

ただ、己の為に

天澄

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

誰かの為になんて曖昧なことは言わない。

君の為になんて綺麗なことも言わない。

自分はただ、自分の為だけに。

目次

Daily Life

#1. One Day | 1

#2. Off Mode | 9

#3. Slums Stance | 17

#4. Raid Preparation | 25

#5. Raid Attack | 33

#6. Celebration | 42

Demise

#7. Housemate | 50

#8. Discipline | 59

#9. Invasion | 66

#10. I'm sorry, please help me. | 75

#11. Hunt down S. mentally. | 84

#12. A troublesome work that | 94

84

ameto Soya. | 102

#13. Two people to be tested. | 110

#14. Encounter with her. | 119

102

#15. Daily life when Ruri in cr | 129

eased. | 139

#16. Collapse suddenly. | 139

#17. Still, I resist. | 139

| 139

#32.	Contact, hero killer.	270
nce.		262
#31.	Awkward workplace experience	254
#30.	Dialogue with Allmight.	
#29.	Shoutouts third game.	245
#28.	Izuku's second game.	237
#27.	Izuku's first game.	230
efinal competition		223
#26.	Sports festival: Towards the	213
edition		213
#25.	Sports festival: First comp	207
#24.	Interval: Determination	199
ation.		199
#23.	The end, VS villain association.	190
ation.		190
#22.	Raid's come, villain association	181
#21.	First battle training.	173
#20.	Admission, the first day.	165
be used.		165
#19.	Practical exam, ability to	150
Aim for HERO!!		150
n t.		150
#18.	The outcome of the incident	

Daily Life

#1. One Day

——血濡れの背中が、そこにはあった。

自らの身体は、酷い痛みを訴え、その意思に反し反応を示さない。
「……動け……」

それでも、知ったことかと必死に身体に指示を送り続ける。痛みが何だ、目の前の彼女が味わっているのはこんなものとは比べ物にならないはずなのだ。ならば。

「動けよ……!!」

ああ、けれど。どれだけ想い、願おうとも。ただただ単純に限界を迎えてしまった肉体は、反応を示すことはない。

「動いて……くれよッ……!!」

「無理をしなくていいさ」

やめろ、やめてくれ。そんなに満足気に笑わないでくれ。そんな顔をされたら、諦めてしまおう、納得してしまおう。

「アタシはもう充分幸せを味わった」

そんなはずはない。まだだ、もっとたくさん、この先幸せなことはあったはずだ。だからそんな顔をしないでくれ。だってそんな満足気な顔をされたら……もう、何も言えないじゃないか。言っても無駄だと、理解してしまうではないか。

「大丈夫さね、大切な人を守れたなら」

言わせてはいけない。それだけは、絶対に。だが頭では分かっている、口を動かすことができない。いつも通り、底抜けに明るい笑顔を浮かべる彼女が、どうしようもなく綺麗で。儂くて。そんな場合ではないのに見蕩れてしまって。ああ、もうお終いなのだと、否定しようがないほどに理解してしまったのだ。

「その結果として死ぬのなら、それもまた幸せなことさ」

「姉、さん」



「……だあー、クソツ、久々に見たなオイ」

懐かしい夢だった。昔は毎日と言つていい程に見続け、魘された夢だった。

とは言え自分の境遇ではそう珍しい話ではない。ただ血も繋がらない育ての親とも言える義姉が、自分をかばって死んだというだけの話。ここに住んでいる人間は、その仔細に差はあれど皆似たような目にあっている。だから自分が特別不幸なわけじゃない。

——そう、割り切れるのにどれだけの時間がかかったことか。既に自分も年齢は二十四。この歳にもなれば、特にこの精神性の成熟が早くないと生きていけない環境においては、過去を過去と割り切り、気にせず生きていくのはそう難しいことではない。

それでも、決していい思い出ではないので汗をかいている。寝巻が肌張り付き気持ち悪いので、一先ずはシャワーでも浴びておくことにする。

「昔は、シャワーなんざ浴びれなかつたんだがなア……」

懐かしい夢を見たせいで、どうにも過去のことばかりが頭を過ぎる。昔、そうまだ義姉が生きていた頃は、ここいら一帯に水道は通つておらず、綺麗な水は貴重品だった。それが今では、バレないように正規の方の水道からパイプ繋いで水を公共機関からパクることで、水を安定供給できるようになったから楽になったものだ。いや、まあちよいちよいバレてその都度新しくパイプを繋ぎ直しているのだが。

風呂場から出て、タオルで適当に水気を取る。電気に関しては、完全に個人個人でパクってきた発電機で賄っているために、あまり無駄遣いはできない。ドライヤーなど人生で使ったことが一度か二度あるかどうか……いや、仕事の関係でホテルに泊まったこともあるので、使う機会はあつたのか。ただ自分がものぐさで使わなかった、というだけだ。

そんなことを考えながら家の中が濡れない程度には水を拭いたあとは、自宅ということもあつてパンイチで朝食の準備に入る。と、

言ってもお湯を沸かしインスタントコーヒーを用意するだけだ。パンはバターロールをそのまま何かつけることもなく食べてしまうので、わざわざ用意するものはコーヒーしかない。

いつも通りの朝であるため、特に何か手間取ることもなくインスタントコーヒーを作り終え、テレビを付けてから椅子へと座る。電気はやはり、勿体ない……が、それ以上にニュースとか、そういったものでの情報収集は大事だ。それが表層的なものを語っただけものでしかないとしても、知っているか否かでだいぶ違うのはここで生きてきて身に染みている。

『今日もオールマイトは——』

「うーん、相変わらずのオールマイト人気」

ニュースで映し出されるのは、V字型の髪型が特徴的な、アメコミ調のヒーローだ。

——そう、ヒーロー。

この世界にはヒーローと呼ばれる人々がいる。それはいつからか、個性と呼ばれる特殊能力が人々に発現するようになったこの世界において、それを使った犯罪者たちに対し同じく個性を以って対抗したのを始まりとする職業になる。資格を取得することでなれるヒーローは日夜悪と戦う正義の味方……というのが一般的な認識。

「ま、キョーミねエけど」

ヒーローとか、ヴィランとか自分の知ったことではない。自分は、いいやここで生きる人々は究極的には自らが生きていけさえすればいいのだ。だから邪魔をするのであればヒーロー、ヴィラン関係なしにただの敵でしかない——と、というのがここで生きる人々の共通認識。

「……それに俺のヒーローは、あの人だけだしな」

思い出すのは夢に見た義姉の背中。誰か、なんて不明瞭なもののためにはなく、自らの大切なものを守って胸を張って死んでいった彼女。当時は勝手に死んで、と憤ったものだが割り切った今にして思えば、自分の命を捨ててまで守りたいと思え、それを成してしまうことがどれだけ凄いいことが分かる。きっと彼女は残されたこちらがど

んな思いをするか、分かっていたと思う。だけどそれでも、大切だからと自分の意思を貫いた彼女こそ、自分にとってのヒーローだと思っ
たし、尊敬していた。

「つと、やべエ、今日はガンギマリ爺んどこ行かなきゃいけなかつたんだ」

呑気に過去を振り返っている場合ではない、と慌ててパンを口に詰め込み、コーヒーで流し込む。コーヒーカップを流しに突っ込んでおき、鍛えられた傷だらけの肉体を隠すように、黒いインナーを着て更にその上からミリタリージャケットを着こむ。下は収納の多いカーゴパンツを履いて、悪路にも対応できる特注のブーツに足を突っ込めば準備完了。

「ああ、いや、こいつを忘れちゃいけねエヤ」

飾られた義姉の遺影の前に置かれた、形見であるゴーグルを回収し、頭に付ける。義姉はいつも視界が悪くなるからと、目には付けずこうして頭に付けていた。だから自分もその真似だ。

「んじやま、行ってくるわ」

一言、遺影に向かってそう告げ、家を出る。扉に鍵をかけ、一応開かないことを確認してから出発。解錠とかあとは無音での壁破壊に向いた個性とかもあるから、施錠に意味があるのかは微妙なところではあるのだが。

「お、ソーヤ、爺んところか?」

「おうよ、仕事さね」

「なんだソーヤ、あの爺んところ行くんか。だったらクスリ貰ってきてくれよ」

「アン?あとで金寄越せよ」

「任せとけて、もうそろそろ手が震えて来てな……ヒヤア我慢できねえ!!」

「おーい、馬鹿が発狂したからぶっ飛ばすぞー」

「ういー」

相変わらずここは騒がしい、と思わず苦笑しながらスラム街を歩く。そう、スラム街。ここはスラム街なのだ。

個性が発現したことによる犯罪率の増加。その余波として犯罪者によって会社が潰された、帰る場所を失った、家を失った……。あとは個性の有無、有用性のなさで親に捨てられたなどの理由で居場所を失った人々。そういった人々の受け入れ先として存在するのが自分が住んでいるようなスラム街だった。

特にここは特殊で、居場所を失った人々の行き場として政府が黙認している場であり、犯罪だろうが何だろうが何をしても咎められることはない。ただしその結果として何が起きようが、ヒーローによって滅ぼされようが政府は一切関与しないという場所だった。

それ故、ここにいる多くの人は犯罪で生計を立てており、かく言う自分も今から仕事となる犯罪を斡旋してもらいに行くところだった。

「オラ、クソ爺いるか？」

「ひえっひえっ……よ才来たよ才来た……ほれそこ座りナ」

「うげ、クツセエ。また新しいクスリキメてんな？」

「これが生き甲斐じゃけエナア……」

ひえっひえっひえ、と笑う爺をガン無視し、窓と扉を開け放ち換気を行う。クスリを好まない自分が、こんな妙な匂いの煙だらけな場所にいられるわけがない。ちょうど近くを通りがかった軽くだが、風を操ることのできる個性持ちに換気を手伝ってもらいながら、何とか人が過ごせる場所にする。

「おーおー……綺麗にしちまってマア……。また後で溜めんといけんナア……」

「誰もが自分と同じだと思っくんじゃねエよ。テメーの薬物耐性が異常なんだろうが」

この爺曰く、個性の副作用と若い頃からクスリをキメ続けていたら耐性が付き過ぎて、一日中クスリを服用していなきや酔えないらしいが……まあ事実は知ったことではない。ただ本名も年齢も、個性も何もかもが不詳なこともあって、その年がら年中クスリを摂取していることから通称ガンギマリ爺と呼ばれているのが、目の前の人物だった。

「まア細けエことはどうでもいいんだよ。仕事、なんかあるか？」

「ちイーつと待ちなネ……今確認するサ……」

椅子に座って、背もたれに寄りかかりながら何かを探す爺を見る。一応、目の前のカウンターテーブルにはこちらを迎えるための飲み物が置いてあるが……まあ十中八九クスリが含まれているだろう。この爺にとつてクスリこそが歓迎の証になっているのだろうし。

だからそれに口を付けることなく、ぼけっとしながら待つ。無論、今から紹介される仕事は犯罪であり、失敗すれば普通に捕まるか、ヒーローによって潰されるかするので……そこら辺、もはや今更な話であるのだ。それにこの爺はなんやかんや有能なのだ。こちらの能力に見合った、やらかさなければ何の問題もなくこなせる仕事しか回してこない。だから妙に緊張する意味はない——そう考えていれば、一枚の紙を爺が手渡ししてくる。

「ほオれ、お前さんなんかにやアこいつがいいじやろ……気を付けていってきんしゃい……」

「おう、言われんでも無茶はしねエよ」

ざつと紙に書かれた内容を確認し、席を立つ。今日の仕事は楽そうだ、と欠伸と共にそんなことを思いながら目的地へと移動する。

◇

夕暮れ、逢魔が時とも言う時間。裏路地にて息を潜める。仕事内容は至ってシンプルな強奪。ターゲットは無個性の犯罪者。どうやら何らかの盗み出された物品を奪い取り、持ってこいという話だった。

目的の物品が何かは明言されておらず……また、興味もない。いや、まあ全くないと言えば嘘にはなるのだが。もしかしたら高値で売れるものなのかもしれない。だから一応、それを個人的に持ち帰り、売りさばくというのも選択肢としてはあるのだろう。

ただ下手なルートで売れば自身が捕まる可能性だってあるし、あの爺にはどこと繋がりがあるのか分からない怖さがある。だから下手に個人技に走るよりかは、あの爺の下で適当な仕事をこなしていた方が安定した収入にはなる、という話だった。

「……やアつとお出ましか」

そんな風にくだらなことを考えていれば、路地裏へと人影がやってくるのを認識する。明らかに周囲を気にした様子の、挙動不審の男が二人。片方の人物の腕には小包が一つ。望遠鏡で覗き込めば、人相も爺から渡された紙に描かれていたものと一致する。ターゲットで間違いない。

すぐに動く——そんなことはしない。まずは今、襲えるかどうかを確認しなければならない。場所自体は自身の事前の調査と、爺が指定した場所であることから問題がないことを確認している。だから確認すべきは予定されていない同行者が相手にいないか、ヒーローなどに追われてはいないかだ。

少なくとも、ターゲット二人には慌てた様子はなく、追われているようには見えない。無論、隠れて追跡しているヒーローがいる可能性はあるので、まだ動くことはできないが。

「……なあ、大丈夫かな」

「何言つてんだ、あれだけ作戦を詰めたんだ。大丈夫に決まってる。……それに、もう後には引けないだろ」

「そ、そうだよな」

ターゲットたちの会話へと耳を傾ける。場所は人気のない街中の喧騒からは離れた路地裏だ。いくら小声であっても、ある程度は聞き取れる。故に、ひたすら息を潜め安全を確認するまで待つ。

「大丈夫、大丈夫だ……」

「ああ、囷が周辺のヒーローを引き付けたのは確認してる。だから無個性の俺ら二人でも——」

「——それはいいことを聞いた」

ああ、本当に今日の仕事は楽だと思いつながら、今まで張り付いていたビルの壁から飛び降りる。そのまま、その勢いを利用してターゲットの元へ飛び込むようにして、

「刀剣召喚 トウハンドソード 両手剣」

重量のある幅広の大剣を召喚する。そしてその重量と勢いを利用して、こちらの声に反応して上を見上げたターゲットの片方の首元へ刃

を置くようにし。

「——つア」

——両断。

いくら骨や肉に厚さがあると言えど、高所から勢いをつけて重量のある大剣を叩き込んでしまえば、引き千切るようにして頭を飛ばすことができる。だから当たったと認識した瞬間、殺したことを確信し舞い上がる血飛沫を無視してステップ。相方が突然死んだことに呆然とした様子のもう一人のターゲットへと距離を詰め、取り回しの悪いトウハンドソードを返還。

「ッ、テメツ、何者——」

「刀剣召喚『ジャマダハル刺突短剣』」

「が、あ——！」

代わりにH型の握り手に、拳の先に刃が付いたような形状の短剣を召喚し、肋骨の隙間から心臓を狙うようにして一突き。引き抜きながらステップで距離を取ることで、返り血を浴びないようにしながら、崩れ落ちるターゲットを見る。

「なんだよ……クソ……し、つばい……」

「……何者、だっけか？」

絶命し、崩れ落ちたターゲットを視界に収めながら目的の荷物を回収する。一人目の頭を派手に飛ばしたせいで血の海に沈んでいるが……まあそこら辺、丁重に扱えという指示はなかったし、問題はないだろうと判断して、片手で投げてはキャッチして遊ぶ。

「ま、そうだな……ただのゴロツキさね」

聞こえちゃいないだろうけど、と最後に呟いてその場を去る。もはや知らぬ人間が血の海に沈もうが、動じることはない。何故ならこれが自分——かんどうそくや喚導想也にとって、当たり前前の日常なのだから。

#2. Off Mode

「……あ、やべ、電気切れた」

ある日のこと。ガンギマリ爺のところに行きさえしなければ仕事がないのをいいことに、昼間から優雅に酒を片手にテレビを見ていたところ、流石に使い過ぎたらしくついに電気がそこをついた。パクってきた発電機は、そんなに高速では発電できないため、このままではしばらく電化製品が使えなくなってしまう。

「……困る。それは実に困る」

何が困るって、折角冷蔵庫でキンキンに冷やしたビールが温くなってしまう。温いビールとかクソくらえなので、早急に電気を得る必要があった。全ては後々自堕落な生活を送るため。そのために今頑張るのだ。

「着替えるかア……」

完全にオフだったのでやる気が全くと言っていいほどしないのだが、外に出るとなれば流石にパンイチというわけにはいかない。いや、まあこのスラム街はバカばかりなので、普通に全裸で出歩いている男もいたりするのだが。まあそんな連中の仲間入りは果たしたくない。それに全裸で出歩いた場合、住民から容赦ない制裁を受けるか、屈強な男に路地裏へ連れ込まれるかする。それは流石に遠慮したいところだった。

「おっし、こんなもんか」

今回は仕事行きではないため、地肌の上にアロハシャツを着て、下は短パン。ついでにサングラス装備と完全にオフモードだ。形見のゴーグルは仕事時のお守りとしてしかつけて行かない。

最後に財布と鍵、それから缶ビール二本を持って家を出る。明らかにガラの悪い兄ちゃんなわけだが、まあ犯罪者の街でそんなこと気にしたってしょうがないので、気にしない。鍵と財布をポケットに入れ、躊躇いなく缶ビールを一本開けて飲みながら街中を進む。

「オイオイ、昼間からいいご身分だなあソーヤ！」

「まあ俺有能だからなあ……。毎日せこせこ働く君ら小物市民とは

違うのだよ」

「ソーヤ酒仕入れたんか。おっしや、ちよつとお前の家行つてくるわ」
「別に構わんど。お前の家財道具一式は金になって俺の懐に入るが
なア!!」

「あ、ソーヤ。お前が買ってきたクスリ中々良かったぞ。この通り震
えも治まつて……ヒヤツハー！楽しくなつてきたア!!」

「お、今日もバカは元気だな？じゃあ殴りに行こうか」

「仕方ないにやあ……」

本日もスラム街はバカばつかだった。

そんな風に住民たちとコミュニケーションを取りながら街中を進
み、ある家へと辿り着く。崩れた家を補修して作られた、このスラム
街でよくある家に住むのは、割とこのスラム街の中でも主要人物だつ
たりする。

外観的にはそうは見えないんだけどなア、と思いながらドアをノツ
クすればはいはい、と中から男の声が返ってくるので、どうやらちよ
うど家にいたらしい。忙しい時はかなり忙しい人物なので、運よく家
にいたことに安堵の溜息を吐きながら、家の扉が開けられるのを待
つ。

「……おや、想也くんか。いらつしやい」

「ちわーっす、雷生らいせいさん。ビール飲む？」

「飲む」

土産として持ち込んだ缶ビールを目的の人物——はった多雷生さん
へと渡す。受け取った雷生さんは、こちらを家に招き入れながら缶
ビールを開けて、それを呷る。気持ちのいい飲みっぷりに、思わず
おー、と声を漏らしながら、一つ質問を投げかけることにする。

「雷生さん今日オフ？」

「オフオフ、超オフ」

「お、俺もやで」

「「いえーい、ナカーマー！」」

既にアルコールが回っている自分と即座に肩を組んで乾杯できる
辺り、雷生さんも昼間から飲んでいた口かもしれない。なんて思つて

いれば案の定で、リビングの方はいくつか空き缶や空き瓶が転がっているのが確認できる。あ、これは酒乱騒ぎになるな？と察しつつもそれも面白いので特に何も言わず、案内されるがままにソファへと座る。

「で？今日はどんな用だい？」

「自堕落生活してたら電気切らした」

「ああ、なるほど、僕もだ」

「やるよなー」

「やるやるー」

雷生さんと固い握手を交わす。ただまあ、雷生さんの場合は個性が発電なので、即りロードできるから関係ないのだが。事実切らした、というのはあくまで一回だけのようで、今は普通に家電製品が動いているのが分かる。

「いーいーよーなー、自力で発電できんのー」

「そう便利なものでもないんだよ？なんてたつて体内での発電しかできなからねえ……」

そう、あくまで雷生さんの個性は発電だけであり、放電も蓄電もできはしない。ただただ発電だけができ、し過ぎるとバント、だ。そのため過去親にここへ捨てられたらしいのだが。

「いーじゃんかよー、実際ここでの生活では重宝してるわけだしさア」
「まあそれは否定しない」

このスラム街、違法研究をやって追い出された科学者なんかもいるので、材料集めを手伝う代わりに結構機械なんかを作ってもらったりするのだ。雷生さんも、蓄電器の方へ発電した電気を送る機械を作ってもらい、今では住民たちへ電気を売って一儲けだ。まあこの住民の数的に、結構忙しい仕事なのだが。

「というか雷生さんよくオフ取れたな」

「面倒になって全部断った」

「ヒューー！やるウ!!」

「無論、君のもやらないからね」

「大丈夫、今日はもうここで飲む」

「全く……仕方ないな。あとで代金は支払ってくれよ？」

「わアい、雷生さんだアい好きイ！」

「気色悪いからやめてくれないかい？」

ゲラゲラ笑いながら、雷生さんが持つてきてくれたビール瓶を受け取る。

「刀剣召喚 内反短剣^{ククリナイフ} つと」

そしてその蓋を開けるのが面倒なので、個性で召喚したククリナイフで上部を切り飛ばし、邪魔になったククリナイフを返還しながらラツパ飲みの要領で一気に呷る。

「いや、しかしこういうの手刀でできたらカツコいいよなア」

「分かる。僕も男として憧れた時期があった」

もちろん、できなくて手を痛めたが、と続けられた言葉に爆笑する。自分も憧れはしたが実際に試したことは流石にない。いやだってどう考えてもオチが見えているわけだし。増強型とか異形型の個性じゃないとキツイよなあ、と思わず呟く。

「それを言うとおールマイトなんかは綺麗に手刀で切りそうだね」

「むしろパワー強すぎて潰しそうじゃない？」

「ブツ」

「そしてH A H A H A、やっちゃまったな！と、露骨なアメリカン笑い」
「ブフツ」

肩を竦めるモーション付きでそう言えば、どうやらツボに入ったらしい雷生さんが顔を伏せ肩を揺らす。何が質が悪いって、その姿がありありと想像できることだった。絶対やる、本当にテレビに出てる感じのキャラなら絶対にやると確信できる。や、問題があるとすれば、おールマイトが酒を飲むところがイメージできないことなのだが。まあおールマイトも流石に人だ、酒を飲んだことぐらいはあるのだろうけども、清廉潔白なザ・ヒーローというイメージのおールマイトが酒を飲む姿はどうにも、想像しづらかった。

「くくつ……。いや、でもしかしそう考えると無駄に破壊しない君の個性も中々いいのではないかい？」

「んー？これが？」

未だに若干笑っているが、そう問いかけてきた雷生さんに合わせて再び呪文を唱えることで、ククリナイフを手元に呼び出す。

「そう、確か召喚の個性だったかい？」

「あー……厳密にはちげエんだよなア……」

使う都合上、召喚と考えておいた方が安定するから召喚としているだけで、厳密には違う能力なのだ、自分の力は。

「正しくは創造の個性。イメージしたものを生み出す力」

「では何故召喚と？」

「イメージを固定しやすいから」

自分の個性はイメージしたものをその場に生み出すという能力であり、理屈の上では想像さえできれば、何であれ生み出すことができるのだ。ただ実際には制約があり、イメージが曖昧であればあるほど生成時に体力を消耗する。それに加え大きければ大きいほど、同じく消耗する体力が増えるため、例えばドラゴンなどの空想上のものは明確なイメージができず、体力の消耗が大きくなり過ぎて生み出すことができなかったりする。

「だから俺がイメージに失敗するともう作り出すことができなくなる」

「……なるほど、だから召喚という自分なりにイメージしやすい形に落とし込んだ、ということだね？」

そういうこと、と理解の早い雷生さんに苦笑しつつも頷いて返す。要するに、安定してイメージさえできればいいのだ。だからイメージしやすい形として自分は脳内で武器置き場をイメージし、そこから手元に武器を呼び出すという形をとることでイメージを安定させているのだ。そしてそれをイメージからより強い思い込みにまでするために、基本的に自分は普段は召喚の個性であると言い続け、詠唱も召喚とすることでより強固にしているのだった。

「ふむ……結構不慣れた能力のようだね。機械とかはできるのかい？」

「あー、微妙。できなくもない……けどちっと安定しないかね。構造をイメージできないからな」

構造を理解はできても、イメージし切れなければそれでアウトなの

だ。そのため複雑な機械はどうにも、自分には生み出すことができなかった。

「あとは概念的なものも無理だぞ。もうあまりにも曖昧だからな」

「ふむ、となるとやはり刀剣類というのはいい選択なのだろうね」

雷生さんの言う通り、基本的に構造がシンプルで、イメージをしやすいから自分はよく刀剣類を用いていた。あとは、親の個性的に刀剣類への適正が高くなったというのものもあるのだが。

まあそれはあまり、思い出さたくない話だ。故に、微妙に残っていたビールを一気に飲み切り、その考えを振り払っておく。ついでに雷生さんへ追加の酒を要求しておく。

「それなら、これはどうだろう。基本この街にまで流れてくる外国の酒はお高いものばかりで僕も初めて見かけたのだが……」

「これは……日本の酒か？」

「ああ、『藩』というらしいのだが、コンビニで売っているような安物らしくてな。珍しかったためつい買ってしまった。ちようど二本あるから二人で飲もうじゃないか」

「いいねエ、新しい酒はワクワクするぜ。えーと、何々？ スパークリング清酒？」

なるほど、分からんと諦め、蓋を開ける。極論、飲めればいいのだ。それで美味ければ上々。このスラム街での生活などそんなもんだ。

そうやって一口、口に含む。……なるほど、これは。

「普通に美味しいな」

「うむ。特別何かが飛びぬけて美味しいわけではないね。ただコンビニで買えるものと考えると充分じゃないかな？」

そうか、これが家の近くのコンビニで買えるのか。それは何とも羨ましいことである。無論、スラム街にコンビニなどあるわけないのだ、そもそもコンビニがあること自体が羨ましくはあるのだが。基本的に酒を始めとする嗜好品なんかはパクってくるか、ブローカーなどを通して注文するしかないのだ。唯一クスリだけはガンギマリ爺がいるので安定供給されているのだが。

「あー……日本行きてエ……」

「ふむ、一応血筋的には僕らの故郷にあたる国か……。想也くんは日本に暮らしていたことはあるのかい？」

「んなもんねエよ」

自分は物心ついた頃からスラム街暮らしだ。一応、置手紙があったために両親については多少知っているが、顔は見たことがない。だからまあ、正直日本という国に思い入れがあるわけではないのだ。ただ単純な話。

「日本での生活クツソ便利そうじゃない？」

「わかる。でも正直ここと比べたらどこだってそうじゃないかい？」

「せやな」

悲しい事実だった。

まあここでの暮らしも慣れれば悪くないのだが、利便性はやはり低いのだ。いつかは普通の街中で暮らしてみたい気はしないでもない。

「まあでも僕的にも日本には行ってみたいかな」

「それはまたどうして？」

「日本人の血が流れてるからかな、正直エロ動画とかは日本人の方が興奮する」

「あー、あーあーあー……。分かるわ……。おもつくそ分かるわ……」

完全にド下ネタの、汚い話をしている自覚はあった。ただまあいい感じに酔ってきて、楽しくなってきたために自重する気は全くと言っていいほどしない。別に男しくないからいいだろうとそのまま、猥談で二人馬鹿みたいに盛り上がる。

「…………ふむ、では行こうか」

「ああ、こりやもう行くつきやねエな!!」

「いざ風俗!!」

もはやテンションが明後日の方向へ振り切れていた。ちよつと恥ずかしいぐらいバカになっていた。だがしかし待て、このスラム街にはほぼほぼバカばかりである。ならば今の自分たちこそあるべき姿なのでは…………？

よし、QED、証明完了。大義は我々にアリ。

「お、酔っ払い共どこ行くんだ？」

「風俗」

「おっしや、ちよつと待つてろ。今準備する」

「何？風俗だつて？俺もつれてけよ」

道中、フットワークの軽い街のバカ共を巻き込み、大所帯で街中を進む。そう、我々はただ歓楽街にある風俗店を目指すのみ——！！

——無論、翌日には財布は空になり、酷い二日酔いに悩まされながら仕事をする事になった。

#3. Slums Stance

「うエ、交渉だア？」

いつものごとくガンギマリ爺の元へ仕事を貰いにいったところ、幹旋された仕事の内容は実に面倒なものだった。普段は基本的に、自分に回される仕事はシンプルなものが多い。すなわち——強奪、殺害、全体的にテロリズム方向の、純粋な戦闘能力が問われるものだ。

一応、騒ぎを大きくしないための処理なんかもするのだが、究極的には自分は戦うことがメインだし、才能がそちらへと振り切れている。代わりにそれ以外の才能が低いため、他の仕事は自分以外の住民に回る、というのが基本だった。

それでも他の手が空いておらず、自分へと苦手な内容の仕事がくることもあったが……交渉に関しては、自分へと仕事として回ってくる意味合いが違ってくる。

「つまり、そういうことだな？」

「うい、うい、そういうことさネ……。向こうさんは頭がヴィランとしての日が浅いそうやからネエ。その裏にいるんはちイつとばかし面倒じゃが、気にせんでもいい。しっかりと対応してきんしゃい……」

既に、交渉相手のそういつた細かいことまで調べてあることに、改めてガンギマリ爺の恐ろしきを感じつつも、それがこの街へと向けられない限りは気にすることでもない。

「あいよ、準備は済んでんだろ？」

「勿論、他の連中にやらせてあるサ……」

「じゃ、あとは交渉の場に向かうだけかね」

ガンギマリ爺に別れを告げて、交渉の場へと向かう。場所は、スラム街の外れも外れ。そこに暮らす人が一人もいない、完全に荒廃した土地になる。理由は単純、余所者を街の中枢に呼び込む理由などないから。

基本的に、わざわざこの街へ訪れて交渉を持ちかけてくるなど、ヴィランしかない。だから交渉の結末如何では暴れ出す可能性も充分あるため、その対策として、スラム街の外れには多くの交渉用の

建物が用意されていた。

今回使用するのもその一つ。外観は、完全に崩れかけの建物。ただその中の一室だけ、ソファや観葉植物などで、他者をもてなすことのできる最低限まで整られた部屋がある。普段は、定期的に掃除する程度でしか住民も近づかない場であつたが、こういう時にその役目が果たされる。

「つちゅーわけでどーも、今回お話相手になります喚導想也になりまアす」

扉を蹴り開けながら、部屋の中へと入る。交渉相手は既にこの部屋に來ている。一人は黒い靄が服を着たような存在。見る限り、何らかの個性によってそういう姿になっているのだろう。戦闘には恐らくその靄が関わってくる。実体がないのは厄介だが……少なくとも服を着ているのだ、ならば何らかの手段で干渉はできるだろう。

そしてその靄の人物を後ろに侍らせソファに座るのは、身体の多くの箇所到手のオブジェクトを付けた、見る限りは少年。趣味が悪いと言わざるを得ない少年の目前は、確か死柄木弔だったか。

「……なんだよ、こいつ。本当にこんなのが交渉相手なのか？」

「落ち着いてください死柄木弔。ここの住民は奇抜な者が多いですが、基本的に有能です。行動に騙されないように」

死柄木は明らかに嫌悪感を隠さずにこちらのことと見てくる。逆に音的に男であろう靄の人物は、理性的な反応で、表情が読み取れないのもあってこちらに対する感情が見えない。靄の男が参謀で、死柄木が頭、という形か、と判断し、一先ずはもう少し様子を見ることにする。

「いやア、悪いね。こっちは明確なボスも、交渉人もいないんだわ。だからこの場に来るやつを決めるのに手間取った」

「……まあいいよ。目的さえ達成できればいいんだ」

——まあ、精々クソガキって程度かな。

イラついた様子の死柄木にそう評価を下す。こっちのペースに合わせられたことにイラついて、それを全く飲み込めてない。恐らく、今彼がこの街で過ごすことになったら、癩癩を起こして人々に見捨て

られ、そして野垂れ死ぬのだろう。故に、クソガキ。ただ、あくまで今は、という話だ。ガキだからこそ、後々化ける可能性はある。まあそれも今は関係ない話なのだが。

なんとなく、ガンギマリ爺が自分へとこの交渉を回した理由を察しつつ、死柄木に対面する形でソファに座り、テーブルの上へと足を乗せる。

「悪いね、こんなスラム街じゃア嗜好品は貴重なんだ。おもてなしする余裕はねエゼ。——ま、俺は飲むがね！」

「……………こいつツ……………」

「抑えて」

お世話役、面倒そうだなあと思いながら、死柄木を煽るようにテーブルの上でこれ見よがしに足を組む。ついでに持ち込んだビール瓶をラツパ飲みもして死柄木で遊んでおく。それを見て、爪を噛む死柄木に内心爆笑しながら、視線で要件を切り出すように促す。

「チツ……………人員だよ。人を寄越せ」

「人？理由は？」

「アンタに語る筋合いはない」

なるほど、とビールを一口呷る。理由も言わず、人員だけ寄越せ、と。こりや交渉にもなりやしない。仕方なしに、靄の男に視線を向ければそれで察したのか、溜息と共に口を開く。

「今回は私たちの組織に、このスラム街の方々に所属してもらいたいのです」

「おい黒霧」

「まアあなたなら話になりそうだ。…………で、それは一回切りの仕事としてっ…」

「いえ、しばらくの間組織の人間として活動してもらいたく」

「報酬は？」

「特には。ですがあなた方をこんな状況に追いやった世界には復讐したいでしょう？」

「そうだ、いるだろう!？」

なるほどねエ、とまたビールを一口。一瞬、こちらが考え込むよう

な仕草を見せたからか、死柄木が押すべきと勘違いしたらしく、突然身振り手振りを交えて勢いよく喋り出す。

「何がだよ」

「燻っている連中がだー！こんな場所に追いやられたんだ！いるんだろ
う世界をブツ壊したいってやつらがさあ!!」

「はあー……」

唐突に叫びだした死柄木に情緒不安定かよ、と呆れつつ、彼が望むものをなんとなく理解する。つまり気に入らないから世界を壊したい、ということだろう。随分安いヴィランなことだ。

きっとそうなるに至った彼なりの理由があるのだろう。だがまあ、そんなものこっちからしたら知ったこっちゃない。信念も何もない感じられないからカツコ悪くすら見える。

だからとりあえずは、彼らの要望に対する答えを返すことにする。最後の一口を呷り、全て飲み切ったビール瓶を後ろに投げ捨てつつ、いいか、と言葉を置く。

「何はともあれ、まずは要望に関する結論からだ」

そう言つて、右手を持ち上げ——中指を突き立てる。

「——ファック！そしてファック!! テメエらにうちの住民紹介する義理はねえんだよ!!」

答えは、無論NOだった。こちらの言葉に驚いた様子に、まさか断られないでも思っていたのか、と呆れつつも、語調を緩めず言葉を更に続ける。

「いいか、まず交渉しに来てんならうちの街のスタンスぐらい知つとけ。うちは絶対中立、どっかに与することアねエ」

それは比較的有名な話なのだ。少なくとも、多少なりとも裏世界でこの街を調べれば、すぐ分かる程度には。別に個人個人であれば、どこの組織に所属したって問題ない。ただ街全体として、どこかに所属することはないというのはかなり出回っている話だった。

そしてそれを知らない、ということは交渉にあたってこの街について調べていないということであり。何より所属して当たり前前、世界に復讐したくて当たり前前と思われることが癪だった。

「辛い境遇の誰もがテメエみたいに世界に絶望し続けていると思っ
てんじゃねエよ。テメエの尺度で、俺たちを決めつけんじやねエクソガ
キ」

「ああ、クソツ……なんだよお前……自分の言いたいことばつか言い
やがって……！」

「お？瘡癩か？瘡癩起こすんか？」

また情緒が不安定になってきた死柄木を煽りつつ、懐から二つほ
ど、道具を取り出しておく。どのタイミングで使おうかななんて考
えてれば、死柄木が何を思っつかこちらの顔面へと手を伸ばしてく
る。

「……もう、いいよ。お前さ……死ね——」

「ツ、待ちなさい死柄木——」

「あ、手エ出しちゃう？んじや、ポチつとな」

どうやら、死柄木の個性は知らないが、攻撃するつもりだったよう
なので、取り出した道具——スイッチを押し込む。刹那、死柄木の
座っていた場所が爆発する。

「——くっ、間に合いましたか……」

「お、やっぱ転送系能力者？逃亡手段はあると思っただよねエ」

確かに爆発の中心地にいたはずなのに、部屋の隅に黒い靄が発生し
たかと思うと、そこから死柄木を抱えた靄の男、黒霧が現れる。そ
りやま敵味方はつきりしない場所に行くなら、逃亡手段は持つておく
よな、という話だった。

ただまあ、である。

「爆発物、一つとは言っていないぜ？」

次の瞬間、再び爆発。そのまま連鎖的に爆発音が幾度となく響き渡
り、建物が軋み始める。

「建物自体に爆弾を仕掛けたのですか——！」

「いえーす！その通りだ！」

状況を察したらしい黒霧が戦慄したような声を漏らす。黒霧に抱
えられ、頭を掻き雀りながらぶつぶつ呟いてる死柄木はともかく、黒
霧の方は理解したらしいので、こちらでネタバレをしておくことに

しておく。

「まあつまり！最初から交渉に応じる気はなかったという話さね！」

「嵌められた、ということですか……！」

「ムカつく……ムカつくなあ……!!」

「ハツハツハ——あんま、うちの連中なめんなつてことだよヴィラン共……！」

自分たちは世間一般的には悪なヴィランのかも知れない。ただ自分たち自身はヴィランだと思っちゃいけないし、そもそも自らが正義か悪かなど気にしはしないのだ。故に、最初からガンギマリ爺はこちらをヴィランとして相手が引き抜きに来たことを見抜き、断れということで自分にこの交渉を任せたと、ということだった。

「壊す……お前壊してやるよ……！」

「……いえ、引きますよ死柄木弔」

「あ、お帰りですか？じゃあお土産どうぞ」

明らかにこちらに敵意を向ける死柄木に対し、こちらが最初から準備を済ませこの場にいると理解したらしい黒霧は、再び黒い霧を発生させどこかへ跳ぼうとする。まあ対応は間違いじゃない。感情的にこちらを襲おうとする死柄木の方が悪手だ。ただ、一度見せた手法で撤退を図るのはよろしくなかった。

黒い霧が広がったのを理解した瞬間、スイッチと共に取り出していた道具——手榴弾のピンを抜いて、お土産と称して霧へと放り込む。

「しまっ——」

「Present for youってね」

爆発は、霧が消えてしまったために起きない。ワープした先で爆発しているのかな、と想像を巡らせつつ、振動が激しくなり崩れ始めているであろう建物に、そろそろ自分も脱出する必要性があることを理解する。

「んじやま、出ますか。外装召喚^{ヒート・レジスタンス} 耐熱鎧^{ヒート・レジスタンス} つと」

個性を用いて、耐熱性の全身鎧を召喚する。こちら辺、自分の個性は炎を浴びても平然としている様子の鎧を着た自分をイメージすれ

ば、素材についての理解がなくても召喚できるから便利だよな、と思いつつ建物内を走る。

無論、爆発を喰らえば熱は防いでも衝撃は防いがないので、何となくでだが把握している爆発物が仕掛けられた場所を避けて進む。瓦礫なんかは単純に鎧が固いので軽く防御したり、ぶん殴ればどうとでもなる。

そうやって外に出て、後ろを見ればほぼほぼ崩壊した建物の様子が目に映る。次の爆弾の仕込まれた交渉場はどこだったかなあ、なんて考えながら鎧を返還し、ガンギマリ爺のもとを指して歩き出す。

道中、考えるのは死柄木弔、という男の目的についてだ。世界を壊す、ということはテロリズムか何か、そういうことをするのが目的だったのだろう。別に、これを個人個人に協力を要請するんだったら問題はなかったのだ。街全体のスタンスはともかく、個人の思想は自由であったわけだし。あるいは仕事として回してもよかった。報酬のある、ビジネスライクなものだったら自分も協力したってよかった。

しかし、この街全体を傘下にしよう、というのはいただけじゃない。ここはあくまで受け皿なのだ。居場所を失くした人々の受け皿でしかなく、犯罪に手を染めてるのはあくまでそれが生きるのに必要だったからだ。

テロを起こしたい人間は、ほぼぼぼうちにはいない。確かに、世界には皆絶望した。自分だってそうだ。こんなに自分たちを追い込んだ世界を恨まなかったはずがない。だけど、それでも自分たちは今を楽しんでいる。だからわざわざ、世界に改めて復讐する必要なんざないのだ。

「……おオ、戻ったかい。どうだったネ……？」

「クソもクソ。ろくなもんじゃなかったさ。俺たちのことを決めつけられてムカついたわ」

「ひえっひえっひえっひえ。まアこのスタンスはそうそう理解されるもんじゃないさネエ……」

確かに、理解しがたいものかもしれない。恨んでるのに世界に復讐

しないのはおかしいとも思うのかもしれない。

だけど自分たちは既に復讐しているのだ。どれだけ追い込もうが、自分たちはこうしてまだ笑っているぞ、と世界に示し続ける——それこそが自分たちの復讐なのだ。

#4. Raid Preparation

「お、ソーヤ来たか」

「今日は飲んでないのかソーヤ」

「別にアル中じゃないからな俺？」

「ちなみに俺はヤク中だぞう！イヤッハー!!」

「はーい、バカ処分のお時間よー」

ガンギマリ爺の家が、多くの住人で賑わっている。あくまで昔のバーを修理して使っているため、そこまで収容人数は多くなく、一部は外にまで溢れかえっている。その上でヤク中は自己主張するからすごいよな、と思いつつ、カウンターテーブルの方。爺が住む住居部分へと視線を向ける。

自分を含めた住人らを集めた爺は、今、住居部分に準備をしに行くのと引っ込んでいる。ただまあ、集まったメンバーを見れば、なんとなくその目的は見えてくる。

周囲と雑談しながら待っていれば、やがて住居部分から、爺、そして雷生さんが姿を見せる。雷生さんに関しては大型のスクリーンを持ってきている。

「ん、割と皆集まったみたいだね。いない人は……まあ適当に特攻担当にでもしよう」

「ひえっひえっ、そいたらあとは任せたヨ……」

「任せられました。……と、いうわけでここからは僕が説明させてもらおう」

爺は口調があまりにも特徴的過ぎて、話を聞きとり辛い。だから今回のように人数が集まった場合の説明は、雷生さんのように落ち着いた人物が行うことが多かった。

「とりあえず、これを見てくれ」

そう言った雷生さんの手によって、スクリーンへと画像が映し出される。それは、どこかの建物の見取り図のようだった。そしてそれが映し出された意味を察したこの場に集まった住民たちがざわつき始める。

「おい……これは」

「ああ、来たな……久々だ」

「あ、爺さん新しいクスリある？さつき一氣に使っちゃって」

「ひえっひえっ……しようがない、お得意様のお前さんには最近のお
気に入りを分けちやるよ……」

「一部関係ない話をしているが……皆察した通りだ」

そこで一度、雷生さんは期待を煽るようにして言葉を区切る。そし
て全体を一度見回したあと、静かになった住人たちに一つ頷いてから
改めてその口を開く。

「――襲撃の、時間だ」

「イエアー！ー!!」

「テッロリズム！はあいテッロリズム!!」

「へへ……血が騒ぐぜ……」

場が爆発的に騒がしくなる。集められた全員が既にワクワクを抑
え切れずに、周囲と話し合っている。かく言う自分だって、久々に暴
れられる機会にうずうずしていた。

それだけ、襲撃という分類の仕事は珍しく、同時にストレス発散の
場になるものだった。

「はいはい、君たち静かにしてくれ。そうしたら今回の具体的な依頼
内容に入ろう」

雷生さんがそうやって声をかければ、誰もが静かになってスクリー
ンへと注目する。それは偏に、誰もが今回の仕事に参加したいから
だった。

「依頼者はある裏組織。ま、匿名って話なんでここについては伏せて
おくよ。それで、今回の相手はその依頼組織のライバルになるわけ
だ」

まあ依頼者の名前は大抵の仕事では伏せられているので気にする
ものではない。そもそも、爺から回ってきた段階で、既に安心して臨
める案件であるのだから。それに依頼者が誰だろうと、自分たちは金
が貰えれば問題ないのだ。

「で、依頼者曰く『ちよつと厄介な個性持ちを誘拐したらしい。これ以

上戦力増強されると面倒だし、ちよつと潰しといて?』だそうだ」

随分と軽いノリでの依頼らしかった。実際の状況的にはもつと厄介なんだろうけども。ただ先ほども思ったように、依頼理由など自分たちは知ったことではないので、気にしはしない。

「ただうん、この誘拐された子つてのが結構強個性らしくてね?だからまあ、折角だからここに連れてきて欲しいんだ」

「……はっ!?つまり開幕爆破できない……?」

「事前調査的に、回収対象の位置が建物の上の方だから無理だねえ」

「フアック、クソかよ。解散、解散!」

「お疲れでしたー」

雷生さんからの情報に、一部の爆発に芸術性を見出す連中が撤収し始める。彼らは先日、死柄木と対談した場に爆弾を仕掛けた連中でもあった。ちなみに彼ら曰く、あの爆破は点数が低かったらしい。建物が崩れるまでに時間がかかり過ぎ、だそうだ。

そんな爆発に情熱を捧げる連中が、あんな情報を聞けば帰ってしまうことを雷生さんが予想できないわけがない。そんなこちらの考えを裏付けるように、雷生さんは笑みを浮かべて帰ろうとしている連中の背中に向かって声をかける。

「ちなみに。今回の目的地は周辺の建物までその組織のものだそう。だから周辺の建物は爆破してもいいし、ターゲットを回収したらメインの建物も爆破して構わない」

「そういうの、先に言えよな」

「仕方ないなー、手伝ってやんよ」

「開幕の号砲は任せな」

あまりにも早い掌返しだった。まあ掌の回転率が高いのは、この街ではデフォルトだ。特に誰も反応することなく、当然の帰結として黙って視線のみで雷生さんへと続きを促す。

「と、いうわけでまずは爆破班が周辺で爆破テロを行う。そしたら正面から全部殺しながらターゲットまで一直線で」

「シンプルだな」

「バカ共にはちようどいいだろう?」

「ちげえねえや！」

雷生さんと一人の住民のやり取りに、全員が爆笑する。気楽なもんだが……まあその方が、力を発揮できるといふものだ。とはいえ、全く警戒しないわけにはいかないもので、いくつか確認しておかなければならないことはあるので手を挙げる。

「おや、想也くん、何かあるのかい？」

「警戒すべき実力者はいるか？」

「そうだね、敵はヴィランから何人が用心棒を雇っているようだ。それなりに強いだろうね」

「オーケー、それなり、だな？」

「ああ、それなり、だ」

なら問題はない、と引き下がる。雷生さんがそれなり、というのなら確かにそれなりに強いのだろう。だがそれなり程度であれば、囲めば封殺できるレベルでしかない。無論、慢心などではなく純然たる事実として、だ。問題は全くなかった。

「それじゃあ、最後にターゲットの写真を見てくれ」

スクリーンの画像が切り替わり、少年と少女が一人ずつ映し出される。少年の方はニット帽で隠れ気味だが、日系の顔立ちに思える。逆に少女の方ははつきりとその顔が見え、金髪に紅の瞳、欧州系の顔立ちだった。どちらも年齢は十代前半程度に見え、写真が日常の姿を撮ったものであることもあって、裏社会とは無縁のように見えた。……いや、誘拐、という話だったのだ、本当に無縁だったのだろうか。

「……そのまま組織で使われるか、この街で暮らすか、か……」

「どつちにしてもクソやな！」

「野垂れ死ぬって手段もあるぞう！」

思わず漏らした呟きに反応する住民が何人かいるが、言葉こそふざけていてもその誰もが目だけは笑っていない。この街の住民の多くは、仕方なしにこの街に、裏社会に身を置くことになった連中ばかりだ。今回の一件に、何も思わないわけがなかった。

◇

「偵察班、偵察はーん。こちら突撃部隊超有能隊長の想也。そっちはどう?」

『あいあい、こちら偵察班。なんかいっぱいいますけど超有能ならどうでもなるんじゃないですかね』

「オーケーオーケー、実際有能だから何とかしてやろう。ただ流石に配置図はちようだいな?」

『しようがないにやあ……』

個性的に、あるいは技術的に隠密行動に長けた連中で組まれた偵察班から、端末へと送られてきた配置図を確認する。襲撃情報でも漏れたのか、予想以上の敵の数がある。ただ報告がなかった、ということには少なくとも外には厄介そうなのはいない、ということになる。ならば作戦に変更はなしになる。

「うし、これだけありやア充分だ。偵察班はこのあと俺たちを陽動に使って内部の偵察も頼む」

『ニンジャプレイして遊んでもいい?』

『俺、あの日系の少年連れて帰ったら本当にニンジャとサムライはいるのか聞くんだ……』

『ああ、ソーヤはなんちゃって日本人だから知らなかったんだよな』
「誰がなんちゃって日本人か」

通信から漏れ聞こえてきた声に思わず突っ込む。確かに住んでいた記憶はないためニンジャやサムライについては答えられないが、出身については間違いなく日本なのだ。別にこだわりがあるわけではないが、なんちゃってと言われるのは癪だった。

『それで、ニンジャプレイしてもいいの?』

「アイサツはダメだからな」

『なんとお!? 忍殺ごっこが、できない……?』

むしろバレないことが前提の偵察部隊で、何故アイサツができると思ったのか。忍殺ごっこするならアンブッシュで全員仕留めてしまつて欲しい。

うちの街には何故か日本のアニメやアメコミといった娯楽品が多

いせいで、変な遊びをする連中が多くて困る、と思いながら念のためもう一度だけ釘を刺しておき、通信を切る。

そして偵察部隊からもらったデータを後衛部隊にも回しつつ、続いてその後衛部隊へと連絡を繋ぐ。

『あいよ、こちら後衛部隊』

『はいはい前衛部隊隊長想也ですよオット。データ、送れた?』

『大丈夫つすよ。来てます来てます』

後衛部隊は、スナイパーライフルを扱える者や、遠距離攻撃に特化した個性の集まりになる。こちら辺、自分は全く射撃の才能がないので羨ましいところではある。一応、構造が複雑なせいでイメージが曖昧になるので、銃系統は召喚できないのだが、弓なら出せたりもするのだ。まああてられないので意味はないのだが。完全に才能が近接戦に振り切れている。

『一応、既に何人か頭ぶち抜けそうっすけど、どうします?』

『爆破班待とうか。あいつら開幕担当しないと後でうるさいだろうし……』

『りょーかいつす。——っわけでお前ら銃下ろせー。はい気持ちちはわかるけど、引き金引きたそうな顔してもダメだぞー』

引き金引きたそうな顔って何だ。そう思いつつも、間違いなく理解できそうもない世界なので黙っておく。別に自分は人を殺すことに喜びを見出せるタイプではないわけだし。しかし、まあ的当てと考えればわからん話でもないのかもしれない。

『そしたら予定通り爆破班が爆破テロったら突撃するんで、支援頼むな』

『はいはい、お任せっすよ。……だから試し撃ちだろうとダメだって。やめんとテメーのど頭ぶち抜くぞ』

荒れ始めた後衛部隊との通信を切る。なんでこう、どの部隊も最終的に荒れるのか、と考えかけ、うちの街がバカばっかだからかという結論に落ちつく。

そして最後に、特大のバカ共へと通信を繋がなければならない。ちよつと、既に気疲れしてきているので本当はしたくないのだが、彼

らなしでは作戦が始まりもしないため、仕方なしに爆破部隊へと通信を繋ぐ。

「あー、あー、こちら突撃部隊——」

『オメエその爆弾はそこじゃねえつつただらうが!!』

『いや、ここだね！現場に来て確信した！ここが一番派手に吹き飛ばポイントだ!!』

『いや絶対こっちだろ。こっちの方がより美しく爆発する』

『なあ？そろそろ爆破していい？我慢できそうにない』

予想通り、ではあるのだが、思わず顔を顰めてしまう程度には、通信の向こうは騒がしい。ただ声をかければ止まる、というわけでもない。一段落するまでは、大人しく待っているしかない。そうやってしばらく、適当に突撃部隊連中と話して待っていると、何とか怒号が収まり小型インカムから、こちらに向けての言葉が聞こえてくる。

『……つと待たせたな。うちの新人はまだまだセンスがなつちやいねえ癖に口だけは一丁前だからよお……』

「それより、そろそろ突撃したいんだがいけるか？」

『おう、任せろ。すぐにでもいけるぞ。というか早く爆破したい』

「マジかよ、もういけるんか。やべエ、お前ら早く準備しろ！」

大騒ぎしていたのでまだだと油断していたら、存外準備が済んでいたらしい。突撃部隊にも開幕に一発だけ射撃攻撃があるのだが、その準備が未だに整っていないのだ。こちらの言葉に、突撃部隊のメンバーが慌てて準備に入る。

『あ、あー、ダメだ。もうダメだ。我慢……我慢できない』

「もうちよつと、もうちよつとだけ堪えて！」

『……3……2——』

『ヒヤア我慢できねえ!!』

「えっ」

ドオン、と。今まで通信していたのとは別の声が聞こえたと思ったら、少し離れた場所から爆発音が響いてきた。それに思わず突撃部隊で顔を見合わせ。

「は、発射ツ——!!」

「え、まだ微調整中……」

「ええいままよ!!」

「ヤク中、行つきまーす!!」

指示を下した次の瞬間、メンバーの一人の個性によって、ヤク中が空へと撃ち出される。目標は、襲撃地点のターゲットが囚われている階層。ヤク中はそこ目指し空を舞い——そしてその建物を越え、空の彼方へと消えて行った。

「……よし、いざ突入!!」

「ヤク中砲なんてなかった、いいね?」

「アツハイ」

グダグダだった。あまりにもグダグダだった。グダグダだがしかし、斯くして襲撃作戦は始まった。

#5. Raid Attack

『——たつまんねえなあ!!』

『ああ、達するッ……!!』

『もつとだ……もつと爆破させろオ!!』

「う、うるせエ……」

全体通信の方で繋げられているために、緊急時に備えて通信を切ることもできず、爆破班の狂気染みた歓喜の声を聞き続けるしかない。耳元のインカムで騒がれているため、どう足掻いても大人しく聞けなかつた。ただ我慢できなくもないので、そのまま敵地へと突撃をかける。

全体通信なので他のメンバーも爆破班の声を聞いており、全員が顔を顰めている。いや、まあその前のヤク中砲のグダグダっぷりにもだろうが。それでも、仕事はこなすと全員が目的地へ向けて走っている。

目の前には既に、敵の姿が見えてきている。爆発に反応してどうにも慌てているようだが、流石に走ってくるこちらに気づかないほど鈍くはないらしく、他のメンバーと連絡しようとして。

パアン、と銃声が鳴り響くと同時に、その頭から血を噴き出して倒れていく。後衛部隊がいい仕事をしているようだった。

そのまま、正面入口が後衛部隊によって制圧され、何の問題もなく自分たち前衛部隊が目的の建物へと突入する。ここからは流石に、自分たちの仕事になってくる。窓際でもなければ後衛部隊からの支援は望めないし、爆破班は完全に頭がいつてしまっている。

一応、偵察部隊がいるが、彼らの本業は偵察であり、暗殺には期待するべきじゃない。

建物内、入口近く。流石に敵がいらないということではなく、何人かがこちらを見つける。そして通信を行うと同時に、手に持ったアサルトライフルをこちらへと照準を合わせてくる。

故に対応するように、加速。近接戦を主体とするために接近の手段は鍛えてある。重心を前へ、倒れ込むようにして体を倒し、倒れきる

前に足を踏み出す。それ繰り返し、結果前へと落下するようにして高速で移動する。

その速度に相手は対応しきれず、銃の照準がこちらに追い付いていない。練度が低い相手だ、と判断しつつ、個性を発動。

「刀剣召喚 『刺突短剣』」

取り回しがよく、かつ殺しやすい武器であるジャマダハルを召喚、心臓へ向かって防具を貫通させながら一突き。一人の殺害を終え、残りの敵を見やれば他のメンバーが一撃で敵を殺している。

こういう襲撃戦においては基本的に、自分たちは数で劣ることになる。だから自分のように一撃で敵を屠る技術は必須だった。

ただ蘇生や再生系の個性がないとも限らないので、召喚したのではなく、普通に持ち込んだ拳銃で一発、頭を撃ちぬいておく。こういう念のためは大事だ。基本的に頭と心臓、この二か所は潰すようにしていた。

一階フロントの敵を殺し終えた段階で、設置されたエレベーターのボタンを押してみる。すると案の定、反応がない。まあ爆破テロがあつた段階でそりや止めるよなあ、と納得しつつ階段へ向かう。

「確か二十階近くなかつたっけ？だつるいなあ……」

「我慢しろ。最初から想定してただろうが」

「ほら走って登るんだよお!!」

メンバーの会話に耳を傾けつつ、階段を走って登る。道中、敵に何度か出会うが、そいつらも一撃で軽く屠っておしまいだ。大した練度の相手がいない。

そうやって一気に上階へと登りながらも、息を切らすメンバーは一人もいない。全員、日々鍛錬を積み、仕事として戦闘を経験している。体力はバカみたいにあつたし、無駄のない動きも身につけていた。だから全力戦闘を数十分継続しない限り、息が切れる、ということはなかった。

やがて階段が途切れ、扉のみが存在する場所へと辿りつく。ただ、階層的にはまだ目的地とは言えない階だ。つまり、ここからは別ルートでしか登れないということであり、間違いなくこの扉の先には敵が

いるだろう。

今までの敵は大分練度が低かったこともあり、恐らくはここからが本番である、と判断し、メンバーの方を振り返る。

そして一人のメンバーを手招きで呼び寄せる。彼はまだスラム街に来てから数年の、比較的新人である人物だった。ただ数年ともなれば慣れが生まれてくる頃であり、そうして気が抜けたのか最初に仕事の説明の際には遅刻をしていた人物であった。

「ちよつと、ちよつとこつち来い」

「……何すか？」

「貴様に一番槍の誉れをやろう」

「マジっすか」

「うむ。——そう、お前が一番槍になるんだよオ!!」

「えっ」

寄ってきたメンバーを片手で持ち上げ、やり投げの要領で投げる。遅刻した者は特攻担当にする、と雷生さんは言っていた。だからまあ、彼をこんな扱いをしてもいいだろうと思いつつ、扉をぶち破り部屋の中へ新人が放り込まれるのを見送る。

それと同時に、扉周辺に銃撃が集中し、憐れにも投げ捨てられた男の姿に、戸惑いからか一瞬銃撃が止む。無論その隙を逃す自分たちではない。

部屋の内部へと一気に侵入、とりあえず近くにいた男の両肩に手を置き倒立。そのまま両手を相手の頭へと持ち替えたなら、倒立の勢いを利用して頭を無理矢理捻る。ゴキリ、と音が響いた頃には次の相手へと移動する。

個人的な話ではあるのだが、誰か見ている中で戦う時は実は見栄えを気にしたりしている。なんせ普通に戦うだけでは楽しくない。そのため格好つけた戦いを、仲間がいる時などは気にしていた。

一人目は、手品染みた個性による刀剣召喚。二人目はアクロバティックなアクション。では三人目は。

敵へと走り寄りながらイメージを固める。目と手の動きでサインを出せば、即座にメンバーが対応し、敵をひとまとめになるように追

い込んでいってくれる。襲撃作戦もこのメンバーとは何度もやって
いる。だからスマートに連携は成功し、範囲内へと全ての敵が収ま
る。

「ナイスだ——無差別大量召喚 降り注ぐ刃雨」

体力の消耗は大きい、仕事の性質上習得した範囲殲滅攻撃を繰り
出す。それは至ってシンプルな技。ただ敵の上方に刃だけの剣を大
量に召喚するだけ。ただし、重量は重め。故に、重力に引っ張られ大
量の刃が一気に敵へと降り注ぐ。

大量の叫び声と共に、血が辺りに飛び散る。反射神経がいいのか、
範囲外に何とか飛び出した敵もいるが、それも他のメンバーの手に
よって手早く処理されていく。

やはり、この技は派手で見栄えがいい、と思いつながら全ての刃を返
還すれば、いくつもの死体が折り重なって血の海に沈んでいるのが確
認できる。ただまあ、雑な技であり、殺し損ねがないとも限らない
ので、次の階へと去り際、増援を防ぐのも兼ねて手榴弾を死体の山へ
と投げ込んでおく。

下から響いてくる爆発音。多少建物が揺れはするが、そこまで威力
の高いものではないので、一階少なくなった程度だろう。どうせこの
後バカ共に強制的に爆破解体されるのだ、この程度誤差であろう。

そう思い、再び階段を駆け上がる。今度は道中で敵に襲われること
はない。ただ、いくつか死体は転がっている、どうやら偵察部隊
が仕事をしているようだった。

そうしてまた、階段が途切れ扉が現れる。しかし今度はその手前に
人影があった。あの姿は——知っている顔だ。

「どうした、こんなところで」

「偵察としてちよつと覗いたんだけど、デカブツがいるわ。結構気持
ち悪いビジュアルしてるわよ、あれ……」

「偵察部隊じゃキツそうか？」

「キツい、というか一人暗殺しようとして返り討ちにあったわ」

「うげエ、マジか」

うちの偵察班は、かなり優秀だ。個性が有能、というのもあるのだ

が、一部の連中は技術だけでその個性を超える隠密性を発揮しているのだ。曰く、日本の漫画で学んだらしい。ちよつと意味が分からなかった。

「途中まではよかったのよ。どうやら相手は鈍いみたいで、こちらの攻撃に反応はしてなかったわ」

「じゃあどうして?」

「刃が通らなかったのよ」

「どうやら、暗殺しようとしたら刃が相手の肉を通らず、気づかれて潰されたらしい。影分身して避けようとしたのだが、その大きな拳でまとめて薙ぎ払われたようだった。」

「……いや、影分身ってなんだ。クツソ見たいんだが」

「私たちではあいつの相手は無理よ。超有能隊長任せたわ」

「だから影分身って……クツソ、どっか行きやがった」

大変影分身とやらが気になるのだが、流石に目の前から消えられては聞き出せない。……いや、冷静に考えると目の前から消えるっておかしくないか……?

ただまあ、そんなことを気にしている場合でもない。刃が通らなかったそうだが……何が要因かが分からない。となれば、自分の攻撃も通らない可能性がある。警戒しなければならぬ相手のようだった。

「……とりあえず、一気に突入。囲んで殺すぞ。で、何で刃が通らないのか確認する」

恐らく、個性なのは間違いない。ただそれが固いだけなのか、反発するのか、無効という概念を持っているのか。それが分からなければ対処のしようがない。だからまずは、突入して自分が攻撃してみるしかなかった。

「3、2、1……GO!!」

扉を蹴破り部屋へ飛び込む。敵は、一人。かなり大柄な、脳が剥き出しの化物のような見た目だった。その反応は鈍く、こちらを認識するのに時間がかかっているように見える。故に先制、自分に続いて突入したメンバーが個性で指先から細いレーザーを発射、敵の体を貫通

させる。だが、敵に怯んだ様子は欠片もない。

一定以下のダメージは無反応か、と判断しているとその穴が塞がっていくのを見てしまう。

——複数個性持ちか！

内心で思わず叫ぶ。恐らく、不気味なビジュアルになったのはそのための改造の影響なのだろう。ただ斬撃耐性、再生能力、また肉体的に増強系も含まれているだろう。厄介過ぎる、と思っていると攻撃を受けたからか、敵が完全にこちらを認識する。

『オ——ア——ア——!!!』

言語化しがたい、独特な奇声。それに思わず耳を塞ぎたくなるのを堪えつつ、走り寄る。そんなこちらに対応するように振るわれる敵の腕——しかし、乱雑なそれを増強個性のメンバーが抑え、流す。そして勢いそのまま体勢が崩れた敵を煽るように吹く、残りのメンバーの個性による風。

そこまでやって敵の姿勢が完全に崩れ、こちらに向かって倒れ込んでくる。

「刀剣召喚 “トウハンドソード両手剣” !!」

その敵の首元に合わせるように、両手剣を召喚する。敵は体格的にかなりの重量だ。故に剣に向かって倒れ込んでくれば、自重で首を斬れる——そして、ズシン、と腕へ振動が走る。

だがその感触は人を斬った時とは違う。いや、確かに首へと食い込む時の感触はあった。だがそこから斬る感触に繋がらない。見れば、両手剣は床へと食い込んだだけで敵には全く刃が通っていない。

これは感覚的に斬撃無効の概念の個性だな、とその厄介さに思わず舌打ちしながら距離を取ろうとし、

「グツ——!?!」

超高速で振るわれた腕に吹き飛ばされる。それはギリギリなのか、振るわれた腕だと認識できるほどの速度であり、回避するのはあまりにも難しい一撃だった。

壁へとぶつかり何とか止まり、口の中へとこみ上げた血を吐き捨てる。体は——動く。単純にダメージを負っただけで、骨などはまだ

生きている。自分の頑丈さに感謝しつつ、何とか立ち上がる。

そんなこちらの下に、予想外の脅威から突撃部隊のメンバーが集まってくる。突撃部隊は、確かに戦闘能力が高い。ただそれは、技術で補っているところが大きく、ああしてスペックが突き抜けているタイプは、その上から捻り潰されるため相性が悪かった。

どうしたものか、と距離を取っていると、敵は何を思ったのかその大きな口を突然開き、

『ああkだあp w qおjわじゃp?』

——それは、狂気を孕んでいた。

聞くだけで脳が揺さぶられるかのような気持ち悪さを覚える。どうしようもなく、視界がブレ、頭が痛い。

「ぐ、ア……精神、汚染系個性……!!」

随分とまあ、とんでもない個性を積んでくれたものだ、と内心で悪態を吐くが、それを声に出す余裕はない。見れば、メンバーの一人は既に泡を吹いて失神している。他の人も、何とかギリギリ意識を保っている程度だ。

かく言う自分だって、結構ギリギリだ。これ余裕で全滅あるぞ、とどうしようもなさに嘆いている時、そいつは現れた。

ドオン、とぶち抜かれる天井。爆音に敵の声が止み、視線がこちらへと向けられることで個性が解除される。急激に戻った感覚に、思わずふらつきながら、何とか何かが落ちてきた場所へと視線を向ける。敵か味方か、それがまだ分からない。だから舞う砂煙のなかを見分けようとして、徐々に晴れていく煙の中からそいつは高らかに声を上げた。

「——夜空より舞い降りし救世主……そう、それすなわち俺ことヤク中ツ!!」

「ヤク中お前!!」

「お前どうやって戻ってきたんだよ!」

もう台詞からキマリっぷりが分かるヤク中が、煙の中から現れたのだった。飛んでったのに何でここに、とか天井ぶち破ったのに何故無傷なのか、とか色々確認したいことがあったが今はそれより優先しな

ければいけないことがあった。いくらこちらの増援だろうが敵の声を聞けばまたアウトなのだから。

「気をつけろそいつの声は——」

『fおwぽあp；あfーだふおえあzー!』

しかしその注意は、遅かった。敵のそれには指向性、というものが存在しないようで、後ろにいた自分たちにも影響が出て、再び精神が揺らぐのを理解する。二度目だからか、視界に映る景色が歪んでいくのを理解する。床は湿った触手で編まれたものに、光源はこちらを見つめる黄色い目玉へと。今はまだその程度の変化だが、これはこのままいけば間違いなく精神が崩壊する——。

「——うっせエ!!」

そんな空間の中で、しかしヤク中のみは平然と活動していた。叫びと共に、何の技術もなく振るわれるテレフォンパンチ。無論、それに威力が乗ることはない……本来であれば。

刹那、発動されるのはヤク中の個性。それはドーピングという名の、今まで摂取したクスリの分だけ威力が増すという個性。それにより、毎日クスリを摂取し続けたヤク中のパンチは、とんでもない威力をはじき出す。

『?!?!?』

「夜天に舞いな……さつきまでの俺のようにな」

ヤク中の一撃によって敵が壁をぶち破り外へと飛んでいく。それを見送り、あれは斬撃耐性しかないあの敵では死んだな、と判断し、未だにフラつく体を無理矢理動かしてヤク中へと合流する。

「すまん、助かった……」

「やっべえ、ストック使ったからクスリ……クスリが足りぬ……」

そう言っただけの礼をスルーしながらクスリをキメ始めるヤク中に苦笑しながら、一つだけ、どうしても確認しておかなければならないことを聞いておく。

「なんで、お前は敵の精神汚染系の個性がきかなかったんだ？」

「そりゃ最初から発狂してる俺に効くわけないだろ？」

あまりにも納得がいく説明に返す言葉がなかった。

まあ何はともあれ、既に目的の階は目前だったりする。そのため、失神してしまった仲間と、それを見守る仲間を一人置いて、次の階へと向かう。

次の階はもう、回収対象がいるらしい階であり、先ほどの敵が最後の関門のようだった。そのため特に何の問題も起こることなく、次の階へと辿り着き、部屋へと入る。そこは殺風景な部屋であり、回収対象と、その警護に数人の人間がいるだけだ。

だからサクツと距離を詰め、首を撥ね飛ばしたりして邪魔者を処理し、回収対象につけられた目隠しと猿ぐつわを外す。

「——っは、え、何、何が起きたんだ？」

「さあね、私は知らないわ。でも、この拘束を外してくれた人たちが何かしたのでしょね」

「た、助けか!？」

日系の少年の方が無邪気に助けが来たのかと喜ぶのに対し、欧州系の方の少女は明らかに冷めた目でこちらを見ている。それは全くと言つていいほどに期待していない目であり、正確に今の状況を把握しているかのようだった。

まあ確かに、厳密には助けではないのだ。少年のそれはぬか喜びでしかないんだよな、と思いつつ二人に向けて口を開く。

「つーわけでお二人さんには再度拉致られてもらいます」

——そうして襲撃作戦は成功を収めたのだった。

#6. Celebration

「「かんぱーい!!」」

グラスの中身が零れることも厭わず、思いつきりぶつけ合う。斬撃系個性に至っては、瓶の口元を斬り飛ばして、それを乾杯に使っていた。

大して繋がりのない連中ともグラスをぶつけて回る。今日は完全に無礼講、誰もが遠慮せずどんちゃん騒ぎをしていた。

このパーティーの名目は、一応襲撃作戦成功祝い兼スラム街の新人歓迎会。ただ、その新人はガンギマリ爺と雷生さんの下でこの街について説明を受けているし、襲撃作戦が上手くいったのが特別嬉しいわけではない。単純に、騒ぐ口実が欲しいというだけだった。

「いやあ、一仕事したあとの酒は美味いなあ!」

「まあ既に翌日なんだけどな」

「じゃあ何時でも酒はうめえ!!」

まあそれは確かに、否定できないところだった。グラスの中身を一気に飲み干して、そこら辺の酒をおかわりとして適当に注ぐ。

襲撃作戦から既に一日が経過し、日付は翌日になっている。全員が後処理などに追われ、この時間での打ち上げ開催となったが、それでも誰もが疲れを見せることもなくバカみたいに騒いでいた。

ただ自分は、どうにもテンションを上げきれず、前衛部隊の連中とは別行動で、会場内をウロウロとしていた。

「……あら、超有能隊長」

「そのネタいつまで引きずるんだ? いや、まあ実際超有能だから仕方ないと思うが」

「ヤク中に救われたのはどこの誰だったかしら……」
「うぐう」

それを言われると何も言えない。思わず、恨みを込めて偵察部隊隊長——「ディテイー」を見るが、本人は完全に素知らぬ顔だ。まあ確かに、自分がヤク中に助けられたのは事実なのだ。大人しく受け入れるしかなかった。

「つつてもなあ……あれマジで対策してねエときつかったからなあ……」

「まあ正直、厄介過ぎる個性よねえあれ。私も隠れて見ていたけど、範囲内だったせいで発狂寸前だったわ」

しかもあれ、後から爺に確認したところ死柄木弔の手回しだったらしい。事前の情報より敵が多かったりしたのも、また。死柄木の裏にいる人物が、悪戯ぐらいならと許可したそうだった。

悪戯であんな厄介なものを送り込める死柄木の組織に驚きつつも、それ以上にそんな情報をサクツと得てくるガンギマリ爺が恐ろしかった。本当にどんな情報網をしているのだから。

「他の偵察班の連中は？」

「基本的に別のところを見ていたから平気よ。私と一緒にいた奴はその前に化物に殺されちゃったしね」

ああ、と思います。そういえば確かに、斬撃が通らないと最初から知っていたのは、その人の死があったからだだったか。

「彼は……ナルリ、という名前だったのだけど。なかなか、優秀だったのだけれどね」

「お、なんだ、あいつの話か？」

「ナルリ？ああ、いいやつだったよ……」

「おお、ナルリよ、しんでしまおうとはなさない」

ナルリの名に反応して、周囲から人が集まってくる。そこには偵察班として何度か見かけたことのある人物が多いが、それ以外にも街中で見かける、非戦闘員の姿もあった。

「あいつなー、最初は無個性だからって親に捨てられてビービー言うてたよなあ……」

「確かによく泣いてたな……。んで見かねた隊長が引き取ったんだっけか？」

「ええ、まさか十代で子育てすることになるとは思わなかったけれど、一から暗殺術を仕込んであげたわ」

「ああ、それでどう考えても子育てじゃねえって俺たちが手を出したんだっけか……忘れてたなあ」

目を細めて懐かしそうに語られる過去に、耳を傾ける。その場にいらる誰もの言葉に感情が込められており、それを知らない自分でも、情景をしつかりと思ひ浮かべることができた。

「つっても俺らもまともに育てられたわけじゃねえからろくなもんじゃなかったけどな!!」

「そういや俺らがあいつの持ってたエロ本見つけて、つい他にオススメのエロ本教えてやったら喧嘩になったこともあったな」

「よりによって隊長にも見られちゃまって、本気でキレてたなあそれは」

「そりゃ好きな人に見られればなあ」

「えっ、あの子私のこと好きだったの?」

「えっ」

「気づいて……なかつただと……!?」

まあこの人、鈍いからなあ、と納得する。こないだ街中で見かけた時も、明らかに好意を向けられているのに全く気付かず、最後には男の心を折っていた。そりゃもう、欠片も相手のことを意識していないというのがよくわかる対応だった。そんな彼女に惚れるとは、ナルリという少年も大変だったことだろう。

「そもそも惚れてなきや、無個性のまま隊長と行動共にしようとしないですよ」

「隊長が担当してる訓練の時だけ気合の入りようが違ったしな」

「ま、まったく気づいてなかつた……」

「隣れなナルリよ……」

「ほんと、何で死んじまったかね」

その言葉に、誰もが彼が死んだことを惜しんでいるのが分かった。ここで生きていく以上、皆死ぬ覚悟はできている。

「……俺さあ、そろそろあいつ風俗に連れて行ってやる予定だったんだよ、いい加減女を知つとけつて」

「それ、あいつ絶対断つただろ。童貞捨てるのに夢持ってるタイプだぞ」

「俺はちよつと街の外に連れていってやろうって、思ってたんだけどなあ……」

「ああ、何人かで、金……出し合ってさ……」

「ナルリ……」

「だけど、やっぱり、誰かが死んで影響がないわけがなくて。こうして、互いに関わっていく以上、どうしたって深い関わりのある人間がいて、悲しみは生まれてしまう。」

「——ほらお前たち！しけた面してんじやないわよ!! 私たちの流儀を忘れたの!？」

「そしてだからこそ、笑うのだ。」

「——笑え、死んだ奴を送るときは目一杯笑え」

「——刻め、そいつが生きた証を残すために心へ刻め」

「そう、あの子は全力で生き抜いた！だから笑って見送ってやるのよ!!」

「二——ナルリに、乾杯!!」二

「自分も、全力でグラスを高らかに持ち上げる。自分は、ナルリという人間を知りはしない。精々、少し見かけたかどうかだ。だけど、だからこそ今日聞いた話をしっかりと胸に刻むのだ。生きた証は、多ければ多いほどいいのだから。」

「ソーヤも、乾杯しましょうか」

「おう、乾杯」

「静かに、デイトイーとグラスをぶつけ合う。彼女は、ナルリという少年を最初に面倒を見始めた人間だ。一番、彼のことを家族のように感じていたのかもしれない人間だった。見れば、目元が少しばかり赤かった。」

「ちつと、お前の目から見たナルリのこと、教えてくれるか」

「だけど、それを理解した上で、いいや理解しているからこそ彼女から見たナルリを、覚えていたかった。」

「そうね……。あの子は、好意を向けてくれていたらしかつたけれど。私からしたら年の近い息子……。いえ、どちらかと言えば弟だったのかしら」

「弟、と言われるかと思えば出すのは自分の義姉のことだ。そうか、自分があの人を失ったのと同じだと考えると……。今こうして、ここで他の」

人々を鼓舞した彼女は、どうしようもなく、強く思えた。

「優秀な子だったわ。個性はなくても、技術でそれをカバーできるだけの力があつた。私と共に行動してたつてだけで、分かるでしょう？」

「そりや、な」

ディテイーは、偵察班の中でも飛びぬけて優秀だ。個性は隠密、気配を消せる個性で、それに加えて純粋な隠密行動の技術だ。そんな彼女が身内の鼻肩目があつたとしても、現場で連れて歩いてきたということは、かなりの実力者であることを示していた。

「そうね……個性があるから、どうしても私の方が上だったけど、経験を積めば偵察班の副隊長にしようと思つてもいたのよ」

「……そいつは、優秀だ」

「ええ、それに普段も真面目で、よく働く子だったわね。私の前だったからなのかもしれないけれど」

寂し気に苦笑するディテイー。それは、そうだ。覚悟してたつて、一日で割り切れるわけがない。いつ死んでもいいように、毎日を全力で楽しくなるように生きていたつて、心残りが無いわけじゃない。引きずるものがあるのだ。

「……夜風にでも当たりに行くか」

「……いいわね」

ディテイーと二人、打ち上げ会場を抜け出す。外はそう冷え込んであるわけではなかったが、それでもアルコールで熱くなった体には、風が冷たい。だからディテイーと二人、寄り添うようにして空を見上げる。

この街には街灯が少ないこともあつて、夜空はムカつくくらいに星々で輝いていた。

「……寂しいもんだなア……」

「どうしようもなく、寂しいわよ……」

自分は、義姉と別れた時を思い出して。ディテイーは恐らく、ナルリのことを思い出して。寂しさを感じながら、二人、グラスに残った酒をチビチビと飲んでいく。

今回の仕事で死んだのは、別にナルリだけじゃない。突撃部隊とは別に、増援を防ぐため建物周辺で戦っている連中もいた。そのメンバーは少数精鋭の突撃部隊と違い、実力はまちまちであるため、何人か死んだとも聞いている。

彼女だけが特別というわけではないのだ。少なくともこの街では、死はすぐそこにあるのだから。

「やるせない、よなア……」

そして思い出すのは、今回の仕事で保護した二人だ。あの二人は、あのままだったらあの組織でこき使われていただろう。自分が知る限りでは、あそこは人員を使い潰す組織だった。だからまだ、この街に来た方がマシだっただろう。

それでも、口が裂けてもよかつたな、とは言えない。ここ暮らしでは、ナルリのように死んでもおかしくないものだ。だから、よかつたなんて言えやしない。

何時だか誰かが言っていたが、あの組織で暮らすか、ここで暮らすか、野垂れ死ぬか。どれもろくなものではない。でも、そのろくでもない選択肢しかあの二人にはないことが、やるせなかった。

「おや、想也くん。こんなところにいたのかい」

「雷生さん」

「少し、話があるんだが、いいかい？」

だからそれは、そんなことを考えていたからなのかもしれない。

◇

「俺が、世話役？」

「ああ、頼まれてくれるかい？」

雷生さんからの頼みに、思わず唖る。目の前にはあの時連れ出した二人のうちの、欧州系の顔立ちをした少女がいた。雷生さんからの頼み、というのはその子のことの面倒を見てやってくれ、というものだった。

この街においては、ナルリという少年がそうだったように基本的に

新人には一人、世話役が付けられる。それは、ここでの生活について教えてやる人間が必要だからだった。

「何で、俺なんだよ」

別に、世話役を設定すること自体に疑問はなかった。ただ、何故自分が選ばれたかが分からない。自分の場合、義姉のこともあって、あまり誰かと生活を共にするのを避けてるところがある。そこら辺は雷生さんも知っていることのはずだった。事実、今まで世話役に選ばれたことはない。その上で、何故自分が選ばれたのか、それが気になっっていた。

「彼女の能力なのだけれどね、君が教えるのに向いている、と思ったのが一つ」

「……他の理由は？」

「いい加減、君も先に進むべきだろう？」

そう言われると、何も言い返せない。過去、義姉が死んでしまったことは割り切っている。ただそれでも、ついつい世話役を避けて、ここまで来てしまった。偏に、家族を失ってしまうのが怖かったから。

特に、今はついさつき弟分を失ったデイティーを見たばかりだ。だから余計に、深い関係の人間を作るのが怖い。それでも、いい加減自分分は前に進むべきなのだろうか、と少女を見やる。

「……あなたは、あの時、私をあそこから解放した人の一人？」

「……まア直接的に連れ出したのは俺だな」

突然、少女から放たれた問いに驚きつつ、答える。あの作戦自体は街全体のものであったが、直接的に彼女らを解放したのは自分たちと言えるのだろう。だから素直に肯定を返したと思えば、少女があの時も見せたやけに冷めた目で、呟く。

「——別に、あのままで良かったのに」

「……………」

その言葉は、彼女が生きること諦めているのを示していた。彼女はきつと聡明だ。だからあの場に居続けければ道具として使い潰されることは、理解しているだろう。その上であのままでいい、というのならそれは、死んでもいいと言っているのと同じだった。

そして同時、雷生さんが自分に彼女の世話を回した理由を理解する。ああ、確かに、自分では彼女を放っておくことができそうもなかった。

「……雷生さん、世話役やるわ」

「それは良かった」

「世話役も、要らないわ」

「うるさい、黙れ。テメーの意思など知らん」

その言葉に、冷めた目のまま少女がこちらを睨む。

……それだ、その眼が気に食わない。全てを諦めた目が、どうしようもなく癩に障る。あの人が命を懸けて、生かしてくれた自分がいる。ナルリという弟分を失ったデイトイーがいる。日々を全力で生き抜いている人々が、この街にはいる。他の場所でもなく、そんな場所で生きるのを諦めている人間がいるというのは、ただただ自分にとって気に食わない事実だった。

だから、彼女の都合とかそういうものをガン無視して、ただ自分がムカつくからという理由で宣言する。

「——今からテメーは、問答無用で俺の家族だ」

癩だから、意地でも生きたいと思わせてやる。

D e m i s e #7. H o u s e m a t e

——ふわあ、と欠伸を一つ。

枕元の時計を見ると、時刻は既に昼頃。まあ昨日打ち上げと称して、夜通しどんちゃん騒ぎしたわけだし、当然だよなあ、と納得する。それでも、二日酔いはしていない辺り、存外飲み方に関しては冷静だったらしい。

ベッドから起き上がり、いつも通り寝汗を流すため風呂場へと向かう。ざっと、適当にシャワーで汗を流したら、タオルで水気を取り、パインイチで脱衣所から出ようとして。

「……あ、今一人じゃないんだっけか」

昨日から同居人が増えたことを思い出す。流石に、女の子の前でパインイチはマズいよな、と脱衣所前に人がいないことを確認し、自室で着替えを探す。今までパインイチで済ませていたため、ほぼほぼ着ていないが……あつた。部屋着用の柄もない甚平。それを手早く着込み、改めて部屋から出る。

一応隣の元義姉の部屋が新しい同居人の部屋になるわけだが、まあ流石にこの時間であれば起きているだろうと判断して、リビングの方へ向かう。どうにも、家の中で服を着ていることに違和感を覚えるが……まあ、そのうち慣れるのだろう。

「つて、あれ。いねエ」

リビングに顔を出せば、そこはもぬけの殻。昨晚から物の配置が変わった様子もないし、どうやら同居人はここへは来ていないらしい。となると今は部屋の方か、と考えつつもまずは腹が減ったために、朝食兼昼食を食べることにする。

ただ流石に寝起きで料理するのは面倒であるし、そもそも別に、自分は料理男子とかいうジャンルではない。済ませられるなら、躊躇いもなくカップ麺などで済ませる人間だ。

一応、今日に関しては買ってきてある菓子パンがあるため、それで

食事を済ませることにする。この環境では菓子パンも貴重品であるために、些か勿体ないような気もするのだが。まあそれこそ取って置き過ぎて、賞味期限を切らすよりはマシだろう。

「ん、美味しい」

朝食に関して言えば、自分は白米よりもパン派だ。いや、そもそも環境的に白米が貴重、というのもあるのだが。単純に、自分はパンが好きだったりする。

しかし、同居人の方はパン派か米派かが分からない。この時間になりビング、あるいはキッチンにいないなら昼食を食べていないのだろうが……まあ、小麦アレルギーなどを持っていないことを祈るしかない。

自身の食事を済ませたら、ここ最近使っていないかったお盆を久々に取り出し、洗う。そして洗ったそのお盆に皿に盛った適当な菓子パンと、コーヒー。それから砂糖やミルクなども用意しておく。正直、他人の世話などしたことないのでこれで正しいかは知らないが……まあ、自分に義姉がしてくれたことをある程度なぞらえれば大丈夫だろう。

「つーわけで起きてますウ？」

足でドアノブを捻って扉を開けて、部屋へと突入する。部屋の中は、住み始めたのが昨日からということもあって、ただベッドとミニテーブル、その上に女性用の衣服が幾つかあるだけだった。殺風景だなあ、なんて義姉がいた頃と比較しながら、ベッドの上に座り込む少女を見やる。

少しだけ赤みがかった金色の、腰まで伸ばされた長髪。寝巻の裾から覗く足首は、余りにも細くて少し力を入れれば折れてしまいそうに思える。そして何よりも、こちらへと向けられた燃えるように紅い色の癖に無気力な、癩に障る目。

「おらソール、飯だぞ」

「……そう」

端的に、それだけしか返さない彼女にイラツとしつつも、ミニテーブルから衣服の類をどかして、そこへとお盆を置く。そして視線では

よ食べ、と示すと渋々ながらもソールはパンを手に取り食事を始めた。

「朝は食ったのかよ」

「……食べてない。別に、餓死したって構わないから」

すぐこれだ、と頭を抱える。死にたがり、というわけじゃない。ただ生への執着がないのだ。生きようというモチベーションがないから、例えその行動が死に繋がるものであっても、誰かに止められなければ躊躇いもなくやってしまう。

ただ誘拐された程度じゃこうはならない。だから間違いなく、それ以前に何かあったのだろう——そこまで考えて、何で自分が嫌いなやつのことを考えなければならぬのか、と後頭部を掻き毟る。

「はー……ほんと、酔った勢いで世話役とか受けちゃダメだわなア……」

「だったら、捨てればいいでしょ?」

「阿呆が」

真顔でそんなことを言うソールの頭を軽く小突く。それにすら不満気な顔すらしないソールに呆れつつ、ソールの方は気にしていないだろうが、一応理由を語っておく。

「一回引き受けて、それを投げだすなんて格好悪いだろうが」

「……それだけで嫌いな私の面倒を見れるの?」

嫌われている自覚はあったのか、と少し驚く。どうやら、ただ無頓着なだけで周りの感情の機微が分からないわけではないらしい。だからやつぱり、元々はこうではなかったのだろうな、と思いつつ嫌いなソールに構う理由を口にする。

「嫌いだからって距離を取るのはまア、一つの選択肢なんだろうよ」

「だったら、何で?」

「個人的な考えだけだな。その選択肢はどうも、逃げてる気がしてな。格好悪い気がして嫌なんだよ」

結局、自分の基準など格好悪いか否か程度なのだ。自分は、自分のことを守ってくれた、格好いい背中を知っている。だからせめて、自分ができる範囲では格好つけることにしているのだ。あとはまあ、シ

ンプルに男としての矜持もある。

「やつぱり、分からない」

ただそれは彼女には理解できない概念らしく。普通は分からない感覚だよな、とも理解できる。ただやつぱり、この街で生きていると格好悪い真似はできないと思ってしまうのだ。なんてたつて、理不尽な目にあつても抗い続ける格好いい人間がここには多過ぎる。

だから彼女のように諦めてしまった人が癩に障るし、同時にこの街の人々に感化されて変わつて欲しいとも思う。それを彼女が望んでいないとしても、自分はそうであつて欲しいと思うからそれを押し付けるのだ。

「…………ちそうさま」

そんなことを考えていれば、いつの間にかソールが食事を終えて、コーヒーも飲み切つてそう言葉を発する。そこら辺のマナーはしっかりしているんだな、と考えながらお盆を持ち、立ち上がる。

「んじやま、ちーつとついてこい」

「何かするの？」

「この街で生きていくために必要なことだよ」

「必要ない。別に生きてたいわけじゃないし」

「んなことどうでもいいから家主の言うことは聞け」

そうやつて言い切れば、食事をあげたこともあつてか渋々ながらも、こちらに続いてソールも立ち上がる。背丈は、こちらの肩ほどまであるから、この年代の女子としてはそう珍しくはないのだろう。ただ、先ほども思ったが、どうにも彼女は体が細い。栄養が足りていないのではないか、と心配になる程度には。と、なるとこの後やることと並行して食事の方も管理しなければならぬかもしれない。特に彼女は放つておくと食事をサボりそうであることだし。

ソールを引き連れてまずはキッチンへと行き、流しの方にコーヒーカップや皿をぶち込み、一旦放置。そのまま家の外へと出る。

自分の家から出てすぐは、街の外れの方にあることもあつて、広い平地が広がっている。いつもは主要区画に遠くて不便だな、としか思っていなかったがこうなつてみると便利なのかもしれない。

「それで、何をするの?」

「ん、それだけだな」

何をするかは気にするのだな、と思いながら振り返り、ソールの目を見る。そしてそこで彼女は何をするのであれ、とつとと済ませたいだけだと察し、やっぱりこいつ嫌いだわ、と改めて思う。

ただまあ、その程度で投げ出すタイプではないので、若干のイラつきを飲み下し、今からやろうとしていることを口にする。

「とりあえず、お前さんの実力チェック」

「実力?」

「そうそう、どれだけ戦えるかって話」

しばらくは、自分が面倒を見るから別に戦えなくても問題はない。ただいつか、独り立ちするか、あるいは自分がいなくなつた場合。その時は彼女は一人で仕事をこなすことになる。だから今のうちに、あの程度は戦えるようにしておく必要があつた。

まあその場合、今の彼女の考え方の場合、仕事などしなれないと思われるので、並行して考え方も何とかしなければならぬのだが、今は考えないでおく。

あとは単純に、雷生さんからの世話役やってくれという頼みには、彼女の鍛錬も含まれているというのもある。個性的には適性は戦闘なので、戦力になるようにしておいてくれ、という話なのだろう。

「別に戦えるようになりたいわけじゃない」

「でも俺はお前が戦えるようにしておきたい」

「……はあ」

そう言つてやれば、溜息こそ吐いているが、諦めたらしくソールの纏う雰囲気が変わる。相変わらず、その瞳は無気力だ。それでも、一応の闘志とでも言うべきものが見えるようになる。

態勢こそ変わらないが、事前に雷生さんからソールの個性は聞いているため、その必要がないのだと理解している。だからその段階で既に、ソールの戦闘準備はできたのだと理解できていた。

ステップ。後ろへと下がって距離を調整する。剣の間合いからは外れ、銃を構えて撃つには些か近い。どちらであつても、互いの技量

によって勝者が変わる、そんな距離。

右半身を後ろへ、軽く腰を落とす、重心はしっかりと体の中心へ。口の中で小さく、刀剣召喚と呟き右手に武器を呼び出す。形状はシンブルな片刃直剣。最も自らが扱いやすい武器だ。

そうして、こちら準備を整える。

「先手は、譲ってやるよ」

「……私が勝っちゃおうよ？」

「はは、オメー如きじゃ負けねエよ」

如き、とまで言われ流石にカチンときたのか、ソールの眉間に皺が寄る。感情が死んでるわけじゃないんだな、と思いつつ、周辺の温度が徐々に上昇していくのに気づく。それにソールの周辺に舞うのは——火の粉か。スイッチが入ったな、と理解ししっかりと右手の剣を握りしめる。

「——手加減は、しないよ」

刹那、視界が燃えた。

いいや、違う。壁だ。紅蓮の壁が、目の前に生じたのだ。それは、ソールを中心に球状に広がっていく、炎の壁だった。しかもよく見れば、純粋な炎ではなく、白いもの——光が混じっているのを理解する。便宜的に、光炎とも言っておくべきか。

これ、直視し続ければ目が死ぬな、と理解しサングラスを手早く召喚する。それでも、それを貫通するほどに強い光を放つ光炎を見続ければ直ぐに目が死ぬだろう。

故に、斬る。

身体の各部関節を順序立てて、連動するように、力を余すことなく足元から腕へと流し、右手の剣を振るう。やることはシンプル。幾度となく鍛錬で、実践で繰り返してきた斬るという動作。

一閃。

—— 続いて、もう一閃。

X字状に、光炎の壁を斬り裂く。そうして見えるのは、光炎の壁の向こうにいた、ソールの姿だ。

余程自信があつたのか、ソールの顔は驚愕に彩られている。ただこの程度、この街の住民であればあつさり突破するだろう。デイトイーであれば、忍術とか言つてすり抜けるだろうし、ヤク中であればノリで耐えて通り抜ける。そして近接戦の中でも、特に剣の扱いに特化した自分であれば、こうして斬り裂いてみせる。

そんなことを思いながら、前へと落ちるようにして加速し、間合いを詰めて、ソールに反応させる暇を与えずその首元へ剣を添える。

「——と、まアこんなもんだな」

右手の剣を返還しながらそう言うが、ソールの方からは反応が返つてこない。どうやら、それなりに自らの個性に自信があつたらしい。

—— 太陽の個性。

それは明確に太陽を操ったり、太陽と化したりできる能力ではない。太陽っぽいことならできる、という抽象的なものらしい。例えば「太陽と言えば燃えている」というイメージから炎のある程度操れる。「太陽と言えば光っている」というイメージから光のある程度操れる。所謂概念系の個性になつてくる。

ただ広い応用の幅に対しデメリットも存在していて、イメージが明確でないと発生する現象の強度が落ちるのだ。だからああも簡単に自分でも斬ることができた。あれに例えば「太陽はその巨大さ故に斬ることができない」というイメージが乗っていれば、斬撃耐性が光炎の壁に付与されただろう。

いや、まあそれでも問答無用で斬り伏せるのだが。

それでも、普通に考えれば個性としては強い部類には入るのだ。だから、今までの生活で自信を持っていても、別におかしなことではないのだ。ただそれがこの街では通用しない、というだけで。

「ま、そんなわけでまだまだ弱いんで修行するぞ、クソ雑魚後輩」

「……修行？」

呼び名はスルーか、と思いつつも反応が返せるなら上等。心が折れたわけではない——あるいはとつくに折れていてもはや折れる余地がないのか。まあ些細なことだ、そんなことは気にせず、反応できるならそのまま修行に入ることにする。

「それじゃ、走るぞ」

「走る？」

「イエス、走る、ラン」

実際、その場で走るモーションを試みれば、そうじゃない、と返される。ならば何が聞きたいというのか。

「強くなるために修行するんでしょ？じゃあ個性の訓練とかじゃないの？」

そのあまりに間抜けな質問に、思わず大きな溜息を吐く。それにイラツとした様子のソールだったが、一先ず話を聞くことにしたのか、こちらに説明するように促してくる。仕方がないので、このクソ雑魚後輩にもわかるように説明してあげることにする。

「いいか、今後お前は仕事をするようになる。そしてその仕事には、ずっと走り続けることになるものがある」

例えば、つい先日の襲撃作戦。あれなんかはいい例で、自分たちは戦いながら階段をひたすら走り続けた。

「それにきつきはお前、止まって個性を発動してたけどあれじゃ狙ってくれて言ってるようなもんだ。動きながら戦うのが基本。だから当然、体力は必要になってくる」

ここでの仕事をこなすには、何はともあれ体力が無ければ話にならないのだ。派手に動いても体力をもたせることのできるだけの体力量と、効率的な身体の動かし方を理解する必要がある。故に。

「走るぞ、俺がいいって言うまで」

「それ具体的にはどれくらい……？」

「俺次第だ」

「……………」

「ちなみにこれから毎日やるからな」

「嘘でしょ……？」

「残念、真実だ！ほら走るんだよオ!!」

ソールの尻を蹴っ飛ばし、無理矢理走り出させる。終わりの見えな
い走り込みに、明らかに絶望した顔をしているが問答無用。

そして過去自分も経験した、ソールにとって地獄のマラソン生活が
始まった。

#8. Disciplining

ソールの走り込みが始まってから数週。精神面においては、全く改善が見られていない。変わらず彼女は生きることに対して無頓着である。健全な精神は、健全な肉体に宿るというのが、絶対にというわけではないらしい。

ただまあ、この走り込みは別に精神面の改善を狙ったわけではない。純粹に体力を付けさせるのが目的である。そしてそれはある程度ではあるが、実を結び始めている。

「オラペース上げろオ!!」

「クソツ……!」

「聞こえてるぞ、距離延長!!」

「ファック!!」

ついでに、精神面の改善はなかったが、こちらに影響されて口はだいぶ悪くなってきた。いいキャラになりそうだと判断しながら、走り続けるソールを見る。

相変わらず、ひいひい言いながら走ってはいる。しかし本人が自覚しているかとはかく、かなりそのペースは速くなっている。それは単純に体力がついた、というだけではなく、体力の消耗が少ない、効率的な走り方を体覚えてきた、ということである。

と、なればそろそろ、次のステップに行ってもいい頃になってくる。だからソールへ声をかけ、いつもより早く、走るのをやめさせる。

「……何でこんなに早く終わりなの?」

「その疑いの目やめない? いや、気持ちは分かるけど」

自分も、同じように初めて義姉の方から走り込みを短めで切り上げられた時は疑ったものだ。絶対に、この後ろくなことにならないのだろう。そして実際、それは間違っではないなかった。

「とりあえず、今日から走り込みは短くするぞ」

「その心は?」

「次の修行へと入ります」

それにソールは思いつき顔を顰める。彼女からすれば、する必要

性を感じない修行がステップアップしていつているのだから、それはやる気がしないだろう。それでもやっているのは、きつと根が真面目なのだと思う。

「つってもまあ、やることはシンプルで、ひたつすら個性を発動して、やめてを繰り返すだけだがな」

「そんな簡単なものでいいの？」

「あ、もちろん攻撃用の威力で、俺がいいって言っただけでな」

「そんなことだと思った」

そう言っただけ嫌な顔をしているソールだが、それでも大人しく個性を発動し、光炎を周囲に広げたあと、それを解除してを繰り返す始める。それに真面目だなあ、と思いつつもその様子を見守る。

彼女の場合、なまじ個性が強力だったせいで、その扱いが洗練されていない。とりあえず雑にぶっばしとけばいい、という考えが透けて見えるのだ。確かに、あの火力で周囲に広げてしまえば対処はしやすい。だから、一般的な環境で彼女の年代ならそれでいいだろう。

ただ今の環境では、あの程度普通に突破できる人間が多い。それに発動しようとしてから、実際に発動するまでも長い。本当は前回の手合わせ、ソールが攻撃を放つ前に接近することだっただけだったのだ。それをしなかったのは、正面から彼女に勝つ必要があったからにすぎない。

何はともあれ、彼女に必要なのは慣れだ。それにはひたすら個性の発動を反復し、それに慣れさせるしかない。要するに、走り込みと一緒だ。ひたすら使い続けることで、疲れさせ、自ら疲れない効率的な運用法を考えさせる。基礎も基礎、当たり前前の段階なのだが、だからこそ疎かにできない修行でもある。

「……ま、これで更に半月つてとこかいね」

少し、羨ましい話だったりする。自分の場合は、走り込みも、個性の反復練習も一ヶ月はそれだけやり続けたのだ。それは偏に、才能が足りなかったから。まあそれでも他と比べるとマシらしいのだが、ソールは自分以上のポテンシャルを秘めているらしい。半月で体力の消耗を抑えた、効率的な肉体の動かし方を習得したのだ。単純な体

力がまだ足りないため、走り込み自体は継続する必要があるが、それでも目的の半分は達成している。

才能に溢れた若者ね、と少し呆れながら呟く。その事実には嫉妬してしまうほどではないが、やっぱり、羨ましいという気持ちは少しある。そして同時に、吸収が早いことを少しだけ、悲しくも思う。早く強くなる、ということはそれだけ実戦に出るのが早くなる、ということなのだから。

自分だって、人一人を養えるほど余裕があるわけじゃない。ソールの修行が終わってから、かなりの頻度で仕事を入れているのだ。だから、彼女が実戦で使えるレベルになったら、すぐにだって仕事に出さなければ家計がキツイ。そしてまた、自分で稼げるのなら稼がなければならぬのがこの街のルールでもある。

「あんまし、気分がいいものじゃねエけどな」

自分たちと同類を生み出すのだ、いい気分なわけがない。それでも、死ぬよりはマシだから。死にたくないからそれを選ぶしかない。ソールが強くなれば、間違いなく様々な仕事の成功率が上がるのだから。

そうやって考え込んで、ふと、随分と暗いことばかり考えたと頭を振る。もう既に、ソールを預かった段階で、この件についてはある程度腹を括ったのだ。だから今更考えることではない。

邪念を振り払うためにも、自分も少し鍛錬をしておくことにする。最近の実戦ばかりで少し、鍛錬も行っておきたかったのだ。

個性を用いて、右手にシンプルな片刃直剣を呼び出す。やることは実に簡単。剣の基礎動作である斬る、突く、払うのモーションを繰り返すだけ。言ってしまうえば素振りだ。ここに、個性での素早い武器の切り替えや、格闘術としての投げなども組み込んでもいいのだが、今回は邪念を払う意味もある。シンプルに、三動作だけを繰り返すべきだろう。

——そうやって、数時間二人修行していると、ボタン、と倒れる音が辺りに響く。それにやっとか、と呆れつつソールの方を見やれば、地面に突っ伏した彼女を確認することができる。

「おう、しつかり死んでるな」

「……ッ……」

「喋る余裕もないのね」

睨みつけてくるソールを軽くあしらいつつ、肩に担ぐ。走り込みで多少、筋肉がついたと言えど、未だ半月。変わらずその体は細く、軽い。ちよつと力入れただけで折れそうだな、と思いつながら自宅へとソールを運び込み、適当にソファへと放っておく。

その扱いに文句を言いたそうなソールであるが、変わらず体力が底をついていて、声を出す気力もないらしい。とりあえず、温めにしておいたスポーツドリンクを渡して、自分もまた、水分補給を済ませておく。

自分は言ってしまうばただ剣を振っていただけだが、それでもゆつくりと、身体の各所を意識しながら、重量のある剣を振り続けていればそれなりに汗もかく。ただシャワーを浴びたいところではあるのだが、明らかにダウンしているソールを放っておくのも流石に、気が引けた。

だからしばらく、来客が多い時用の椅子を引っ張りだして、それに座ってソールの体力が回復するのを待つ。

「……個性を……発動するだけが……こんなに辛くなるとは……思わなかった……」

「ま、普通はあんなに連用しないもんな」

個性だって身体の機能の一つなのだ、使えば使うほど体力を消耗するのは当然であり、ましてや何も考えずに放ち続けければ、倒れるのは必然なのだ。実戦になれば、これに走ったり、場合によっては近接戦が加わってくる。ソールの場合、近距離も遠距離もいける個性であるため、そこら辺も考えて体力を配分をしなければならぬ。だから個性での体力消耗の感覚を早く掴んでもらう必要があった。

「それで、何で個性発動するだけの修行だったかは分かるか？」

「走り込みと……一緒でしょ……」

わかっているならよろしい、と頷く。目的を理解しているなら、ソールであればすぐに個性の扱いにも慣れてくるだろう。そこまで行っ

たら、今度は近接型か遠距離型かの話もしないとな、と考えていると、ある程度息が整ってきたソールがこちらを見つめてきて、その口を開く。

「あなたも、こんな修行をしたの？」

「おん？」

彼女がこちらのことに興味を持つのは珍しい。生に対し執着がないからか、周りに対しても無頓着なところがある彼女がこちらについて質問してくるなんて、この半月で初めてかもしれない。

二週間共に過ごしたことで、多少なりとも彼女にも変化があったのかもしれない、と考えつつ、自分が修行してた頃のことを思い出す。

「そうさなア……うん、多分、お前よりきつかった」

「私より？」

「いや、倒れても無理矢理立たされて続行させられたし……。基本鍛錬は気絶するまでよ」

「ええ……」

今思い出しても地獄の修行だった。義姉の指導はもう、ザ・スパルタとしか表現できなくて、本当に地獄としか言いようのないものだったのだ。倒れても再度立たされるなんて当たり前、ゲロつても続行、酷い時は気絶しても無理矢理起こされて続行だ。

だからついつい、義姉の修行を参考にしつつも、自分が味わった苦労をソールには味わってほしくなくて、甘めになってしまっているところはある。義姉並みにスパルタで行けば、多分一週間でソールは効率的な身体の動かし方を習得していただろう。

そこら辺をソールに語って聞かせてやれば、明らかにソールの目が可哀そうなものを見る目になる。それ自体は少し癩であるが、自分がソールの立場であれば同じ目をしただろうとは思うので、文句は控えておくことにする。

「そう考えると、私はまだラッキーなのね……」

「なんだ、生きるのには興味ないんじゃないのか？」

「別に、今だって生きてたいわけじゃないわよ。でも死ぬないのに辛い思いはしたくないに決まってるでしょ」

そりやそうだ、と笑う。確かに辛い思いをしたくないのはMでもない限り、それが普通だろう。まあこの街で普通とか言っても、微妙なところなのだが。最近は顔を合わせてないが、この街には個性「ドM」を持つやつもいるし。

「何その個性、業が深過ぎない……？」

「なお本人はMでも何でもない模様」

ええ……と困惑するソールを見て、自分も最初に聞いた時はそんな反応だったことを思い出し笑う。こちら辺、半月も二人で生活していれば、ソールともそれなりに打ち解けて、こうしてくだらない雑談もするようになってきている。未だにその根本的などころは変えられていないが、それでも出会った当初よりは大分感情が出るようになってしまったものだ。バカをやった甲斐があった、というものだ。

「それでもその人結構上手くその個性使うんだぞ？」

「どうやって？」

「ドMの個性は痛みを快感に強制的にコンバートするから、囮とか、わざと捕まって拷問受ける時とかに使ってる。あとは肉壁とか？」

「扱いが……」

「大丈夫大丈夫、前に会った時は痛めつけられるのが楽しくなってきた、って悩んでたから」

だから多分、そろそろ純粋にMに仕上がってきてるんじゃないかな、と思っっている。ただあの個性、あんまり威力の高い攻撃喰らっちゃうと、テクノブレイクで死ぬ可能性があるのが困りものだったりするのだ。この街でテクノブレイクで死亡したとあれば、速攻で街にその話が出回るのが目に見えている。だからまあ、彼には上手いこと生きていて欲しいと思う。まあテクノブレイクで死んだら死んだで、自分も全力でネタにするのだが。

「ま、そんな感じで個性も扱い間違えると大惨事なわけよ」

「できれば他の例えで聞きたかった……」

「それは俺が相手の段階で諦めな！」

はあ、と溜息を吐くソールに笑って返す。基本的に楽しく過ごしたい人間であるため、真面目な話、というのは避けたいのだ。だからこ

ういう話も、ついついネタを交えて話してしまう。ちなみにそれを反省したことは一度もない。

「言うて俺の個性だって、制御失敗すれば頭上とかに剣出しちゃうし、皆危険をはらんでるもんだよ」

「それは……分かる」

それこそ、ソールの個性は制御をしくじれば周辺一帯が燃えてしまってもおかしくないのだ。だから極限下でも制御を失敗しないように、そこら辺を鍛錬しておく必要だってある。

効率的な扱いを覚えて、精密制御を習得して、近距離、遠距離それぞれに対応できるようにして、それからどちらかをメインの戦闘法として仕上げて。まだまだ、やることは多くある。いつかは彼女も仕事を、人殺しを経験するだろう。だけどそれはまだだ。もっと、その能力を仕上げて……そして何より、その精神性を改善してからだ。

……今はまだ、多分彼女に人は殺せない。殺すくらいだったら、自殺すると思う。感性がまだ、普通の平和な世界でのものなのだ。それは、この街でバカをやっている連中に対して、笑うのではなく、得体の知れないものを見るような目をするところから分かる。頭のネジを何本か外させなければ、人殺しはできないだろう。

それに加えて、生に執着しない、何らかの要因がある絶望を彼女は抱えている。だから殺すくらいだったら、自分が死ぬという選択肢を取ってしまう。それは……自分が嫌だった。二週間とはいえ共に過ごした彼女を、そう易々とは死なせたたくない。

何とか、彼女をこの街に適応させないといけないなあ、と適当にソールと雑談しながら改めて思うのだった。

#9. Invasion

——ガンギマリ爺の家に、人が集まっている。ソールともう一人の少年を誘拐した時と一緒だ。ただ一点、違う点を挙げるとすれば、その人数が前回よりも少ないことだろうか。爺の家に充分収まる、十数人程度しか今回は集まっていない。

ただその十数人は、自分を含め戦闘に特化した連中で、前回前衛部隊を務めた連中もいる。その段階で、なんとなく何が行われるのかを察し、これまた久々だなあ、と一つ溜息を吐く。

「……その、ここ臭いんだけど」

その隣から発せられた言葉に、ああ、初めてだもんな、と納得する。見ればこちらの服の裾を掴んだソールが、明らかに顔を顰めている。言われてみれば確かに、仄かにクスリの匂いが残っているのが分かる。自分の鼻も慣れちゃって強い匂いじゃないと分かんないなあ、と悲しくなりながら声を張り上げる。

「オラお姫様がこの店臭いだそうだア!!」

「おっしや換気だ換気!」

「ドア開けるぞー」

「んじや個性で風おこすなー」

「美味しいおクスリの空気がアーー!!」

「あれ、この窓立て付け悪……あつ」

「どうし……あつ」

こちらの声に全員が反応を示し、総出で換気が行われる。開けられる場所は全て開け、そして風の個性持ちが空気の入替えを行う。なんかガシャン、だとかヤク中が騒ぐ声が聞こえてくるが気にはしない。どうせガンギマリ爺の家だし、壊したの自分じゃないから請求が来ることもないのだし。

その上でソールにもう大丈夫か確認すれば、明らかにええ……みたいな顔をしながらも一応大丈夫、という返事が返ってくる。ならいいだろう、と一部の惨状をスルーしつつ、今回こちらのことを集めた人物へと視線を向ける。

視線の先にいるのはガンギマリ爺ではなく、普段は街の警邏や、その周辺の街で情報収集を担当している男になる。すなわち、今回集められた理由は仕事ではなく、街の警備に関わる話になってくる。

「んじやまあ、馬鹿が何人かいるけど、馬鹿やってるままでもいいから聞いてくれ」

その言葉に自分以外の視線も警邏担当の男に集まり、そしてまたガシヤン、と何かが落ちる音が響く。どうやら意識が逸れた瞬間にまたやらかしたらしい。それを知ったこっちゃんと言わんばかりに、警邏担当の男は話を続ける。

「俺がこのメンバーを集めた段階で察してると思うけど、もうすぐ敵襲があるぞ」

その言葉にああ、やっぱりな、と納得する。この街はその性質上、それなりに敵を作っている。いくら中立、と言ってもどこかの組織には被害を出しているのだから、恨まれるのは必然。またやっていることは結局ヴィランと変わりはないのでヒーローがやってくることだつてある。まあこの街は政府に黙認されているだけあって、やってくるヒーローは大体独断専行なのだが。

最近は、あまり襲撃はなかったのだが、と思いつつ、更なる情報を求めて警邏担当の男の言葉を待つ。流石に、ヴィランなのかヒーローなのかといった情報は欲しいところではある。

「隣町の方に来てたのを確認したところ、相手はヴィジランテが一人。非公認のだから情報はほぼほぼなし」

それはまた珍しいのが来たもんだ、と呆れる。ヴィジランテとは資格なしに、無許可でヴィランや小悪党などを取り締まっている連中のことを指す。まあようするに、自称ヒーロー、ということだ。こちらと同じ無法者に該当する。

ただこのヴィジランテという連中、自分たちからすると結構面倒な存在で、非公式であるために政府が見逃しているこの街にも躊躇いもなく手を出してくるのだ。

まあヴィジランテからすれば悪を放置できるか、という話なのだろうが、こちらとしてはちよいちよい手を出されて面倒で仕方がない。

そのため過去、あえて情報を流し、ヴィジランテを一掃したこともあるのだが……まあまたある程度のヴィジランテが生まれてきている、ということなのだろう。

「一応情報班に過去の事件とか洗ってみてもらったけど……個性とか分かるのはなかったな」

「つてーことは囲んで先制して封殺かね？」

誰かが零した言葉にしばし、考える。選択肢としては間違っていない。敵の能力が分からないなら、その力を発揮される前に潰すのは基本だ。だから正しい対処だとは自分も思うのだが……。

チラリ、と隣のソールを見る。彼女は、今回が初の実戦だ。すでに彼女がこの街に来てから半年近い。だから仕上がり具合的にもそろそろ、実戦を経験させておきたいところではあるのだ。ただ封殺するとなると、他との連携の経験がないソールを実戦に出す余裕はない。

ただ無論、ソールの経験のためにどんな個性かも分からないやつに個性を使わせるなんて、そんな大きなリスクを背負うのもできはしない。ならば、と考えて折衷案を出すことにする。

「そしたら頼みがあるんだけど、こいつに封殺の仕方教えたいから、分かりやすい形でやれるか？」

「あー、そうな、連携は早いうちに叩き込んどきたいよなあ……」

「おーけーおーけー、見て覚えろ、というやつだな？任せとけ」

「ついでにおクスリの楽しさも教えてあげるぞう！」

「基本ワンマンプレイの人間は黙って」

いつかは前線メンバーに加わることになるソールが連携を学ぶことは、他の連中にとつても重要なことになってくる。だからこうしてあつさりところちらの提案は受け入れられ、方針が定められる。すなわち、

「分かりやすい動きで、敵を封殺する」

「縛りプレイだよったね！」

まあ縛りプレイ、と言えば縛りプレイではあるのだろう。とは言っても、やることがそう変わるわけではないので、難しい話でもないのだが。だから少し、つまらないとは思う。敵が一人で封殺する、とな

ればすぐに済んでしまうだろう。かといって、放置できる問題でもないので、手早く終わらせてそのあと遊ぶのが一番有意義だろうか。

そんな考えはこの作戦に参加する人ほとんどに共通なようで、誰もが興醒めだ、と言わんばかりの顔をしている。

だからだろうか。一人の男が名案を思いついた、と呟いた瞬間、誰もがそれに反応してしまった。そして頭の悪いその提案を許してしまった。

「折角だから、世紀末スタイルで遊ばねえ？」



封殺する、と言っても実際はそう難しいわけではない。やることはシンプルだったりする。

例えば、理想系で言えば一撃で殺すことだ。自分がよくやる心臓を一突きで殺すのは、相手の反撃を許さないためである。

ただ、個性というものがある現代、一撃で殺すのは意外と難しい。増強系は単純に心臓周りを強化すれば済むし、硬化の個性で防ぐことだってできる。

もちろん、知覚される前にやってしまえば問題はない。だが、今回の相手は実力不明であり、気配察知に長けている可能性だってある。そう考えると不用意に暗殺を狙うのも怖い。実際、過去にナルリという例もある。

自分一人であれば、暗殺を狙ったが、人手があるのであれば、より安全な手法を選びたい。

となれば必然、個性を発動できないようにして殺すことが要求されてくる。

そんなことをバイクに乗って、モヒカンに肩パッド装備の由緒正しき世紀末スタイルで考える。無論、周りの連中も同じ格好である。流石にソールには断られたが。

「……正気？」

「こんなこと素面でできるかよオ!!」

流石に酒は飲んでる訳ではないが。ただやっぱり、ソールが言う通り正気のできることはない。

だから今自分は、適度に脳を蕩かしている。コツは適度に阿呆になることだ。基本的に考えてはいけない。面白そう、とかその程度だけでいいのだ。

もちろん、かなりバカなことをしている自覚はあった。

けれどそれが楽しいのだ。状況的には、ワンチャン街ごと摘発されてもおかしくないのだが、だからって一々真面目にやるのもバカらしくない、という話だ。

「いいか、ソール。この街には基本的にバカしかいない」

「はあ」

「お前もこの街で生きていくならバカにならないといけないぞ」

「嫌だけど」

「えっ」

「え……?」

「嘘だろ……?」

「むしろ何でそんな信じられないって顔ができるの?」

「そりやまあ……ノリと?」

「勢いで?」

「だいたい何となくだよね!!」

「いーい、と皆でサムズアップを交わす。それにソールは呆れから溜息を吐くが、前衛の連中はだいたいこんななので諦めて欲しい。」

ちなみにもちろん、自分以外の連中もソール以外世紀末スタイルでこの場にいる。自分なんかは流石にウィッグだが、中にはガチで剃って髪型をモヒカンにしているやつもいる。肩パッドについては自分が召喚で用意した。

「なお、バイクを運転できる人は一人もない模様。」

「さて、敵さんはこっちから来るってことでもいいんだな?」

『ああ、今姿を確認した。お前たちの待機地点にはあと少し、ってところだな』

インカムから聞こえてきた偵察班の男からの情報を、周囲の連中に

も伝える。インカムなんかは世紀末スタイルにそぐわないものだが、流石にここらへんなしなのは難しいところがある。妥協点として、自分のみがそれを付けていた。

自分が全員にまもなく敵が来ることを伝えたことで、戦闘態勢へと移行する。と、言っても皆気楽なもので、準備運動を行う程度であるが。今更この程度で気負うことはない、という話だ。

ソールに関しては今回観戦になるため、バイクと共に待っていてもらうことになる。バイクは完全にお飾りだった。

今回集まったメンバーから一人、少しだけ前に出る。彼が開幕を担当するためだ。先制するにあたって彼の個性は重要だった。

そうして準備を整え終えた時。こちらへと向かってくる人影が見えてくる。

上裸の、体格がいい、獣染みた顔と髪型が特徴的な男だ。個性はある程度、見た目や性格に影響を及ぼしてくる——恐らく、直接的な攻撃の個性だろう、と判断する。それでも一応、見た目がフェイントの可能性を考慮しておくのを忘れないしておく。

「む、お前は——」

「封殺術その一ィー！^{ヒャッ}！^{ハァー！！}！視界を奪う！！」

ヴィジランテが何かを喋ろうとしたのに被せるように、開幕担当が動く。

その動作は至ってシンプル。前に出て、言葉と共にその個性を発動する。

すなわち、発光。

彼の個性で放てる最大の光量で、光が発せられる。それが放たれることを予め知っていた自分たちは無論、それ相応の対策をしてある。しかし、喋っている途中にいきなりそれをくらったヴィジランテは。

「ぐ、オオオオオオオオオオ!!」

正面からまともにその光を見てしまう。下手をすれば視力を失う可能性もある程の光量だ、これではしばらくは、まともに周囲が見えないだろう。

「貴様らァー！不意打ちとは——」

「封殺術その二！集中力を奪う!!」

続いて飛び出した仲間が、周りが見えず、対応できないヴィジランテの口と鼻に触れる。そして発動する個性は、接着。

個性の使い手が解除するまで触れたものを接着し続けるそれは今、ヴィジランテの口と鼻に対し発動された。つまりヴィジランテは呼吸を封じられたのだ。

確かに、視界を奪った段階である程度、相手の行動を制限することはできた。しかし、周辺範囲への攻撃の個性を相手が持っていた場合、反撃を受ける可能性がある。

だからそれを封じるために呼吸を封じた。

個性を制御するには、当然ある程度の集中力が要求される。戦闘中に呼吸ができなくなってしまえば、当然個性発動に集中などできなくなる。そうなれば、もはや敵には個性を暴発覚悟で発動させるしかなくなってくる。

とは言っても、暴発覚悟で、あるいは自らの肉体を武器として。そう言った形で反撃が行われる可能性は充分存在する。

故に、完璧ではないにしても、更にヴィジランテの行動を制限するために動く。

「封殺術その三！動きを封じる!」

「ヒヤッホウは世紀末語録的にセーフ?」

「ギルティ」

そもそも世紀末語録の定義が曖昧なので、ノリだけで有罪判決が下されつつ、四人の仲間がヴィジランテへ接近する。各々の手にはナイフなどといった、切ることのできる道具が握られている。

そして間合いに入った瞬間、それぞれの得物が振るわれ——ヴィジランテの手足の腱が断ち切られる。結果、ヴィジランテの動くことができなくなる。

傍から見れば、矚り殺しにしているようにしか見えないだろう。だが、自分たちだって死にたくはない。例えば残酷であっても、安全な手法を選ぶ理由があった。

こうなればもう、ヴィジランテは酸欠で死ぬだろう。近づけば暴発

覚悟の個性をくろう可能性も未だあるため、きっとこのまま酸欠で死ぬのを待つのが正解なのだろう。

ただ流石に、というかいくら安全面を考慮するにしたって、このまま放置できるほど、自分たちは鬼ではない。故に、ここで自分の仕事になる。

「——刀剣召喚 “ツヴァイヘンダー重大剣”」

重さを重視した幅広の大剣が、身動きの取れないヴィジランテの上に生成される。そしてそれは重力に引かれ——ヴィジランテの肉体を、上下へと斬り分けた。

ふう、と息を吐く。流石に両断してしまえば、ヴィジランテももはや生きてはいないだろう。蘇生系の個性もあるいはあるが……過度な警戒は精神の損耗を招く。

だから警戒を最低ラインまで落とし、死体が完全に沈黙を保つことを確認する。

「汚物は消毒だ、っと」

そしてそんな言葉と共に、発火の個性持ちによってヴィジランテの死体が燃やされていく。

自分たちにそんな権利があるのか、とかそういう話は置いておいて。余裕があるのならこうして、火葬なりなんなりで殺した相手を吊るのが、この街の流儀だった。

「しかし最後ソーヤ普通に喋ったよな？」

「ああ、世紀末語録じゃなかったな」

「これは余りにもギルティ」

「やっべ、忘れてた」

火葬が行われる最中も、全員がいつも通りのノリで会話をする。その中で、自分には罰が下されることが決まったが……流石に、今回は自分の落ち度だ。大人しく罰を受けることにする。

そんなことを考えていれば、ヴィジランテの死体も燃やし終わり、骨と灰のみとなる。

各々骨を拾い上げ、灰は風の個性持ちが集めて、箱へとしまう。そうして完全に帰る準備が整う。

「おっし、んじや撤収なー。ソールも、帰りながら今回の戦いについて――」

ソールの方へ振り返りながらそこまで言葉を発し、気づく。

自分たちを見るソールの目。そこに込められた感情が、今までとは違う。

今までは呆れながらも、少しではあるが親しみを感じられるものだった。だけど今、この瞬間向けられているのは、それとは全く違った。

――恐怖、疑念……そう言ったマイナスの感情。

そんなものが込められた視線は……そう、間違いなく、得体の知れないものを見るものだった。

#10. I, m sorry, please he
lp me.

困った。

珍しい、実に珍しいことに、今、自分は困っていた。

だいたい悩みなどノリと勢いで解決してきた自分だが、今回ばかりは真面目に困っていた。

「あー……ソール？」

「……………」

やはり、完全に無視される。

朝食の置かれたテーブルを挟んで対面しているのだから、距離的に聞こえない、ということもありえない。間違いなく、意図的に無視されている。

先日のヴィジランテ襲来から、ソールはずっとこの調子である。

原因は……既に分かっていた。

ソールは生きること执着してないだけで、それ以外の感性は普通なのだ。そんな彼女が、ふぎけながら惨い方法で人を殺す人物を見たら……それは当然、避けるだろう。ましてや、それまで普通だと思っていた相手ならなおのこと。

あるいは、どう接したらいいのかわからないのかもしれない。普段の自分と、ヴィジランテを殺した自分、どちらが喚導想也という人間の本質なのか。また街の人々は、そんな疑念に囚われているのかもしれないかった。

ただどちらにしても、それは彼女から言葉にしてくれなければわからないことだった。

多分、こちらから理由を話したって、彼女は言い訳としか受け取らないだろう。必要なのは、互いに本音でぶつかること。

まあそれが、難しいのだが。

ごちそうさま、とだけ呟いてソールは自室へと引っ込んでしまう。

まだこの家から出ていけないだけ、脈はあるのだと思いたいところ

だった。宛がないだけで、仕方なしにこの家に住んでいる、という可能性もあるのだが。

ただ、少なくとも、まだこの家にいるうちはチャンスはあるということだ。だからそれをどうやってものにするか、なのだが……。

「それが難しいんだよなア……」

背もたれに体重をかけたことで、ギシリと音が鳴る。会話の存在しない静かなこの家には、やけにその音が響いて聞こえた。

どうやら、自分は寂しいらしい、と自覚する。思えばソールがこの家に来てから、毎日一緒に鍛錬をしているのもあって、ずっと一緒だったのだ。それが無くなれば寂しいのは必然だろう。

ああ、いや……違うな、と呟く。多分、そんな理屈とかではないのだ。ただただ単純に、家族と話せないのが寂しい、のだろう。

この街で家族とか、そういう深い関係を作ると後が面倒なんだけだな、と思いながらもそれがまんざらでもない自分がいる。

絆される、とはこういうことを言うのか、と思いながら朝食のパンを一口、食べる。

「……美味しくない、なア」

一人で食べる飯がこうまで美味しくないとは、こうなるまで気付かなかった。

これはちよつと、重症かもしれない。早めに解決しなければ、とは思うものの、具体的な解決案が思いつかない。

必要なのは、互いに本音でぶつかれる状況。ただ、今日に至るまでソールの本音を引きずり出せたことなど、一度もない。そんな自分が、どうやってソールと本音でぶつかれる状況を作るかなんて、分かるわけがなかった。

残念なことに、義姉との思い出にも、そういった類のものはない。手詰まりに近いなあ、ともそもそと食べ続けていた朝食を完食する。ソールよりも量が多く、考え事をしていたために、大分時間をかけてしまった、と反省しながら自分の食器を流しへと持っていく。

流しには既に、ソールが使っていた食器が水に漬けてあり、こちら辺は律義だよな、と呆れつつ、洗い物を始める。

その間も無論、ソールのことを考えるが……ヴィジランテ襲来から既に数日。ずっと考えた上で結論が出ていないのだから、考え続けてもやはり、結論は出ない。

と、なればいい加減、新しい視線がいるよなあ、と洗い終えた食器を拭きながら、今日の予定を組み立てた。

◇

「それで、僕たちを集めたと?」

「おう、俺だけじゃどう足掻いても解決できそうにないからな。頼ることにした」

同日、午後。自分の家のリビングに置かれたソファには、二人の客人の姿があつた。

雷生さんと、デイティー。どちらもこの街では比較的常識的な視点を持ち、真面目な相談であれば、真面目に答えてくれる貴重な人間だった。いや、本当に貴重なのだ。この街の人間は大体ノリでしか返してこないのだから。

まあかく言う自分も、ノリで返す側の人間なのだが。

「ちよつと情けないセリフだねえ」

「だが一人で抱え込むよりは余程いいだろう。それに僕の場合は、彼女のことを想也くんに押し付けた責任もあるからね」

「別に、納得済みで引き受けたからそこら辺は気にしなくてもいいんだぜ?」

「ふむ、では今回の面倒を見なくてもいいか。帰らせてもらおう」
「待って。やっぱり気にして。思いつきり責任感じてくれ」

流れるように立ち上がった雷生さんの服を掴んで、必死で引き留める。真面目な話、完全に手詰まりな為、相談役がいなくなるのは余りにも辛かった。

「冗談だ、ちゃんと話を聞くさ」

「冗談とは思えない力だったんだが……」

服を掴んだ引き留めた感じ、結構力が必要だったので、わりと本気

で帰ろうと自分は感じていたのだが。それに雷生さんはやらなくていいことは、基本的にやらないタイプなので、放置していたら本当に帰っていた、と自分は思っていた。

「……で、だ」

その自分の言葉に、この場にいる全員が首を傾げる。そんな様子を一人ずつ確認していく。

雷生さん、デイティー、黒い霧を纏う男、そして人の手を顔に付けた男。

「うん、何でテメエらがいんの？」

「あ、我々のことはお気になさらず」

「この酒アルコール弱いな……。もつと度数高いのいわけ？」

「おう、気にしないわけないだろうが。人の家で何くつろいでんの？」

雷生さんとデイティーが座る、来客用のソファとは別。普段自分やソールが食事などに使う、木製の椅子に座って、黒霧と死柄木弔はくつろいでいた。

死柄木の手元には、勝手にうちから探し出したらしい酒がいくつか。黒霧の手元には、同じく勝手に探し出したらしいティーカップ。匂いから察するに中身は紅茶だろうか。

どこからどう見ても、リラックスタイムだった。

「ちよつと、ソーヤ。あの二人誰よ？」

「俺が前に交渉して、爆破してやった連中」

「ああ、あの複数個性持ちの化物を送り込んできた連中か」

その言葉に、そう言えばデイティーからすれば、仇とも言える連中なのか、と思わずデイティーに視線を向ける。

それに気づいたデイティーは、こちらへと苦笑を返してくる。

「別に、復讐に走ったりしないわよ」

「……いいのか？」

「そりゃ憎いし、腹も立ってるわ。でもそれだけよ。面倒なことになるのは、分かってるもの」

基本的に、この街ではかたき討ちはご法度だ。復讐で動けば、要らぬ恨みを買って、この街自体が危なくなる可能性がある。だから復讐

したいなら、この街と縁を切るのが条件だった。

そして、感情はともかくとして、ディテールはこの街を捨ててまで復讐することに、それほどの価値はないと判断したようだった。

別に自分としては、復讐することを見逃してもよかったのだが、彼女がそれでいいというのだから、いいのだろう。

「……ああ、脳無がその女の家族でも殺したのか」

「まあ弟みたいな子を、ね」

「ふーん……まあこつちとしても、脳無が負けるのは予想外だったよ」
確かにあの化物、ヤク中がいなければ勝てなかったという、とんでもない化物だったからなあ、と死柄木の言葉に納得する。というか、今にして思えばあの脳無とやらも理不尽だが、それを殴り飛ばしたヤク中も相当理不尽なのではないだろうか。

そんなことを思いながら、台所の棚にしまつてあつた度数高めのカイスキーを死柄木の前に置く。ついでに、合わせてグラスも。

「氷は冷凍庫から適当に取ってくれ」

「……良いのですか？我々は一応、敵対しているわけですが」

失礼なことに、礼も言わずウイスキーを飲み始めた死柄木の代わりに、その言葉を発したのは黒霧だった。

まあ彼の言う通り、普通ならこつちが爆破して、その仕返しに化物を送り込んだ関係なら、敵対していることになるのだろう、とは思う。

ただこの街は生憎ながら、普通ではなかった。

「基本的にこの街は中立だからね。仕事現場で敵対していいようとも、その仕事が終わってしまえば関係はリセットなのさ」

「つーわけで、別にこつちには敵対の意思はねーんだわ。そつちが仕掛けてこない限り、まあ客人としては扱ってやるよ」

雷生さんの言葉に続いて、そう答えつつ、死柄木にだけ何か用意するのも不公平なので、黒霧の方には紅茶に合うように、クッキーをいくつか渡しておく。

「……これは、どうも」

「んじゃ、代わりに折角だから相談に乗ってくれ」

「面倒」

「あ、オメーはいいや。ろくな答え返ってこないだろうし」

端的に返してきた死柄木は相談相手から除外しつつ、比較的まともそうな黒霧の方には、相談を聞いてくれるように頼んでみる。

意外とクツキーが気に入ったのか、サクサクと齧る黒霧が、頷きを返したのを確認し、改めて状況を説明する。雷生さんとデイトーはともかく、黒霧への説明だ。

「放っておけばいい」

「だからオメーには聞いてねエ」

一通り説明を聞いた死柄木の言葉をバツサリ切り捨てつつ、で、何かない、と他三人へと問いかける。その言葉に、三人ともが考え込む仕草をする。

「それこそ、デイトーなんかは、ナルリとこういうことなかったのか？」

「あの子はどちらかと言えば感情が表に出やすい子だったから……ソールちゃんとあなたみたいな状態になったことはないわね」

「マジかア……」

経験、という点で一番頼りになりそうなデイトーから、そんな言葉を聞いてしまって、思わず落胆する。前例があれば、参考にしやすかったのだが。

「正直、僕は待つしかないと思うよ？彼女が抱えきれなくなるまで、ね」

「あー、何時になるんかね、それ……」

「まあ気長に、としか言えないね」

確かに、雷生さんの提案は手ではあるのだ。ただどれだけかかるかわからない、それまでソールがこの街に残っているかわからない、と不確定要素が多過ぎるのが問題だった。あまり、好ましいとは思えない手段であり、最終手段にしておきたい選択肢だった。

あと自分が、それまでの気まずさとか、寂しさに耐えられそうにない。

「と、いうかですね」

と、そこでティーカップをテーブルに置いた黒霧が口を開く。

彼は期待値の低い死柄木を除けば、この中で唯一、この街の人間ではないという、自分たちとは違った視点を持つ人間である。だから何か、画期的なアイデアでもあるのか、と期待が込められた、自分のものを含めた三つの視線が黒霧へと向かう。

それに少し、黒霧は驚きながらも、はつきりと言葉を発する。

「そもそも、親のいないスラム街の住人に、ろくな過去のないヴィランという段階で、人選ミスでは？」

「……………」

「……………」

「……………」

「今更だろ、それ」

死柄木以外、返す言葉もなかった。

だがしかし、待つて欲しい。自分はこの街の住人なのだ。まともな生い立ちの人間に、伝手などあるわけがないのだ。相談できる相手は、必然的に裏家業の人間だけになってしまう。

そしてそれは、雷生さんやディテイーにも当て嵌まることだった。

と、そんなことを思わず、黒霧へと語る。何というか、自分の落ち度を指摘されて、つつい焦ったのだ。

だから、それを聞いた黒霧にしかし、とあつさり反論を許してしまった。

「このスラム街には、大人になってから居場所を失ってしまった人も来ていたはずです。そういった方に相談すればよかったのでは」

「ごめんなさい……考えなしでごめんなさい」

気づけば条件反射で謝っていた。あまりの正論に、謝るしか選択肢がなかった。

そんなこちらを見て、大爆笑している死柄木には腹が立つが、落ち度はこちらにあるので文句は言えない。

確かに、黒霧の言う通り、相談相手には他にも選択肢があったはずなのだ。ただ自分がそれに気づかなかっただけで。どうやら、予想以上にソールに無視されるのが堪えているらしい。

ちよつと、冷静にならなきゃ、とは思っても、そう簡単になれたらミ

スはしていない。これ、誰か自分の代わりに、冷静に考える担当がいるなあ、なんて思っていると、突然、ウイスキーを飲んでいた死柄木が口を開く。

「つーかき、もつと簡単な方法があるだろ」

「アーン？なんだよ、それ」

反射的に死柄木にそう返す。死柄木、それも酔っぱらった状態の答えになど、あまり期待はしていなかったが、アイデアがあるというならば聞いておいて損はないだろう。

そんな判断を下し、アルコールが回っているのか、頬に赤みがさしている死柄木の言葉を聞く。

「もつと追い込めばいいんだよ」

「はア？」

何言ってるんだ、と言いかけ、しかし、そこでふと気づく。

自分が求めているのは、ソールと本音でぶつかれる状況だ。では何故それができないか。それはソールが文句や疑念といった本音を吐き出さず、抱え込んでいるからだ。

じゃあそんな彼女を、今より更に追い込めば？

もつともつと追い込んで、抱えきれなくさせてしまえば？

——そう、そうならもはや、爆発させるしかない。

「ああ、うん、アリだな、それ」

「……そうだね、悪くない案だろう」

「え、何、どういうこと？」

どうやらデイトーだけは、死柄木の言葉の意図を拾いきれていないようだが、まあ彼女については後で説明すればいいだろう。

どちらかと言えば今問題なのは、意外とまともなアイデアを出した死柄木に対する礼だが……意外と酒好きのようだし、酒でいいかと判断する。一応酒は貴重品なので、財布に痛いのだが、まあ別に、働けばいいのだ。

「つーわけで、礼にウイスキーもう一本やるよ」

「キープで」

「うち別にバーじゃねエからな？ていうかそれ、こっちの方だと見た

「ことないぞ」

日本特有じゃね、というと、黒霧の方がそうなんですか、と意外そうに反応する。死柄木はろくな反応も示さず、グラスを傾けていた。

こいつ、と若干イラツとしつつも、まああくまでお礼なので、ちやんとキープしておくことにする。折角なので日本式に、ボトルの方に死柄木、と分かるようにしておく。

何時か、こんな生活とおさらばできたらだが。バーを経営するのもいいかもしれない、なんて考えながら、今後の方針が決まったことに、思わず笑みを浮かべるのだった。

#11. Hunt down S・I mentally.

——死柄木から、予想外にいい提案を受けた翌日。

その日から早速、ソールを精神的に追い詰める作業が始まった。

◇

一週目

とりあえずは、ひたすらにこちらの仕事につき合わせることにした。

ソールの方が嫌がろうと知ったことではない、と容赦なく自分の仕事時の様子を見せつけ続けた。無論、その内容はほぼほぼ殺しだ。

それと並行して、今までの日常を続けつつ、ソールを街中へと連れ出すようにもした。

二週目

とりあえず、ソールの方に疲弊が見られてきた。このまま行けば何時か、感情が爆発するだろう。

またそれとは別に、ソールの訓練に座学を追加した。今までは、その強力過ぎる個性を扱いきるための訓練だったが、そろそろ制御に関しては安心できるレベルになっている。そろそろ、どういう風に扱うのかを定める時期に入ってきていた。

一先ずは、リミテッド到達者やオーヴァード超越者などの、個性に関する、一種の完成系についての話が主になった。

三週目

ついにソールが鍛錬をボイコットするようになった。追い詰められている証拠だろう。

まあ慈悲はないので、担いで部屋から連れ出すのだが。

一度家の外に逃げ出したこともあったが、残念ながら街の連中はこちらの味方なので、あつという間に確保された。

あとちよいちよい死柄木がうちに遊びに来るようになった。曰く、息抜きには丁度いい場所、らしい。いや、まあ構いはしないのだが。

四週目

予想外のこと起きた。

死柄木が家に来ている時に、街のバカ共が来襲。死柄木に無駄に絡み、それに死柄木がキレて戦闘へと発展した。

そしてその余りの煩きに、ソールまでキレて、大乱闘へ発展。そのままソールの一時的なガス抜きが行われてしまった。

また追い込まなければならぬ。

五週目

流星にいい加減、こちらが意図して追い込んでいることに、ソールが気づき始めた。あまり考える時間を与えると、ソールが目的を察してしまうかもしれない。

なので、仕事の量を増やし、その後には街のバカ共の下に放り出すことで考える暇を与えないことにした。正直、仕事の時間以外バカ共に絡まれるとか、自分ですら遠慮したい内容だった。

ちなみに最近、ソールをいじめるのが楽しくなってきた、主旨がズレていることに少し焦った。

六週目

ソールがやつれてきた。

流星に、追い込み過ぎたらしい。感情を抱え切れなくさせることで、暴発させようとしていたのに、その暴発させるエネルギーすらも奪ってしまったらしい。

どうやら風邪もひいてしまったようだし、少し休ませてやらねばならない。

風邪の看病など、何年ぶりだろうか。義姉が一度だけ、体調を崩して以来だ。家族が苦しそうにしているのは、こんなに辛いものだったか……。

七週目

よく分からないが、風邪が治ってから、ソールの様子がおかしい。今まで通り、無視されるのには変わりがない。ただ、どうにもこちら

を見定める、というか、疑念の込められた視線を向けられることが増えたように思う。

そろそろ、いい頃だろう。タイミングがいいことに、また大規模な仕事がある。そこでの様子と、その後の打ち上げでの様子のギャップで、ソールの感情が爆発することを祈ろう。

◇

ソールを小脇に抱えて、夕暮の街を歩く。打ち上げに参加する、という話をしたら案の定部屋に籠ったので、容赦なくこうして連れ出していた。

道中、ソールとの間に会話は無い。ソールの方は、何かを言おうとし、そして口を閉じるを繰り返している。

その姿に、ちゃんと今日でケリが付きそうだと安心する。

決してこちらから声をかける気は、なかった。

情けないことに、自分はこういつた時、どうやって本音で向き合えばいいかが、分からない。誰かと喧嘩する余裕もなく、家族も昔に失った。まともじゃない、こんな街で育ってしまった弊害だった。

全部解決したら、こんな手段しか選べなかったことを、ソールに謝らなきゃいけないな、と内心で思いつつ、打ち上げ会場へと辿り着く。

見た目は、コンクリート製の、武骨な建物。ここがまだスラム街になる前は、公民館として使われていたらしい建物だ。だから元々、それなりの広さの部屋がいくつかあり、そこから更に改装を重ねることで、広々とした一部屋を持つ、打ち上げ会場と化していた。

この街では、ちょいちょいこうした打ち上げが開催されることもあって、こういう建物がいくつもあつた。この街らしい、遊び心のある建物の一つだった。

「おーっす。……って、もう始めてるのかよ」

「おう、来たかソーヤー！」

「いやあ、目の前に酒があつたら、飲むしかないよな？」

「俺たちに『待て』はできなかった……」

「俺たちは犬以下だった……?」

明らかに頭の悪い会話を繰り広げたバカたちが、そのまま爆笑し始める。どうやら既に、大分出来上がっているらしい。

今からこのテンションに追い付くのは面倒だな、と思い辺りを見回せば、雷生さんが誰かと飲んでいるのを見つける。

アルコールが回っても、ある程度冷静なのが雷生さんだ。だからまだ素面の自分は、思わず雷生さんへと歩み寄り……雷生さんと共に居た人間たちに、思わず呆れてしまった。

「ああ、想也くんも来たか」

「お邪魔していますよ」

「ビールは好きじゃない。もつといい酒はないのか?」

「オメーら……」

ここ数週間で、大分この街に馴染んだ死柄木と黒霧が、そこにはいた。特に黒霧の方は雷生さんと気が合うらしく、こうして二人で喋っているのはよく見かける光景だ。また、それと同様に死柄木が酒を飲んでる姿も。

というか死柄木、顔に掌装備なせいで、顔だから年齢が判断できないが、ちゃんと酒を飲める年齢なのだろうか。と、今更ながらに疑問に思い、しかしそもそもヴィランなのだから気にする必要もなかったか、とすぐに頭を振る。

「つーか、黒霧が飲んでるの珍しいな」

「まあ普段は移動を担当していますからね。私の個性だと、酔いでコントロールを失敗した際が大変ですから」

「ただ今日は僕の家泊まる予定だから。だからこうして、気兼ねなく飲み交わせるといふものさ」

「あ、喚導さん、死柄木の方は任せましたよ」

「聞いてないんだけど」

「と、言いつつも想也くんは泊めさせてあげるから優しいよね」

雷生さんからの言葉に、事実であったために思わず黙り込む。

死柄木とは、仲がいいかと言えば微妙だが、それでもこの数週間でそれなりに関わったため、見捨てるというのは流石に、気分が悪い。

死柄木、我儘だから面倒なんだよなあ、と思いつつも、結局泊まるのを許可する辺り、甘い人間なのだろう。

とは言っても、それもこれもソールの問題が解決できたらなのだが。解決できなかった場合、我が家の空気が死ぬので、人様を泊めている余裕はない。

「つと、忘れてた」

今の今まで、抱えたままだったソールを放り投げる。投げられたソールは、恨みがましい視線を向けてくることもなく、相変わらず何か言いたげな目を向けてくる。

そしてしばし、悩んだかと思えば、ふと、笑い合っているバカ共を見る。そしてそれを見たソールは、ついに言葉を漏らした。

「なんで……」

「おん？」

「なんで、笑えるの？人を……殺したんでしょ？どうして、笑っているの？」

やつとか、と思わず溜息を吐く。やつとその言葉を引き出すことができた。

だからまずは、何かを答える前に、ソールの方から全てを吐き出してもらうことにする。

「なんで遊びながら、人を殺せるの？皆、優しくて、面白くて、なのに人を笑いながら殺せて……よく、分からなくなっちゃった。人を殺すのが楽しいの？」

「楽しいわけではないだろうが」

呆れと共に、言葉を吐き出す。本気でそう思われているのなら、ちよつと心外だ。

いや、まあ、精神的に追い込まれてるからそういう風に思ってしまったっただけだとは、わかってるのだが。

「だったら、何で笑ってるの？」

まあ確かに、普通に考えたら、そんな状況で笑えるのはサイコパスしかありえないよな、とは分かる。自分だって、ソールの立場ならそれを疑った。

それに実際、誰かを殺す時にバカをやったりする理由は、他者には理解しがたいもので、ある種のサイコパス染みているのかもしれない。ただそれでもそれは、自分たちには必要な措置だったのだ。

そしてそれは、この街で生きていく以上、ソールにも必要なことである。だから、自分はその理由を語らなければならぬ。

「俺たちが笑うのは、自分の心を守るためだよ」

「守るため……？」

ああ、と頷いて返す。

そして視線を、バカどもと笑っている一人へと向ける。そいつは、何か特別なところがあるわけじゃない。この街では普通の、バカのうちの一人だ。

「あいつはな、確かヴィランの被害かなんかで会社が潰れて、再就職にも失敗してここに来るしかなかったやつだ」

「……………」

「たった、それだけ。それだけの理由でこの街に来てしまった、普通のやつだよ」

そう、本当に何でもない、普通の人間だった。会社が潰れなければ、普通に結婚して、普通に子供に恵まれて……きつと、そんな人生もありえたはずの、人間だった。

「そんな人間が、突然こんな場所にきて、人を殺さなきゃ生きていけないようになって、平気だと思っか？」

その問いに、ソールが首を横に振って答える。

そう、平気なわけがない。今まで普通に生きてきた人間が、他人の命を奪って心が耐えられるわけがない。だから——誤魔化すのだ。

「ふざけて、バカやって、笑って……そうやって、目を逸らし続けて、心を守る。それでもしないと、お前やあいつみたいに表から来たやつは耐えられない」

自分みたいな、幼い頃からこの街で育った人間は、最初からまともな倫理観を持ってないから、そんなにダメージはない。それでも、同じ種族を殺す段階で、種族としての本能的にいくら辛いものもあるのだが。

だけど、表からこつちまで落ちてきた人間は、人を殺し続けてればいつか、心が壊れてしまっただろう。そうならないために、無理にでも自分たちは笑うようにしていた。

「とはいえ、殺してるのも事実だからな。目を逸らし続けるのは、あまりにも酷い話だ。だから殺した連中を弔う場所もあつたりするんだぜ？」

それは所詮、自己満足でしかないのかもしれない。それでも、弔った、という事実は殺した側の心を軽くするためにも、必要な処置だった。

殺された方からすればふぎけるな、という話なのかもしれないが、殺した相手の為、というよりは自分たちの為にやっている。ヴィジラントの遺骨も、そこに今は眠っている。

「……そつ、か」

「他にも、普段からバカやるのは、この街に来たばつかのやつ辛さを和らげてやる目的もあつたりする」

この街に来ることになった段階で、大抵の人間は嫌なことがあつたからだ。その辛さを誤魔化すためにも、自分たちは日頃から笑って、そしてそれに他人を巻き込んでいた。

実際、ソールだつて来た当初に比べて、気づけばいい反応を返すようになっていた。それは、間違いなくこの街のバカ共に感化されたからだろう。

本人もそんな覚えがあるのか、こちらの言葉に一つ、頷いてくれる。「結局さ、自分たちが生きていくための、自分本位なものでしかないかもしれない。けどさ、酷い目にあつて、こんな場所に追いやられて、それで辛いまま死ぬなんて癪だろ？ だったら笑って、ふざんけんってこんな目に合わせた神様に中指突き立ててやる方が有意義だろ」

「……なにそれ」

そう言いつつも、ソールは笑みを浮かべる。その表情に、久々に見たな、と思わず嬉しくなる。

ただ、そこで笑ってるだけではいけない。自分たちが笑う理由は

語った。きつと、ソールも少なくとも理解はしただろう。

だから聞かなければならない。

「今のを聞いた上で、決めろ。この街で、お前は生きていくのか」
「……………」

返事は、すぐには返ってこなかった。

無理もない、どれだけ理由があつたつて、やっていることは正しくはないのだから。悩んで当然で、すぐに受け入れてはいけないものなのだ。

たつぷりと、ソールは数分も黙り込んでいた。けれどそこまできかかって、それでもソールは結論を出したのか、視線はこちらに向けず、騒ぐバカ共を見ながら口を開く。

「……私、ある研究所出身なの。そこでは交配によって、強力な個性を生み出す実験が行われてた」

脈絡もなく語り始められたそれは、ソールの身の上話だった。

いつかは聞かなければならないとは思っていたが、何故それを今語るのか。その意図は自分には分からなかったが、きつと大事なことになるだろうと耳を傾ける。

「それでも、私の個性の元になったお父さんとお母さんは、優しかったし、酷い研究所の人間から、守ってくれた。それに研究所の人だつて、全員が悪い人間じゃなくて、外に連れてつてくれる人だつていた。だからそんなに、嫌だとは思ってなかったの」

「……………そっか」

「……でも、私を攫いに来た連中に、皆殺されちゃった。優しかった研究所の人も、お父さんも、お母さんも」

そして、自分たちが組織を襲撃した件に繋がるのか。そう理解して、彼女が生きる氣力を失った理由も、なんとなく察する。

「私の世界を構成していた全部が失われて、どうでもよくなつちやつたんだ」

だから、頑張つてまで生きる氣がなかったの、と締めくくる。

それに自分は、なるほど、としか返せない。自分に彼女の苦しみが理解できるわけじゃなかったし、この街ではさして珍しい話でもな

い。

同情すらできない自分に、彼女に対してかける言葉などなかった。だから代わりに、自分は一つ問いかける。

「今でも、生きていたいとは、思わないか？」

「……………どうだろう」

こちらの問いかけに、ソールは少し考え込む。その視線は相変わらず、バカ共に向けられている。

酒が入っているせいで、明らかにヤバイ方向へエンジンがかかり始めているのが遠目でも分かるが、それでもソールは今までの呆れた目ではなく、どこか眩しいものを見る目をしているように思う。

「まだあんまり、頑張ってまで生きたいとは思わない、かな」

「……………」

「それに、この街の皆の生き方も、理解はできても納得はできない」

「……………そっか」

やっぱり、表の世界で生きてた人間には、受け入れがたいものなのだろう。

まあソールの生い立ちは、表の世界とは言い切れないところがあるが。

少し、それを寂しく思っていると、でも、と意外なことにソールの言葉が続けられる。

「ちよっと、羨ましいとも思う。そうやって、皆で、生きていこうっていう姿は……………街全体が家族みたいで」

家族みたい、そう言われ、確かに、と納得する。

この街は誰もが何らかの形で、辛い目にあい、だからこそある程度互いを理解できている。そして誰かが困っていれば、放っておくこともできない。

その形を言葉にするなら……………家族、というのはあながち外れでもないのかもしれない。

「私にとっての世界は、ほとんどはお父さんとお母さんの家族で構成されてたから……………家族みたいなのはやっぱり羨ましく思える」

「バカばっかで、そんなにいいもんじゃないけどな」

「それも近しいからこそ、遠慮しなくていいって考えたらいいものじゃない?」

そういうもんか、と言えばそういうもの、と返ってくる。ソールがそう言うのなら、そうなのだろう。

——だから、失った家族を求める彼女には、こう声をかけるべきなのだろう。

「そんじゃま、お前も家族の、この街の一員になれよ」

「……私、まだ誰かを殺す時に笑うのは、納得できてないんだけど」

「別に、納得できなくてもいいだろ。自分なりに折り合い付けるか、最悪、戦い以外で街に貢献すればいい」

正直、折角の強力な戦力なので惜しいどころの話ではないのだが。それでも、彼女の意思が最優先だ。

「……皆みたいに、頑張つて生きようとはしないけど、いいの?」

「いいだろ、別に。何時かは生きたくなくなるかもしれないし」

「……でも……」

「ああもう、面倒だな!」

はつきりとしらないソールに、いい加減痺れを切らし、思わず頭を掻き巻く。

そしてもうこの際、はつきり言うしかないのだろう、と腹を括る。

正直、言うのはクツソ恥ずかしいのだが、埒が明かないのだから仕方ない。

いいか、と前置きして、無理矢理こちらを向かせて、視線を合わせた上で告げる。

「正直!もうお前がいないと寂しいんだよ!俺にとつちやもう家族みたいなもんだから、つべこべ言わずこのままこの街で生きろ!!」

——そうして、この日、本当の意味でソールがこの街の住民となったのだった。

#12. A trouble some work
that came to Soya.

「喚導、つまみ」

「お前、もうちよつと遠慮つてもんをだな……」

「ヴィラン相手にそんなことを言われましても……」

「ヴィランは免罪符じゃないからな？」

そう言いつつも、ちやんとつまみを用意してしまうから、死柄木が調子に乗るんだろうが。

それを分かっているにしても、なんやかんやで死柄木との関係はこの街のバカどもとは違うノリの人間であることもあって、中々気に入っていた。だからついつい、甘やかしているところはある。

「この枝豆でいい？」

「お、さんきゅソール」

それにこうして、ソールと仲直りの切っ掛けもくれたわけだし。いや、曰く、何にも考えてない思いつきだったそうだが。それでも、助かったのは事実だった。

酒には金がかかるが、それも黒霧の方からちやんと、全額とは言わずとも支払われている。家が賑やかになるのなら、まあ悪い話でもないのだ。

そんなことを考えながら、ソールが用意した枝豆を死柄木の前に置く。

礼も言わず食べ始める死柄木は相変わらずで、その姿にはもはや、呆れるしかない。

「ていうか、お前ら、なんか目的があるんじゃないやなかつたのか？ここに入り浸ってていいのかよ」

「二人とも、毎週来てるけど……」

「別に、いいんだよ。今は準備期間だから」

「一応、やることはやってから来ていますので、ご心配なさらず」

そんな風に、適当な世間話を交わす。死柄木はあまり、言葉を発し

ないが、代わりに黒霧は丁寧に戻してくれるため、存外話は膨らむ。そうやって、二人がいる時は他愛もない話をし、それ以外はソールと共に仕事か鍛錬を行うのが、最近の日常だった。

——しばらく、中身のない会話を続ける。生産性がないながらも、落ち着いていて息抜きとしては上等な時間を過ごしていると、突然家にノックの音が響く。

基本的にこの家に来る人間は、無断で家にかかる人間がほとんどだ。それこそ、ここにいる死柄木と黒霧なんかがいい例で、この二人は黒霧の個性を用いて、この家に気づいたらワープで入っているのだ。当初は来る度に驚いていたそれとも、今では慣れて気にもしなくなってしまうた。

そんな人間が多いため、わざわざノックする人間は少ない。真面目な人間ほど、バカが集まりやすいこの家を避けるし。

そのため、こうしてノックが響く、ということは仕事などの、真面目な何かがあった時が多かった。

「死柄木ー、もしかしたらこの後出かけるかもー」

「勝手にしろよ。こつちも勝手にくつろいでるから」

「俺の家んだけどなア……」

まあほぼほぼ、あの二人はこの家の住人なので気にしてはいないが。

一応死柄木たちへと一言言ってから、玄関へと向かう。この街ではいつ、どんなバカなことを仕掛けられるか分からないところがあるため、念のためドアの覗き窓で外の人物を確認すれば、そこにいるのはガンギマリ爺からの伝達担当の人間だ。

彼がいるならば、これは確実に仕事の話だな、と判断し、ドアを開ける。

どうも、と告げられた簡素な挨拶に、自分も簡単に返し、それ要件は、と問いかける。彼は、この街では珍しく、遊びがない人間であるため、こちらもそれに合わせて手早く話を進める方が有意義だった。

「喚導さん、あなた指名でのお仕事が来ました」

◇

「……、か」

「……うん、地図見る限りそうっぽいね」

今、ソールを連れて、今回の仕事先へと辿り着いていた。

時刻は既に深夜、相手の指定の時間、というのもあったが、街からそれなりに離れた場所であったために、単純に移動に時間がかかったのが原因だった。

今日はこれ、ホテルに泊まらなきゃいけないなあ、と思いながら目の前の建物を見る。

それなりに広い土地に建てられたそれは、所謂別荘、というやつに見える。白をベースにされたその建物は、時間の関係もあつて光源が少なく、形状ははつきりとはしない。しかし庭にはプールがあり、観葉植物も多く、ガレージらしきものもある。

単純に、金がかかつていそうなことは、スラム街出身の自分でも分かる建物だった。

実際、相手は表において成功を収めている大きな企業だ。この建物も、今回のような裏の連中と接触するための建物のうちの一件なのだろう。

羨ましいよなあ、とは思っても、まあ縁のない話だ、とは思う。いくら黒霧から支払いがある、とは言っても住民が四人になったことで出費が増えたわけだし。

「それで、結局仕事内容はなんなの？」

「それが情報が貰えてねエんだよなあ……」

一応、ガンギマリ爺の方には詳細がいつているらしいのだが、何やらちよつとでも情報が洩れるとそれだけでヤバい一件らしく、直接会うまで情報が貰えないことになっている。

本来ならソールもやめて欲しかったそうだが、戦力的に使えることが伝えられて許可が下りたら良かった。

「貰えた最低限の情報によると、護衛の仕事になるらしい」

「護衛……つてことは、しばらく街を離れる感じ？」

「そこまでは、何とも。護衛対象がうちの街に来る可能性もあるし」
うちの街は、防衛力で言えばかなり高いのだ。単純に、戦闘を想定した人間しか住んでいないので、敵が襲撃してきても誰もが対応できるからだ。

流星に、オールマイトとかとやり合える化け物クラスが来たりすればその限りではないのだが。

そんな話をソールに聞かせながら、指定の時間も近いので、チャイムを事前に知らされていたリズムで鳴らす。そして繋がったインターホンで合言葉を伝え、そしてようやく中へと通される。

話し合いの場に辿り着くまでも、何人もの戦闘員が案内も兼ねてこちらについて歩いてきた。これ、思っていた以上に厄介な案件では……？

なんて今更ながらに面倒になっていると、突然、案内担当の人間が何もない廊下で立ち止まる。そして突然、何もない壁を叩いたかと思うと、その壁が突然動き、地下への階段が現れた。

実にロマン溢れる仕組みだった。かかる費用と実用性が釣り合っているかは知らないが。

そこから更に歩き続け、何か所もの分かれ道を越えながら十数分は経った頃。ようやく、目的地らしき部屋へと通される。

その部屋は、テーブルと、椅子、光源と最低限のものしかない殺風景な部屋であり、明らかに今回のような場合しか利用しない場所であることが分かる。

そしてその部屋には、既に椅子に座っている一人の男がいた。

身体は細身で、武芸を嗜んでいる体格ではない。髪も年からか、白髪混じり始めていて、見た目だけならただのおっさんにしか見えない。

しかし——その身に纏う雰囲気だけは、只者ではなかった。

見た目だけでは大したことはないのに、それでも相対しているだけで気圧される凄みがある。大企業の社長は違うな、と事前に見せてもらった依頼主との写真と比べながら思わず内心で呟く。

その男性はこちらが部屋に入ってきたのを確認すると、柔和な笑みを浮かべ、けれどその身に纏う覇気は揺らがせることなく、一礼と共に口を開く。

「ようこそ、ご足労頂きありがとうございます。私が依頼主のアルベルト・アウエイクです」

「ああ、これはご丁寧に、どうも。喚導想也です。それでこつちが」
「ソール・喚導です」

アウエイクさんと挨拶を交わし、対面するように椅子へと座る。

それを確認したアウエイクさんは、では、と護衛たちに退出するように指示してから、改めて言葉を発する。

「あまり、時間をかけたくないのでね。大したもてなしもできないことを許して欲しい」

「まあ気にしなくていいですよ。もうここに来るまでにかかなり厄介な一件なことは理解してますし」

そう言ってくれるとありがたい、とアウエイクさんは心底困ったように溜息を吐く。それでも揺らがぬ彼の覇気は凄じいように思うが……逆に言えば、それだけの覇気を保ち続けなければならない一件、ということだ。本当に面倒なことになったものだ。

「それで、どこまで話を聞いている？」

「護衛の仕事、だとは」

「そうか……それなら、どこから説明したものか」

しばし、アウエイクさんが考え込む。しかしその時間すらアウエイクさんは惜しいのか、すぐに話す内容を決めたのか、一度はズラした視線を再び、こちらへと向けてくる。

「君たちは、^{リミテッド}到達者については知っているかい？」

「ええ、ある程度は理解しています」

そう言つて、しつかりと座学で学んでいるかの確認も兼ねて、ソールに到達者について説明するよう、視線で指示する。そしてそれを受けたソールが、口を開く。

「自らの個性について、性質をその根底まで理解し、使いこなすことでその個性の性能の限界点まで扱える領域に到達した者……故に、

リミテッド
到達者」

「そうだな。では……超越者オーバーアードについては？」

「本来、その個性で発揮できる性能の限界点すら超えて、ありえないほどのスペックを発揮できるようになった人間のこと……ですよね」

「そしてそれは今、世界でも数人しか確認できず、そこまで至る条件が全く分かっていないものですね」

「ああ、そこまで理解しているなら話が早い」

同じ理由を以って答えたソールの言葉に、自分が補足を加えたところ、アウエイクさんにとつて十分な答えを言うことができたらしい。満足そうに頷いたアウエイクさんが話を先に進めようとする。

一応、到達者や超越者には、もう少し面倒な話があるのだが、その部分は今回の一件にはさして重要でないようだった。

しかし、到達者と超越者の話が出るとは、まさか今回の護衛ではそんな連中が襲ってくる可能性があるのだろうか。

そんな心配が顔に出ていたのか、アウエイクさんがこちらの疑問を察したようで、安心してほしい、と言葉を発する。

「別に、ゼロとは言えないが、そんなレベルの敵が襲ってくるわけではない」

「では何故そんな話を？」

「——もし、超越者へと簡単になれる手段があつたとしたら？」

その言葉に、今回の護衛の意味を悟った。

超越者は、本当に次元が違う強さになるとされている。そんなものになる手法が、可能性でも発見されたとしたら、欲しがる人間は多いどころの騒ぎではないだろう。また、手に入れるにあたって強引な手段に出る人間も。

「きつと、君が察した通りだろう。今回の依頼は、その方法の鍵となる人物の護衛だ」

「……情報が、漏れた可能性がある、ということですか？」

護衛が必要、ということはすなわち、襲撃される可能性があるということだ。わざわざ外部であるこちらのことを頼つてまで、ということとはよっぽどの襲撃が予想されるから、だと思つたのだが。

「いいや、そういうわけではない。ただ実験に協力してもらいたくてね」

「実験、ですか」

「ああ、超越者に本当に至れるのか、のね」

曰く、方法こそ見つかったが、未だ実際に超越者となった者はいないらしい。それなら条件を変えてみよう、ということでも外部の人間、信頼できる相手——ガンギマリ爺の紹介する人材に試してもらおう、ということらしかった。

「超越者になれる、というならこつちとしても願ったり叶ったりですが……実際のところ、どんな手法なんですか」

その問いかけに、アウェイクさんが渋面を作る。どうやら、それなりに厄介な内容らしい。

あるいはその手法こそ、ここまで厄介なことになった要因なのかもしれない——そして、そんな予想はどうやら当たっているようだった。

「個性、だよ」

「……なんですって？」

「ブーステッド覚醒誘因」という個性でね、どうやら他者の個性の眠れる力を目覚めさせるものらしい」

らしい、と曖昧なのはそれによって実際に超越者となった人物がないからしかなかった。

しかし、個性によって超越者になれる、ということであれば、厄介な一件というのも納得がいく話だった。

何か科学的手法だと言うならば、必要な機材なりなんなりを最悪破壊すれば、悪人に奪われずに済む。しかしそれが人となれば、殺して問題解決というわけにはいかないだろうし、洗脳の個性があればそれだけで悪用される可能性は大きくなる。

そりゃ、危険だわ、と納得すると同時、いくら信頼できる人間を紹介してと言えど、余所者を実験に利用しようとするとは、とも思う。それだけ実験に行き詰っていたのだろうか。もしそうなら、確かに超越者を得られる利点を考えると、分からない話でもなかった。

「私の娘がね、その個性を持っているんだ」

「それは……何ともまア……」

衝撃の事実にも、返す言葉に困っていると、それを無視してアウェイクさんが無論、と言葉を放つ。

「いくらあの人の紹介と言えど、君たちをいきなり信頼するわけにはいかない」

「まア当然ですね」

「だからまずは、うちの護衛と戦ってもらい、実力を示してもらおう。そしてそこでうちの護衛に勝ったら、しばらくうちで生活してもらい、その人柄を見極めたあと、初めて護衛を任せようと思う」

「状況を見れば……必要な処置、か」

依頼しといて、それだけ試されるといふのは些か癪ではあったが、状況的には仕方がないとも思う。

こちらとしても、超越者には興味もあるので、我慢する価値はあるだろう。そう判断して、アウェイクさんへと了承の意を返す。

そんなわけで、自分とソールは試験を受けることが決定した。

#13. Two people to be tested.

アウエイクさんとの話し合いの後。その日はもう深夜であったこともあって、お開きとなった。

どこに人の目があるか分からない、ということと比較的覗き見てる敵を見つけやすい夜にこちらを招く必要があっただけで、用事自体は夜に済ませなければいけないわけではなかった。そのため、試験とやらは翌日、ということらしい。

当初の予定では自分とソールは経費でそれなりのホテルに泊まる予定だったのだが、そういう理由もあって、結局アウエイクさんの別荘に宿泊している。

それこそ最初は折角他人の金でいいホテルに泊まれるのに、なんて思っていたのだが。

「——ヤバい、俺もうアウエイクさん家の子になる……!!」

「あー……自分で自分が墮落していくのが分かる……」

別荘、といっても大企業を牛耳る、お金持ち様の持つ物件だ。広々とした部屋に、この世のものとは思えないほどふかふかのベッドが二つ。テーブルにソファ、それからテレビと自宅にも存在する物だが、サイズも質も段違い。止めにメイドさんのお世話付き、ときたまのだ。

メイドが運んできてくれた朝食も、あのスラム街ではまず食べられない、しっかりとバランスの取れた、寝起きの胃にも優しいながらも、しっかりと腹に溜まるラインナップだ。あまりに至れり尽くせり過ぎた。

「スラム街帰りたくねエ……」

「ソーヤだけで帰ってよ。私の年齢なら養子いけると思うし」

「それはズルい」

二十超えた男の自分に対し、ソールは十六歳の女の子だ。それも金髪赤目、顔だちも人形と見紛うほどに整っている。出会った当初は簡

単に折れそうな細かった体も、日々の食事とトレーニングで、健康的な肉付けになっている。間違はなく、美少女と言える逸材だろう。

養子に迎えるには、十分な理由があった。というか、アウェイクさんが若かったら妾ルートとかもあっただろう。

——これ、意外と自分、とんでもない子と同棲してない……？

今更ながらな事実には、若干驚きながらも、まあ今更恋愛対象として見れるものでもない、と結論付ける。少なくとも自分にとってはソールは、既に家族という括りに入ってしまったため、そういう対象には見えなかった。

「……うむ、どう考えても手のかかる妹、だな」

「急に何？妹萌えにでも目覚めた？」

「少なくともあれだけ手間をかけさせられた妹には萌えないかなア」

「……あれは……うん、掘り返さないで……」

「……せやな」

あの一件に関しては、互いに恥ずかしい部分もあったため、タブーとなつているところがあった。

特に、自分から触れといてあれだが、それなりにこつ恥ずかしいことも言っているため、この話題で受けるダメージはソールよりも大きかった。

そんな風に、どこか気恥ずかしい朝を過ごしていると、アウェイクさんのメイドの方から声かけられる。曰く、試験を行うのでついてきて欲しいとのこと。

自分もソールも、スラム街での生活で生活習慣として、朝はそれに早い時間に起きるのが染みついている。それはいつもよりいい環境であるこの場でも発揮されており、起きて布団から出るのこそ時間がかかったが、目が覚めた時間自体はかなり早かった。

それに、今日は試験が行われる、というのも分かっていたため、既にある程度の準備は整えてある。

故に、少しだけ案内のメイドには待ってもらい、残っていた準備を済ませて部屋を出る。

出てきたこちらを確認したメイドは、表情を変えることなく、事務

的に案内を開始する。創作なんかでは結構、メイドはキャラが濃かったりするが、普通に考えたら主人やその客人にはこんなもんだよな、と納得する。

まあ個人的にはもう少し、愛想が良くてもいい気がするが。まあそこら辺は、主人の趣味が関わってくるのかもかもしれないし、そもそも使用人なんて縁遠くて、ろくに知らない自分が語るものでもない。

そんなどうでもいいことを考えながら、メイドについて歩いていると、昨日も通った隠し扉を抜けて、再び地下へと降りる。

しかし続いて連れていかれた部屋は昨日とは違う部屋で、六畳ほどの広さの、椅子などが幾つか置かれている部屋だった。

「二人とも、おはよう」

「あ、おはようございます」

「おはようございます、アウエイクさん」

部屋に先に来ていたらしいアウエイクさんと簡単に挨拶を交わしている、メイドが失礼します、と退出していく。

それを見送ったアウエイクさんが、さて、と改めて口を開く。

「これから君たちの実力を測らせてもらう。こちらから依頼しておいて試すことを、許して欲しい」

「まあ事情を鑑みれば仕方ないっすよ」

「そう言ってもらえるとありがたい」

頭を下げた感謝と謝罪を示すアウエイクさんに、こちらとしてはとつとつ話を進めたいこともあって、それで、と話の続きを切り出す。

「結局試験って何すればいいんですかね」

昨日の段階では、試験をやる、としか伝えられていなかったのだ。そのため特に対策も用意できていない。

スラム街の癖で、何事も対策を用意してから臨む質であるために、事前情報がないというのは些か怖い、というか気持ち悪かった。

「ああ、それはだな、私が雇っている護衛二人と戦ってもらおう」

アウエイクさんの解答に、なるほど、と内心で呟く。

相手は能力不明で、こちらと同数。数の利が取れない、となると開幕不意打ちで一撃、が理想形だな、と計画を立てていく。

「……ちなみに、生死は？」

「問わん。相手側も承諾している」

心配事の一つがこれで減る、と安堵の溜息を吐く。殺してはならない、となると生かしたまま無力化するという、難易度が高いことが要求されてしまう。それをしなくていい、というのはありがたい話だった。

代わりに、別の心配事も出てくるのだが……それに関しては、そこまで問題じゃないだろう、と判断している。

その心配事であるソールに視線を向ければ、渋い顔ながらも領きが返ってくる。

——例のソールとの問題について解決してから、ソールは仕事において、何人かの人間の命を奪っている。

ソール自身は、スラム街のスタンスのようにふぎけながら殺すことをよしとしなかった。それでも、スラム街で生きていく以上、誰かの命を奪うことは必要だと割り切り、何度か人を殺したのだ。

無論、最初のうちは仕事の途中で吐いたりしてしまうこともあった。だが悲しいことに、人間とは慣れる生き物だ。スラム街の連中が精神のケアをしていることもあって、ソールは多少顔色が悪くなれど、既に人を殺せるようになってしまっていた。

「他に確認したいことがなければ、その扉の先にある、普段は護衛たちの鍛錬に使っているアリーナに行つて欲しい。既にそこに相手は待っている」

見ればアウェイクさんが示す先には、確かに扉が一つある。その先が鍛錬に利用するアリーナとするならば、本来この部屋は利用者の簡易的な休憩所なのだろうと判断する。

とりあえずは確認したいことはないので、アウェイクさんに別れを告げ、自分の状態を確認する。

実力の確認のための試験、とは聞いていたので服装は既に、いつもの仕事着。軽く剣を出し入れし、個性の調子もチェックすれば、絶好調とまではいかなくとも、悪くはない。

隣では同じようにソールが個性を軽く発動して、調子確かめたあ

と、こちらを見て頷いてくる。

それを確認したら、指定された扉を開けて、その先の廊下を歩く。部屋とアリーナはさほど離れていないのか、一分もかからずに、視界に映る風景が変わる。

そこは、地下にあるとは思えないほどの広さを誇る場所だった。

直径にして百メートルほどの広さで、床は学校のグラウンドのような地面になっている。天井には多数の照明が存在しており、充分過ぎるほどの明るさが確保されていた。

そして自分たちが出てきた場所とは反対側。そこには、屈強な男が二人、佇んでいる。その立ち姿から、なるほど、確かに護衛というだけあって、それなりに鍛えられているのが理解できる。

だが、それなりでしかない。スラム街の連中に比べたら、大したことはないだろう。

やれるな、と判断し、ソールに視線を向ければ、大丈夫、と端的に言葉が返ってくる。

そんなこちらの姿を視認した相手が、腰を落として構えをとる。片方は無手、もう片方は戦斧を両手に一振りずつ握っている。

そしてその視線は真っ直ぐこちらに向けられていた。

その姿に、これは勝ったな、と判断を下し、瞬間的に加速しながら前へと出る。

地を蹴るようにして、一步で数メートルの距離を駆ける。

身体的なスペックとしては、自分では増強系の個性を持つ人間には遠く及ばない。しかしただ間合いを詰めるだけであれば、しっかりと人体の駆動の仕方を理解し、正しく動かす技術さえあればこうして自分のスペックでも簡単にできる。

故に、相手が高速で接近するこちらに驚いているうちに、その距離を一気に詰め――

目の前に、ソールによって光炎の壁が展開された。

そしてそれを気にすることなく、正面から突入する。

自分の肉体が光炎の壁に触れ、けれど燃えることなくそれを突破する。

当然だ、ソールはあくまでこちらの味方。その彼女がこちらの進路上に発動した個性が、こちらを傷つけるわけがない。

では何を目的に、ソールは個性を発動したのか。

それは、光炎の壁を越えた先に見えた景色が答えだった。

「ぬおおおおお!?!」

「め、目がア!?!」

そう、それはいつぞやのヴィジランテにも使った戦略。

ソールが張った光炎の壁は、燃やすことに主軸を置いたものではなく、『人間の目は太陽を直視するのには耐えられない』という特性を強くした、光に比重を置いた光炎で構成されている。

そのためこちらを警戒して、接近するこちらを見据えていた相手はもろに太陽の光を目視してしまっていた。

もちろん、自分はソールがそうすると理解していたため、対策としてそれに耐えるための専用ゴーグルを、光炎の壁が展開される直前に召喚している。

ソールにこの個性の使い方を提案したのも自分だし、連携の一つとして幾度となく練習したものの一つであるために、そこら辺の抜かりはなかった。

結果として、相手は突然の光に驚きと、眼球へのダメージで大きな隙を晒している。そうなればもはや、自分には命を奪うのは容易いとだった。

「刀剣召喚 ジャマダハル 刺突短剣」

右手に召喚したジャマダハルを握り、一突き。相手の片割れの心臓を突き刺し、その命を奪う。

そしてそれを引き抜く間も惜しいので、代わりにジャマダハルを返還。同時、持ち替えるようにして、左手にジャマダハルを再召喚し、もう一人の心臓へと突き刺す。

「……これで、お終いつと」

言葉と共に、左手のジャマダハルを返還する。

そうして、瞬く間に相手二人とも絶命させ、戦いを終えた。

今回は敵と戦力が同数、ということもあつて、遊びを入れる余裕が

なかった。その為、いつもより精神にかかる負荷が大きい。だから深呼吸をして、少しだけ自らを落ち着かせてから、ソールの方へ振り返る。

自分に遊びがなかった、ということはソールの方にもかかる負荷が大きくなる、ということだ。遊びながら人の命が奪われていく光景に對して、何を思うかはともかくとして、仲間が気楽そうにしているというのはそれだけで精神の負荷を和らげてくれる。

それがなかった今回は、その代わりのケアが必要だということ。だから顔を青くしているソールを抱きしめて、優しく背を擦る。後からケアをする、というのなら、こうして人肌の温もりを感じさせてやるのがいい、というのは過去、義姉にやってもらった経験からきていた。しばし、そうしていると落ち着いたのか、ソールが大丈夫という意味で、こちらのことを軽く掌で叩いてくる。

なのでソールの背に回した手を離せば、ソールが深く息を吐いたあと、こちらへと顔を向けてくる。その顔は既に、いつも通りの血色に戻っており、特に心配はいらないように見える。

とはいえ、あくまで見えるだけなので、この後しばらくは気にかけないといけないな、なんて思っている……突然、アリーナにザザ、というノイズ音が響く。

『——さて、落ち着いたかね?』

「ええ、すみませんね」

スピーカーから響いてきたアウェイクさんの声に、言葉を返す。

アウェイクさん自身の姿はアリーナのどこにも見えないので、監視カメラか何かでこちらのことを見ているのだろう。

そんなことを思いながら、集音性的に、ちゃんとかちらの声がアウェイクさんまで届いたかな、と心配していると、杞憂だったようですぐにアウェイクさんの方からも言葉が返ってくる。

『それはなにより。それで、今回の試験についてだが……』

「何か、問題でもありましたか?」

『……少し、仕事が早過ぎて実力がいまいち見切れなかったが……』

まあ、許容範囲だ。合格だよ』

確かに、実力を見極めるといふ観点だと、速攻は失敗だったか、と今更ながらに反省する。とはいえ、反撃の可能性を考慮すると、間違った判断だったというわけでもない。反省して今後に活かせばいいだろう。

『それでは、合格ということでは今度は君たちの人間性を見るために、この屋敷で数日生活してもらおうぞ』

「りょーかいです」

「わかりました」

そういえばそんな話になっていたな、と返事をしつつ内心で呟く。まあ数日とはいえ、あの金持ちの素晴らしい生活を味わえるならありがたい。

斯くして試験に合格した自分たちの、お屋敷生活が始まるのだった。

#14. Encounter with her.

「ダメだってソール……」

「いいじゃない、諦めて溺れよう……?」

まるで何かを悟ったかのような表情のソール。彼女からの悪魔の囁きに、自身の心が揺らぐのを自覚する。

だがしかし——駄目だ。その選択は決して許されない。それはスラム街で暮らす皆への裏切りだ。自分には選べない選択肢だ。

だって、それは余りにも。

「——でも情けなさ過ぎるだろ、依頼先の環境が良過ぎたんで帰れませんとかさア!!」

「だって、スラム街と比べるのもう……」

分かる。それは自分も痛いほど分かることではある。自分たちがここ数日生活させてもらっている部屋だけでも、全ての点において、自宅の上位互換と言えてしまう状態なのだ。

家具も食事も、全てが純粹に金と手間がかかっているもので、余りにも居心地がいい。特に自分は、高級な酒が飲めるのがポイント高かった。

聞けば、護衛として働いている人はこれよりは劣るが、それなりにいい寮に住まわせてもらっているというではないか。その上で、給料の払いもよく、護衛内のリーダークラスになれば、部屋もグレードアップするという。実に、いい職場だ。

ただ、待遇が良かったので、一元の仕事を途中で投げ出して転職しました、とか外間が悪すぎやしないだろうか。

正直、スラム街の連中への裏切り云々などどうでもよかった。単純に、情けなさ過ぎるという点でその選択肢を取りたくなかった。

「——ッ!? いや、待てよ!」

そこで突然、閃きが生まれる。

現状としては、自分もソールも、このままここで暮らしたい。ただそれは、仕事を途中で投げ出すようで、自分は嫌だ。となれば、折衷案を取るしかない。

そう、つまり。

「この仕事を完遂した上で、報酬を貰って、それからこの護衛として就職すればいいのでは……?」

「ソーヤ、あなた天才……?」

アウェイクさんも、強力な護衛が二人手に入り、ついでに超越者オーヴァードに至るための情報を持つ人間を手元で管理できる。誰も文句はない、完璧な作戦だった。

「あんなおっさんのところ行くなら、俺たちのところ来いよ」

「ばっか、お前。お前らのところどう考えても環境劣悪だろ」

ベッドの上で我が物顔で横になっている死柄木へ、否定の言葉を飛ばす。優雅に紅茶を飲む黒霧も、こちらの言葉に同意するように頷いていた。

「……いや、テメーらあまりにも馴染んでるから忘れてたけど、あんなここに来るなって」

余りのくつろぎっぷりに、すっかり忘れていたがこいつら、本来は招かれざる客、というやつなのだ。

黒霧のワープと、手下の個性で監視をやり過ぎているらしいが、バレたら洒落にならないので控えて欲しい。何より、理由がこちらだけがいい生活しているのはズルい、とかふざけんなどという話である。

「ああもう、今日はこの後アウェイクさんのところ行くんだから帰った帰った!」

「そういうことならここで勝手にくつろいでるわ。黒霧、コーラとポテチ。うすしおで」

「はいはい、どうぞ」

「しかも結局食ってるの市販品じゃねエかよオ!!」

「ソーヤ、言うだけ無駄だよ……」

思わずツツコミを入れるが、それすらも気にすることなく悠々自適に過ごす死柄木にもはや、呆れの念しか抱かない。いや、むしろその自由さに若干、尊敬すらしてしまうレベルだ。

優しく肩を叩いてくれるソールだけが、唯一の癒しだった。

どれだけ言っても、直す気がない死柄木はもう仕方ないので、この

部屋に放置してアウエイクさんの下に向かうことにする。

ここ数日の生活で、この建物の構造は全て把握している。だから案内なしでも迷うこともなく、目的地である、アウエイクさんが過ごす書斎へと到着するので、ドアを三度、ノックする。

「…………ふむ、誰かね?」

「想也とソールつす。ちよつとお話が」

「ああ、君たちか。丁度呼ぼうと思っていたところだ。入ってくれ」

アウエイクさんのその言葉に、うつす、と端的に返し、重厚感のあるドアを開け、中へと踏み入れる。

書斎は、今日までに数度だけが入っている。それでもなお、圧倒されるほどの蔵書がここには存在しており、読み切るのにどれだけの時間がかかるのだろうと思う。壁が全て本棚だというのに、それでも本宅の方にはまだまだ本がある、というのだから凄まじい。

実は本好きであるために、ここへ来るとそわそわし出すソールに苦笑しながら、デスクに座るアウエイクさんに視線を向ける。

今まで来た数度の時は、大抵書類仕事なりなんなりをしていたのだが、今回は珍しく何もしていないようで、しっかりとアウエイクさんから視線が返される。

「それで、用があったみたいですけど、自分とどっちの要件を先に済ませた方がいいですかね?」

「それなら問題はないよ。おそらく、君たちはそろそろ仕事を進めたい、という話をしに来たのだろうか?安心したまえ、私もその件について話があったのだ」

アウエイクさんとは、今日までにそれなりに話す機会があった。だからこちらの口調から多少遠慮が消えたし、アウエイクさんの方も、こちらの考えることをある程度察せるようになっていた。

流石に、この仕事終わったら雇ってくれなんて言いに来たとは気づいていないようだったが。というか気づかれたらむしろ怖い。

「……数日で、君たちの人間性を見せてもらったが……概ね問題はないだろう」

「概ね?俺たちの?人間性が?」

「問題がない……？ 私たちのどこを見てそう言えるの……？」

「いや、うん、まあそうやってすぐふざけるところとか、日々の自堕落な生活は、うん、あれだけでも」

「そうやってボカシて伝えてくるあたり、アウェイクさんの人の良さが滲み出ている。これがスラム街の連中なら、即座に煽りに入っていたらどう？」

「そう考えるとやはり、ここは理想的な職場なのでは、なんて思いつつ、とはいえず、と続けるアウェイクさんの言葉に耳を傾ける。

「そういう点を含め、今回の一件を君たちに依頼していい、と私は判断した。無論、数日程度で見極められるわけもないのだが……それでも、私は君たちが気に入った。信じてみたいと思ったのでね」

「いやア、それほどでもありませんけど」

「褒めても何も出ませんよ。ああ、でもそれなら報酬弾んで欲しいです」

「そうやってすぐ調子に乗らなければ完璧なんだけどね？」

「それはもう、あのスラム街の住民という段階で諦めてもらうしかない。ソールも日常面に関してはすっかり、スラム街式に染まっていた。

「まあそれだけでも。君たちには護衛をやってもらおう、と話をしたね」

「その確認に領きを返す。詳細こそ聞かされていないが、ブーステッド覚醒誘因という個性を持つ人物の護衛と、個性の効果を実験するのが依頼だとは聞いていた。

「それを合っているか確認をとれば、アウェイクさんから肯定の返事が返ってくる。

「そうだ、その個性を持っているのが私の娘なのだが……」

「何か問題でも？」

「……うむ、その、個性のこともあって過保護にし過ぎたのか……十五にもなってもまだ、世間知らずなところがあってな？」

「あー……振り回すかもしれない、と」

「……すまん」

護衛というのも色々形があるものだが、どうやら今回は基本的に対象の傍にいて守る形らしい。となれば、世間知らずのお嬢様に、いくらか振り回される羽目になるのは簡単に予想がついた。

とはいえ、仕事は仕事。その程度は文句を言うほどではないので、アウェイクさんには問題ないと伝える。

「それでののだが、護衛中は娘を君たちの街に連れて行って欲しい」「スラム街に、ですか？」

今まで過保護にしていた割には信じられない提案に、思わず聞き返す。しかしアウェイクさんの方は至って真面目な顔なので、何か理由があるのだとすぐに判断し、アウェイクさんの真意が発せられるのを待つ。

そしてそれは、特に伏せたり、言い難かったりすることではないらしく、ほどなくして言葉をまとめ終えたらしいアウェイクさんが口を開く。

「君たちに娘を保護してもらっている状況で、この家に覚醒誘因の個性持ちがいる、と偽の情報を流す予定なのだ。そこで、娘を狙う連中をある程度削りたい」

「……なるほど」

確かに、それなら自分たちに娘を預けるのも理解はできた。しかし、それでも何点か、分からないことはある。

「実験、っていうのはその場合どうするんですか？」

「現状娘の個性が効果を発揮する条件は、その個性の持ち主と共に過ごすこと。個性の持ち主が対象に信頼を持つこと、とされている。君たちにはこの条件を満たしてもらい、超越者となれるか確認してほしい」

「それなら確かにスラム街で行えますね。では次の疑問なんですけど、スラム街は自分たちを悪化させたようなバカがいっぱいいますけど、そんな場所に娘さん送っていいんです？」

「えっ」

そう、戸惑いの声を零したアウェイクさんは数秒固まったあと、再起動を果たしてからは腕を組んで悩みこんでしまう。眉間には皺が

寄り、歳を重ねていることもあって、大変険しい顔に見えた。

というか、そんなに悩ませてしまうほど、自分たちの素行に問題があっただろうか。ちよつとソールと道行くメイドさん品評会を開催したり、アウエイクさんとの会話で揚げ足取りをして遊んだだけなのだが。

「まあ……うん、必要経費というか……多少の犠牲はやむなしというかね?」

「ちよつとアウエイクさんとはこちらに対する認識について小一時間ほど話し合っておきたい」

「……まあ、端的に言うとかバカだよ、君たち」
「ぐぬう」

「待って、私もその分類されてるの?」

アウエイクさんのあまりに的確な言葉に、ただ唸るしかなかった。ソールの方は納得がいかないようだったが、彼女も充分こちら側だとそろそろ自覚した方がいい。

今度、ソールに普段自分がやってることを振り返らせてみよう、と思っていれば、本題に戻るが、と咳払いと共にアウエイクさんが話の路線を修正する。

「それで今日には娘と顔合わせをして、明日君たちの街へと出発して欲しいんだ」

「明日……!?!」

「私たちの幸せな生活が終わる……!?!」

「そろそろ話が進まないから、遊ぶのをやめてくれないかな?」

はい、とソールと声を揃えて返事をする。それにアウエイクさんは疲れたように溜息を吐いた。きつとお仕事が大変なのだろう。しっかりと休んで欲しいところだった。

そして早速、ということであウエイクさんの娘さんと顔を合わせるため、娘さんが待っている部屋へとアウエイクさんの先導の元、移動することになる。

連れていかれる方向は今まで立ち入りを禁止されていた区画で、なるほど、娘さんと接触させないためだったのか、と納得する。

しばらく、アウエイクさんと他愛のない話をしながら歩いていると、アウエイクさんがある部屋の前で立ち止まる。パツと見は、何の変哲もない扉だ。

そして事実、自分とソールが過ごしていた部屋と何も変わらぬ扉のようで、普通にアウエイクさんがドアノブを捻って中へと入る。

まあ確かに、露骨なセキユリテイがあつたら、ここに大切なものがありますよ、と言っているようなものだよな。なんて思いながら部屋へと入り。

——そこには、美しい白がいた。

まず目立つのは、光を反射する艶やかな白髪。雪景色を思わせるその白髪は、こちらに視線を向けただけの小さな動きによる揺らぎですら、視線を奪ってやまない。

聞くところによれば、彼女はソールと同じ年だというが、ソールよりもその体軀は小さく、細身だ。けれどその細さは不健康そうなものではなく、健康的な食事をしているのだろう、遠目でも適度な柔らかさがありそうだと分かる。

顔は年相応のあどけなさを残しているが、それでも将来は美しくなることが簡単に予想できるほどに、整っていた。

そして何よりも、その瞳。こちらへと純粹な興味を抱えた、深い深い青色の瞳は、美しく、無垢さに満ちていた。

ああ、この美しい青色は、何という名だったか。そう、確か——
瑠璃色。

「紹介しよう、私の娘の、ルリだ」

「ああ、それは……ピツタリの名前だ」

「だろう？日本の方の色の名前を参考にして付けたんだよ」

「……彼女によく似合う、綺麗な名前だと思います」

どこか、呆けたままアウエイクさんと言葉を交わす。どうにも、アウエイクさんの娘さんであるルリちゃんは、人を惹きつける不思議な力があるようだった。

見れば、ソールもこちらと同じくどこか呆けているような顔を見せている。あるいは、それすらも覚醒誘因の個性の効果の一つなのかも

しれなかった。

ただ、あまりそうやってぼけつとしているわけにもいかない。だからソールと二人、まずは挨拶を交わすため、視線をルリちゃんへと合わせる。

「俺は、喚導想也だ。よろしくな」

「私はソール・喚導だよ」

「ルリ・アウエイクです。よろしくね」

自分がルリちゃんの右手と、ソールが左手と握手を交わす。そしてすぐに、それを離そうとして、ルリちゃんの方が離してくれないのに気づく。

そのままルリちゃんは目を閉じて、しばし何かを考え込んだあと、ポツリと、呟くようにして口を開く。

「ソールは……とつても暖かい色してる。色はクリーム色で、皆を照らしてくれる、太陽みたい」

それは、所謂人物評、というものだった。ただそれは、余り表面に出てこない、ソールの本質的な部分についてだ。出会ったばかりのルリちゃんが分かるはずのない部分のはずだった。

「それからソーヤは……ちよつと、分かり辛いね」

きつと、また考え込んでいる彼女は今、先ほどソールにしたように、こちらの人物像を考えているのだろう。

普通であれば、見知らぬ人間に本質を見抜かれるそれは、気持ち悪さを覚えるはずのものだったが、ルリちゃんであるからか、不思議と不快感はなかった。むしろ、彼女が自分をどう評すのか、興味すらあった。

「ソーヤは、鈍色。心の周りを鈍色の鉄で囲って、赤黒い汚れに包まれてる。だからパツと見は、残酷にも見えちゃう。だけどその内側には……ソールぐらい、暖かいものがある。これは……きつと、炎かな？ 誰かから貰った、とつても暖かなもの」

ああ、その評価は。否定しようがないほどに正しかった。自分の中には、義姉から受け継いだものが、ずっと眠っているのだ。

そしてそれは自分以外誰も知らないはずのもの。原理は不明だが、

彼女は人の心を覗き見る力があるようだった。

個性とはまた違う、不思議な力……けれどやはり、それに不快感はなかった。

「……うん、二人とも、とっても綺麗な形をして……。私、二人のこ
と好きになれそう」

どこまでも綺麗で、純粋なその笑みに、むしろ好感すら抱いてしま
うのだった。

——それが、後々の自分の運命を左右する出会いだった。

#15. Daily life when Rur
i increased.

「とりあえず、ここがリビングで、あれがキッチンだ」

「好きに食材とか使って料理していいからね」

「お前が勝手にお菓子作りとか始めてから食費嵩んでるの知ってて言ってる？」

「私……料理できないよっ」

その言葉に、そういえばこの子は箱入り娘だったな、と思い出す。今自分の中で、この年代の女の子の基準が、ソールになっっているところはある。

だがルリという箱入り娘としばらく共に生活する、となればそこから辺の基準を修正しなければならぬだろう。ソールとルリでは、あまりにも生い立ちが違いすぎるのだし。

——ルリと顔合わせを済ませてから。そのままその日は、丸一日ルリとのコミュニケーションに費やした。

そうしてある程度ルリと仲良くなった姿を見て、アウェイクさんも腹を決めたのか、予定通り、その翌日にこうして、ルリを連れて自宅へと帰ってきていた。

「トイレなんかはそこにあって、風呂がそこだな」

「ああ、あの屋敷暮らしと比べると、なんて貧相な……」

「うっさい、俺も辛いんだからやめてくれ」

「このお家、小さいね」

「ぐふう」

ルリちゃんの純粋な言葉が深く心へと突き刺さった。無邪気に放たれた言葉故にあまりにもダメージが大きかった。

突然崩れ落ちたこちらを見て、首を傾げるルリに大丈夫、とだけ告げて何とか、ソールの手も借りて立ち上がる。ソールもこの家の住民として無傷ではないだろうに、すまない。

「あー、それでルリの部屋だけど、しばらくはソールと同じ部屋で生活

してくれ」

「ソールと？」

「ああ、物置になつてる部屋を片付けるまで待つてくれ」

部屋数自体は、実はそれなりにあつて、ルリの部屋を確保できなくもなかった。しかし、残つている部屋は、使っていないこともあつて物置と化してしまつてゐる。

確か、それなりに適当に大量の物を突っ込んでいたため、数日ばかりで掃除する必要があつた。

「とうか、死柄木と黒霧の二人がいなければ……」

「ああ、うん、あの二人部屋一つ占有してるからなア……」

あの二人、以前こちらが仕事で家を空けている間に、一部屋勝手に自分たちのものにしていただけだ。

元々、客間として利用していた部屋であるため、一応二人はこの家の住人ではない以上、そこを使うのは間違ひではないのだが。ただ勝手にカスタムするのはやめて欲しい。

お陰様であの部屋、もうあの二人にしか使わせられない状態になっている。まさかテレビとかソファまで持ち込んでゐるとは。しかもスラム街連中の協力を得て、日本の番組まで受信できるようにするのは。

「いや、改めて思うとあいつら自由過ぎねエ？」

「慣れちゃつたところはある」

まあとりあえず、ヴィランにまともな理由を求めるのが間違ひなのだろう。

そんなことを考えているうちに、ルリに自宅を案内し終わる。

基本的に、ルリはその事情の関係上、あまり外に出したくないところがある。

ただ、とルリの方を見る。

「――」

目を輝かせて家の中を観察して回る姿を見てしまうと、外に出ちゃダメ、とは言いつらいものがある。

箱入り娘なだけあつて、うちにあるような安物に興味津々なようだ

し、時々窓の外も見ている。

これ、どうする、とソールに視線で問いかければ、ソールも懇願するかのように見てくる。その段階で、自分が上手いこと妥協点に持つていくしかないな、と理解するしかない。

「……そしたら、ルリは俺か、ソールのどっちかと一緒になら、外に出ていいぞ」

「ほんと!？」

そう言っつて、ルリは目を輝かせる。そして、ソールと二人、手を合わせて喜んでいた。

その姿に少し、ほっこりする。ただ、一つだけ、心配事はあった。護衛に関しては、自分かソールがいれば、よっぽどのがない限り問題ない。むしろ、スラム街の連中に協力を請えるという点では、より安全かもしれない。

「ただ、まあ、そのスラム街連中がバカだからなア……」

箱入り娘のルリと、スラム街育ちのバカが、どう化学反応を起こすかだけが予想がつかず、不安だった。

◇

「喚導、酒、つまみ」

「お前……死柄木お前、ほんともう……」

今日も今日とて、絶好調の死柄木にもはや言葉がなかった。

ルリがこの家に来た翌日。

ベッドの質による、寝起きの快適さの違いに絶望しながら、何とか起き上がり、顔を洗ったり。

そうやって朝の準備を済ませて、リビングに行けば、朝っぱらから死柄木が寛いでいた。

死柄木たち、割と暇なのでは、と思ったりするが、そもそもヴィランなので時間配分は自由なのだそうだ。

それに基本的有能なので、問題ないらしい。個人的には、それ有能なの黒霧では、なんて思っているのだが。

何はともあれ、とりあえずは死柄木に要求されたものをテーブルの上に置く。

それと並行して、自分たちの朝食も用意していく。

今日の朝食は、昨日の帰りに無理矢理調達したために、六枚切りの食パンが二袋だけしかない。自分とソールで少なくとも三枚ずつは食べるので、明日の分の飯も調達しないといけないな、と思いつつ、トースターへと二枚、食パンをぶち込む。

その間にマーガリンと、ブルーベリージャムを用意しておき、追加で一枚出した食パンへ、ジャムを塗っておく。

「おはよう」

「おはよう……」

そうやって食パンが焼けるのを待っていると、部屋からすつかり目が覚めているソールと、未だ寝ぼけまなこのルリが出てくる。

そんな二人に、まずは挨拶を返してから、ソールにルリに顔を洗わせるように頼む。

二人が洗面所へ行っている間に自分は、とりあえずソールの朝食を用意することにする。

ソールに関しては、食パン三枚をジャム二、マーガリン一と割り振るのを、これまでの生活で理解しているので、一枚、焼き上がった自分の食パンと入れ替えるようにしてトースターに放り込む。

本来であれば、これに簡単なサラダも追加したりするのだが、生憎と今日は冷蔵庫に材料がないため、諦めるしかない。

この後、ソールとルリが座るため、邪魔になるので朝食組ではない死柄木をソファへと追いやり、自分の分の朝食を皿に乗せてテーブルへと運ぶ。

「お、ルリ、目は覚めたか？」

「まだ眠い……」

「立ちながら寝たりするなよ……?」

それに眠そうな顔のまま頷くルリに、また眠るのではと心配になりながら、皿に乗せたソールの分の朝食を、テーブルへと運ぶ。流石に、トースターに入れたものはまだ焼き上がっていないので、とりあえず

はジャムを塗る用の二枚しか、皿には乗っていない。

「ありがとう」

「あと一枚はもうすぐ焼き上がるからな。それで、ルリは食パン何枚がいい?」

「ジャムで四枚……」

「よん……四枚!? え、ちゃんと全部食べれる?」

「よゆー……」

驚きながら問い返すも、ルリからは肯定の返事しか返ってこない。それを不安に思いながらも、一応、ルリからのオーダー通り、皿に食パンを四枚乗せてテーブルへと運ぶ。

ついでに、ソールの分の食パンが焼き上がったので、それも運びつつ、自分も席へとついて朝食の時間になる。

「いただきます、つと」

「いただきますーす」

「いただきます……」

自分、ソールの順に言っていたいただきますに続くように、ようやく目が開き始めたルリもいただきます、と言う。

しかしそこから食パンへと手を伸ばすことはなく、首を傾げている。

「ふうひはほ、ふひ?」

「行儀悪いし、何言ってるかわかんねエぞ、ソール」

「つんぐ、どうしたの、ルリ」

首を傾げるルリに思わず釣られて、自分も首を傾げていると、同じく首を傾げていたソールが、食パンを加えたまま喋り出す。それにツツコミを入れたつも、自分もルリの様子を疑問には思っていたため、そのまま喋ること自体を止めはしない。

そんなソールに問われたルリは、えつとね、と呟いてからこちらの疑問に答える。

「もつところ、オムレツとか、ベーコンとかいっぱい無いの?」

「ぐふう」

「すまねエ……すまねエルリ……! うちにはそんな金はないんだ……」

!!

ルリの無邪気な言葉の刃にソールが崩れ落ち、自分はルリに謝るしかなかった。確かに、アウェイクさんの屋敷で自分たちにも出してもらった朝食と比べれば、明らかに量も質も数段劣る。

しかしうちの財力では、基本ここにサラダが加わるか、ベーコンが出れば豪勢、というレベルだった。ルリには申し訳ないが、これが精一杯だ、と伝えれば、そっか、と納得してくれる。

「でもだったら、パンもう二枚は欲しいかな」

「大食いキャラと申すか」

「食費が嵩むなあ……」

ソールの言葉によって突き付けられた現実には、軽く目の前が暗くなりつつも、何とか、朝食を終える。

ちなみに、本当にルリは食パン六枚をペロリ、と食べていた。

その後は、ソールと協力して皿洗いや、洗濯といった家事を済ませていく。

途中、今までメイドに任せていたために、全く家事に触れたことがない故に興味を持ったルリを交えつつ、昼前には最低限の家事が終わる。

「さて、そしたら昼飯もないし買い出しに行きたいんだが」

「買い出し？ 行きたい！」

ま、言うと思った、と手を挙げてアピールするルリに苦笑する。

ただ、自分かソールがいれば外出してもいい、と言ったのは自分だから約束を違えないためにも、ルリもついてくることを承諾する。

「ソールはどうする？」

「んー……ま、行こうかな」

普段であれば、買い出しは面倒だと渋るソール。しかし、純粹な眼で見つめてくるルリに、ノーとは言えなかったらしく、珍しくついてくるという。

なんとというか、我が家で一番強い人物が決まった気がするな、と思いつつ、手早く準備を済ませ、玄関へと向かう。

「そんじゃ、死柄木留守頼むぞー」

視線を手元の本に向けたまま、軽く手を挙げて返す死柄木を確認して、ソールとルリを連れて外へと出る。

スラム街の商店区画へと向かう道を、仲良く並んで歩くソールとルリの姿を微笑ましく思いながら歩く。

金髪と銀髪で、見た目的には二人は似ていない。しかしその仲の良さは、姉妹のようにしか見えなかった。

かく言う自分も、ルリと接して未だ一日二日程度だが、いつかアウェイクさんの下に帰ってしまうことを考えると、既に寂しくなってしまう程度には、彼女に入れ込んでいた。

「……ん？お、ソールにソーヤじゃねえか！それに……誰だ？」

「あの二人帰ってきたんか。……ん？見ない顔だな」

「銀髪ロリ……ありだな！」

「貧乳かよ、ぺっ」

「ああん!? テメエ今なんつった!？」

徐々に商店区画に近づくにつれ、人が増え始める。その中には知っている顔も多く、皆こちらに声をかけようとして初めて見るルリに首を傾げる。

最初のうちは説明していたのだが、あまりに手間なので、適当にあしらっている、それでも聞こうとしてくる連中が徐々に増えて行ってしまう。

そして商店区画に着く頃には、人の塊が出来上がっており、気づけば身動きをとるのも難しくなっていた。

なお、その間に一部の人間の間で貧乳巨乳戦争が起きていたが、知ったことではない。その中に貧乳派として、血涙を流すディティーがいたが、知ったことではないのだ。

「ていうか！ 貴様ら!! 邪魔だア!!!」

「へっへっへ、もう逃げ場はないぜ……?」

「さあ洗いざらい吐くんだよ……!」

「ていうかこれ、商店区画に居た人、ほぼほぼ集まってない……?」

「集まってるなアこれ!!」

ソールの漏らした言葉に思わず同意すると、周りの全員が頷きを返

してくる。スラム街の住民は、こういう時の連携が無駄に巧くて、本当に困る。

「お嬢ちゃん、ちょっとお兄さんたちとお話しよう?」

「お話? いいよ、たくさんしよう!」

「お、おう。……なんだこの子、天使かよ」

何人かが自分とソールに詰め寄ってくる中、人垣によって分断されたルリの元に、何人かのスラム街のバカ共が集まっている。

そして明らかに事案な声のかけ方をしたと思ったら、そのままルリの純粹さに浄化されていった。

わかる、その子の純粹さは一種の兵器だよな。

「で、何だよあの子」

「ま、簡単に言えばいいところのお嬢様で、諸事情により護衛中」

「おーけー、把握した」

肩を組んで確認してきた男に、簡単に説明すれば、それだけで諸々を察して、こちらのことを解放してくれる。こちら辺、スラム街の住人は皆裏仕事の厄介さについて理解しているから、察しが良くて助かる部分だった。

今、説明した相手はこの街でも顔が広い男だ。すぐにこの情報は、詮索しないで欲しいという点も含めて街中に広がるだろう、と安心する。

そんなことを考えている間にも、浄化されてしまった男に代わって新たな男がルリへと挑戦する。

「情けないやつめ、次はこの俺が——」

「うわあ、凄い筋肉。鍛えてるんだね……わ、すっごい硬い……」

「ぐぬう」

今また一人、新たな犠牲者が生まれた。ヨゴレ系として定着してしまっているスラム街の連中では、純粹なルリとはあまりにも相性が悪かった。

「ふ、そういうことなら俺の出番だな……」

「お、お前は!?!」

そんな中、満を持して、と言わんばかりの雰囲気を身に纏って一人

の男が歩み出てくる。そしてそれは、自分のよく知る顔だったために、思わず声が漏れる。

「ヤク中……!」

「ヤク中が出るだ?!」

「あまりに日頃のクスリをキメているイメージが強すぎて、本名が忘れられてしまったヤク中か……!」

周りの明らかにヤベーやつが来てしまった、と言わんばかりの言葉を、まるで声援でも浴びているかのように振る舞いながら、ヤク中がルリへと歩み寄っていく。

ヤク中は条件こそ特殊だが、増強系の個性だ。それに影響されてか、それなりに体格がいたため、ルリと並ぶと身長差がとてつもないことになる。

故にヤク中は、ルリの前でしゃがみ込み、目線を合わせてからその右手を差し出す。

「はじめまして、お嬢さん。突然だが俺と一緒にめくるめくおクスリの世界へ——」

「んー……」

「あの、お嬢さん? 何故俺の手をそんなにぎにぎと……」

突然、ヤク中が差し出した手を両手で触り始めるルリ。その様子に、周りの連中が戸惑う中、自分とソールは、この戦いのオチを完全に理解してしまった。

「あの——」

「あなたは、凄い色々混ぜたごちゃごちゃした色してる。でも、奥へ行けば行くほどその色が上手く混ぜたって……」

「え、あの」

「最後にはとつても綺麗な虹色になってるんだね。……普段の振る舞いに隠れちゃってるけど、あなたはきつととても素敵な人なんだと思う。私、そういう人好きだな」

「ぐわあ——」

「や、ヤク中が浄化されたあー!?!」

「やつはこのスラム街の中でも、最強のヨゴレ系キチガイ……」

「あ、これ詰みましたね」
この日、新たなスラム街最強が誕生した。

#16. Collapse suddenly.

「そういうえば、喚導さんの個性はかなり万能ですよね」

「アん？」

夜中、ソールもルリも寝てしまった頃。

死柄木と黒霧と自分の三人で、小さな照明だけつけた、リビングのテーブルを囲んでいた。

ソールが来てから、自分は彼女の世話もあつて昼間にあまり遊べていない。そしてルリが来てからは、それがさらに顕著になっている。

そういうこともあつて、時々、死柄木と黒霧の二人に付き合つてもらう形で、息抜きの酒盛りを行うことがあつた。

時間が時間のため。また死柄木も黒霧も騒がしく飲むタイプではないため。自分には珍しい、静かな飲みだった。

だが、まあ。偶にはそんな飲みも悪くない、とも思う。

精神的負荷を軽減するため、とはいえ、ずっとバカでいるのも疲れるものだ。

「正直、喚導は手持ちに欲しい」

「死柄木がんなこと言うとは、また珍しい」

ウイスキーをロックで飲みながら、二人と言葉を交わす。安物であるため、決して美味くはないが……まあ、スラム街ではこれが基本であるし、だからこそ慣れた味でもあつた。

「汎用性が高いですから」

「二人いれば、作戦の幅が広がるだろ」

「つつつても、存外制限も多いんだぜ？」

今日の話題は、それぞれの個性。特に、自分の個性が今、注目されていた。

一応、死柄木や黒霧とは今後敵対する可能性もある。だから本来、個性についてなど話さない方がいい。

だがそれを理解した上で、互いの個性について話してしまう程度には、自分たちの間には友情が生まれていた。

それに、個性の概要がバレても問題がない程度には、伏せ札を用意

してある。そしてそれに関しては、二人も同様だろう。

だから遠慮なく、自分の個性の欠点なども、話していく。

「基本的に、ありえないものってのが作れないんだよな」

「ありえないもの、ですか」

「まア……そうだな。例えば、熱に強い耐性を持つ鎧なんかは召喚できるわけだが。これは実際にそれだけの耐熱素材が世界に存在してて、鎧として加工されさえすれば、ありえなくもないものだからだ」
例として出すのは、死柄木たちを爆破した時の鎧だ。あれは、実在しない鎧でこそあるが、今の技術なら作れないこともないだろう、というものになる。

じゃあ、何が作れないのか、っていうと、という言葉と共に、手元に一振りの剣を呼び出す。

「今、俺は常に炎を纏う剣をイメージしたわけだが、こうして出てくるのはただの剣なわけだ。何でかわかるか？」

「実在する可能性すらないから、か」

「死柄木正解！」

召喚した剣を返還しつつ、死柄木を指さす。

そう、死柄木が言ったように、実在する可能性がないものが自分が召喚できないものになる。

一応、過去雷生さんに語ったように、体力の消耗を考えなければ作れるのだが、消費量的にはほぼ作れないのと同義だ。

「……なるほど、理屈の通らないものを生み出すことはできない、ということですか」

「あー、そうだな、だいたいそんな感じ」

炎を纏う剣も、発火のシステムが理論的に存在するなら生み出せるが、常に炎を纏うことが当然である、という理屈が存在しないものは召喚ができないという話だ。

「あとは、概念的な属性を付与したものが作れない、ってどこか？」

「概念的……また曖昧な言葉だな」

「そうだなア、単純に材質とか構造で剣の切れ味を上げることではできない。何でも斬れるって概念を持った剣は生み出せないわけだ。これ

で、分かるか？」

雷生さんにも話していなかった情報ではあるが、それを伏せていても大して痛手でもないの、具体例を以って説明する。

ついでに、合わせて先程の理屈が通らないものは、体力の消耗度外視でなら作れるが、こちらに関しては完全に不可能であることも告げる。

ただその二つの境目も曖昧であり、本当に概念的なものとか言いようがないのでそれ以上の説明は難しい。実際、召喚しようとしてみない限り、自分ですら判別がつかなかった。

ちなみにこれを個人的には、神の領域に踏み込む、あるいは人間の領分を逸脱するから……なんてことを考えたりもしているが、まあそこから辺は個人的な考察で、どうでもいい話になってくる。

「……いえ、なるほど、神の領域に踏み込むことはできない……面白い考察ですね」

「そオカア？別にこれ、概念の付与とかできたら神様っぽいよな、とかそんな理由で思いついたやつだぜ？」

けれどまあ、酔っ払いの他愛のない話にはそのどうでもいい話ぐらゐが丁度いいわけで。存外、その話題でそのまま、話が広がっていく。

「そうは言っても存外的を射ていると思えますよ。実際、到達者リミテッドに至った方を何人か見えています、その誰もが神のようなレベルのことはできていません」

「まあ話聞く限りじゃ、超越者オーバーワードになってようやく、そのレベルに近いことができるらしいな」

「超越者になってようやく神のレベルに手をかけられる感じ、って話かア……」

そう考えると、超越者になれる可能性があるルリの個性がどれだけヤバいかが、より分かる気がした。

これ、死柄木たちにルリの個性黙っておいて正解だな、なんて思いながら、そのまま酒盛りは続き、夜は更けていった。

◇

「――全滅？」

「おうおう、その通りさネエ……。アウエイク坊んところは、護衛含めて壊滅だそうだネエ……」

ガンギマリ爺から告げられた言葉に、顔を顰めるしかりアクションを返すことができなかった。

ルリがスラム街で暮らし始めて数週間、ようやくルリがいる暮らしに慣れ始めた時に、ガンギマリ爺に呼び出されて聞かされたのが、そんな情報だった。

アウエイクさんは、それなりに人格者で、短い付き合いではあったが、それなりに仲良くなれて、個人的には友人だと思っていた相手だ。だからそんな人間の訃報に、心にはそれなりのダメージがある。

だが、スラム街生活で染みついた感覚で、それを悲しむより先に、自分がこれからどうすべきかという点に思考が回る。

それは薄情と称されるような思考かもしれない。しかし、ルリを預かっている関係上、次は我が身かもしれないのだ。油断して被害が出るのは、自分だけではなく、ソールとルリもなのだから、警戒は最優先すべきものだった。

「お嬢ちゃんに伝えるかどうかは任せるサ……。ふえっふえっ……」
「……………」

少し離れた場所でソールと遊ぶルリを見る。十六歳の、今まで外出などの制限はあっても、家族に囲まれていた少女が、あまりにも突然に父親を失ったなら。それは、心が耐えられるものなのだろうか。

自分も過去、義姉を失ってこそいたが、そこから立ち直れたのはあくまでスラム街出身だから、というのがあ。あまり、参考になりそうもない。

「……そういや、母親の方はどうなんですか？」

「わしや全滅、と言ったさネ……」

「一般人含めて、か」

「ニュースにもなってるヨ……」

そう言っつて、ガンギマリ爺が今日の朝刊を渡してくる。そこには、

謎の人物によるアウエイクさんの会社、自宅、別荘全てが襲撃を受けた旨が記されていた。

破壊痕を確認する限り、何か鋭利なもので建物ごと断ち斬られており、また各建物ごとに襲撃があった時刻にズレがあるため、少なくとも実行犯は同一人物とされているらしい。

現状、捜査が展開されてこそいるが、目立った情報はないらしい。これだけ派手にやって、逃げおおせているとは、よっぽどデカイ組織なのだろうか。

「……どうしたもんかな」

まだ犯人が捕まっていない、ということは自分たちの下にルリがいる限り、襲われる可能性があるということだ。だから、防犯の意識を強くするためにも、ルリには全てを伝えておくべきだと思う。

……だけど、家族も、おそらくメイドも護衛も。皆が死んでしまった、などとそう簡単に言えるもんじゃない。

だから、自分はどうすべきかを考え込み。

「——爺！大変だ!!」

突然、ガンギマリ爺の家に飛び込んできた男の声によって、その思考は遮られた。

入ってきた男の姿を見れば、いつぞや、ヴィジランテの襲来を知らせた男であることに気づく。それはつまり、警邏担当が何かを見つけただということ。

「ソーヤもいるのか、ちょうどいい」

「敵が来たのか?」

「ああ、それも大分近くまで来ている。時間が惜しい、説明は全員が集まってからするから、人を集めるのを手伝ってくれ」

その言葉に了承の返事を返しながらも、珍しいこともあったものだ、と考える。

基本的に、警邏担当は数が多い。戦闘技術が一定ラインを満たさない連中は、基本ここに回されるからだ。そこでついでに、鍛錬も受けることで最終的に戦闘班に移動となるわけだが。この街はその特性上、常に誰かがやってくるため、警邏担当も常に一定の数があるのだ。

警邏には基本的に、特殊な技術は必要ない。監視の目を増やすだけでいいからだ。だから、有能無能関係なしに、数が多い警邏隊が敵の察知が遅れるとは実に珍しいと言える。

ただ、自分は今回の侵入者に心当たりがないわけではない。むしろタイミング的に、そうとしか考えられず、そしてそいつであれば、警邏隊の発見が遅れたのも納得ではあった。

そんなことを考えながら、戦闘班の面子を集めていく。

その際、ガンギマリ爺の下から持ち出したインカムを渡しておくのも忘れない。

今回は時間に余裕がないため、一度集まって警邏隊からの説明を聞いている余裕がない。だから配置につきながら説明を聞ける手法が必要だった。

——そうやって、数十分の時間をかけて、迎撃態勢を整える。

自分も、ソールと共に配置について敵を待つ。

ソールを連れてきたことで、ルリの護衛がいなくなってしまうているが、ガンギマリ爺の家はセキュリティ的に、そして何よりもガンギマリ爺という化物がいる。あの爺は具体的な戦闘力こそ分らないが、一度だけ、気迫のみで失神させられたことがある。あの家はスラム街で一番安全な場所と言えた。

『……あ、あー。全員、聞こえるか?』

その言葉に、多数の声が返ってくるのが、インカムより聞こえてくる。

それは数が多く、自分では全員揃っているのかわからないが、この街では声を聞き分ける個性、なんて微妙な個性を持っているやつがいる。そしてそいつはこういった時のため、通信周りを担当しているの、おそらく今もそいつが確認を取っているのだろう、と予想すれば。

『……よし、確認がとれた。全員いるみたいだな。そしたら状況説明に入る』

そう切り出した警邏隊の男から、いくつかの情報が渡されてくる。

一人の男が迷いなく真っ直ぐにこの街へ向かっていること。

日本の着物に袴、羽織を着て、大太刀を担いだ時代錯誤の姿である

こと。

ある程度離れた場所に、突然現れたこと。

過去の情報を洗っているが、今のところ目ぼしい情報は見つからないこと。

それらのことがインカム越しに伝えられるが、明らかに情報が足りていない。

現状で分かるのは、大太刀で近接戦をしてくるだろう、ということだけだ。

ただ、自分に限ってはその男が恐らく、アウエイクさんとその近辺の人間を全滅させた男だろうと気づいている。

だから、少なくともそれだけのことができるだろうことを伝え、続いてその根拠を語ろうとしたところ。

——男が現れた。

黒い着物に、灰色の袴。白い羽織を着ており、長い髪を後頭部で束ねている。なるほど、確かに時代錯誤の侍というやつに見える姿だ。

そして特徴的なのは、その肩に担がれた男の身の丈程はある、大太刀。取り回しの悪そうなそれが、男の主武装であることは明らかだった。

だが、それがブラフの可能性だってある。やはり、余りにも事前の情報が入り足りない。

と、なれば取るべき手段はやはり、過去にもやった先制してハメ殺す手法になってくる。

ただ、今回は誰かの見本とする予定もないので、わざわざ分かりやすくやる必要もない。

『……よし、始めるぞ』

インカムから開始の指示が飛ぶ。それと同時に、最初に動き出すのは、テレポートの個性を持つ男だ。

テレポートと言っても、緯度や経度、そういった精密な座標が必要になるテレポートであり、また短距離でしかテレポートさせられないという、微妙な個性だ。

それでも、この街であれば機械の補助や、演算系の個性持ちによつ

てその個性を最大限に活かすことができる。

故に、敵の大太刀の間合いの外にして、正面の位置にヴィジランテ戦でも開幕を担当した、発光の個性持ちが転送され。

「——遅い」

個性が発動するより早く、いつの間にか距離を詰め、振り切られた大太刀によって、その首が落とされた。

その光景に、誰も思考が止まり、直前の勢いのまま、作戦が進行してしまふ。

すなわち、隠密個性持ちによる、死角からの奇襲だが。

「見えてる」

個性によって知覚できないはずなのに、奇襲をかけた隠密班の女――

――デイティーの首が、斬り落とされる。

「――マズい……！」

そこまでいって、ようやく現状に思考が追い付く。完全に、自分たちでは対処し切れない敵であることを、事ここに至ってようやく理解した。

そしてそれでは遅すぎた。

視界で金色が動く。

突然のことに一瞬理解が遅れ、何が起きたのか理解した時には最後のチャンスすら逃したあとだった。

男が紅蓮の壁に包まれる。

しかしそれはあっさりと斬り裂かれた。

そして金色が空を舞う。

一瞬の攻防だった。

「――ッ――」

一瞬でそれは決着してしまった。

その光景に、思わず激情のまま襲い掛かりそうになるのを、精神力

で抑え込む。

彼女は、敵に光炎を斬るために一手、彼女自体を斬るためにもう一手使わせた。その時間を無駄にするわけにはいけない。

だから口から漏れそうになる慟哭を、別の言葉に変え、解き放つ。

「全ツ員!!逃げるオ——!!」

叫ぶと同時、身を翻して走り出す。向かう先はガンギマリ爺の家。あのレベルの敵、間違いなくこのスラム街では対処できない。その場合、ガンギマリ爺は間違いなくこの街を捨てて逃げるだろう。あれは、そういう人間であり、事実そういう契約でこの街にいた。

そうであれば、今ルリは一人になっている、ということだ。敵の目的がルリだと思われる以上、彼女を一人にしておくわけにはいかない。

そして何よりも、これ以上家族を失いたくはなかった。

「……すまない、ソールツ……!」

あの一瞬で、何とか掴み取った一房の彼女の髪を、ジャケットのポケットへと仕舞う。

そして辿り着いたガンギマリ爺の家の扉を、勢いよく開けて中の様子を確認する。

案の定、そこには既にガンギマリ爺の姿はない。

「あ……ソーヤ——」

ルリには悪いが、無言のまま担ぎ上げて、そのまま再び走り出す。行く宛てはない。だがどこか遠い場所へ逃げなければならない。遠く、遠く、やつに見つからない場所へ——

「……クソツ」

——失敗した。

失敗した失敗した失敗した!!

忘れていた、油断していた、気が抜けていた!!

そうだ、何時だって現実には理不尽だ。何時だって死は唐突だ。

自意識もないうちに親に捨てられ、義姉とは死に別れ、それを十二分に理解していたはずだった。

だけど、最近の幸せな生活でそれを忘れてしまった。

ソールがいて、ルリがいて、ちよくちよく死柄木と黒霧が遊びに来る。そんな生活に、溺れ切っていた。

そのせいで——ソールを失ってしまった。

自己嫌悪で死にたくなる。自分は知っていたのだ、世界の理不尽さを。死は隣人であることを。

だからもつと、少なくともルリを預かった段階で警戒しておくべきだったのだ。ルリの希少性を理解していた以上、それはやっておかなければいけないことだった。

そして幸せな日常に溺れて、怠つたのは自分だ。だから現状の責任は、自分にある。

ああ、そうだ、ソールを殺したのは——

「——ソーヤ？顔、怖いよ？」

「っ……大丈夫、大丈夫だから」

ルリからかけられた言葉に、何とか、冷静さを取り戻す。

そう、少なくともルリはまだ、生きている。

反省も、自己嫌悪も、生きていれば後でいくらでもできる。

だから今は、ひたすらに逃げることに全力を注ぐしかなかった。

#17. Still, I resist.

——走り続けて、どれほどの時が経っただろう。

どことも知れぬ廃工場。崩れた天井からは、憎らしいほどに美しい星空が見える。

「ソーヤ……」

「……………」

ルリに言葉を返す余裕がない。

走り続けた疲れは、既がない。ただソールを失った痛みが、未だ逃げ切れたと確信できない現状が、自分の精神に負荷をかけ続けている。

現在地がどこか、分かりはしないがそれでもそれなりの距離を逃げてきた。

普通であれば、十分なだけ逃げたように思う。それでも何故か、どうしても安心できなかった。

「——こんなところにいたか」

だから、そんな言葉が聞こえても、さほど驚くことはなかった。

「……ハハ、見つかったかア……」

「俺自身は斬るしか能がないがね、有能な探索個性持ちがいるのさ」
つまり、ここまで逃げてきたのは無駄だった、ということだ。

何だか自分がやったことがバカらしくなって、笑えてきてしまった。

「……他の連中は？」

「全員斬り捨ててやったぞ」

「有能な探索個性持ちがいるんじゃないやなかったのかよ」

「いやア、俺、所謂人斬りってやつだからさ？ 詳しい全員斬りたくなっちゃったのよ」

「マジか……」

「おう、全員、確かに斬ったぜ。……ああ、でもあの爺だけは別な。ありや勝てねエわ。それ以外は綺麗に首落としてやったぜ」

「つーことはもう俺とルリだけか……」

つまり、雷生さんも、デイテイーも。偵察班の連中も、後衛部隊の連中も、爆破班の連中も。風の個性持ちも、DMの個性持ちも、ヤク中も、接着の個性持ちも、発火の個性持ちも。店を開いていたやつも、マッドサイエンティストなやつも。そして、ソールも。

バカ共が、自分たち以外皆、死んでしまったということだった。

ああ、そうか、そうかよ——

「——テメエはブツ殺す!!」

「いい気迫だ——斬り甲斐がある」

言ってる、と吐き捨て、個性を発動する。自重はしない、最初から自分が持つ、奥の手を切る。

「外装召喚 // 血 戦 鎧 // ツ!!」

刹那、自分の身を赤黒い鎧が包み込む。

両手の籠手からはそれぞれ、両刃の剣が伸び、グリーブの前面には刃が取り付けられている。鎧の材質自体も、自分が知る限り最硬のものだ。

硬く、鋭く——それだけのシンプルな全身鎧。

特殊なものは召喚できない自分が出せる、最大戦力がこれであった。

胸の中には、激情が渦巻いている。怒りも悲しみも、多くの感情がごちゃ混ぜとなって、目の前の男への殺意と化しているが……それでも頭だけは冷静に、一度呼吸を整える。

敵は完全な格上、勝率は低い。だから、熱く熱く、けれど冷静に——
そして感覚が研ぎ澄まされたその瞬間、加速。重心移動、歩法、そういう技術を以って一息で間合いを詰める。

それと同時に、相手の呼吸、瞬き、心臓の動き、そういったものからリズムを掴み、相手の意識の間隙へと潜り込む。それは意識の死角へと入る技術であり、その瞬間、相手はこちらを認識できなくなる。

故に、接近の勢いを流すようにして、ステップでその指向性を変え、背後へと回り込み。

「ッ!？」

逆に、意識の死角へと入り返されたのを理解する。

この技術は基本的に、相手は知覚することができない。だが、同種の技術を持つ場合は別だ。同種の技術を持つ人間だけは、意識の死角へと入られたことを知覚し、そしてそのレベルによつては、入り返すことすらできる。

だから自分も男がこちらの意識の死角へと入ったことを理解し、けれど既に攻撃のモーションへと入っていたために、そのカウンターを回避する動きへと切り替えることができないのを理解する。

攻撃のための流れはもはや、途中で切ることはできない。

ならば、繋げる。

右下から、左上への切り上げ。それを振り切る。無論、こちらを既に知覚している相手は、それを姿勢を低くすることで回避する。

そしてそのまま、同じく切り上げを返してくるのに対し、自分は攻撃の勢いを利用して、身体を流す。

結果、敵の斬撃が通る位置から身体は逸れ——回避し切れず、腹部が鎧ごと斬り裂かれる。

「がっ——」

だがその痛みで動きを止めれば、間違いなく斬り殺される。それが分かっているため、身体に残る勢いのまま、後ろへと下がって距離を取る。

それを相手は……なぜか、追ってこない。

理由は不明だが、こちらとしては幸いのため、鎧の腹部のみ再召喚することで修復する。

傷は——浅い。回避へと動きを繋げたのが功を奏した。動けなくなるほどの傷じゃない。

だけど、あまりにもあつさりと鎧が斬り裂かれた。自分が召喚できる、最も硬い鎧の中でも、厚さがある腹部がこうもあつさりと斬り裂かれたのだ。これは、防御してもその上から叩き斬られるな、と理解せざるを得ない。

そうやって修復と、現状のチェックを済ませている間も、相手は攻

撃を仕掛けてはこない。

疑問に思っていると、それが表情に出ていたのか、男が笑みを浮かべて口を開く。

「折角そこそこ動けるやつと戦えるんだ、相手が全力を出せるように待ってやった方が楽しいだろう?」

「……気狂いめ」

どうやら、本格的に理解できない思考をしているようだった。

とはいえ、今はそれがありがたくもある。痛みを落ち着かせるように、呼吸を整えていく。

そうやって戦う準備を整えていくうち、思考もまた、冷静になっていく。そして先ほどは殺意もあって斬りかかったが、ルリと二人生き延びるのを目的とするならば、戦いだけがその手段ではないと気づく。

「……なアあんた。そんだけ強いのに、何でルリを狙うんだ」

「アん?」

「正直、オーバーアード超越者になる必要、なさそうなんだが」

「あー、ま、確かにそうだな」

一縷の望みをかけて話しかければ、存外、男が応じてくれる。その内容も、意外と説得できそうなものだった。だから続いて言葉を発しようとして。

「——だが生憎、俺は超越者になる必要がある」

「……何でだよ」

あつさりと碎かれた希望に、思わず顔を顰めながら、問い返せば、いか、と男が前置きをする。

「俺は、オールマイトを斬る」

「——」

「あいつは化物だ。それは個性や、肉体がじゃねエ。あいつが化物たる所以は、その精神だ。あいつは精神の化物だ。精神力だけで、個性を百パーセント以上に引き出し、状況を覆す」

「……………」

「だから到達者の俺の『斬る』つつー個性でも斬れない。大抵のもの

を斬れる俺の個性で斬ろうとしても、精神力で間違いなく、それを凌駕してくる。だから——俺は超越者になる必要がある」

そう語る男の目は——本気だ。どこまでも本気で、そう言っていた。

理解するしかない。どれだけ言葉を尽くしても、こいつは引かないと。戦って勝つしか、自分には道は残されていなかった。

「そうか……よッー」

故に、前に出る。

先ほどと同じ、技術を以ってその間合いを詰め、再び相手の意識の死角へ潜り込む。無論、先程同様、相手はそれに意識の死角へ入り返してくる。

だから自分も、意識の死角へと入り返した。

同じ技術を使っているのだ、相手にできて自分にできない道理はない。だから同じことをした。

そうして起きるのは、意識の死角への潜り合い。どちらが優位を取ることもなく——互いが互いを正しく知覚できる状態になる。

これで、真正面からの不意打ちは不可能。状況はイーブン。

——手札を切るなら、ここだ。

「オォ!!」

真正面から体当たりするように飛び込み——そして鎧から飛び出すようにして、後ろへと跳躍する。

結果、重量のある鎧のみが、相手へと向かう。

それを確認しながら自分は、一振りの、何の変哲もない剣を召喚する。ただその剣は極限まで鋭くした一品であり、その柄の先をつま先に乗せるようにして——蹴り出す。

真つ直ぐ、男へと射出されるようにして飛ぶ剣。完全に意表を突いたはずだ、と相手の目を見て。

「ッ」

それが間違いだと理解した。

——刹那、奔る斬撃。

鎧が両断され、剣が斬り裂かれ。そして自分の身体が斬られた。

「が、ア……！」

熱い。斬られた箇所が、ただ熱い。

先ほどの比ではない。完全に一撃を入れられた。これはもう、動けないレベルだった。

ドサリ、と地面へとうつ伏せで倒れ込む。コンクリートであるため、地面は冷たいが……それ以上に傷口が熱い。

これ、もしかしくなくても詰んだな、と理解する。一応、このままであれば死にはしないが、身動きがとれないので相手が止めを刺しに来たらもう、抵抗できない。

相手には止めを刺さない理由がないので、これは死ぬしかないだろう。

——だけど、十分に時間は稼いだ。

それほど、長い時間は戦っていない。それでも、ルリが逃げただけの時間はあった。その間に、何とかヒーローとかその辺りに出会っていることを祈り。

そのまま目を閉じようとして。

「……え」

目の前に現れた背中に、言葉を失った。

「ほオ、そいつを庇うか」

「庇うよ、大切な人だもの」

自分を庇うように立っていたのは、ルリだった。ルリが、逃げることもせず自分を守るために立っていた。

てつきり逃げたと思っていたその姿に、驚愕で言葉が出ない。

だけどそんなこちらを無視して、ルリと男の会話は進んでいく。

「私を自由にしているから、ソーヤを殺さないで」

「別に、その男を殺してから、お前を無理矢理連れてけばいいだけだが？」

「ソーヤを殺したら、私自殺するよ。それは困るでしょ？」

「……くツ、ハハッ！」

自分が関わることなく、とんとん拍子で話が進んでいく。それも、ルリが犠牲になる方向へと。

「なるほど、確かにそれは困る。困るなア！」

「だったら……」

「別にそれに対処する術がないわけじゃねエが……だが、気に入った。いいぜ、その提案に乗ってやる」

このまま、話を進ませちやダメだ。守りたいものを犠牲にして、自分だけが生き残るなど、いいわけがない。

それに知っているぞ、自分は、この光景を知っている。

「よかったな、坊主。嬢ちゃんのおかげで生き残れるぜ」

「……………」

「ついでに、俺から生き延びたやつも初めてだ。誇っていいぜ」

自らを犠牲にして、大切な人を守り抜く。そんな光景を、自分は昔に見ている。

——それを、もう一度繰り返すのか？

——また失いたくないものに守られるのか？

それは……ダメだ。ダメだろう。昔と何も、変わっていない。何も進歩していない。また悔しい思いをするだけだ。

だから——だから。

「——アアアアアアア!!」

立ち上がる。

痛みも、何もかも無視して立ち上がる。

あの時とは違う。痛い、痛いけど……まだ、身体は動く。だから立ち上がって、まだ戦える。大切なものを、守れる。

「……ソーヤ、もう、いいから——」

「うるせエ、黙れ」

こちらを止めようとするルリを振り払う。

ああ、そうだ。分かっている。自分がこれ以上家族を失いたくないように、ルリだって失いたくないのだ。だから止めたいのは分かる。だけど、それでは自分が納得できない。そんな結末は、自分が認められない。

だからこれはルリを守るためとかじゃなくて。ただ自分が、納得するためだけに。

「俺は、お前を犠牲にすることを、許容できない。だから」
そう、だから己の為に、自分は戦うのだ。

——刹那、理解する。いいや、理解させられる。自分の個性の神髄を。新たな領域に至ったことを。

その感覚は途轍もなく唐突で、また不自然なものだった。だから、理解できる。これがルリの個性、ブーステッド覚醒誘因の力なのだろうと。

それによって今、自分は到達者となったのだと。

「刀剣召喚——ブレイジング紅蓮剣」

左手で無理矢理、ルリを自分より後ろへと押し出す。同時、右手に呼び出した剣を振るう。

そうして剣から延びる炎。それが男へと襲い掛かり——何事もなく、炎が斬り裂かれる。

「ハッ、どうした、スラム街で斬った光炎の方が手応えがあったぞ」
「チツ」

その短い攻防で、足りないことを理解する。力も、経験も今の自分では足りていない。到達者となってもなお、目の前の男には届きはしなかった。

——だから、その先へと踏み込む。

「まだ、まだア!!」

こちらの気合に呼応して、ルリの覚醒誘因が再び発動する。さきほど同様、無理矢理、理解させられる感覚。自らの個性をどう扱えば、どれだけのことができるか、それを理解させられる。

そうして至る——超越者へと。

「憑依召喚——ヴァルキュリヤ戦乙女”ア!!」

そして超越者と至ったことのできるようになった、新たな力を行使する。

自らの肉体へと注ぎ込まれる力。同時、身体は白き純白の鎧に包まれ、右手には同じく純白のランスが現れ、左手には盾。

何よりも、この新たな力の特徴は、召喚したものの経験、技量、そういうものまで自分の力として扱えるところにある。

——故に、単純な速度のみで相手に知覚させず間合いへと踏み込

む。

「——ッ!!」

「おオつとオ!?!」

ランス故、攻撃手段は突きと、叩くことしかできない。刃がないのだ、他の槍とは違って薙ぎでの攻撃ができなかった。

だからシンプルに——突く。相手からの攻撃をランスで叩き、盾で弾きながら、その隙間を縫って突き込む。

ステップで位置を小刻みに変え、右腕の高さを変え、突く位置をズラす。時に盾を押し出すことで視界を遮り、相手の行動を制限する。

だが——それでも足りない。

技量も、経験も足りている。だが肉体が足りていない。

憑依召喚は、あくまで対象を憑依するだけで、肉体の改造までは行えない。そのため、理想の動きに、肉体が付いていけなかった。

なれば、この間合いで戦う意味はない。

ランスと盾を投げつけることで、無理矢理隙を作る。その隙に後ろへと下がって、超越者としての力を、更に発動する。

「従僕召喚——エインヘリヤル死せる勇士達ッ!!」

瞬間、周囲に現れる純白の戦士達。全身鎧に身を包み、剣と盾を携えたその戦士達は、ざつと五人ほど。

そう、自分の力で勝てないのなら、勝てる存在を呼べばいい。今の自分では、超越者として至ったばかりで、さほど強力ではない名も無き勇士を五人が精一杯だ。

それでも、自分がヴァルクユリヤの力を振るうよりは強いのは、間違いない。

だからエインヘリヤル達に戦闘を任せ、その場に膝をつく。

正直、いきなり強制的にパワーアップさせられた力を、即興で使っているために身体への負荷がデカい。

それに超越者になったからといって、傷が治るわけじゃない。ずっと、斬られた箇所が痛みを訴えている。

だけど、まだだ。まだ倒れるわけにはいかない。まだ相手は生きている。ルリが奪われる可能性は、まだあるのだ。まだ自分は、戦わな

くちやいけない。

そうやって無理矢理、根性だけで意識を保つ。とうに限界など超えていた。それを根性で何とか保っているだけだった。

「——ハハッ、ハアーハッハッハッハ!!」

だからその笑い声には、正直絶望しかなかった。

響き渡る笑い声に、思わず男へと視線を向ければ、エインヘリヤル達に斬られ、その白い羽織を赤く染めながらも笑みを浮かべる姿が目に入る。

勝っている。間違いなく、現状エインヘリヤル達の方が勝っているというのに、それを気にした様子もなく男は笑っている。

「至ったな!?お前、超越者に至っただろう!!ハハッ、そうか、その少女の力は本物だったか!!」

自分が超越者となったことが、あっさりと男に見破られる。まあ、バレるだろう、とは思っていた。

だが、バレるということは、ルリの力が本物だと証明されることだ。それはつまり、相手にとってルリは是が非でも欲しいものとなった、ということである。

つまり、殺さなければ、今後また襲われる可能性がある、ということだ。

故に、更に追加でエインヘリヤルを召喚しようとして。

「……あ、れ……う?」

世界が揺れた。

いや、違う。これは……自分が倒れたのだ。

そして倒れると同時に、身に宿していたヴァルキュリヤの力と、エインヘリヤル達が掻き消える。それは、要するに。

「限界、かよ……」

あと少し、あと少しというところで、限界が訪れてしまった。

超越者の力はいくまで、元々の自分の個性の発展形なのだ。だから当然の話ながら、召喚すればするほど、体力を使う。

自分は既に、ここまで逃げるのに走って、さらに通常の召喚を何度も行っている。その上で強力な力を振るえば、ガス欠になるのは当然

だった。

「チツ、何だよ盛り上がってきたつつーのに、もう終いか。つまんねー幕切れだな」

「うっせーよ……」

もはや悪態にすら力が入らない。ここでこの男を殺さなければ、またルリが自分を庇うのは目に見えている。だから殺さなければならぬのに……指先すら、もはや動きはしなかった。

「クソ……クソオ!!」

あとちよつとだったというのに、負けてしまった。もはや逆転の目はない。悔しさから、涙が流れるのを止められない。

どれだけ心は諦めていなくても、肉体が動くことはなく、自分の負けは確定してしまっていた。

すまない、ソール、自分はルリすらも守れなかった――

――そしてその瞬間、その男は現れた。

ドオオオン、という派手な音と共に、空から一人の男がクレーターを生み出しながら降り立つ。

青を基調としたヒーロースーツ。筋骨隆々の肉体。特徴的なV字の髪型。

そしてその男は笑みを浮かべながら、こう言うのだ。

「もう大丈夫だ――私が来た」

ああ、なるほど、これは確かに、格好いいわ――

そんな考えを最後に、自分の意識は暗転した。

#18. The outcome of the incident.

「……知らない天井だ」

いや、まあ、様式美として。スラム街で見た、日本のサブカルチャーではこういう場合、こう言うのがお約束、というやつらしいので一応言っておく。

実際、目覚めた自分の目の前に広がるのは全く知らない、白く清潔な天井だ。自分が暮らす、スラム街の建物の天井とは似ても似つかない。

周りを見れば、同じく白を基調に整えられた、掃除と整頓が行き届いた綺麗な部屋が目に入る。自分が寝るベッドも、清潔なもので、周囲の棚には薬品などが並んでいる。

一応、その光景は初めて見るものではある。だが、知識として、またここまで清潔ではないが、近いものをスラム街でも見たことがある。ここは。

「病室、か」

見れば、自分の身体は包帯で覆われている。痛みも、大きくはないが、まだあった。

おそらく、自分は治療されてここに運ばれたのだろう。

——気を失う前に、何があったのかは、はっきりと覚えている。

結局、自分はルリを守りきることができず、ある男が助けに来てくれたことで安堵から失神してしまったのだ。

情けない、とは思う。そこからくる、自己嫌悪もある。だが、今は現状の把握が最優先だろう——そう判断し、ナースコールとか、そういうものがないか探す。

多分、気を失う直前の光景的に、やってきた男が自分たちを助けることに成功したから、今自分はここにこうしているのだと思う。

だから、ルリも大丈夫だとは思うのだが……それでも、やっぱり不安に思ってしまうのが人の性だ。

そのため何はともあれ、まずはルリの安否を確認するために、人に会いたいのだが。

「……ナースコールとか、そういうのないぞ」

それに加え、よく考えてみたら薬品の入った棚が、病室の中にあるとは思えない。

となれば、もしかしてここは病室ではないのでは、という考えに行きつく。

一応、この状況に合致する場所は知識として知っているが……そうになると、今度は何故自分がその場にいるのかがわからなくなってくる。

状況が分からずに、思わず首を傾げていると。

「——おや、目が覚めたようだね」

引き戸の開けられる音と共に、そんな声が聞こえてくる。

それに思わず、音源の方に目をやれば、そこにいたのは。

「……ネズミ?」

「ふっふっふ、ネズミなのか犬なのか熊なのか、かくしてその正体は——」

「あ、校長先生、どうですか、彼の容態は?」

「……………」

何とも、リアクションに困る状況だった。

キメ台詞を言おうとした、人型のネズミっぽい男は動きを止め、ひよろっちい男ははそんな男のキメ台詞を邪魔してしまったことを、後から自覚したらしく、目が忙しく泳いでいる。

これ、自分はどうすべきなのかなあ、なんて悩んでいると、最初に復活したのは、ネズミっぽい男だった。

「……ちよつと、後でお話しようか」

「えっ、あ、はい!」

完全にひよろっちい男が気圧されていた。離れている自分ですらヒヤツとしてしまう気迫を、ネズミっぽい男は身に纏っていた。

あのネズミっぽい男は怒らせないしよう、そう心の中で決め、そこで改めてこの部屋に訪れた二人を見る。

ネズミっぽい男は、ネズミという比喻ではなく、ネズミが人型になった、という表現がしっくりくるような容姿をしている。

着ているのは、白のカッターシャツに、黒ベスト。赤いネクタイに黒のスラックスで、そのどれもが上等な品であることが分かる。

確か、動物に個性が芽生え、人のようになった、という話を昔に少しだけ、聞いたことがある。

彼は、その一件に何らかの関係があるかもしれない、そう思いながら、もう一人の男を見る。

個人的には、こちらのひよろっちい男の方が、違和感を覚える男だった。

無論、単純な容姿ではネズミっぽい男の方が違和感はある。ひよろっちい男は、Tシャツに、だぼついたズボン。パツと見は、どこにでもいる訳では無いが、いてもおかしくない、そんな一般人だ。

だが、自分のようなある程度、武術に通じる人間からすると、とてつもない違和感の塊になってくる。

武術を修めている人間というのは、多かれ少なかれ、その影響が日常の動きにも出てくる。無意識下で重心の位置や、音を殺したりと動きが最適化されていたりするものだ。これが、暗殺が生業だったりすると、意図的に日常では普通の動きに落とし込んだりするものなのだが。

目の前のひよろっちい男は、その明らかに効率化された動きをしているのだ。それも、明らかに自分以上の体格に合わせた、だ。

そのせいで、確かな技術に基づいた動きなのに、自身の体格には合っていないというちぐはぐな動きなのだ。どうにも、気持ち悪い光景だった。

とはいえ、初対面相手に言うことでもない。だから、体格が変わる個性でも持っているのか、とあたりをつけるだけに留め、目の前で喋り込む2人へと声をかけることにする。

「……あの、これはどういう状況で……?」

聞きたいことは、山ほどあった。ここが何処だ、とかルリは無事か、とか。……スラム街の住人は、本当に死んでしまったのか、とか。

正直、冷静に考えて全滅だろうとは思っている。だが、最後に助けにきてくれた男であれば、あるいは。そう、期待してしまう自分がいた。

だがそれも何も、現状を把握してからの問題だった。あの男に助けられたのであればまずありえないだろうが、目の前の人物達が信頼できるとは限らないわけであるし。

故に、確認のため目の前の二人に声をかければ、ネズミっぽい男の方がああ、すまない、と一言詫びてから口を開く。

「こちらの個人的なことに集中し過ぎてしまったね。私は根津、気軽に根津校長と呼んでおくれ」

「私はオー……じゃない、八木、八木俊典だ」

「あー、まあ知ってるのかもしれませんが、一応。喚導想也です」
スラム街での影響もあって、基本的には敬語は使わない主義だ。単純に、得意じゃないというのものもある。ただ、助けられたかもしれない、ということもあって、一応、最低限の礼節は保つべきだろう、と判断した。

そんなことを考えていると、チラリとネズミのような男——確か、根津校長、であったか。彼が壁にかけられた時計を見たのに気づく。シンプルなデザインのアナログ時計は十五時ほどを示しており、一般的には食事時、などではないだろう。

ならば、単純にこの根津校長、という男が忙しい身なのだろう、と考える。

「……時間とか、大丈夫なんですか？」

「うん？ああ、大丈夫だよ。予定がないわけではないけれどね、君の一件は、それなりに重要なんだ。私の都合で君に應對しているのだから、君は気にしなくていい」

その言葉が、こちらの心情を氣遣つてのものなのかは、先ほど顔を合わせたばかりの自分では見抜けない。これが、スラム街の交渉を担当する連中だったら、話は違ったんだろうけど。なんて思いつつ、今は額面通りに、その言葉を受け取っておくことにする。

「さて、これから事情の説明に入るけれど」

「色々聞きたいことは多いだろうが、まずは頭から一通り話すから、それから質問をしてほしい」

八木、という男からの提案に頷いて肯定の意を返す。下手に聞きたいことだけ聞いて、情報が錯綜するよりかは、しっかりと順序立ててもらった方が理解はしやすい。

だから、色々確認したい気持ちを抑え——ああ、でも、と一つだけ、一つだけどうしても確認しておきたいことがあって、口を開く。

「ルリは——ルリは、無事ですか」

「彼女なら、元気だよ」

「既に君より早く目を覚まし、我々の保護の元だけど普通の生活を送っているよ」

その言葉に一先ず安堵する。この二人がどれだけ信用できるかは、分からない。スラム街の頃のように、ガンギマリ爺を経由していないので、信頼できるかは自分で判断するしかない。

ただ、スラム街で多くの悪意と接してきた自らの感覚では、彼らから悪意、あるいはそれに近いものを感じ取ることはできない。

それに、と八木という男を見る。

確証があるわけではない。けれど先ほどの自己紹介の時の様子。それから彼の体捌きから予測できる体格。それらの要素から考えるに、おそらく八木さんは、彼だ。

一度だけ、とはいえ戦う場で、その姿を直に見ている。実力があるものは、同じく実力のあるものを見抜ける、というが……これも、それに近いものなのだろう。

ならば、心配する要素はない、そう考える。

「……どうしても確認しておきたかったのは、それだけです。答えていただいて、ありがとうございます」

「いやいや、あれだけ頑張って守ろうとしたんだ、大切な人なんだろう？それなら、先に確認したいのも当然さ」

その八木さんから言われた言葉に、それでも、ともう一度頭を下げる。

どれだけの時間、気を失っていたのかは分からないが、その間ルリ

を守っていてくれたのは彼らなのだ。頭を下げるのは当然だった。

「ふむ、その感謝はこちらが受け取るまで続きそうだね。では素直にそれを受け取っておこう。さ、そしたら本題に入ろうか」

「わかりました。……それで、喚導くんは私——ああ、いや！お、オールマイトが来たのは覚えているかい？」

根津校長に肩をどつかれながらそう言った八木さんの言葉に、この人致命的に隠し事に向いてないな、と思いながらも領きを返す。

それを確認した八木さんは、そういうことならと、どこからどう話すかを決めたらしく、改めて、こちらへの説明を始める。

——彼、つまりオールマイトが自分とルリを助けてくれたのは、偶然ではないらしい。

アウェイクさんの一件は、スラム街で起きたことではないので、至極当然の話だが表沙汰になっていた。事実、自分も新聞でそれを見ている。

ただ、あの新聞を始めとする報道では犯人不明とされていたが、実際のところは警察やヒーローの方では犯人の目途がつけられていたらしい。

ヴィランネーム
敵名称、人斬り。

それがあの、侍然とした男の呼ばれ方らしい。

あの男は過去にも、同じような事件を起こしているらしく、また今までの事件から、人を斬ることに何かを見出しており、見境なく人を斬る、とその人格をプロファイリングされているらしい。

実際、自分があの男と相對した時、そのようなことも言っていた。だから、人斬り、というのはその風貌からもピッタリなようにも思える。

そしてその人斬りが今まで起こした事件の凄惨さ、予想される実力の高さからオールマイトが人斬りを追うことになり、その最中偶然にも自分たちを助けてくれた、というのがこのあらましのようだった。

「それで、そのあと人斬りを撤退させて、喚導くんとアウェイクくんがいたから深追いせずに日本まで帰ってきた形だね」

「……、日本でしたか……」

「厳密には日本の雄英高校、その保健室だね。そして僕がその校長さ
！」

「ちなみに、何で八木さん現場にいたかのようには詳しいんです？」

「え!? あ、えつと、そ、そう、私はオールマイトと個人的な伝手があつ
てね! 今回の事件の手伝いをしてることもあつて、教えてもらつてた
んだよ、うん」

ガバガバかよ、と内心で呆れつつも、現状について、少し思案する。
雄英高校、というのはスラム街にいた自分でも知っている、世界的
に有名なヒーロー育成学校だ。オールマイトの母校でもあり、教師も
実力のあるヒーローが務めているらしい。

そんな場所に匿われて、四六時中ではないだろうが、オールマイト
もいる。ならば、一先ずの危険はないだろう。

———そこまできて、ようやく本当の意味で安心できた。

ふつ、と体から力が抜ける。下はベッドだ、倒れても何の問題もな
いこともあつて、バタリと倒れ込む。そして一つ、溜息。

「……落ち着いたかい？」

「……ええ、まあ。環境的に、安心できるみたいなので」

どうやら、八木さんと根津校長にはずつと気を張っていたことがバ
レていたようで、こちらが落ち着けたことに向こうも安堵の笑みを浮
かべている。

ただ、自分たちの現状的にこれほど安心できる場もないので、
ちよつと、自分も休みたい。だから少しだけ、ベッドに横になつたま
ま、力を抜く。

———だけど、それでも完全には気を抜けない。

それは警戒してではない。もう、警戒する必要があることは分かっ
た。

それとは別に、一つだけ。一つだけ完全に気を抜く前に、確認して
おきたいことがあつた。

「……俺とルリ以外に、スラム街で生き残った人はいますか？」

その問いに、八木さんも根津校長も、目を伏せて黙ってしまう。

……それだけで、もう、答えは分かってしまった。

それでも八木さんはヒーローらしく律義なようで、その重いであろう口を、ゆつくりとだが開いてくれる。

「……スラム街の住民が誰で、何人いたのか私たちは知らないが。……少なくとも、君たち以外に、生存者は見つからなかった」

それは、言外にそれ以外なら見つかった、と言っていて。ああ、つまり、人斬りと呼ばれる男の言葉は、本当だったのだろう。

「——俺、あの街が好きだったんですよ」

気づけば、ポツリと声が零れていた。

「クソみたいな理由であの街に住むことになったし、バカばつかでしたけど。それでも、あの街で過ごす日々は楽しくて、大切なものだったんです」

今、自分の口から漏れる言葉に、意味はないのかもしれない。それを理解していても、それでも自然と零れる言葉と、涙を堪えることが自分にはどうしてもできなかった。

「俺を守って死んでいった義姉の背中を見て、自分も、自分の大切なものだけは守りたいって思ってた。……だけど……だけど、実際は守れなんてしなかった」

「……………」

「ああ、何だろうな……この気持ち、何て言ったらいいのか——そう、悔しい、悔しいんだ。昔からずっと大切なものを守ろう、なんて思ってたのに、実際はこのざまだ。悔しくて、情けなくて……」

止まらない。どんどん、涙が溢れてくる。けれどそれを拭う気力さえ起きなくて、ただ腕で顔を覆うことしか、できない。

「情けないんだ、ソールが殺されるのを見ることしかできなかった自分が！ 皆を守ることでもできず逃げるしかなかった自分が!! くそつ……くそお……!!」

——そんな風に叫ぶ自分の頭に、ポン、と何かが置かれる。それは、八木さんの掌で指は細く、あまりにもひ弱に見えるはずなのに、不思議と暖かな力強さを感じられる掌だった。

「その悔しさを、忘れちゃいけないよ。一生君はその悔しさを抱えて

いかなければならない」

それは、重みのある言葉だった。きつと、彼がオールマイトで、彼もまた、過去に救いきれなかったものがあるからこそその言葉だった。「けれどそれは、呪いじゃない。抱えて抱え続けて、それでも前へと、糧にしなきゃいけないものだ」

「——う、あ……」

「そして同時に、君が救った命があることも忘れちゃいけない」

「でも……でも!!それはあなたが、オールマイトが助けに来たからで!!」

「それでも、君が戦っていないければ私は間に合わなかった。だから胸を張りなさい、君は確かに、ルリ・アウェイクという少女を守り抜いたんだ。……その二つを忘れなければ君は、次は必ず大切なものを守り切れるよ」

「っ……うあ——」

その言葉は、じんわりと胸に染み込んでいつて。自分は、ルリを守れたのだと。それだけは誇っていいのだと。

ソールや、スラム街の皆を守れなかった悔しさや、悲しみは消えなけれど。それでも——自分が戦った意味は、あったのだ。

——やはり、涙は止まらない。止まらないが……悪くない、気分だった。

◇

「落ち着いたかい？」

「ええ……多少は」

根津校長から差し出されたタオルを礼と共に受け取り、顔についた涙を拭う。泣いている間、ずっとタオルで押さえ続けていたのだが、既に一枚びしょびしょにしていたために、新たなタオルはありがたかった。

これほど泣いたのは、義姉が死んだ時以来か、なんて、どこかボヤついた頭で考えていると、申し訳なさ気に根津校長が言葉を続ける。

「さて、本来なら疲れただろうし、もう少し休むといい……と、言いたいところなのだけどね」

根津校長の言葉に、ベッドに横になった体勢で首を傾げる。

思いつきり泣いて、落ち着いたからか。疲労と、傷の痛みが一気に来てしまつて、些か起きるのが辛い。だから申し訳ないが、そのままの姿勢で話を聞かせてもらおうと思つてしていると、それを見抜いたかのように根津校長が口を開く。

「少し、大事な話があるんだ。けれど辛いのならその姿勢で構わないよ」

「ありがとうございます。……それで、大事な話とは？」

「君の処遇についてだね」

根津校長に処遇、と言われ、そう言えばと今更ながらに一つのこと
に思い至る。それは、スラム街での生活において、生きるためとはい
え、自分は犯罪を犯していた、ということだ。それも、それが悪であ
ると理解した上で、だ。

そして目の前にいるのは、姿こそ今は違うが、No. 1ヒーロー、
オールマイト。偶然だったが、泣いている最中に勢いで本人である、
と確認がとれてしまった。

そんなヒーローが、目の前に犯罪者がいて見逃すだろうか、とい
う話だ。

これ、詰んだわ、と気が遠くなつていると、そんなこちらを見た八
木さんが困つたように笑う。

「ただ困つたことがあつてね」

「困つたこと、ですか？」

「政府の方から、スラム街がどういう性質か、そしてどんなことをして
生活していたかは聞いているんだけど——具体的な証拠が、ね。な
いんだよ、全くといつていいほどに」

それは、ありえない話だった。確かに、証拠隠滅を担当していた人
間はある。無論、それなりに有能だった。だが、それでも自分やスラ
ム街の連中は人を殺しているのだ。

今の社会で人が一人消えて、証拠が全く残らないなどありえない。

そうやって、慌てるあまり自分を追い込むようなことを言ってしまうが、八木さんはそのはずなんだけどね、と困った様子ながらも首を横に振る。

「政府の方が搦んでた君たちが殺したという人物、皆事故死とか、別件として処理されていたんだ。あとは、誤魔化しきれなかったのか、いくつかの事件は人斬りに殺されていた人物が犯人、ということになっていたよ」

「そんな……バカな」

「ありえない、とは私たちも思うんだけどね！ただ事実として起こっている以上、よっぽど有能な仲介人なりなんなりがいたんじゃないかい？」

その根津校長の言葉で思い浮かぶのは——ガンギマリ爺だ。

あの爺は得体の知れない人間だったが……まさか、ここまでだとは思っていなかった。本当に何者なのか、予想もつかない。

一応、情報としてガンギマリ爺について二人に伝えるが、案の定二人は難しい顔をするしかない。

「噂には聞いていたが……実在したのか」

「噂になってたんですか？」

「そうだね、神出鬼没、底が見えない。パツと見はクスリをキメただただのお爺さん、ただ彼が放つプレッシャーに耐えられるものはいない……そんな噂だね」

「正直、噂が一人歩きしてただけだと思っていたが……喚導くんの反応を見るに、どの噂も本当のようだね」

根津校長が言った噂には、どれも心当たりがあった。あの爺、スラム街に突然ふらつと現れたので、本当に神出鬼没であるし、実際最後までその実力を測ることはできなかった。なのに、パツと見は弱そうな爺なのだ。

「ヴィラン、人斬り」できえ殺せそうになかったようだし、本当に、何者なのだろうか。

「と、いうわけで君を簡単には捕まえられなくなってしまうんだ」「……だけど素直に解放するわけにはいかないでしょう？」

「そうだね、いくら逮捕できなくても、君が犯罪者である可能性が残っている以上、無条件、というのは難しい」

当然の話だ。一度、犯罪を犯したらまたいつかやるかもしれないと思うのは当然だ。

そして八木さんや根津校長は事情を知っているが、彼らはヒーローであり、私情で動くなどありえない。

ただこの場合、どうなるのか自分の知識では予想がつかなかった。だから二人からの言葉を待っていたところ——根津校長の口から、思いもよらない提案が発せられた。

「——と、いうわけで君、雄英高校に入学しないかい？」

「……は？」

根津校長の言ったことが心底理解できず、思わずそんな声が零れる。

冗談の類いか、と根津校長を見るも、その顔は至って真剣だ。ふざけている様子はない。

「……いや、いやいや、ヴィランを雄英高校に入れるって、正気ですか？」

「無論正気さ！君が悪人氣質でないことは、ここまでのやり取りから大体わかつている。だったら、雄英高校で更生の道を歩むのもありだろう？」

「あとは、打算もあるんだ。君の個性はアウェイクんに聞いた限りかなり有用のようだからね。ヒーローになつてくれれば心強い。それに雄英高校にいてくれれば監視もしやすいし」

確かに、戦力として欲しい、ということであれば納得できなくもない話だった。

ただこれ、それっぽい理由を言っただけで、八木さんと根津校長は、ほぼほぼ善意で、こちらに更生の機会を得て欲しいと願っているようだった。

あまりにお人好し過ぎる。そう思うも、それ自体は、存外嫌ではない自分がいた。

けれどそれとは別に、単純にヒーローになる気が自分にはなかつ

た。

「……俺、ヒーローになりたくないんですけど」

「それは、この時代ではあまり聞かない台詞だね。ちなみに、何故か聞いても？」

確かに、一般家庭であれば大抵の人間が憧れるヒーローという職業。それになりたくない、というのは現代では珍しいのだろう。

ただ、どうにも自分はその珍しい人間で、ヒーロー……というよりは、ヒーローとなった人間が苦手だった。

「お金稼ぐため、とか名声を求めて、とかそういう目的のヒーローなら、平気なんすけどね」

そこら辺の人間は、理解ができる。だってそれは、人間らしい願いだからだ。誰だって、幸せにはなりたい。だから理解ができる。けれど。

「他人のために、って本気で言っている人間が自分は、気持ち悪い。何で、見知らぬ他人のために、自分が危険な目に合いにくいんだ？それが自分にとって大切な人ならわかるけど、何の得もない見知らぬ他人を助けるっていう思考が、心底理解できない。気持ち悪いとすら思う。だから八木さん、いやオールマイト、あなたなんかは——誰よりも気持ち悪いと思ってる」

だからって別に、自分の感覚を他人に押し付ける気はないですけど、と締めくくる。

ちよつと、酷い言い方でこそあったが、紛れもない本心だった。

自分、喚導想也という人間は究極的に、己の為にしか動けない人間だ。ルリやソール、スラム街の仲間を守りたかったのだって、自分が彼ら彼女らを失いたくなかったからでしかない。

だから見知らぬ人の為に、自分の命すら投げ出すようなことをする人間が、自分には心底理解できなかつた。

「喚導くん——」

「では、こう考えるのはどうかな？」

こちらの言葉に対し、何かを言おうとした八木さんを制して、根津校長が口を開く。

八木さん、オールマイトは最も自分が理解できない人間だ。その強さを、在り方を貫く姿勢を格好いいと思うことはあっても、やはり理解することだけはできない。

それに対し、根津校長はまだ理解できる部類だった。根本的にはオールマイトと同じ、ヒーロー的な思考なのかもしれない。だけど、あくまでこちらが理解できる考え方を提示しようとしているのがわかったので、聞く価値はあるように思えた。

「どんな考え方でしようか」

「君は、この日本で安全に暮らすためにヒーローになる。強くなるため、ヒーローとなることで強力なバックを得るため、生活費を稼ぐため。自分の為という考え方なら、理解できるんじゃないかな？」

根津校長からの提案に、思わずなるほど、と呟く。

確かに、ヒーローという人種が苦手だからと、ヒーローとなるのを断るには些か勿体ないメリットが、そこにはあるように思えた。

しかし、しかしである。

「俺、もう二十五なのに今更学生になれと……？」

「そこは、それ、もう我慢してもらえないね！」

勘弁してほしかった。

この歳になって制服着るとか、完全にコスプレにしか思えなかった。

だが、その程度で断るにはあまりにもメリットが大き過ぎるのだ。

「お、お金は……？」

「奨学金で何とかしてもらおう形だね。後々返済してもらえばいいし、未成年ヴィラン更生用のものに、何とかしてねじ込めばいけると思うよ」

苦し紛れに言った言葉も、既に回答は用意されていたようで、あっさりとは解決法を提示されてしまう。

これ、もしかしなくても最初から逃げ場がなかったのではないだろうか。

「——ああ、ちなみに。アウェイクくんは雄英に通うそうだよ」

「保護の観点から提案したら、嬉々として了承していたね。……君も、

彼女と学校生活、送ってみたくないかい？」
それは、卑怯だろう。完全に止めだった。
——そんな風に、自分とルリの、日本での生活は始まるのだった。

Aim for HERO!!
#19. Practical exam, ability to be used.

「いや、流石のお兄さんでも、やつぱり二十五で高校生ってキツイと思うんだよ。そこら辺、どう思う少年?」

「いや、知りませんけど」

世間一般では、おっさんと呼ばれる場合もある年齢だ。いや、無論自分はこつちに来てから、見た目には気を使ってるのでお兄さんで通じるヴィジュアルではあるのだが。

「あくまでお兄さん、まだお兄さんだから。オーケー、少年?」
「だから知りませんけど」

つまらない少年だなあ、と紅白頭の少年から視線を外す。

隣で佇む少年からは……余裕、そう、余裕というものが一切感じられない。何かで、視野がとてつもなく狭くなっているように思えた。

君、人生楽しい?なんて思ったりもするのだが、所詮他人でしかないため、さほど気にはかけはしない。

「……さつこと」

正面へと視線を向ける。そこには寂れた遊園地のような光景が、広がっていた。それは、雄英高校推薦入試、その実技試験会場だった。

——結局、自分はヒーローを目指すことになった。

ヒーローになるメリットが大き過ぎることが決め手だった。強力な後ろ盾、ヒーロー故の信頼、ルリの保護。そして何よりもオールマイトという札が強力過ぎた。

オールマイトが味方である限り、ルリの安全はほぼほぼ確保されている。

ただ八木俊典、というオールマイトの秘密を知ってしまったために、一通りオールマイトについて聞いたが、彼は徐々に活動可能時間が減っていつているらしい。だから何時かは、ルリを守る強手札としては機能しなくなる。

だから、その時までには新たな対策を用意するための下地、コネを作るためにも、準備としてヒーローを目指すことは必要だった。

だから、実際に必要なのはヒーローになることだ。雄英高校に通うことは必須ではない。保護という観点から、ルリは雄英高校に入るべきかもしれないが、自分はそのままヒーローを目指してもよかった。

けれど悲しいかな——自分は、致命的に常識が欠如していた。スラム街で育った弊害だ。常識を投げ捨てた空間で生きていたために、表で生きていくには知識が足りていない。特に、ヒーロー周りにはあまりにも縁遠い存在であったために、ろくに知識がなかった。

常識なんかは、知識だけあっても意味がないものである。それに、今までは殺すための技術ばかりで、生かしたまま無力化するための技術もない。

自身にそれらを馴染ませるためにも、高校に通った方がいい、というのが根津校長の判断だった。

それに、雄英高校はあまりにも環境が良過ぎるのだ。オールマイトを初めとするプロヒーローの教師陣。

いくら超越者オーバーテイクに至ったとしても、それを扱い切れていない為、鍛錬は必須だ。そして自分の汎用性が高い個性にとって、様々な技術を学べる雄英高校は修行の場としてぴったりだった。

あとは、まあ、長時間ルリと離れるのがキツイ、というのがある。スラム街の連中と別々に逃げたせいで、別れも言う間もなく、永遠に会えなくなってしまう。そのせいでまた、自分と離れている間に、大切なものが失われてしまうんじゃないか。それが、怖かった。唯一守れたルリという少女に、固執してかけている気があるのは、自覚していた。……これが、所謂トラウマ、というやつだとも。

実際、今だって本当はルリの元から離れることが怖い。だけど、最終的に長時間ルリと過ごすため、と我慢していた。

情けない、というか格好悪いとは思う。それでも、即座に解決できるものでもないのだ、トラウマというやつは。

——だから、こうして自分は雄英高校の推薦入試試験へとやってきていた。

ルリは個性的に、雄英で保護すべきだ、ということでも無条件で入学できることになっている。

だが自分は、そういう特殊な理由もなく、また奨学金が必要であるために推薦枠で入学しなければならぬ。

だから根津校長推薦、とかいう完全に特別枠でここに立っていた。

特殊な事情のある、元ヴィランの更正用の奨学金の枠に無理矢理ねじ込んでくれたのも根津校長であり、完全に頭が上がらない相手となっていた。

「あの、すみません!!」

「んあ?」

そんな風に、今までの経緯を振り返ることで約十歳も違う少年たちに紛れている気恥しさを誤魔化していると、やたら勢いのいい、丸刈りの少年に声をかけられる。

その勢いのある声に見合うような、強い熱量を秘めた瞳が特徴的な少年だった。

「自分、夜嵐イナサと申します!」

「おう、喚導想也だ、よろしく」

「よろしくっす!それで質問なんですけど」

その言葉に、首を傾げる。この少年とは、初対面である。この実技試験より前にやった筆記でも、彼とは関わっていない。

はて、彼問われるようなことがあったか……なんて思っていると、夜嵐が疑問を口にする。

「喚導さん年上ツスよね!何で高校受験してるんスか!」

「君、デリカシーないとかよく言われぬい?」

「言われるっスね!」

やっぱりな、と二人で笑い合う。

この少年、明らかにバカだ。それもスラム街系の。

実気が合いそうで、紅白頭の少年よりもよっぽど気に入った。だからまあ、細かい事情は抜きにして簡単に自分が雄英を受験する理由を話すことにする。

「まア……そうだな、目的の為に必要だったから、だな」

「目的っスか」

「おう、守りたいものがある、よくある話だよ」

守りたいものが個人か、大衆か。究極的には自分と、ヒーローを目指す少年らはその程度の違いしかないのだろう。

だから自分の目的は、よくある話でしかないのだろう。

「……熱いッスね!!」

「うむ、よくわからんがお前式に言うならきつと熱いんだろ!」

夜嵐と肩を組んで、空いている手の拳をぶつけ合う。そしてその後、夜嵐は別の受験生へと絡みに行った。

クソ強メンタルしてるなあ、なんて呆れつつ、夜嵐イナサという少年について、少し考える。

——彼はどうにも、スラム街のバカどもを思い出させる少年だった。ノリと勢いが、スラム街のそれに近い。

だからどうにも、失ってしまったものを思い出してしまって、辛くもあり、嬉しくもある、なんとも言い難い感情を抱かせてくる相手だった。

彼とは、一緒に雄英に通いたいような、通いたくないような、微妙なところだ。

ただ彼、基本的にはうざったがられるタイプだよな、と夜嵐の騒がしさを迷惑そうにする受験生たちを見ていると——

「……あれ」

見覚えのある姿に、思わず声が漏れる。

試験開始までは……まだ、時間もある。だから片手を上げながら知り合いへと近づいていく。

「おいっす、八木さん。どしたのこんなところで」

「君、大分砕けたよね……」

まあ確かに恩人ではあるのだが。ここ最近でどテレビ越しではわからない、彼のポンコツっぷりを見ていたら、どうにも敬語を使い気は失せていた。

「まあフレンドリーさは大切だろ?」

「いや、まあ構いはしないけどさ……」

言質は取ったので、今後一切遠慮しないことを決めつつ、それで、と話を元に戻す。

「何でこんなところいるんだ？」

「まあ君は一応、ヴィランの疑いあり、という状況だからね。監視としてだよ」

それに、そういえば確かに、自分はそういう扱いだったのだなと思いつく。

実際、今日までも八木さんは監視として自分と行動を共にすることが多かった。それがあつたからこそ、八木さんとは仲良くなれたのだ。

まさか、他にもプロヒーローが近くにいる雄英の入試でまで、監視をつけられるとは思わなかった。

「警戒し過ぎじゃないかねエ……」

「実は、今日は監視につくかどうかは私の自由だったんだけどね。まあ、少し気になってしまった。どうだい、問題はなさそうかい？」

「……ま、何とかなるさね」

先ほど行われた筆記試験は、事前に猛勉強して何とか解けている。だからそこで落ちることはないだろうし、実技も、それなりに自信がある。

そりゃ、まあなんてつたつて。

「俺、^{オーヴァード}超越者だし」

「そうか、オーヴァード……お、オーヴァード!？」

その八木さんのリアクションに、そう言えば言っただけか、と思いつく。自分の個性については、ルリの方から根津校長と八木さんの方に伝わっていたようだが、こちらが超越者とまでは伝えていないようだった。

ただ、それについて詳しく話そうと思つたところ、集合の声がかけてしまう。故に、仕方ないので、八木さんには後で説明することにして、今は集合地点へと向かう。

集合場所は、実技試験のスタート地点だ。既に、試験内容はこちらへと伝えられている。

ルールは至ってシンプル。妨害アリのレースだ。タイムが早ければ早いほど、実技試験のスコアは上がるらしい。

自分としては、ヒーローなのに妨害アリなのか、と疑問に思ったが、想定しているのがヴィランよりも早く目的地にたかなければならない、という状況らしい。それならばなるほど、確かに妨害アリというのも納得がいった。

スタート地点には既に、他の受験者たちが揃っている。八人毎で、何回かに分けてレースは実施されるようだが……自分と同じレースには、紅白頭の少年と、夜嵐がいる。

妙な縁もあったものだ、と苦笑していると、夜嵐が手を振ってきたので、自分もそれに返しておく。

スタート地点での並び順は適当なようで、最後に来た自分は端の方になる。

隣には、紅白頭の少年。その立ち姿を確認し、ついでに他の連中の姿も確認して、大体開幕からの流れを察する。

となれば、自分の立ち回りは、と点滅する赤色のランプを見つめる。そしてランプが——青色へ、変わる。

「よっ、と」

刹那、跳躍。次の瞬間、地面に広がる氷。

こりや、そのまま素直に走り出そうとしたら、足が氷漬けだったなと苦笑いしつつも、自分も一手打つ。

「刀剣召喚 『両手剣』」

召喚場所は、自分の手の内ではなく、他の受験者の目の前。

それにより、足を凍らされた者は氷を砕かれ解放され、氷結を回避した夜嵐や、その氷結を引き起こした紅白頭といった走り出そうとした者たちは、目の前に突然剣が現れたことで怯む。

これで、さらに自分には一手、挟む時間が生まれる。

「——憑依召喚 『最速の狩人』」

その時間で発動するのは、超越者としての新たな力。

——自分の個性は、結局、創造ではなかった。

いや、創造とも言えなくもないのだが。

元々、両親もおらず、個性の診断を受けれる環境でもなかったために、自分の個性を厳密には知らなかった。ただ、自分の持っているものを手元に召喚できるため、創造して呼び出しているのだと勝手に思っていた。

しかし、人斬りとの戦いの最中、到達者となったことで理解した正しい自分の個性は、結局召喚と言うのが正しかった。

過去、未来、平行世界、そういったものから、自分が望むものを強制的に召喚する。それが正しい自分の個性。

しかもこの個性、召喚しようとしたものに合致するものがなかった場合、それが存在する平行世界を一時的に生み出すとかいう形で、その召喚を成立させているらしい。

だからあまりにも現実からかけ離れたものを召喚しようとした場合、そもそも平行世界を創造するのに体力を消耗してしまうようだった。

そして、超越者となったことで、この個性は更なるものを召喚できるようになっていた。

それは、神話上の英雄や、神様。それらを自らへの憑依か、従僕という形で召喚することができる。

—— 故に、その力を存分に振るう。

今、自らに憑依させたのは、ギリシャ神話最速と謳われる英雄。

森で育てられたという逸話から、身に纏う服が毛皮製の、民族感のある意匠のものへ変わる。さらに腰にはナイフと矢筒、右手には弓が召喚される。

如何にも狩人然とした姿——そして事実、憑依させたことで得た経験は、狩人としての動きを己の肉体へと反映させる。

前へ駆け出すと同時に、身を捻りながら弓を構え……射撃。突然現れた剣の怯みから立ち直った受験者たちの足元へ、矢が突き刺さり、再びその動きを阻害する。

これで、自分以外の受験者は遅れてのスタートになり、団子状態になる。間違いなく、潰し合いが起きるだろうし、そんな状況下でギリシャ神話最速に追い付けはしないだろう。

やはりこの個性は汎用性が高く、性能も高い。正直、自分でもふざけているのかと思うような性能をしている。

超越者となったことでこれだけ性能が跳ね上がるのだ、そりゃルリの個性を誰も求めるよなあ、なんて考えながらコースをあつという間に踏破し。圧倒的一位で、実技試験を終えた。

#20. Admission, the first
today.

推薦入試トップ。それが自分が残した記録だった。

まあ当然と言えば当然の結果なのだ。超越者^{オーバーアード}なので実技は圧倒。単純な学力はスラム街でも充分学べたし、ヒーロー周りについては事前の勉強でカバーした。歴史と国語周りは国が違うので些か大変だったが、有能なのでなんとかした。面接だって、二十五にもなれば人当たりのいい仮面などいくらでも被れる。

むしろ順当と言える結果だった。

「あー……憂鬱だなア……」

「そう？ 私は楽しみな」

ルリと二人、雄英高校の廊下を歩く。

雄英高校の学生としての初日。自分たちのクラスへ向けて廊下を歩く。

無論、自分もルリも生徒であるため、身に纏うのは制服になる。コスプレをしている気分で、どうにも落ち着かない。

だがまあ、ここから三年は着続けることになるのだ、何時かは嫌でも慣れるだろう。そう、無理矢理納得しておくことにする。

時刻としては、まだ早めの部類になる。単純に、遅刻というのが性に合わないというのもある。いや、まあこれが友人との待ち合わせなどであれば、面倒などの理由で遅れることもあるのだが。ただ今回は、学校初日なので、流石にという話だ。

あとは、単純に家が近い、というのもある。

地方から上京してきた人向けに、雄英高校が提携しているアパートがある。それはそこそこ雄英高校に近い位置にあり、ルリと二人でその一室に暮らしていた。

「そういうえば、推薦入試ってどんな感じだったの？」

「んー？ そうだなア……」

そういうえば言っただけでなかったか、とルリに推薦入試の時の様子を語り

ながら、考えるのは自分同様、推薦入試を受けた連中だ。

まず紅白頭、あいつはどうやら無事入学したらしい。紅白頭は確かに、他の連中とは明らかに練度が違った。間違いなく家で訓練を受けているのだろう。順当な結果、と言えた。

それに対し、意外な結果だったのは夜嵐だ。結果は悪くないはずだったのに、何やら辞退したらしく、試験後紅白頭と揉めているのを見かけたし、何かあったに違いない。だが自分が夜嵐が辞退した、と知ったのは試験結果が出てからの、説明会での場だ。何があったか確認するには遅すぎた。

「……ああ、そういえば推薦入試組の説明会で、ちよつと知り合ったやつもいたな」

ふと、説明会で思い出した人物がいたために、ポロリとそんな言葉が漏れる。

それにルリが興味を持ったため、そのまま、説明会についての話題へと流れていく。

自分が説明会で出会ったのは、確か八百万百、という名の少女だった。

ポニーテールの生真面目そうな少女で、どうにも自分とは気の合わなそうな少女だったのだが、ボールペンがあればいいだろうと油断していたために、持ってきていなかったシャーペンを借りることを切っ掛けに多少、話した相手になる。

これで、自分を含めれば今年の推薦入試合格者の半分と顔を合わせたことになるなあ、なんて思ったのを覚えている。

そう、今年の推薦入試合格者は六人になるらしい。

例年は四人、と聞いていたため、まさか根津校長が無理に枠を増やしたのか、と思ったが、どうやらあくまで四人の場合が多いというだけらしい。

基本的に雄英高校では、一般でも推薦でも一定ボーダーを超えた人間を合格とするらしく、毎年合格者の人数は変動するらしい。曰く、有能な者を他より劣っていたからと落とすのは勿体ない、だそうだ。

結局、今年のヒーロー科合格者は計四十三人、一クラスは二十二、あ

るいは二十一人になるらしい。

そして、目の間にある、自分たちの所属するAクラスが二十二人の方になるらしい。

「つーわけでチツスチツス、おはよーございまーす」

「おはよう」

異形型のことを考慮された巨大な扉を開けながら、とりあえず朝の挨拶を言う。それに続くように、ルリからも挨拶が放たれるが、しかし、それに誰も返事を返してくることはない。

「あん？なんだ、つまらん奴らだな、この愚民どもめ」

「お、おう、すまん、予想以上に灰汁が強いのが来てリアクションに困ってるから待ってくれ」

「これだから一般人は……」

やれやれ、とりアクションを取りつつ、自身の席を探す。

どうやら名前順で席は割り振られているようだが……と、なる自分分はちようど、唯一こちらに反応を返した少年の前の席になる。

自席を確認した段階で、ルリは苗字がアウエイクなので、教室入つてすぐの席で彼女とは別れ、確認した自席へと向かう。

「うわ、あんた前の席か……」

「本人目の前にして言うとは君、中々いい性格してるな？喚導想也だ、よろしく」

「その流れで自己紹介するのかよ……や、まあ切島鋭児郎だ、よろしく」

軽く握手を交わしつつ、切島少年を少し観察する。一番、特徴的なのはそのツンツン頭。それに加え、体格的に鍛えてあるのが分かる。武術はあまりやっていないようだが、恐らく、近接型、それも鍛え方にグラップラーとかだろう。

と、そこまで考えて、この環境ではそんなに警戒するべきではない、と思考をリセットする。そも、ここにいるのはヒーローを目指している少年少女なのだから、敵対する理由がないのだ。だから、もっと平和的な部分を分析する。

例えば、そう……性格的な部分。

多分、この切島、という少年は自分の、というかスラム街のノリにはついてこられそうにはない。ない、が。ツツコミという点では存外、悪くなさそうに思える。

「さて、切島少年。俺、知り合い少ないし、その数少ない知り合いも同じクラスか分らないから仲良くしようぜ」

「まあ別に、仲良くするのは構わねえけど……」

「ちなみに切島少年って知り合いいる？あ、クラスメイトでね？」

「ぐいぐい来るな……。一応、いるよ、同じ中学だった、ほらあそこの、芦戸三奈っていうんだけど」

そこには、席が近かったという理由でルリと話す、ピンク色の少女がいる。ただ、そんな二人より、席が二人の間になる少年が、気まずそうにしているのがどうにも笑える光景だった。

「つつても、同じ中学ってだけで、さほど交流はなかったんだけどな」

「お、じゃあ実質ぼっち？ねえぼっちってどんな気分？」

「お前、俺よりよっぽどいい性格してじゃねえか……。そういうあんたはどうなんだよ」

「ん、俺？俺はほら、その芦戸って子と話してる銀髪の、そうそう、その子。あの美少女と一緒に登校してきた勝ち組だから」
「ペッ」

切島を煽りながら遊んでいると、唐突に唾を吐くような音が横から聞こえてくる。音源の方を見れば、小柄な頭に球体がくっついていてかのような少年が、親の仇を見るかのような目でこちらを見ていた。

流石の自分も予想外な光景に、思わず言葉を失っていると、そのままその小柄な少年は、自らの席であろう場所へと向かっていく。

「……流れ弾が当たったみたいだな」

「これに懲りて煽るのやめろよ？」

「ライフワークだから無理」

クソみたいなライフワークだなあ、と続けた切島と、そのまま時間まで適当に会話して時間を潰す。

途中、一応顔見知りではある八百万とは挨拶を交わし、同じクラスだった紅白頭にびっくりしながらも、やがて時間が訪れて担任がやつ

てくる。

「お友達ごっこしたいなら他所へ行け」

「いや、あまりにも説得力のない格好では？」

寝袋装備、廊下で横になっていたりとかいう威厳の欠片もない姿だったが。思わず、声に出して突っ込まざるを得ない光景だった。

「ていうか、相澤センセ。もうちよつとまともな登場じゃないと、生徒からの信頼得られませんよ？」

「信頼を稼ぐ時間が勿体ない、合理的じゃないだろう」

「逆じゃないです？最初からもつといい登場の仕方の方が、生徒が指示に疑問持たなくてよっぽど合理的では」

「む……そうだな、以後考慮しよう」

そう言つて教壇に佇むのは、自分の知っている顔だ。

長く手入れのされていない髪。無精ひげと充血した目。首には時期外れに見えるマフラーらしきもの。

明らかに、不審者然とした見た目だが、これでも彼もまた、雄英高校の教師の一人なのだ。

「と、まあそんなわけで君たちの担任になる相澤消太だ。よろしく」

そう言った彼は気だるげで、やっぱり教師らしくない。だがそれでも、その実力は本物だ。

今日まで、担任となる彼とは情報共有を兼ねて何度か顔を合わせているが、その時に鍛錬として何度か手合わせもしている。

そして今日まで、一度も勝っていない。超越者の力を以てしても、だ。

と、いうか。そもそも自分は、一度も雄英高校の教師陣の誰にも勝利できていない。

教師陣はその多くが到達者リミテッドに至っているし、それ以外でも技術がとんでもないレベルで磨き上げられている。

少なくとも、真正面からの戦闘では、一切勝てる気がしないのが雄英教師陣だった。

一般のプロヒーローだったら、まだ何人が勝てる宛てがあるんだけどなあ、なんて思いながら、今からの流れについて説明を始める相澤

先生を見る。

「とりあえず、事前資料にあつた通り、入学式とかは無しだ」

ま、そりやそうだよなあ、と頷く。雄英高校、というかあらゆる学校のヒーロー科は、一般科目に加えてヒーロー科用の科目が追加されるのだ。削れる時間は削りたいのが当然だろう。

そこら辺、個人的には経験したことないので、入学式とかちよつぴり気になっていたのだが。まあないものは仕方がない。

「それじゃあ、このあとは何やるんスか？」

「ん、そうだな、お前ら、ちゃんと体操服持ってきたか？」

切島からの問いを、相澤先生が問いで返す。これがスラム街であれば、問いに問いで返すなよオラア、と個性が飛び交っていたのだが、流石にここにいるのはヒーローを目指す少年少女たち。素直に持ってきた、と返事をしたり実物を取り出したりしている。

そんな生徒たちを確認した相澤先生は、一つ頷いたあと、それなら、と言葉を続ける。

「これからグラウンドで個性把握テストを行うぞ」

「個性把握テスト、ですか……？」

生徒の誰かが、ポツリと疑問を零す。目的は、読んで字のごとく、なんとなく察することができる。ただ、実際に何をするのか、というのはどうにも、ピンとはこない話だ。

そしてそれは他の連中も同じようで、首を傾げる生徒が多数である。どうやら、中学などでは行われていない何からしい。

「ま、簡単に言えば個性アリの体力テストだよ。個性を使えばどれだけのことができるのか、それを使い手自身が正しく把握しよう、って話だ」

そんな自分たちを見かねたらしい相澤先生から、補足の説明が入る。それに、なるほど、と納得を示す生徒たち。中には面白そう、楽しそうと言う生徒もいた。

ただ、この数ヶ月で自分が知った、相澤消太という男は、そんなただ面白そうなことをさせてくれる性格ではない。事実、生徒たちの言葉聞いた相澤先生がニヤリ、と口元を歪める。

「ちなみに、俺が勝手に定めたボーダーラインにスコアが達しなかった場合、そいつは退学させるので気を付けてな」

その言葉に、生徒たちは一瞬固まったあと、叫び声を上げる。そこからは、焦り出す者、上等だと笑う者、個性ある様々なリアクションが続く。

かく言う自分は、まあ相澤先生ならそうだよな、と納得のリアクションだ。なんせ自分は、これまでの交流で相澤先生について、いくつかのことを知っている。例えば、だ。

「言つとくと、相澤先生は去年だか、一クラス丸々除籍した実績があるぞっ」

「喚導、余分なこととは言わなくていい」

「いやア、阿鼻叫喚の様子見てると、追撃叩き込みたくありません?」
「外道かよ」

ツツコミいられるとは、切島は存外余裕があるなあ、と思いつつ、自分が追加で放った爆弾で慌てるクラスメイトたちを見て爆笑する。特に、先ほどの小柄な少年や、ぼさぼさ髪の、冴えない少年の慌てっぷりは実に笑えた。

逆に、八百万とか紅白頭、あとは切島とは別の、ツンツン頭で柄が悪そうなのは、自信があるのか余裕そうで実につまらない。

まあそれを言ったら、自分が一番余裕絳々なのだが。いや、だってぶっちゃけ自分の個性なら、体力テストの競技、どれもハイスコア叩き出せるし。

——そして事実、体力テストは自分がほとんどの種目で一位を取った。

流石に、ハンドボール投げの無限、というスコアは超える方法を思いつかなかった為に二位である。それでも、充分すぎるスコアだろう。

その結果、柄の悪いツンツン頭に絡まれたり、何か冴えない少年は相澤先生と揉めたりしていたが、まあそこら辺、興味はない。最終的に誰も除籍は受けなかったようだが、ぶっちゃけルリの番くらいしか他人の競技は見えていなかった。

強いて何か収穫を挙げるとすれば。長座体前屈で好成績を出すために、ヨーガの力を使ったら何人かの男子が反応したので、ヨガファイヤーを見せて仲良くなったことだろうか。

実は自分の個性、ゲームやアニメのキャラだろうと、それらが存在する平行世界を創造してしまえば、憑依召喚などができるので、こういうネタもできたりするのだ。

とりあえず、今度クラスの男子には、元々持ちネタとして持っていた待ちガイルのモノマネを、個性を交えた「真・待ちガイルのモノマネ」として見せてやろうと思う。

#21. First battle training.

「——わーたーしーがー！普通にドアから来た!!」

「あ、面白くないんでやり直しリメイクで」

「喚導くん辛辣ウ！」

八木さん、というかオールマイトとしてのキャラクターは、比較的ノリがいいからやりやすいよなあ、と教壇に立ったオールマイトを見ながら笑みを浮かべる。

入学から数日。初日から普通科目、ヒーロー科目どちらも授業があった。けれど、そのどれもが授業の今後の方針などの説明に費やされたため、第二回の今日はついにヒーロー科特有の授業、ヒーロー基礎学が本格的に実施される。しかもその教師がオールマイトとあって、浮かれている生徒の多いこと。

そこら辺、八木さんという人物と、オールマイトの私生活におけるそこはかたないポンコツっぷりを知っている身としては、どうにもテンションが上がらないところだった。

ああ、いや、そもそもヒーローという立場が便利だから目指している段階で、楽しみもクソもないのが自分なのだが。

「さて、今日の内容は前回言ったけれど、戦闘訓練！」

「戦闘訓練……!」

「それにあたって、コスチュームも用意してあるぞ！」

その言葉と共に、教室横の壁がせり出し、生徒それぞれの戦闘服コスチュームのケースを取り出せるようになる。

無駄なところに金かけてるなあ、と思いつつ、自分もそのコスチュームを回収して、着替えることにする。

とは言っても、自分の場合はスラム街での仕事着と特に変わりはない。ミリタリーグリーンジャケットに、黒のカーゴパンツ。それからゴツイブーツ。

変わった点と言えば、ちゃんとしたメーカーを通すことで、その耐

久性が上がっていることだろうか。

まあそれも、憑依召喚を使った場合、召喚対象の衣服が着ている服に憑依するため、あまり関係ないのだが。

憑依召喚では、あくまで召喚したいものを他所から持ってくるので、召喚されるのはイメージ通りのものなのだ。だから、召喚対象が女性だろうが、男性服着ているところを想像して召喚してしまえば問題なかったりする。

だから、ぶつちやけ耐久度すらイメージ次第で、どうとでもなるのだ。

そういった点から、あまりコスチュームに拘りはなかった。強いて言うなら、コスチュームとはいえ別の、義姉の形見であるゴーグルぐらいだろうか。

そんなことを考えながら、授業の行われるグラウンドβへと向かう。

クラスメイトたちは、初めてのコスチュームということもあって、着替えに時間がかかっており、自分が一番手だ。

まあオールマイトに確認したいこともあったし、丁度いい、と思いながら、グラウンドβに入れば、入ってすぐの位置に、筋骨隆々の男の姿を確認できる。

「お、喚導くんが一番乗りか」

「まあ、着慣れたデザインだからな」

「あの、喚導くん？私、教師なんだけど、敬語使わない？」

「いや、過去構わない、って言われたし」

言質は取ってる、と言えば、Shit、と如何にもアメリカンなりアクションを取るオールマイト。

実にいいノリだ、とは思っても、ちよつと今回は真面目に確認したいこともあるので、珍しく、ボケずに話を進めることにする。

「まあとりあえずどうでもいい話は置いといて」

「私の威厳的にはどうでもよくないけどね？」

「それこそ、どうでもいい話だな。で、なんだけど、俺を生徒と戦わせる、って本気か？」

今回の戦闘訓練は、事前にその方式が情報公開されている。

基本は、ヒーロー組とヴィラン組に分かれた二対二の戦闘訓練。ただし、事前にどのヒーローとヴィラン、どちらの組みで、ペアは誰かはヴィランにしか知らされない。

そして、状況設定も教師と相談してヴィラン組が指定。

つまり、ヒーロー側はペアの相手も、状況も現場で知るといって圧倒的に不利なシチュエーション。

とはいっても、無論、ただの嫌がらせではない。実際のヒーローも、協力するヒーローも、状況も現場で知る、というのはよくある話らしいのだ。

要するに、実践を見据えた訓練、ということになる。

まあ、それ自体はいい。別に、教師の指定した訓練に文句を言うつもりはない。

問題なのは、生徒とでは圧倒的実力差のある自分が、普通にヒーロー組として組み込まれていることだ。

「これ、どう考えても俺が勝つだろ」

「ま、順当に考えてそうだね!というか、そうじゃないと困る」

困る?と意味が分からず首を傾げる。自分が圧倒的な実力差で勝たなければ、何に困るといえるのか。

そんなこちらを見たオールマイトは、苦笑しながら、いやね、と口を開く。

「生徒たちには、圧倒的格上との戦いを経験しておいて欲しいんだよ」

「格上との戦い、か」

「そうそう。雄英高校では、学生のうちからインターンとかで外で活動する機会がある。そういう時、インターン先の大人なんかが付きつきりなるんだけど、それでもやっぱり予想外のことは起きるんだよね」

世の中絶対なんてないわけだし、と肩を竦めるオールマイトを見ながら、なんとなく、話の流れを察する。つまり、だ。

「もし、プロヒーローが近くにいない時に、格上と出会ってしまった場合に備えて、経験を積んでおいて欲しい、ってことか」

「That's right!ま、初回だから大概の子は戦闘を選ぶだろうけど。上手いこと、調整を頼むよ」

生徒に頼むことではないとは思。とはいえ、年齢的には既に子供たちを導く側なのだ。言ってしまうえば、生徒にも教師にもなる、中途半端な立ち位置が自分なのだろう。

「基本的に戦闘訓練での喚導くんの役割は、そういうのが多くなると思う。あとは他の子たちに指導してもらったりね。それが職員会議で出た結論」

「それ、ほぼほぼ教員だろ……」

「代わりに、放課後暇な教師が君の鍛錬に付き合うのを約束しよう。流石に私は、活動時間の関係上できないけどね」

それなら、まあいいだろう。正直、今更学生レベルの訓練を受けても意味はないわけだし。元々、この学校で学びたい点はそこではないのだから、問題はない。

代わりにプロヒーローから手解きを受けられるなら、悪い話ではないだろう、と頷いて返す。

オールマイトから教われない、というのは、元々彼の戦闘は精神論な部分が多くて、参考にならないから問題ないし。

「じゃ、そういうことで頼んだよ」

「あいあい」

そうやって、今後の戦闘訓練について話し合っていると、徐々にクラスメイトたちが集まってくる。

比較的早く来た中には、初日で知り合った切島や、最近親しくなった瀬呂範太がいる。

彼らはこちらが年上であっても、それに触れない、そしてそれを気にしないかのような態度で接してくる少年らだ。純粹に根がいい子なのだろう。

ただそのせいで年齢をネタにし辛いのが難点だが。

個人的には、過ぎたことなら深刻そうに語るよりも、あえて自らネタにするくらいの方がよっぽど有意義だと思っている。

けれど、さほど親しくない相手に過去の失敗などをネタにされても

リアクションに困る、というのも分かる。だから、そこら辺の匙加減が難しいよな。

なんてこと思いつつ、自重するタイプでもないので自虐ネタを挟み切島たちをリアクションに困らせていけば、最後の一人、冴えない少年がやってきてA組が全員集まる。

全員集まった段階で、授業時間は限られていることもあって、オルマイトはすぐに授業を始める。

ルールについては前回の段階で説明済みなので、ヒーロー組のペア決めから。最初の組み合わせは——冴えない少年、緑谷出久と、麗日お茶子という少女。そしてその対戦相手のヴィラン組は、ガラの悪いツンツン頭こと爆豪勝己と、飯田天哉だ。

興味がないので、あまりしつかりとは見ていなかったのだが、何やら緑谷と爆豪が揉めていたのが印象的な訓練を皮切りに、何組かの戦闘訓練が行われていく。

その中には無論、同じクラスであるルリの訓練もあり、内心ハラハラしながらそれを見ていた。

ルリは一応、自衛手段もあった方がいいと、オルマイトに救出されて以降、格闘訓練などを行っている。

だが彼女は、個性も、性格も致命的に戦いに向いていない。誰かを傷つけることを忌避する、優しい子だ。そしてそれは、人斬りの一件で、家族やスラム街の連中を失ってからより顕著である。

失う悲しみを知ったことで、失わせてしまうかもしれない行為を苦手とするようになっていた。

故に、彼女の戦闘スタイルは補助型。

モニタに映る彼女は、トラップや道具を駆使して、相棒の芦戸三奈が立ち回り易いように動いている。もし、戦うことになりそうになったら、完全に逃げの一手。

冷静に必要な手を考え、実行する。補助と生存に特化したスタイル。それが彼女が今、磨いているスタイルだった。

そんな風にルリの戦い方を分析していれば、ルリの訓練が終わる。結果はルリ・芦戸組の敗北。単純に、ルリが補助である限り手数が

足りず、押し切られてしまった形だ。

正直、そもそもルリが戦うこと自体嫌だし、傷を負っていないか心配だが、あまり構い過ぎるのも過保護というもの。

ルリには普通の少女として過ごして欲しいし、学校ではあまり、手を出さないスタンスで行こうと思う。

「そしたら、次のヒーロー組は……喚導・耳郎組！」

そしてついに、オールマイトの引くくじによって、自分の番が回ってくる。

相方は、長い耳たぶと、三白眼が特徴的な少女。パンク調のコスチュームを纏った彼女は、確か耳郎響香、という名だったか。

「対するヴィラン組は……轟・八百万組だ！」

その言葉に、耳郎がげえ、と言葉を漏らす。自分を含め、今回の組み合わせはほとんど推薦組だ。唯一、一般入試の耳郎には嫌な組み合わせだろう。

だが、だからと言って組み合わせが変わるわけではない。

ヴィラン組が先に仕込みが行われている建物へと向かい、それから一定時間後に自分と耳郎が同じ場所へと向かう。

「とりあえず、今回の状況設定は人質救出及び犯人確保、か。さて、どう立ち回るか……」

「そう、ですね。えっと……なんて呼べばいい……ですか？」

そのたどたどしい言い方に、そりや普通は年上としてか、クラスメイトして扱えばいいのか悩むよな、と思う。即座にクラスメイトして対応した切島がおかしいのだ。

だからまあ、少しだけ考えて、別に年下に敬語を使われたいとかもないので、クラスメイトとして扱ってもらえばいいだろうと判断する。

実際、スラム街では年齢なんて気にせず、性分でもない限り、全員がため口であったし、気にする理由はない。

「つーわけで、敬語無し、喚導でも想也でも自由に呼んでくれ」

「ん、そーいうことなら遠慮なく」

「俺もジロちゃんって呼ぶし」

「なんかペットみたいだからやめて」

可愛いと思うんだけどなあ、なんて呟いたりしてるうちに、指定された場所へとつく。

見た目は何の変哲もない六階建てのビル。ただ、ヴィラン組は訓練場所の指定と、教師に仕込みを頼むことができる。だから、見た目通り何の変哲もない、ということではなく、トラップなども存在しているだろう。

事実、近くに來ただけで冷気を感じる。間違いなくあの紅白頭——轟焦凍だかの個性だろう。

「さて、とりあえず作戦立てるためにも、ジロちゃんの個性教えて」「だからジロちゃんは……ああ、もういいや。うちの個性は、イヤホンジャック」。刺した対象に心音を叩き付けたり、対象から微細な音を聞いたりできる」

と、なると、と頭の中で作戦を組み立てていく。彼女の個性は素敵に使えるそうだ。ならば——

◇

建物内を堂々と歩く。自分の腕の中には、耳郎おり、所謂お姫様抱っこの状態だ。年頃の女の子らしく、その状態に照れているようだが、作戦上仕方ないので我慢してほしい。小脇に抱えてもいいのだが、見た目が悪い。あとは照れてるのを後でネタにしてからかうつもりでもある。

そんなどうでもいいことを考えながら、周囲を警戒する轟と八百万の横を通り過ぎる。

しかし、ヴィラン組の二人はそれに気づいた様子はなく、そのまま人質役——ルリの元へと辿り着く。

ルリが人質役とは、どうにも過去のことを思い出して嫌な気分になる。

過ぎたことはネタにした方がいい、なんてどの口が言うのかと自嘲しつつ、ルリと、轟、八百万の間に立つ。

相変わらず、二人はこちらを認識できていないようで、しっかりと自分の力は働いているらしい。

そして無言のまま耳郎と領き合い、耳郎の耳たぶの先端が動き、轟と八百万にそれぞれ突き刺さる。

——その瞬間、ようやく二人がこちらに気づくが、遅い。

次の瞬間には、何か衝撃を受けたような素振りを見せた二人が地面へと倒れる。計画通りであるなら、耳郎によって心音を体内へとぶち込まれた結果だろう。

倒れているうちに、二人を手早く拘束。人質役にルリを選んだ恨みを込めて、ちよつときつめに縛りつつ、続いてルリを解放。

そしてスピーカーから流れるオールマイトからの終了の合図。実にあっけなく、自分の戦闘訓練は終了した。

「……まあ、とりあえずはお疲れ」

「おう、お疲れ、ジロちゃん」

これ、オールマイトの格上との戦闘を経験させてやれ、っていう頼み的にはこれアウトだよな、でもガチで勝ちに行くならこの手が一番だしなあ。

なんて、悩んでいたところ、耳郎の方から労いの言葉をかけられたので、それに軽く返す。

ただその後耳郎はどうにも、微妙そうな顔をしているので、思わずどうしたのか、と問いかければ、耳郎が口を開く。

「なんか……あまりにも呆気なくて。結局、喚導は何をしたわけ？何か小声で呟いてから、普通に建物入ったと思ったら、ヴィラン組の二人はこつちに気づかないし」

「うーん……」

自分が使ったのは、憑依召喚の派生形である、とある能力だ。今までなんとなくできそう、という感じだったので、今回試運転を兼ねて使ってみた次第だった。

ただ、これ、現状自分しか知らない力だ。オールマイトや根津校長、ルリにも言っていない。

そして伏せ札は一枚は欲しいよな、という話で。

「んー、とりあえず秘密ってことで」
クラスメイトだろうが、どこから情報が流れるかも分からないの
で、話さないことに決めたのだった。

#22. Raids come, villain association.

バスに乗る、というのは初めての経験だった。

スラム街時代は、移動手段は高速移動系の個性の持ち主に運んでもらったり、依頼者からの迎えだったりで、あまり公共交通機関には縁がなかった。かろうじて電車に乗ったことがある、程度か。

スラム街自体に車を持っている人間がいるのだから、バスを使う理由がない、という話だ。

だからこうして、クラスメイトとバスに乗って移動する、というのはどうにも落ちつかない、初めての経験だった。

「どした、喚導。何かそわそわしてないか？」

「ん、ちよつとなー」

「あ、もしかしてあれだろ、この後の訓練が気になってんのか？ そうだよなー、ヒーローの本分だもんなレスキューは！」

隣に座る切島の的外れな言葉に、思わず苦笑する。ただまあ、切島のこの、ヒーローに対する真つ直ぐさは嫌いではなかった。

「レスキューねエ……苦手分野なんだが」

「意外だな、喚導くんはその個性の汎用性もあって、何でもそつなくこなせると思っていたのだが」

先日、ひと悶着の末に委員長となった飯田の言葉に、そんなことはない、と返しながらこのあとに待つ訓練のことを考える。

この後の訓練は、救助訓練だ。切島が言っていたように、人を助けるという点で、ヒーローの本分とも言える内容になる。だから皆、気合を入れて臨んでおり、それは自分も例外ではない。

もつとも、その理由は皆と違い、自分にとつて経験の浅い分野だから、真面目にやろうというだけなのだが。それでも、やる気があるだけ上等だろう。

ただその訓練、どうやら雄英高校の敷地内ではあれど、少し遠い場所で行うらしい。だから移動手段としてバスが用意されたのだが。

同時に、遠い場所でやる、というのが少し問題となっているらしい。ついこの間。何やら、雄英高校に不法侵入があったらしい。入ってきたのはマスコミらしいのだが、そいつらが入るために入り口を壊すことでマスコミも通れるようにしたヴィランがいるようだった。

自分は、戦力と年齢、それから出自といったものから、それなりに雄英教師陣には戦力として見られている。だからその一件も自分は多少の話を聞かされているし、同時にA組の警護も頼まれている。

このあとの訓練も、担任の相澤先生に、十三号、そしてオールマイトというヒーローたちと共に、有事には生徒たちを守ってくれと言われていた。

ただまあ、入り口の破壊痕的に、なんとなくだが犯人のあたりはついている。

そういえばあいつら、メインで活動してたのは日本だったよなあ、と今更ながら思い出しているうちに、目的地へとバスが到着する。

その名もウソの災害や事故ルーム。

もう少しまともな名前はなかったのか、とか版權的に怒られない、と色々疑問がある名前の施設ではあるのだが、機能としてはかなり有能だ。

水難、土砂、火事といった基本的な災害を再現し、経験できるといふとんでもない演習場。日本に多い地震も再現できる、というのだからいやはや恐ろしい。

雄英は惜しみなく金を使っているよな、なんて考えながら自分たちA組の前に立つ、宇宙服のようなコスチュームを纏ったヒーローを見る。

「皆さん、USJへようこそ。スペースヒーロー“十三号”です」

そう言つて、ペコリとお辞儀する十三号は、そのビジュアルもあつて愛嬌に溢れている。事実、十三号のファンだという麗日なんかは、キヤーキヤーとはしゃいでいた。

だが待つて欲しい、その見た目に騙されてはいけないのだ。

自分は十三号とも過去に手合わせをしたが、その人見た目に反して結構戦い方がえげつないのだ。

過去の経験と、現状の分析から相手の行動を予測し、相手が移動するであろう先に個性のブラックホールを発生させるといふ戦い方。

一見、普通の戦い方のようにも思える。しかし、これが十三号がやると、予測の精度と、ブラックホールの展開速度からえげつないことになる。

接近しようと思えば、突然ほんの数センチの距離に現れるブラックホール。回避しようとするれば、避けた先に現れるブラックホール。動かなくてもとりあえず現れるブラックホール。

どう行動しようとも現れるブラックホールに、ろくな身動きをとれなくなつたのは、実に嫌な記憶である。

人をあつさり殺せるブラックホールを、そんなポンポンと展開していいのかと文句も言ったが、殺さないギリギリの匙加減はすっかり把握してますから、と返されてしまった。

元々は指先からしかブラックホールで吸い込むことができなかつたらしいが、到達者となつてからは、任意の座標に、好きなサイズのブラックホールを生成できるようになつたらしい。実にえげつない方向へ発展したものだと思う。

そんなことを思い出していると、相澤先生の方に自分だけ、名指しで呼び出される。

他のA組連中は十三号が相手する中、自分だけ呼び出される、ということは十中八九、警備関係の話だろうな、と予想していれば、案の定の内容が、相澤先生から語られる。

「今回の授業、オールマイトはなしだ。通勤中に活動限界ギリギリまで個性を使つたらしい」

「まーたあの人は……」

だからいまいち、教師としては尊敬できないのだ、と思いながら、少し思案する。

もし、今回の授業で襲撃があるとすれば、オールマイトがいることを前提にした編成だろう。と、なれば相澤先生と十三号、そして自分で、対オールマイト用の構成の敵と相手どらなければいけない。

至極面倒だな、と溜息を吐いていると、相澤先生も同じよう

息と共に、諦めろと首を横に振られる。

仕方ない、か。そう考え、意識を切り替えて再度、警戒態勢に入ろうとし――

――USJの噴水広間に、黒い靄が現れた。

それを知覚すると同時、宙へと飛び出す。

「死つ柄っ木くウーん！あっそびつましょオー!!」

「ま、お前ならそう来ると思ったよ」

個性で手元に大剣を召喚しながら斬りかかるが、靄から出てきた死柄木に当たる前に、目の前にまた、黒い靄が現れる。そして次の瞬間には、元居た相澤先生近くまで戻されてしまう。

「元気にしてたか？俺は辛いことがあったぞ死柄木イ！」

「……話には聞いてたが、本当にお前が雄英にいるとはな」

自分でも意外だよ、と返しつつぎつと視線を周囲にやり、現状を確認する。

まず自陣、雄英側。場所はUSJのエントランス部分。広さはそれなりにあつて、A組はひと塊になって、相澤先生から警戒と、ヴィラン襲来を告げられている。

状況と戦力的に、死柄木や黒霧に対応できるのは自分と十三号、相澤先生のみ。生徒は戦えて死柄木が連れてきた下っ端連中のみだろう。

次に、死柄木率いるヴィランサイド。現状、確認できる主戦力らしき姿は、死柄木と黒霧のみ。ただし、黒霧のワープゲートがある限り、控えがどれだけでもおかしくはない。戦力の逐次投入は下策だが、奇襲として使えるならアリでもある。

死柄木と共に黒い靄から出てきたチンピラ共は、動きからさほどの練度ではないことが分かる。どう足掻いても、街中のチンピラ程度だ。間違いなく捨て駒だろう。

自陣と、敵陣の距離は約百メートルほど。通信は、他の連中の様子を見る限り、通じない。となれば、直接救援を呼ぶのがいいのだが。

「……チッ」

入り口の方に視線を向ければ、黒い靄と、そこから出てきた男が扉

に何か仕掛けている様子が見える。そりや逃げ道は塞ぐよな、とは思
うがやられる身からするとたまったものじゃない。

扉に何か仕掛けてすぐに逃げたところを見るに、恐らく、個性の持
ち主をどうにかしなければ解除できない能力。また距離は関係なく、
対象の状態を固定するか、接着するなどの個性だろうとあたりをつけ
ておく。

「情報共有！まずあの顔に手をつけてるのが主犯格で、個性は掌で触
れた対象を崩壊させる個性！それから黒い靄の方はワープゲートの
個性だ！」

「何で知っているかは後で聞くとして……それに間違いはないな！」

「あくまで知っている範囲で、です！正確ではないし、到達者に至って
いる可能性も考慮してください！」

「チツ……知られてる、つてのは厄介だな」

「お互い様だろ！」

そう叫ぶと同時に、相澤先生と共に前に出る。手早く主犯格を抑えた
いところだが、それには雑魚が数が多過ぎて些か邪魔だ。故に、まず
は雑魚を蹴散らす必要がある。

「相澤先生！」

「任せろ」

——相澤先生の個性は“抹消”。見た相手の個性を、瞬きするま
で抹消、より厳密に言うならば抑制する個性。

相手のメイン武装を封印できるそれは、元々の個性の段階で実に強
力な個性だ。

「ああ、実に強力な個性だ。だけど、知ってるぞイレイザーヘッド」

相澤先生が個性を消した連中の顎や頭に、重量の大きい鉄塊を叩き
付け意識を奪っている、それまで回避に専念していたヴィランたち
が、ある瞬間から唐突に、反撃に転じようとする。

それは、相澤先生の個性が切れるタイミング。目を開けているのに
耐えられず、思わず瞬きしてしまう、その平均時間。

死柄木は過去の相澤先生の戦闘データを漁ることで、それを割り出
していたのだろう。

——だが、甘い。

「抹消——リミテッド・アクション限界駆動」

相澤先生が呟くと同時、反撃に転じようとした雑魚共の個性が不発に終わる。しかし、威圧の為かあえてゴーグルを外した相澤先生の目は、今も閉じられている。

「……到達者としての力か」

そう、相澤先生は到達者に至っている一人だ。基本的に、到達者としての力は、大本の個性の拡張になる。

相澤先生の場合、瞬きに関わらず、見た対象の個性を一定時間抹消する、というもの。これにより、短時間だった個性の抹消時間が、かなり延長されている。

「はッ、だけどよお、異形型の個性までは消せねえみたいだなア!!」

そう言つて、多腕の岩に包まれたかのような見た目をしたヴィランが、相澤先生へ殴りかかる。それは体格からわかる通り、人を殴り殺すには十分な威力を秘めているだろう。

——本来ならば。

「なっ……」

「到達者を甘く見過ぎだぜエ、オイ!」

相澤先生へと殴りかかった異形型の一撃を、間に割り込む形で片手でその拳を掴み取り、逆に顔面を殴り返す。

本来であれば、片手で掴むことなどできない一撃に、殴ることなどできない岩に包まれた相手の顔面。しかし、今は相澤先生の力によって、異形型ヴィランは形状を除き、一般的な人間のスペックまで落とし込まれている。

元の個性ではできなかった異形型の個性の抑制と、抹消時間の延長。これが相澤先生の到達者としての力だった。

「……くそっ、予想外の到達者に、目的のオールマイトがいないと来たか。どうするかな……」

完全に反撃を封じられたことによる敵の怯み。そこから生じた膠着の一瞬に、死柄木の呟きが響く。

それに丁度いい、と判断し、構えを解かないまま、一つの問いを死

柄木へと投げる。

「おーい、死柄木。お前の目的にルリって入ってるー?」

「……ああ、あの覚醒誘因ブリステッドのガキか。今回は用はない、安心しろ」

その言葉に、少しばかり安心する。もしルリを狙っていたならば、全力で殺しにかからねばならないところだった。流星に、友人を殺すのはいい気分ではないし。

「俺の目的は、オールマイトを殺すことだが……さて、今回はどうするかかな」

そうやって死柄木が一人悩む間も、戦況は着々と動く。

自分と相澤先生は雑魚共を蹴散らし、死柄木へ距離を詰める。

USJエントランス部では、生徒たちが黒霧によってどこかへ飛ばされ、十三号と黒霧の一騎討ちが始まったのを視認した。

ただ、生徒たちに関してはいても足手まといでしかないので、遠くに飛ばされたなら丁度いいのかもしれない、と判断する。

チンピラレベル以上が飛ばされた先に居た場合、彼らでは負けるだろうが。まあその場合はついてなかつたな、としか言えない。

「そうだな——」

そして手早く雑魚を蹴散らし終え、いざ死柄木と間合いを詰めようとした瞬間。

「——オールマイトがいないなら、今後の為に戦力を削るか」

刹那、自分と相澤先生を包み込むように展開される複数の黒い霧。

「ツ、ファック!」

「チイッ!」

そしてそこから吐き出される多数の鉛玉。どういう理屈かは知らないが、黒霧が機関銃か何かで、ワープゲートを経由することで多方向から射撃してきているようだった。

個性に対してしか効果を発揮しない相澤先生に対するメタ手札の一つなのだろう。例え回避しようと、避けた弾丸が再度ワープゲートに突入するために、時間が経過する毎に弾数が増えていく鬼畜仕様だった。

だが、相澤先生も自分も、その程度でやられるほど甘くはない。回

避しても再利用されるなら、弾き飛ばせばいい。

故に、相澤先生は首に巻いた強度の高い、特殊な布を操ることで弾丸を弾き、自分は全身鎧を召喚することで、被弾を完全に無視する。

これで、黒霧からの支援攻撃は無視できる——そう思った次の瞬間、自らの身にかかった巨大な影に、反射的にその場から逃げ出す。

「ッ……脳無……！」

「本当はオールマイイト用だったが……まあいい。何時だかの再演だ、やれ、脳無」

「——オ——オ——オ——」

幸い、今回の脳無には精神汚染系の個性は積まれていないらしい。あるいは、まだ使っていないだけか。

ただ、重要なのは自分は今、動けるといふことだ。こちらに拳を振り下ろした姿勢の脳無と少し距離をとり、構える。

最初から敵に相澤先生がいることを想定しているなら、この脳無には個性をレジストする個性が積まれている可能性が高い。となれば、この巨体を誇る脳無と相澤先生では相性が悪い。

よって、脳無に対応すべきは、その汎用性からメタを取りやすい自分だろう、と判断する。

「相澤先生は死柄杓を！……いつは俺が!!」

「任せろ」

相澤先生からの返事を確認しながら、動きが鈍重な脳無との間合いを詰め、その脇腹に右足での蹴りを叩き込む。

以前は斬撃耐性を積んでいたことからの一撃だったが——感触があまりに軽い。これは、衝撃系への耐性も積んでいるな、と判断。

同時に、このまま近距離にいるのは危ないと判断して、右足の爪先を脳無へ引つ掛けるようにして、身を捻る。そのまま自分の肉体を持ち上げ、空いている左足を利用して、一撃。ただその威力を脳無ではなく、自身へと向けることで脳無から離れる。

刹那、先ほどまで自分がいた位置を薙ぎ払う脳無の腕。

その威力に、これ避けなかったら一撃でやられてたな、と冷や汗をかきながら、脳無を正面に捉えるようにして、構える。

——死柄木率いるヴェイランとの戦いは、まだ終わらない。

#23. The end, VS villain
association.

「僕のブラックホールは全てテレポートで受け流され」

「逆に私の攻撃は全て、ブラックホールに飲み込まれる。千日手、というやつですね」

MATCH UP!!

十三号 VS 黒霧

「一対一なら、俺はお前の個性を封じ続けることができる」

「チツ……純粋な格闘戦か、面倒だな……」

MATCH UP!!

イレイザーヘッド VS 死柄木弔

「こいつあんま素晴らしい思い出がないんだけどなア……」

「——オオ——オ——」

MATCH UP!!

喚導想也 VS 脳無

◇

——踏み込む。

一歩、距離を詰めるだけのワンアクション。しかし、ある程度歩法について修練を修めていれば、数メートルの距離程度も一瞬で詰めることができる。

故に、即座に脳無を剣の間合いに収め、片手剣を召喚すると同時に一閃。

その手応えから案の定、斬撃耐性が積み上がっていることを確認し、思わず舌打ちをしつつ、再度ステップで距離を取る。

そんなこちらに遅れるようにして、先ほどまでいた位置が脳無の腕によって薙ぎ払われる。

遅いから回避ができているが、代わりに巨体な分一撃の範囲が大きい。ヒットアンドアウェイを心掛けなければ、すぐに重い一撃を喰らってしまうだろう。

「つっても……どうすつかね」

おそらく対オールマイト用の衝撃耐性。自分への対策の斬撃耐性。相澤先生によって個性を無効化されていないあたり、個性無効の耐性か、個性の活性化か何かがあるのだろう。

と、くればおそらく十三号対策もしてあるのだろう。そうになると、やつへの有効な攻撃手段は少なくなってくる。

一応、炎なんかでは焼けるだろう。ただあの巨体を焼くだけの出力が出せない。

超越者となったって、ベースはあくまで元々の個性なのだ。元々の個性が苦手とする、理屈の存在しない、超常現象とでも言うべき力を持ったものが召喚できないのは、今だってさほど変わらないのだ。

単純に剣技に特化した逸話を持つ英雄は召喚できるが、炎などを操る英雄がいたとしても、それが超常的なものである限り、炎を操る以外の逸話の部分しか再現できない。できて、低出力だ。

「……いや、ほんとこいつ厄介過ぎねエ？」

雄たけびを上げながらその巨腕で殴りかかってくる脳無の一撃を、斬撃が通らないことを利用し、片手剣を引っ掛け、脳無の腕の周囲を回るようにして上空に上がり回避する。さらに身を捻って、今度は脳無の首に剣を引っ掛け、すれ違う。

そうして再び訪れた束の間の休息に、さてどうしたものかと思案する。

正攻法なら、自分では脳無を倒せないだろう。つまり、逆に言えば

正攻法ではない攻撃でなら倒せる。

ただその手段は本来の自分の個性の使い方ではないし、まだろくに使ったことがない力だ。一応、いつぞやの戦闘訓練ではうまく使えたので問題ないとは思うのだが。

そうやって悩んでいるうちに、再び脳無がバカ正直に突っ込んでくる。

確かに大量の個性は強力だが、知能が落ちるのが難点だよなあ、なんて思いながら、今度は剣で脳無の拳を一度受け、そこから身体全体を使ってその衝撃を流す。そしてその勢いを利用して身体を回転、脳無の肩へと斬撃を繰り出し、その衝撃で脳無の後ろへと抜ける。

その際、チラと相澤先生や十三号の方を見れば、敵も味方も、互いに決定打が叩き込めず、手間取っているのが分かる。

救援は望めず、敵を倒すことはできない。ついでに、こちらは一撃貫えばお終いときた。こりゃ、出し惜しみしている場合じゃないな、と片手剣を返還する。

「……こんな場所で死ぬわけにもいかねエしな」

そう呟きながら脳裏に浮かべるのは光り輝く炎。

「こんなに早く、そっちに行ったら怒られそうだし」

あらゆるものを焼き払う紅蓮にして。

「だからまア、俺に力を貸してくれ」
人々を優しく照らす輝き。

「二人であいつをやるぞ。絆憑依——太陽神!!」

刹那、己の周囲に光炎が噴き上がる。

突如現れた圧倒的熱量に、本能で動く脳無が怯む。

その隙を見逃さず、素早く間合いを詰め。

「炎纏、かーらーのー！インパクト・フレア炎腕解放ア!!」

光炎の比率を炎へと大きく偏らせ、右腕へと圧縮し纏わせ脳無の腹を殴る。そして拳が脳無に触れると同時、纏わせていた炎を一気に解

放する。

結果、大きな音共に焼き抜かれる脳無の胴体。脳無の向こう側がはつきりと見える大穴が、脳無の腹部にできあがる。

「出力問題なし、コントロールも同様つと」

脳無から距離を取って、光炎の比率を弄つたりすることで調子を確かめる。なんてたって他人の個性だ。何があるか分かりはしない。

そう、今自分が使っているのは他人の、ソールの個性だ。

本来なら、自分は個性を憑依召喚で再現することができない。何故なら、まさに超常的な力だからだ。

だけど、一つだけそれを可能にする条件があつた。それはその個性の持ち主と一定以上の絆を結ぶこと。

絆、とは実に曖昧で、自分ですら掴み切れていないが、恐らく、スラム街の住民の多くを再現できるだろう。

そして特に。特に親しかった、家族であるソールに関してだけはその再現度は飛びぬけている。習熟すれば恐らく、到達者^{リミテッド}までは再現できるだろう。実際にソールは到達者になっていないので、もしなつたらという想像でしかないが。

そんなことを考えているうちに、脳無の腹の大穴が、肉体が再生することで埋まっていく。やはり、再生の個性も持っていたらしい。

「ま、慣らし運転にやあ丁度いい。炎剣展開、スタイルシフト——紅蓮舞踏」

ソールとは違って、自分の場合破壊力が高い炎の方が相性がいい。故に、光炎の比率を炎に偏らせたまま、本当はソールに教えるつもりだった技を再現する。

周囲に展開される、光炎で構成されたいくつもの剣。両掌の前にも浮くようにして、それぞれ炎剣が存在している。

遠距離主体のソールには向いていないため、教えるのを後回しにしていた戦闘スタイルの一つ、近接特化の紅蓮舞踏。

「斬撃は通らないかもしれないが——焼き切るなら話は別だよなア!?」

脳無へと接近。両手の炎剣を振るってその右腕を焼いて斬り飛ば

し、そして周囲に浮かせた炎剣を制御。斬り落とした腕を細切れにし、再生の余地をなくす。

それでも、本体側の切り口から再生するだろうが、落とされた腕と繋げて再生すると、一から腕を丸々再生するのではかかる時間が違う。

「オオアアア??——」

「させねエよ」

精神汚染系の個性を使おうとしたために、脳無の口へと炎剣を突っ込み、喉を焼くことでそれを防ぐ。

ついでにこれ、間違いなく長引かせた方が厄介だな、と判断し、慣らし運転として遊ぶのをやめ、脳無を焼き払うため、大技の準備に入る。

「天高く、どこまでも焼き払え——」

脳無を囲むようにして、炎剣が地へと突き刺さる。そしてそれぞれの炎剣が刺さった場所から、地を這うように繋がっていく小さな炎。

「地ラン・アッ・ブ・フレアより咆え立てる炎柱!!」

刹那、炎剣を外周として空へと膨れ上がる炎。無論、円内部にいた脳無はその炎柱に飲み込まれ、悲痛な叫び声を上げている。

そのまま、しばらく放置すること数秒。叫び声が聞こえなくなった段階で炎柱を消す。

「おっし、生きてんな?」

一応、身分的にはヒーローの卵であるため、不殺を心掛け火加減を調整したのだが、その甲斐あってか、炎柱から出てきた脳無は呼吸が確認できる。再生の個性が機能しないあたり、気絶しているらしい。自分ではこの脳無を拘束できる強度のものが思いつかないため、一旦脳無は放置し、それを操る死柄木を止めることにする。

そのため、相澤先生対死柄木がどうなったのかを確認しようとする。そこには意外な光景が広がっていた。

「くっ……」

「思ってたより長引いたな……」

相澤先生が膝をつき、死柄木が余裕を保って立っている。

相澤先生は個性上、相手の個性を封印してからは純粹な格闘戦をすることに。だから当然、格闘戦は高いレベルで身につけているのだが。それを死柄木が上回り、相澤先生を追い込んでいく。目の前に広がる光景はつまり、そういうことだった。

「……意外だな、お前が格闘ができるとは」

「何年もかけて準備してるんだ、これくらい当然だろ」

相澤先生に歩み寄りながら死柄木にそう声をかければ、何言ってるんだ、という声音でそんな言葉が返ってくる。確かに、自分と死柄木が出会った二年ほど前の段階で既に計画を練っていたのだとしたら、ある程度鍛えているのは当然だと言えた。

「しかし、脳無はもう負けたか。と、なると……黒霧……」

その呼び声に反応して、死柄木の横に黒い靄が発生する。しかし、黒霧本人はその姿を現さないのは、恐らく相澤先生を警戒してのことだろう。

純粹な総数としては三対二のこの状況。しかも長引けば長引くほど、こちらは援軍が来る可能性が上がっていく。となれば死柄木が打つ一手は。

「撤退か」

「そろそろ引き時だからな。最初から成功しない場合も想定してるから問題ない」

「逃がすと……思うか！」

黒い靄へと入ろうとする死柄木に、相澤先生が布の先端を飛ばす。しかしそれを死柄木は掌底で弾き上げて勢いを殺し、掴んで引つ張ることで相澤先生の体勢を崩す。そしてすかさず黒い靄から放たれる銃弾。

それを咄嗟に自分が手元に召喚した剣で弾けば、その頃には既に、死柄木は体のほとんどが黒い靄に入っている。

「じゃあな、喚導」

「はア……ま、じゃあな、だ、死柄木」

「あと、ふれぜんとふおーゆー、だ」

「はっ」

その言葉と共に、死柄木はある方向を指さす。それに釣られ、指された方向を見れば。

「——くそつたれが!!」

いつかの意趣返しか、如何にも爆発寸前と言わんばかりに脳無が赤熱している。

最後の最後に、自爆の個性か何かでも始動させたらしい。この状況下だ、ここら一带を吹き飛ばすような威力であることは想像に難くない。

故に、脳無に向かつて駆け出し。それがどう足掻いても間に合わないことを理解してしまう。

それでも、被害を抑えるにはどうしたらいいか頭を捻りながら脳無へと走り続け。

「——遅れてすまない、後は任せてくれ」

ヒーローが、そんな自分を追い抜いていった。

V字の髪型が特徴的な、脳無には劣るがそれでもガタイのいい、スーツを纏った男が脳無へと駆け寄る。そしてその拳を大きく振りかぶる。

「DETROIT——SMASH!!」

その一撃に、爆発ごと脳無が空へ打ち上げられる。直後、響き渡る派手な炸裂音。

一先ず、周囲に被害はなかった。そう、周囲には。

「オールマイト……爆発、巻き込まれたな?」

「ギリギリ間に合わなかったね!」

H A H A H A、と笑うオールマイトだが、決してこちらを振り向かない。それはきつと、身体の前面が焼けてしまっているのを隠すためだろう。

確かに、オールマイトが爆発ごと脳無を空へ打ち上げたことで、周囲には被害がない。けれど、爆破前には間に合わなかったために、起きてしまった爆発の中心に近かったオールマイトだけは、その被害を受けてしまっていた。

それでも、まだマシな結果なのだろう。なんせ、上空で起きた爆発

の規模と、オールマイトに傷を負わせたということは、とんでもない威力の爆発だったということなのだから。

「……とりあえず、リカバリーガール呼んでくれない？爆発って結構痛いんだよね！」

「……はア、気が抜けるから急にノリ軽くならないでくれ……」

そうして、死柄木弔率いる敵^{ヴィラン}連合の襲撃は、オールマイトへの傷と、雄英が襲撃を許したという結果を残して幕を閉じた。

#24. Interval: Determination

「困ったなあ……」

自宅のベランダから夜空を見上げながら、そう呟く。

後ろからはシャワーの音が聞こえ、女性は風呂が長いよなあ、と思いつつ、ルリがない機会に、色々と考え込む。

まず、^{ヴィラン}敵連合が残した爪痕について。

今回ヴィランに侵入をされたことで、マスコミがこぞってそのことを報道しているのは、まあ構わない。雄英の評判など関係ないし、自分への取材さえなければ至極どうでもいいのだ。

A組の生徒に関しても、黒霧に分散して飛ばされた先で、それぞれ敵連合の下っ端と戦い勝利したらしい。ただのチンピラというわけじゃなかったようで、些か時間はかかったようだが。

問題は、オールマイトが負った傷だ。彼は通勤中に人助けをして、結果活動限界を超えた上で無理をし、脳無の自爆を受け止めたらしい。

結果、その活動時間は更に短くなったという。それでも、オールマイトは今後も無茶をし続けるだろう。オールマイトのその人間性は理解できないが、それでも、この程度では無茶をやめない人間だというのは自分でも分かる。

だから恐らく、一年以内にはオールマイトはその力を失うだろう。オールマイトの性格から考えると、早ければ、半年もいかないかもしれない。

まあ、それ自体は構いはしないのだ。オールマイトが力を失おうが、それ自体は他人事ではない。

じゃあ何が問題になるか、と言えば。ルリを守るための手札が減ってしまうことだった。

オールマイトはそのネームバリューから、彼がバックにいる、というだけで委縮するヴィランは多い。そこら辺、死柄木なんかは気にし

た様子もなかったが。

ただあくまで一般的なヴィラン相手なら、オールマイトがバツクにいるだけでルリの安全がある程度約束されるのだ。平和の象徴は伊達ではない、という話。

しかしそのオールマイトが徐々に弱体化、いつかはその力を失うとなれば、それまでにそれを補うための手札を手に入れる必要がある。オールマイトに匹敵するほどの手札など、そうそうありはしない。となると必要なのは数。それなりの手札を多く用意するしかない。それを為すためには。

「雄英体育祭……ここで多くのヒーローにアピールするしかない」

ヒーローたちに、将来自分たちの事務所に引き入れたいと、それまで保護する価値があると思わせなければならぬ。

そのためには、雄英体育祭という多くの人の目に触れる舞台での活躍が必須だった。

だがそれには一つ、問題があった。それは自分が雄英体育祭に参加するにあたって、制限が設けられたのだ。

まあ自分は超越者^{オーヴァー}で、実戦も経験している。学生を相手にするなら、当然の処置と言えた。むしろ、今までなかったのがおかしいのだ。今まで制限がなかったのは、格上との戦いを経験させるため、とのことだから納得できなくもないのだが。

しかし雄英体育祭では生徒同士、頂点を競い合うのが醍醐味であるというのに、誰が勝つか、予想がつかってしまうというのは運営的に困るらしい。

故に、自分には制限が設けられる、とのことだった。

そしてその制限内容だが。一競技につき、召喚は一度まで、だそう
だ。

それはつまり、相手に応じて召喚を切り替えられない、ということ。基本的に汎用型の召喚をする必要がある、ということだった。

「……ッ……」

戦闘系の競技なら、絆憑依でソールを使うのが確定なのだが、なんて思った瞬間。心臓が締め付けられるような感覚に襲われる。

それに、やはりダメか、と溜息を吐く。

戦闘中なら、問題はない。そこまで思考を割く余裕がないから。スラム街についても、まだ大丈夫。

だけどソールだけは、家族のことだけは考えるとどうしても酷く苦しくなって、呼吸すら危ういこともあった。

……おそらくトラウマに起因する、ストレス性の症状。

スラム街の連中は、その多くが自分の見ていないところで死んだ。それに関しては多大な無力感を感じるが、それでも現場を見ていないだけ、精神にかかった負荷は小さい。

けれど、ソールは。目の前で、何もできずに家族が殺される姿を見てしまったそれだけは、トラウマとして残ってしまっていた。

何度か、深呼吸をして自らを落ち着かせる。それから、懐から煙草とライターを取り出し、火をつけてそれを吸うことで肺の中を煙で満たしたし。

「……煙草って、美味しいの?」

「いいや?クツソマズい」

思いつき煙を吐き出しながら、ルリからの問いにそう答える。

そう、煙草は不味い。欠片も美味いとは思えない。だけどその不味さが、身体に悪いという事実が。ソールが殺された時何もできなかった無力な自分を、今もそれを振り払えない情けない自分を苛めているようで、偶にだが無性に吸いたくなるのだった。

「お父さんは美味しそうに吸ってたけどな」

「まア……人それぞれだろ」

煙草を美味しく感じるかなんて、所詮人それぞれだ。それに、金持ちなアウエイクさんなら、さぞいい煙草でも吸っていたのだろう。

自分の煙草はそこらへんで買った安物でしかない。ただ無力で情けない男には、この程度の煙草がお似合いだ、という話だ。

「……あー、ダメだな、ネガティブモード入ってるわ」

頭を搔きながらそう呟く。

だがネガティブモードに入った、というよりは仮面が剥がれて中身が出てきた、という方が適切なのだろうか。

結局、普段のノリは、スラム街での過去に縋る、憐れな男の偽りの仮面でしかないのだ。もう戻らないスラム街での生活が恋しいから、正氣に戻れば情けなさで死にたくなるから。

だから自分自身を騙すため、表面部分だけ取り繕ってるに過ぎない。

しかしその仮面も、スラム街に付き合いがあつた死柄木たちと、そしてソールの力を使ったことであっさり剥がれてしまった。

仮面が剥がれてしまえば、ただただ自分が嫌いで、死にたがりのクソ野郎しか残らない。

だけど、そんな自分でも残されたルリは守らなければいけない。そうやって、普段ならすぐに取り繕えるのだが。

「……大丈夫？」

「ちよつと、今日は疲れちつたなア……」

痛む胸を抑えながら、でも明日には元通りだ、とルリには言うが、それを聞いてもルリは、変わらず心配そうにこちらを見てくる。

その姿に、根気負けして、少しだけ、ルリと言葉を交わすことにする。

「ルリはさ、実際のところどうなのよ」

「……何が？」

「……家族を失って、辛いだろ？ だけどどうして、普通に振る舞えるんだ？」

それは、ずっと不思議に思っていたことだった。

ルリが泣いている姿は、スラム街が失われてすぐのうちしか見えない。それ以降は、まるで立ち直ったかのように、笑顔で生活する姿を見てきた。

そして今では、まるで普通の学生かのように、友達と笑い合っ
て過ごしている。

ルリが薄情者でないことは分かっている。だけど、だとしたらどうして彼女は普通に振る舞えるのか、それが分からなかった。

「私の個性、あるでしょ？」

「ん、ブリステッド覚醒誘因だろ」

「それがあることが分かってからはね、私はずっと家で家族と過ごしてたの」

それは、アウェイクさんから聞いていた話だった。

ルリのその特別な個性は、何時誰から狙われるか分からないものだった。だから、アウェイクさんはルリを守るため、常に家の中で過ごさせ、勉強もしつかりと身元を割り出した、信頼できる人物だけで教えていたらしい。

真正正銘の箱入り娘、それがルリだ。多分、メイドや家庭教師を除けば、個性発覚以降、初めて会った外部の人間は自分たちになるのではないだろうか。

「その時にね、お父さんがよく言ってたんだ。『個性については必ず何とかする。だから全部解決したら、ルリは外で沢山友達を作って幸せになりなさい』って」

「……………」

「だからね。個性のことは解決してないけど、お父さんもお母さんもいなくなっちゃったのは悲しいけど。外に出れたから、今は沢山友達を作って、目一杯幸せになろうと思うんだ。きつと、その方が皆喜んでくれると思うから」

ああ、なんて——なんて彼女は強いのだろう。

それが、ルリの言葉を聞いて自分が抱いた感情だった。

皆を失ったことは悲しいけれど、それでもいなくなってしまった人々の想いを引き継いで、真っ直ぐ歩こうとしている。

純粹で、真っ直ぐな、強く美しい少女。

「…………きつと、その方がソールも喜んでくれると思うんだ」

「…………そう、だな。あいつも、きつと喜んでくれるよ」

——それに比べて、なんと自分の惨めなことか。

何時までも過去に縋り、ルリを守るのだった、結局はまた失うのが怖いから。全て、自分の為でしかない。

絆憑依だってそうだ。あれは本当は、自分が過去に執着しているから生まれた力だ。

嫌だ、失いたくない、あの時をもう一度——そんな感情が個性と

混じり合った結果、生まれたのが絆憑依なのだ。

だから本当は、召喚対象は絆を強く結んだ相手じゃなくて、自分が強く執着している相手なのかもしれない。

ああ、本当に情けなくて——死にたくなる。

「……大丈夫だよ。失ったものはもう戻らないかもしれないけど、私はまだここにいるし、きっと新しい素敵な出会いも待ってるから。だから大丈夫」

……だけど、ダメだ。彼女だけは、ルリだけは守らなくちゃいけない。

ここまで純粹で美しい彼女を、自分は失いたくない。

そして何より、ソールが好いていた彼女を、死なせたくない。

どれだけ自分のことが嫌いで、死にたくても、生きてルリだけは守らなくてはいけない。

「——ありがとう。もう大丈夫だ。……俺もきつと、色んな出会いを経て、幸せになるよ」

だから彼女の前でも仮面を被ろう。過去を乗り越え、また歩みだせるようになったかのような仮面を。

そして自分の全てをつぎ込み、彼女を守ろう。どうせなら、自分の命と引き換えにするぐらいのつもりで、彼女の個性の問題を全て解決するのもありかもしれない。

なに、問題が全て解決してしまえば、彼女を守る必要が、自分が生きる必要がなくなるのだから、何も問題ない。むしろ大嫌いな自分を殺せて万々歳だ。

そんなことを思いながら、ルリと二人、夜空を見上げる。

スラム街とは違って、街中であるためにろくに星の見えない、寂しい夜空だった。



そして、雄英体育祭の開催日が訪れる。

#25. Sports festival: First competition

A組連中以外も入り混じった待機場所で、人混みをウザったく思いながら時間を待つ。

周りにいる誰もが、共通して気合いの入った顔をしており、かく言う自分も珍しく集中状態へと入っていた。

—— 雄英高校体育祭当日。

欠片も興味の湧かない開会式を立ったまま寝て過ごし、第一競技の出発地点として案内されたこの場所。

目の前には遠くまで道が続いており、その途中には多くの障害物が既に見える。これ、間違いなく障害物競走だよなあ、と思わず呟きつつ、偶然隣に立っていた少年に話しかける。

「と、お兄さんは予想してるんだけど、そこらへん少年はどう思う？」

「いや、知りませんけど」

「むしろこの光景で障害物競走じゃなかったら、少年は何やると思う？」

「だから知りませんけど」

相変わらず轟少年は冷たいなあ、と呆れつつ、だったらと轟少年とは反対の、左隣を見る。

「じゃあそこの少年はどう思う？」

「……………」

こっちはガン無視と来た。

逆立てた紫髪に、隈が目立つ目元。如何にも根暗、といった見た目だがこれ、どちらかと言えばただ他人に構っている余裕がないだけのように思える。

両サイド余裕がないやつに挟まれたなあ、と思いつつ、言っても自分も余裕がないか、と自嘲する。

ふざけることで外面を整えているだけで、内面は割かし余裕がなかったりするのだ。絶対に他人に見せる気はないが。

『——さあオメエら準備はいいかあ!? 出来てないならご生憎、つてなあ!!』

自分の現状について少し考えていると、会場に設置されたスピーカーからプレゼント・マイクというヒーローの声が響いてくる。

あの人、常時ハイテンションでノリもいいが、微妙にタイプが違うせいで苦手だったりするんだよなあ、なんて思いつつ実況のプレゼント・マイクの言葉に耳を傾ける。

『第一競技は見れば分かる通り、障害物競走だ！目の前の道を障害物に対処しながら駆け抜けな!!』

それにしろな、と頷く。むしろ轟少年に問うたように、むしろそうでないなら何をやるのだ、という光景である。

だから重要なのはそのルールに、何が追加されているか、だ。

その考えを裏付けるように、そこから更にプレゼント・マイクの言葉は続けられる。

『たーだーし、だ!!この競技は五人一チームとする!!』

その言葉を聞いた段階で、両サイドにいた少年ズを小脇に抱える。それに二人が驚いた顔をしているが、説明している暇はない。

多分自分の予想が正しければ、競走だし速さがものを言う競技になるだろう。それはチームメンバー選びも、だ。

『チーム全員がゴールに着いた段階で、初めてそのチームのメンバーはゴールとなる!!』

続いて、偶然近場にいた耳郎を、知ってた顔ということで追加で回収し、あと一人を探す。

とりあえず、突然の追加情報にも動じず、爽やかな笑みを浮かべ続けている金髪の少年を回収しておく。いや、なんかどんな状況でも落ち着いて対処できそうだし。

『チームを組んだら出発地点付近の受付でメンバーを登録しな!その段階でそのチームは出発することを許可する!!』

プレゼント・マイクが言い終わると、突然地面が開き、そこからテーブルと椅子に座った教師陣が上がってくる。

無駄に金かかってんなあ、と呆れつつ、文句を言う連中をガン無視

しつつ、今上がってきた受付であろう場所へと走る。

『ちなみに他人の妨害はアリだぜ！まあそれで観客にどう思われるかは知ったこっちゃねえがな!! つーわけで、ハイ第一競技スタート!! とつととチーム組まないと出遅れるぞー!!』

開始の合図唐突過ぎるだろ、と思いつつも連れ出した四人に無理矢理名前を書かせて、スタートの許可を得てコースへと飛び出す。

「……で、そろそろ説明してくれるか?」

走りながらジト目を向けつつ、轟がそうやって問うてくる。それに仕方ないにやあ、と答えつつ、競技説明がああも唐突で、慌てさえしなければ誰もが気づけるだろうこの競技について説明することにする。

「いいか、この競技は何はともあれ速さが重要になるわけだ」

「ま、そうだね。障害物、競走だからね」

と、なるとの話である。確かに速度を出せるチーム構成を考えるのは手だ。半端なメンバーで時間をかえてゴールする羽目になるよりはいい。

だが、一人で速度を出し、全員を運べる個性の人間がいるならば。下手にメンバー選出に時間をかけるより、とつととメンバーを揃えた方が早く勝負をかけられる。

「……つまり、あんたは俺たちを一人で運ぶ宛てがあるってことか?」
「そういうこつた。あとは速度の出せる個性持ちとかの奪い合いが発生して、出発地点で荒れる可能性があったからな。そこから抜きたいのもあつた」

目元に隈のある少年、チーム登録の際に確認した名前は心操人使だったか。彼の質問に答えつつ、追加で補足もしておく。

それにチームメンバーたちは納得した様子は見せるが、ただ同時に金髪の少年、物間寧人は不快そうな顔を見せる。

「……僕はA組なんかと組みたくなかつたんだけど?」

確かにチーム登録する時に物間が一番ゴネたな、なんて思っていると、なんかと言われた今度はA組である轟と耳郎が不快そうな顔をする。

即席とは言え、下手にチーム内に不和を残すと後が面倒だな、と今後のことを考えて自分が仲を取り持たなければならぬか、と溜息を吐く。

「いいか、お前がA組をどう思おうが構いはしない」

その言葉に、A組の二人が文句ありげな顔をするが、それをガン無視して更に言葉を続ける。

「ただ本気でこの体育祭で優勝とか狙うならそれ捨てた方がいいぜ？」

「……何故？」

「究極的には個人戦だからだよ。最後にや自クラスの連中とも争うことになるんだ、クラスなんかの括りに拘っているようじゃ痛い目見るぜ？」

「……ま、一理あるね」

「敵だろうが利用できるもんは利用して、邪魔な連中は全部薙ぎ倒すくらいの気概で行こうぜ」

そう言つてやれば、こちらの気迫にあてられたのか、話していた相手である物間だけではなく、全員が気合いの入った顔になる。

……が、すぐに耳郎が呆れた顔になり、呟く。

「……思つてただけど、喚導つて時々凄いヴィランっぽくなるよね」
ハツハツハ、と耳郎の言葉に笑つて返す。いや、だつて実際元ヴィランなわけだし。笑つて誤魔化すしかなかった。

そして誤魔化しついでに、いい加減話もまとまったので、召喚の個性を発動させる。

「憑依召喚 戦車を駆る者!!」

ソール、という単語に痛む胸を押さえながら、憑依召喚を成立させる。

——オクソールとは、北欧神話における雷神トールの別名である。

トールは雷神として有名な神である。しかし、同時に戦車を操るものとしての性質も持ち合わせている。

今回憑依召喚したのは、その戦車を操るものとしての側面。

基本的に神様はそのスペックが高過ぎるので、一側面の召喚しかできない。

しかし逆に言えば、一側面であれば神様クラスのものも再現できてしまう、ということでもある。

憑依召喚に成功した段階で、視界に映る自分の黒髪が、赤みを帯びる。面倒なのと体育祭のルー尔的に、今回はジャージからの衣装変更はなし。

そしてここからが重要であり、トールの戦車を操るものとしての側面を召喚したことで、それに付随して召喚される戦車とそれを牽く二頭の山羊。

これが今回、先ほど言った一人でチームメンバーを運ぶ宛てである。戦車にチームメンバーを全員乗せてしまえば、残りのメンバーは障害物の対処に集中できる。また速度も、神話由来であるために申し分ない。

「……これなら確かに、全員運べるな」

「ただこれ、俺の戦闘能力が無くなるというデメリットがある」

チームメンバーを全員乗せながら、そう弱点を告げればえ、と戸惑った顔を返される。まあ突然弱点晒されればリアクションに困るよなあ、と思いつつ、ざっと自分の現状について説明する。

今、自分はトールを憑依召喚している状態である。しかしそれはあくまで、戦車を駆るトールであり、それ以外の部分は自分自身のキャパシティの関係で消し去っている。

故に、今手元にはトールの代名詞たるミョルニルが存在しないし、また超常的な力は再現できない、という制約から戦車を牽く二頭の山羊、タングリスニとタングニョーストの蘇生能力は使うことができない。

まあ、そもそもあの二頭の蘇生にはミョルニルが必要なので、どちらにしてもできないのだが。

そんな内容を聞かせれば、全員がこちらの現状理解できたようで、そんな状態でどうするのか、と目線で問うてくる。

それにこれは予想通りいい点数稼ぎになるな、と判断しつつ、それ

それぞれに指示を出していく。

「俺は戦車の操作に集中する必要があるし、戦力も低い。だから皆に手伝ってもらう必要がある」

「具体的には？」

「まずは轟。お前は基本的に対障害物を担当してほしい。性能の高さと、扱いやすさはお前が一番だからな」

「わかった」

「次にジロちゃん。イヤホンジャックの先端を戦車に刺して、振動からある程度の索敵はできるか？」

「大雑把にはなるけど、多分できる。あとジロちゃん言うな」

「それから、物間、個性は？」

「触れた相手の個性を五分間自由に使えるよ」

「そしたら随時メンバーに触れて、状況に応じて支援。心操は？」

「……洗脳、だ」

流れるように全員に指示を飛ばしていく中で、心操が言葉に詰まりながらそう答える。確かに、一般的な環境なら避けられる個性だろう。何時洗脳をかけられるか分かったものではないわけだし。

ただ、である。

「正直もつと昔に知り合いたかった……」

「……は？」

「いや、だってお前それ、普通に強個性じゃん。捕まえたヴィランから情報を引き出せるし、自分に洗脳かけられたら、自己強化もできるだろ？ そうじゃなくても仲間に洗脳かけて強化する支援型もいけるし」
あとは洗脳で組織を内部崩壊させたり、相対した強敵を自殺させた
り。

流石に、後半はヒーローの卵たちには言えないが、スラム街出身の自分からすれば、実に仲間にした個性だった。

彼がいたらどれだけ仕事が進んだか。あとどれだけスラム街の連中に悪戯できたか。

「……あんた、それ本気で言ってるのか？」

「普通に本気だけど？ ただ今回は使い道が限定されるな……。そして

ら、追い込まれたら俺に戦車を操りつつ、敵に勝って洗脳かけてくれ。それなら多少戦えるようになるだろ」

「妙な命令されるとか、考えないのか」

「少なくとも現状においてお前に俺たちを裏切る利点がねえ。いや、流石に自分を道連れにヒーロー科を蹴落とす、とか考えてたらどうしようもないけど」

「……変な奴」

それにしたって、このチームで他のヒーロー科チーム潰した方が早いし、と言えば心操から返ってきたのはそんな言葉。

確かに、ある種自分に変な奴なのだろう。スラム街、というか裏社会出身の自分からすれば、基本的に騙される奴が悪い、となるし。その理屈でいけば洗脳にかかる奴が悪いのだ。

だからさほど、自分的には気にすることではない。ただそれが表社会では一般的ではないのも理解しているので、変な奴と言われても否定できないのだが。

「つと、そろそろ後続が来たか」

「前もだな」

「これはウチが索敵するまでもないなあ……」

後ろからは速度重視のチームが既に来ている。そして正面からは巨大なロボットがこちらへと迫ってきている。前後を挟まれた形だ。

追い込まれた、と考えられなくもない状況でもある。ただ適当に集めたこの面子、存外悪くない面子であり、この程度ならさほど問題ではない。

「轟、前方の敵、凍らせられるか？」

「余裕だな」

「オーケー、ついでだ、後続の邪魔になるようにやっただれ。物間も、折角だから邪魔になるように個性使ってもいいぞ」

「任せろ」

「あはははーそら苦しめA組イ!!」

頷いて了承した轟が、一気に敵ロボットを凍らせ、それを崩すことで道を塞ぐ。そしてそれに続くように、物間が轟からコピーした個性

で、崩れた敵ロボットの隙間を更に凍らせることで補強する。

物間のA組に対するヘイト高過ぎねえ？とも思うが、とりあえず妨害に関するモチベが高いようなので放置。

これでとりあえずは第一関門は突破、同時に後続も多少、抑えられた。となると、次の問題は第二関門になってくる。

「ジロちゃん、なんか分かる？」

「待って……多分、だけど道が途切れてる？……違う、これ穴が空いてるみたい」

「細い道かなんかか？だったら、やっぱまた轟だな！」

「どうすればいい？」

「氷の道を作ってくれ。穴とかガン無視で行こう」

障害物があるのが、迂回してしまえば問題ない、という話だ。

こちらの指示に従った轟が作り出した氷の橋を、戦車に乗って駆け抜ける。

ただ後続もリカバリーが早いようで、眼下では穴の上に張られたロープを素直に渡るグループ。こちら同様何らかの形で飛び越える奴らが見える。

ちなみに、物間はひたすら氷を飛ばしてA組に妨害を行っていた。それでいいのかヒーロー志望。

「ジロちゃん、氷に乗る前まででいいから、穴の先でなんか気づいたことあった？」

「んー……正直、凄く曖昧だけど、何かが埋まってそうだった……かな？」

「それなら、このまま氷の道を走るのが無難だな。物間、一時的に轟とチェンジ」

「何故だい？」

「俺は続けても構わねえが……」

まあ確かに、このまま続けても問題はないかもしれない。ただ、存外個性を使う、というのは早いペースで体力を消耗するのだ。

後々、疲れで個性を制御し損ねたりしたら怖い。だから今のうちに対策を打っておきたい、という話になる。

「つーことで、心操。お前の洗脳ってかかったやつ意識って残せるのか？」

「そう指示すれば」

「んじや、轟に疲労を感じないように個性をかけてくれ」

疲労での制御ミスが嫌ならば、そもそもその疲労を感じなくなればいい。暴論染みたところはあるが、対処法の一つではある。

無論、感じなくなるだけであり、轟を限界まで酷使用する可能性もあるが、遠目に見えるゴールとの距離的に、轟の体力全てを使いきるほどではない。

今回に関しては、疲労を感じさせなくする、というのは手だ。

「……だ、そうだけどあんたはいいのか？」

「やってくれ。制御ミスなんか杞憂かもしれないが、打てる手は打っておきたい」

「そういうことを聞いてるんじやないんだが……」

轟のズレた答えに自分も苦笑しながら、心操によって轟に洗脳が施される。

一瞬だけ固まった轟だが、心操がすぐに指示を出し、その次の瞬間には眠りから覚めるようにして動き出す。

「……すげえ、本当に今までの疲れを全く感じない」

「あ、準備できた？ だったら早く物間と代わってくれない？ 今にも氷の道が崩れそうで」

「だ、大丈夫これ？ いきなり崩れてウチら落ちたりしない？」

「全く酷い言い草だなあ！ これだからA組は!!」

「A組関係ないだろ、つと」

轟が律義に物間の言葉に突っ込みつつ、氷の道を補強する。

結局、コピーして同レベルに個性を扱えるようになるうが、それを扱う経験がない以上、そのスペックは落ちるのだ。

事実、先ほどまでは戦車の移動する振動で崩れそうだった氷の道が、轟が補強した瞬間、全く揺らぐ不安定感が別次元になっている。

「それじゃあ物間は妨害に戻ってくれ」

「僕のこと随分な扱いだなあ、ん？ A組の底が知れる——」

「ほら、あそこにA組だけで構成されたチームがあるぞ」

「ハハハハハ！A組どもめ!!」

こちらを追い抜かしかねない勢いで迫る、爆豪率いるA組のみで構成されたチームを指させば、物間が凄烈な笑みを浮かべて攻撃にかか
る。

もはや情緒不安定過ぎて心配になってくるレベルだが、まあ最悪心
操に洗脳で止めてもらえばいい。

そんなことを考えながら、物間の攻撃を回避したことで地面に触れ
た爆豪が、地面からの爆発に飲み込まれるのを見る。

なるほど、仕掛けられていたのは地雷だったか、と知っている間に
ゴールへと突入し。

あっさりと即席チームで、第一競技の一位を飾った。

#26. Sports festival: Towerds the final competition

『さあさあ、次は第二種目……の前に一つお知らせだ!!』

障害物競走を全チームがゴールし、数分の休憩を段階で、実況のプレゼント・マイクからそんな言葉が発せられる。

よくプレゼント・マイクはそのテンションを維持できるよなあ、と呆れながら、楽しそうに大声で喋り続けるプレゼント・マイクの言葉に耳を傾ける。

『これ以降の競技は全て第一競技で組んだチームで参加してもらおう! 無論、最終種目に出場するのに必要なポイントもチームごとだ!!』

「……は?」

誰かがポツリとそう漏らしたのを皮切りに、会場内の生徒から戸惑いの声が上がりはじめ。確かに、事前情報なしなのだから戸惑うのも分かる。

ただ自分に関しては、可能性の一つとして考えてはいたので、さほど驚きはない。わざわざチームメンバーを申請して、記録されたのだからどこかのタイミングで再び使われる、程度には考えていた。

だからわざわざ物間とA組メンバーの間を取り持とうとしたり、心操の個性を褒めるような真似をしたのだ。普段であれば完全放置である。

『いきなりの情報に戸惑ってる暇はないぜ? なんてたつて敵の襲撃は何時だって唐突だからな、何事も即時対応!! つーわけで次の競技いくぜ!!』

そうして会場内の大型モニタに表示されるのは、『玉転がし』の四文字。競技自体は、一般的なものではある。

『基本ルールは玉を転がしてゴールへと持っていくだけ! ただし、スタート段階での玉は一つだけ! その玉をチームごとに奪い合ってもらうぜ!! 参加人数は各チーム三人ずつで——』

プレゼント・マイクから告げられる競技内容を聞きながら、自分たちのチームから出場する選手を選んだり、作戦を立てたりしていく。その中核になるのは、自分だ。自分が集めたチームであるし、何より中核になるように立ち回っている。

この体育祭における自分の目的は、何らかの形で体育祭を見ているヒーローたちの記憶に残り、できることならコネを作ることだ。

その場合、一番いいのは自分が有能であると示し、スカウトしたいと思わせることである。それに成功すれば、早ければ今日の体育祭終了後に声をかけられることすらあるだろう。何と言ったって、人材は有限であり、奪い合いになるのだから。

そして、有能というのは何も戦闘能力に限った話ではない。

支援能力の高さや、平時における個性の応用力。そして指揮能力の高さ。

様々な要素でアピールする必要がある以上、できるだけ多くアピールの機会を作る必要があった。

——そんな風に打算もありながら、いくつかの競技をチームで協力して攻略していく。

自分なんかは綱引きに出場して、憑依召喚で力の強いものを憑依させることで勝ったり。

あとはパンチングマシン、とかいうイロモノ競技で、絆憑依でヤク中の個性を使ったりした。流石にクスリは怖いので、出力は落ちるが、煙草で代用になったが。

そんな風に午前中いっぱいを使って、多くの競技を終わらせる。

そして、その結果が集計され、今、発表の時を迎えていた。

『さあさあ、ここまでの結果発表だ！ つつても最終種目出場者を決めるだけだからサクサクといくぜ!!』

最終種目だけは、毎年恒例で、トーナメント方式のシンプルな一対一の試合になる。

その年によって、最終種目に出れる人数は変化するが、今回はチームごとの順位なので上位四チームの計二十人。

そして出場する二十人の中から四人、教師陣の判断により一回戦の

シード枠が決められる。

だからまあ、別に一位を取らなければならぬわけではないわけではなかったのだが。

『一位は、ジロちゃんとか愉快的なヤベー奴ら〃チーム！いややっぱふざけたチーム名だなオイ!!』

「ほんと、なんでこんなチーム名が通ったのかな……!」

恥ずかしさから顔を覆う耳郎を笑いつつ、会場の観客たちに向かって手を振る。

まあ面子的に一位以外ありえない、という話で。アピールという観点的にも、手を抜く理由がないということだった。

ちなみに、チーム名は自分がチーム登録時にメンバーには黙って登録した。

いや、だって心操は目つき悪いし、物間はなんやかんやで中身ヤバかったし。轟は天然で、自分は言わずもがな。存外、ピッタリの名前だと思うのだが、耳郎的にはお気に召さないようだった。

『二位は〃爆豪〃チーム！こっちは普通の名前で安心するようになつまらないような!!』

そこから、最下位までチーム名が呼ばれていく。

流星に、というか上位のチームは所属するA組の人数が多い。特に二位の爆豪チームなんて、メンバーが全員A組だ。まあ彼の場合は、その性格に慣れているA組しか対応できなかったのだろうが。

まあこれは、実戦の経験、というのはそれだけで多大な経験値となるということの証左だろう。

『さて、次は午後からの最終種目！そのトーナメント表の発表だ!!』

画面に表示されるトーナメント表から、自分の名前を探す……:までもなく。一番左上、分かりやすい位置に自分の名前は存在していた。

もちろん、予想はしていたが、シード枠に割り振られている。だから一回戦目は試合はなく、二回戦目からが自分の出場タイミングになる。

そしてその相手となる可能性があるのは。

「緑谷か、心操か」

緑谷の方はどうでもいいとして。早くも元チームメイトと戦うことになるとは。

まあ別に、元チームメイトだからといって遠慮とか、何かそういうのがあるわけではないのだが。敵になるなら躊躇いもなく潰すだけである。

そして緑谷はクラスメイトであるため。心操も元チームメイトであるため、個性は分かっているし、メタは張りやすい。

三回戦以降は、それ以前の試合を見れば対策は練れるし、充分優勝は狙えるだろう。

そうやって最終種目について考えているうちに、プレゼント・マイクの説明も終わって昼休憩に入る。

相変わらず、学校生活では基本的にルリには干渉しないスタンスを貫いている。そして同時に、特別親しい人間を自分は作っていない。

故に、下手をすると発生するのはぼっち飯である。

「そしてそれは嫌だから、一緒にご飯食べようぜオールマイト！」

「相変わらず君の行動は読めないね!!」

様々な人に聞いて回りながら、オールマイトを探せば、人気のない階段でその姿を見つける。

オールマイトは目立つ分、少し聞き込みすれば分かるから楽だよなあ、なんて思っているとオールマイトより奥。より暗い位置にで揺れる、炎に気づく。

「君は……」

「エンデヴァー……」

オールマイトの次に強いとされる、N.O. 2ヒーローのエンデヴァー。その個性こそソールの下位互換でこそあるが、それを補って余りある技量でN.O. 2の地位にいる、精神論のオールマイトとはまた別ベクトルの化物。

オールマイトを精神の化物と称するなら、技術の化物。それが自分の知る、エンデヴァーというヒーローだ。

エンデヴァーは事件解決数史上最多を誇るが、その苛烈とも言えるやり方から、嫌っている一般人も多い。

しかし、スラム街出身の自分からすると、その目的のために最低限のルール以外は、手段を選ばないスタイルはシンパシーのようなものを感じるころがあった。

そう、あくまで『シンパシーのようなものを感じるころがあった』だ。

今こうして、直接エンデヴァーに相對してなんとなく。本当になんとかなくだがざわつきのようなものを覚える。

直感的に、エンデヴァーとはどこか相容れない——そんなものを感じながら、それでも味方に付けられれば強い手札となるので、あくまでにこやかに挨拶をする。

「え、つと。どうも、はじめましてエンデヴァーさん。体育祭見てたなら知ってるかもしれませんが、改めて。喚導想也です」

「……ん、ああ、はじめまして、エンデヴァーだ」
「喚導くん、私の時と態度違い過ぎない？」

まあオールマイトには遠慮しないと決めているし、と内心だけで呟きながら表面ではオールマイトにガン無視を決め込む。

そんな様子のこちらに、エンデヴァーは何を思ったのか、一つ頷くと、こちらに背を向けて去りながら言葉だけを置いていく。

「君にも期待しているよ。ウチの焦凍のいい経験値になつてくれ」
ブチツ、と。頭の中で何かが切れるのを自覚する。

既にエンデヴァーの姿は、階段の先の曲がり角に消えている。しかしそうか、あくまでエンデヴァーにとって自分は、息子の経験値ではないのか。

基本的には他人からの評価など気にしない身だが、流石にここまで言われて黙っているわけにはいかない。

轟には悪いが、もし試合で当たったら、ちよつと、八つ当たりで遊んでやることにする。

「フフ……フハハハ……」

「か、喚導くん……？おーい？」



何故かやたらと大丈夫か、と問うてくるオールマイトと昼食を済ませ、会場へと戻る道すがら。ふと、聞こえてきた声に足を止める。これは、轟と緑谷の声だろうか。

「——個性婚、って知ってるか」

自分と同じように、偶然にも近くを通りがかり、思わず聞き耳を立てていたららしい爆豪を騒がないように抑えつつ、轟と緑谷の会話に耳を傾ければ、聞こえてきたのはそんな言葉だった。

そしてそこから続けられるように語られたのは、実に胸糞悪い話だった。

——轟焦凍は、オールマイトを超えるために作られた子供である。

大雑把にまとめれば、そういう話だった。エンデヴァーがオールマイトを超えられなかったため、超えられる子供を作る。

元々、存在の知られていなかったソールのような個性を除けば、地上最強の炎熱系とも言われる個性だ。その上で、強力な個性、轟の個性から察するに氷結系統の個性を持った女性を妻とし、子供を作る。

そうすれば、上手くいけば両方の個性を持った子供が生まれる。それが個性婚であり、その結果生まれてきたのが轟焦凍、ということだった。

ああ、なるほど、確かに手段の一つではあるだろう。次世代に託す、それ自体はきつと間違った選択肢ではない。

轟焦凍を生まれさせ、そこで願いを託したのなら、自分は気にしなかった。

だが、エンデヴァーは願いを押し付けた。オールマイトを超えろと強制したのだ。

子供はテメーの道具じゃねえんだぞ。それは自分をスラム街へと捨てたクソ親どもと同じだ。

自分に都合がいいように無理矢理教育する。自分に都合がいいように邪魔だから捨てる。

子供に対してやったことが違うだけで、大元は子供を自分に都合が

良いように扱っているだけだ。それで苦しんだ子供がどれだけいるか。

エンデヴァーと相対した時、何故ああもぎわついたのかを、ここで理解する。

ああ、それは相容れないわけだ。自分の本気で嫌いなものの一つなのだから。

スラム街で自分が苦勞を味わい、そして同じく辛い思いをした子供たちを見てきた自分には、身勝手な親というのはどうしても許すことのできない存在だった。

「……予定変更」

先ほどまでは轟と試合で当たった場合、八つ当たりするつもりだったが。今の話を聞いたら、そうも言っていられなくなった。

やっぱり、巻き込まれる轟には申し訳ないのだが。試合を通して、エンデヴァーに喧嘩を売る。

なに、別に自分の価値観をエンデヴァーに押し付ける気はない。ただただ気に食わないから喧嘩を売る、それだけの話だ。

流星の内容に、黙り込んだ爆豪を置いて、会場へと戻る。

自分の実力であればまず負けはしないし、轟も同様。順当に行けば準決勝には轟とあたるだろう。

とはいえ、それで油断して足元を掬われてはたまったものじゃない。だから二回戦、三回戦であたることになる人には悪いが、少しばかり本気で相手させてもらおう。

なんせ————珍しく、本気でエンデヴァーにはイラついているのだ。

#27. I z u k u , s f i r s t g a m e .

選手用の通路を通り、ステージへと向かう。

無論、それに緊張するところはある。緑谷出久にとって、他者から向けられる視線とは、侮蔑の視線だ。それは過去の経験から、深く根付いている感覚だ。

最近で言えば、認めてくれる友人も増えて、多少改善こそしたが、それでもやはり恐怖は抜けない。

——— だけど、君が来たと知らしめろと言われた。

自分の背中を押してくれる人がいる。それだけで恐怖を飲み込んで、前へ踏み出すことができる。それが緑谷出久という人間だった。故に未だ恐怖と緊張を抱えたままではあるが、ステージの上へと歩み出る。

途端、周囲から向けられる多くの視線に、怯みこそすれど気合を入れ直すことで平静を保つ。

そうやって正面に視線を向ければ、同じくこちらを見つめてくる対戦相手が見える。

心操人使。出久にとって、未知の相手となる。

いいや、出久だけではない。彼のチームメイト以外、この会場の誰もが目の前の少年の個性を知らないはずだ。

何故なら、彼は今日この時まで、チーム全員出場競技以外に出ていない。

出場した競技でさえも、補助に徹してその実力を見せなかった。

唯一分かつているのは、支援ができる個性だ、ということだろうか。理屈は分からないが、彼が何かしてから、彼のチームメイトの動きがよくなったことが何度かあった。

だけど個性は、工夫次第で多くの使い道を生み出すことができるものだ。支援をしていたからと直接戦闘ができないと判断するのは早計である、と出久は長年の研究でよく知っていた。

そのため、相手をよく観察し、しっかりと警戒する。

出久には経験が少ない。学生である以上仕方がないことではある

のだが、未知の敵と戦う時、予想外のことに対応する時、経験から即応することができない。

けれど代わりに、出久には長年の研究がある。研究のデータから、相手の行動とそれに対する対応を予測することは出来る。

故に、思考を巡らせる。出久の強みはそのオールマイトから引き継いだ個性ではない。長年集めたデータと、それを活かせる柔軟な思考だと自覚していた。

そしてそれに、出久は集中し過ぎていた。

『さあさあお待ちさせたなあ！最終種目、第一試合！緑谷出久VS心操人使!!試合、スタアアアーートオ!!』

「なあ、アンタ、緑谷出久だっけか？折角の大舞台だ、いい試合にしようぜ？」

「あ、うん。こつちこそよろしく——」

あまりにも自然に、紳士的に告げられた言葉に。無意識的に返事をしてしまった。

刹那、薄れる意識。自己の認識は揺らいでいない。しかし、動こうという意識が肉体に反映されない。まるで肉体の制御権が自分から失われたかのような。

それを理解した時、出久は現状もまた理解し、己の迂闊さを呪った。催眠、洗脳、そういった類いの対象を操る個性。ただ身体を動かさないならともかく、動こうという意志に肉体が反応しないのであれば、可能性としては拘束系の個性より高いだろう。

そして恐らくトリガーは先程の会話。思考と動きへの警戒へ意識を割き過ぎた出久のミスだった。

「悪いな、少し汚いやり口かもしれないが、こつちも本気なんだ。そのまま場外へ歩いて行け”」

心操は謝る必要は無いと出久は思う。誰もが本気で、打てる手を打つのは全力の証でしかない。

だからこれは、騙し討ちのようなことをした心操が悪いのではなく。まんまと策にかかった自らが悪い話。

そんなことを思いつつも、出久の思考は同時に、体が勝手に場外へ

と向かうこの状況を打破する術を求めて回転を続ける。

—— 将来の為のヒーロー分析ノートNo. 9、32ページ。

催眠及び洗脳系個性は直接的な戦闘能力こそ低い、その厄介さは飛び抜けている。一度くれば、それだけで相手の言いなりになってしまうからだ。

唯一の弱点とも言えるポイントは、この系統の個性は外部からの衝撃に弱い場合が多いこと。無論、全ての催眠及び洗脳系個性がそうというわけではないが、その確率が高いのは事実である。

故に、そういった相手と相対する場合は必ず仲間を潜伏させておくなど、外部から衝撃を与える術を用意しておくことが重要だろう。

じゃあ今はもう手遅れじゃないか。

口が動かないので、内心で出久は思わず毒づいた。

一対一の試合である以上、誰かが出久に衝撃を与えてくれることは期待できない。

そうなれば、自分で自分に衝撃を与えるしか出久には手が残されていないのだが、もちろんそんな仕込みはしていない。この場で新たな手を思いつくしかない状況だった。

出久の手札は、オールマイトから受け継いだワン・フォー・オールしか存在しない。突き詰めれば、これをどこまで上手く使えるかが出久の強さに繋がってくる。

そのため、日頃からワン・フォー・オールでできることは研究しているし、発動さえできればこの状況をどうにかできる術も、思い浮かんでいる。

だが、そもそもその発動ができない。一般的に、個性も身体機能の一つとして認知されている。それは、心操のような身体に影響を及ぼす個性が、対象の個性にまで効くからだ。

つまり、今出久は個性の発動権限すら、心操に奪われている状況になる。

さてどうする、と出久は考える。考えて、考えて、考えて。個性を発動できなければどうしようもないという結論しか出ない。

一瞬でいい、個性を、ワン・フォー・オールを発動さえできれば――

——そう、願い。

——ぞわりと、鳥肌が立った。

出久が向かう先。選手の入場用通路に誰かがいる。いいや、分かる。それが見えているのは自分だけだ。そしてそれらが、一体何者なのかもまた、分かる。

同じ力を持つ者同士のシンパシーか、あるいは自分の内にいる存在だからか。理由は何であれ、今、出久には歴代のワン・フォー・オール継承者達の姿が見えていた。その中にはもちろん、あの特徴的なV字の髪型も見える。

そんな彼らが、出久を見ている。それだけ、ただそれだけだ。けどそれだけで、出久の中には確かな火が灯った。

瞬間、心操洗脳の個性を出久ワン・フォー・オールの個性が上回る。

洗脳の個性は解除できていない。だけど、それを打ち破るだけのエネルギーが、ワン・フォー・オールとして発せられる。

そしてそれを自覚した出久は、そのエネルギーを即座に制御、圧縮し、左手の小指の先端部であえて暴発させる。

圧縮したが故に、規模が小さい、しかしそれでも威力の高い爆発が小指の先で起きる。これでもう、左手の小指の第一関節より先端は壊れて使えない。その代わりに、洗脳が解けた。

もう既に、自由に身体が動かさず、思考も明瞭になっている。

ようやく、こちらでも戦うことができる、と出久は振り返りながら心操へと視線を向ける。

心操は出久が洗脳の個性を解除したことに驚いてはいたようだが、すぐに構え直している。それは格闘戦を意識したもので、一度使ったからには洗脳は通じないと判断したからだろう。

ただ、そう油断させて戦闘中に唐突に会話を挟んでくる可能性もある。だから常に、頭の片隅では相手の個性についてを意識するようにしておく。

一歩、前へ。

ワン・フォー・オールは使わない。あれは出力が高過ぎて、人を使うには些か物騒だ。だから、出久は鍛えた技術のみで前へと出る。

クラスメイトで年上の、喚導想也が一步で数メートルの距離を詰めるのを、出久は訓練で何度か目にしている。普段のノリが軽いため、出久からすると少しばかり苦手な相手ではあったが、未だワン・フォー・オールを制御し切れていない出久にとってそれは必要な技術であるように思えたから、過去に少し話したことがある。

当時は残念ながら面倒だと一蹴されて教えてもらえなかったが、教えることのできる雄英の教師を紹介してもらったために、こうしてその技術を、出久は自らのものとして修めていた。

純粋な脚力と技術で、心操との間合いを詰める。そしてその勢いのまま、右のストレート。

そこから上下反転する視界。

「かはっ……！」

勢いを利用され、投げられたのだと理解する頃には、背中に強い痛みと、肺の中の空気が吐き出されていた。

「俺は直接攻撃系の個性じゃないんだ。格闘戦は鍛えてるに決まっているだろ」

また、油断したと出久は内心で自身へと怒りを向ける。相手の個性に警戒するあまり、相手が格闘もできることを考慮していなかった。

何が柔軟な思考だ、と反省しながらも、しかし、やはり出久は同時にここからどう動くかも絶えず考え続ける。

ワン・フォー・オールは使わない、というのはなしに変える。この体育祭、最終種目まで残っているような人は、皆持てる力の全てを使って戦っているのだ。出し惜しみをしている場合ではない。

だから、瞬間的にワン・フォー・オールを腕へと発動する。出力は約8%。

地面を叩くようにして、倒れた自らの身体を跳ね上げる。そしてそこから身を捻り、心操の頭へ右足での蹴りを一撃。

出久が倒れたことで油断していたのか、その一撃は心操へ綺麗に入り、出久はその衝撃を利用して一度間合いを取る。

既にワン・フォー・オールは解いている。出久はもう、出力10%までなら数分の間、発動しその身に纏わせ続けることができる。それ

は、出久自身が無個性だと発覚してなお、ヒーローを諦めきれず、ワン・フォー・オールを得るまでずっと基礎鍛錬を続けたいたのが偶然にも実を結んだものだ。

しかし、だからと言って常にワン・フォー・オールを発動させ続けていたら、体力も肉体も耐えきれない。故に、出久は必要な時のみワン・フォー・オールを使う、瞬間的なオンオフ制御を身につけていた。それに加え、出久はどんな相手なら、どれだけの出力まで耐えられるかをオールマイトから聞き出している。そのため、こういった場でも相手を殺してしまう心配は、事故以外ではない。

オールマイトの話と、敵^{ヴィラン}連合が襲来した時の経験から、心操が耐えられるのは、直接攻撃で5%。間接的な攻撃で10%で、やり方によつては20%までいけるだろう、と出久は予測を立てる。

そして心操が格闘術に覚えがあるなら、直接攻撃よりも間接的な方法で、場外へ吹き飛ばすのを優先した方がいいだろう。

そこまで考えた出久は、再び前へと踏み出す。ただし、今度は姿勢を低くし、下方へと心操の視線を誘導。そこから両足に瞬間的にワン・フォー・オールを発動し、身体を起こしながら強引なステップ。急激な移動により、心操の視線を振り切る。

移動した先は、拳の間合いには一歩足りない程度。あるいは、扱う武器が剣だったならば、ちようどこの程度の間合いだったのかもしれない。

そんなことを思いながら、出久は右腕へワン・フォー・オールを二重に発動する。

——オールマイトは、全盛期はともかく、現在はワン・フォー・オール^{スルフォーム}の力でトゥルーフォームからマッスルフォームへと変化している。

それはつまり、自らの肉体を強化しているということであり、マッスルフォームでは攻撃力だけではなく、防御力も上がっているという点を含めて、ワン・フォー・オール^{スルフォーム}の強化なのだ。

そう、ワン・フォー・オールには本来、肉体の防御力を上げる力もあるはずなのだ。

あくまで出久がその力を使いこなせていないため、一定出力以上で肉体が壊れてしまっているのが現状だ。

だから、まずは右手の内部に出力10%のワン・フォー・オールを発動し、保護をかける。続いて、その上から肌の表面に纏うようにして、出力20%でワン・フォー・オールを発動。反動で吹き飛ばないように、両足にも10%でワン・フォー・オールを発動し、右腕を振りかぶる。

「O・F・A瞬間出力20%——TEXAS、SMASH!!」

狙う先は心操ではなく、心操と出久の間の地面。斜め上方向から、右拳を叩きつけることで、衝撃と破壊によって生まれる瓦礫を心操の方へと飛ばす。

「ぐあ——」

ワン・フォー・オールの出力20%とはつまり、オールマイトの一撃の20%の威力ということである。防御に特化した個性があるならともかく、それだけの威力に生身で耐えられる学生はそうはいない。

故に当然の結末として、心操がその威力に耐えられず、場外へと吹き飛ばされるのを、出久は軽く痺れる右腕を擦りつつ見ていた。

「心操くん、場外!!」

『二回戦進出は緑谷出久だア——!!』

審判と実況が告げる己の勝利を、どこか呆けながら出久は聞く。自分に油断があった、相手は実力者だった。その上で今、自分が勝ったのだという現実には、出久自身の思考が追いついていない状態だった。けれど、と出久は自らの頬を叩き、気合を入れ直す。審判が告げた以上、出久が勝利したのは確実であり、かと言ってそれに浮かれるわけにもいかない。まだまだ、試合は続くのだ。

油断も、慢心もするわけにはいかない。次は今回よりも更にキツイ試合になるだろうから。今のうちに、今までのデータから対策を練る必要がある。

——そう、次の相手はシード枠。あの喚導想也との戦いなのだから。

#28. I z u k u , s e c o n d g a m e .

緑谷出久にとって、次の対戦相手である喚導想也はよく分からない人間である。

出久から見た喚導は、日頃からノリの軽い、些か出久にはついていくのが難しいテンションの人間だ。けれどその実力はクラスの中で飛び抜けており、実際戦闘訓練においては、格上の仮想敵^{ライバル}として参加することが多い。そして放課後には、雄英の教師陣と訓練をしている姿を見かけることもあり、普段の性格に反し、ストイックな人間であると、出久は認識していた。

しかし、それでは喚導の本質を全く捉えていないことを、出久は自覚していた。

出久たちよりも歳上で、現役ヒーローでもおかしくない実力。過去に何かがあり、その結果として雄英にいるのは出久でなくても予想できることだ。

それに加え、時々見せる、痛みを堪えるかのような仕草に、クラスメイトのアウェイクを見る時の、どこか眩しいものを見るかのような顔。何かを抱えていると告白しているようなものだった。

出久は基本的に、困っている人間を放っておけない人間だ。だから、何かを抱えているであろう喚導のことも、力になりたいと話しかけたこともある。

だけど、喚導は決してそれを話すことはなく、また話術も向こうの方が上であるために、煙に巻かれてしまって結局何もできなかった。

だから、出久が知っているのは喚導の表面部分だけだった。彼が何を思い、何を抱えて雄英にいるのか。そういったものを出久は全くと言っていいほど知らない。

多分、ヒーローになりたいからではないのだろう、という程度だ。ヒーローになる必要があるから、仕方なくなるだけというのが出久の予想だ。

それはあくまで現状知っている情報からの予想でしかない。それでも、もしそれが当たっていたら、出久は喚導には負けたくないと思

う。

何か事情があつて、ヒーローになるのは必要なことなのかもしれない。だけど、他の皆はヒーローに憧れて、ヒーローになりたくて雄英に、この場に立っているのだ。

喚導の目的を否定する気はないが、出久は喚導に負けてしまえば、自分たちがヒーローを目指す理由が喚導のものより劣っているように思えて、無性に負けたくないと感じていた。

まあとは言つても。それはあくまで出久の勝手な感情だ。負けたくないという部分以外、全て胸の内にとまっておくことにする。

譲りたくない思いがあるのなら、ただ勝てばいい。

そう気合を入れ直し、出久は選手用通路からステージへと入場する。

入場すると同時に出久に向けられる多くの視線は、まだ二回目では慣れはしない。それでも、一回戦目に比べればいくらかマシにはなっている。だから適度にそれらの視線を無視し、ただ、目の前の相手に集中する。

フィールド上で、数メートルの距離を保って相對するのは、対戦相手の喚導想也だ。こちらよりも十センチ以上高い身長。ジャージの上着を腰に巻き、半袖の体操服となった上半身からは、圧縮された上でなお主張する筋肉が見える。教員から許可を取ったのか、午前はつけていなかったゴーグルをつけており、その表情を窺い知ることにはできない。

しかし、その身に纏う雰囲気がいつもと違うように出久は感じた。いつもは、ふわふわしているというか、ノリが軽くて掴みどころがない、というのが出久が感じている喚導の雰囲気だ。

それに対し今は、何と言うべきか。余裕のある佇まい、といったらしいのだろうか。どこか人からは外れた、超越者染みた空気を纏っているように出久は感じた。

それ自体は決して、何ら危険なものではないはずだ。時々見える不安定さが全くないのだから、むしろ安心すべきはずなのだ。

けれど、と出久は改めて喚導の顔を見る。

ゴーグルに隠れて見えない表情。唯一見える口元は、余裕の笑みを浮かべているが、出久からはそれらが全て内心を隠すためのものに見えて仕方がなかった。

「……おいしい、男にそんな熱烈に見つめられても、オニーサン、リアクションに困るんだけど?」

そのいつも通りであるはずの軽口すらも、どこか薄ら寒く感じるのは、一体何故なのか。

出久はさほど己の勘を信じるようなタイプではないけれども、今回のこれは無視してはいけなような気が無性にしていた。

故に、その言葉は自然と口から零れ出ていた。

「……喚導さん」

「あー、別に敬称とか要らないって言ってるのに緑谷は相変わらずだなア……。で? 試合前に何?」

「僕が試合に勝ったら、一つでいいので、質問に正直に答えてもらえませんか?」

「ん、別にいいぞ」

「……え」

今までが頑なにはぐらかされていただけに、正直この条件ですら説得に時間がかかると出久は思っていたのだが。思いのほかあっさりとした許可に、思わず出久の口から間抜けな声が漏れる。

しかしそんな出久を気にした様子もなく、喚導は一人、勝手に話を進めていく。

「あー、でもそれじゃあつまんないか……。おっし、そしたら出久が勝ったら実現可能な範囲で、何か一つ言うこと聞いてやるよ」

「えっ、いいいの!?!」

思わず、出久が素でそう問いかけるが、喚導は笑みを浮かべたままそれに頷いて返す。しかしこれは僥倖だ。もし、本当に一つ言うことを聞かせられるとするのなら、例えば――

「――例えば、緑谷出久に、喚導想也を救わせろ、とかな?」

――その、思考を読まれ、笑みと共に放たれた言葉に、出久は思い違いをしていたことに気づかされる。

「無論、勝てるもんならなア?」

喚導は、最初から欠片も負けると思っていないのだ。

絶対に出久に負けることはないと判断したからこそ、こんな条件を出せたのだろう。

あるいは。本気で己のことを救いたいのなら、それだけの力を示せ、ということ喚導は言っているのかもしれない。

いずれにしても、出久の想いを通すためには、真正面から喚導に勝つ必要があることだけは分かった。

正直なところ、出久は喚導に勝つことがほとんど不可能であることを自覚していた。喚導の個性が、あまりに強個性過ぎるからだ。相手に応じて召喚対象を変えれば、それだけで有利を取れる。また、本人の経験か、あるいは召喚対象の経験も憑依できるのかは定かではないが、喚導は召喚対象の力を有効的に扱っている。

一応、教師陣の方から制限も入っているが、その制限だって乱戦ならともかく、一対一の最終種目では意味を為さない制限だ。

だから、喚導に勝つのはほとんど無理だと出久は考えている。

「……言ったからね?」

だけど。その程度で諦めるほど、緑谷出久という人間は賢くはない。

「意地でも勝って、君が抱えるものを全部救ってみせる……!!」

どれだけ確率が低かろうと。たった一パーセントに賭けて、想いを貫こうとする。それが、緑谷出久だ。

「だから、君に勝つ!!」

それが、緑谷出久が憧れたヒーローだ。

「ハッ、上等。やれるもんならやってみな、ヒーローの卵さんよオ!!」

『——喚導想也VS緑谷出久!!STARRT!!』

「O・F・A、フルカウル100%!!」

「憑依召喚 マグニ “!!”」

開始の合図直後、出久はすぐにワン・フォー・オールを発動し、接近し速攻をかけることで召喚が為される前に仕掛けようとする。しかし流石にどうか、その程度の攻略法で何とかなるわけもなく、

バックステップで距離を保たれたまま喚導の召喚が成立してしまふ。

見かけ上は何も変わらず。しかし、憑依召喚、という言葉が聞こえた以上、ブラフの可能性を考慮しつつも、召喚は為されていると見て行動すべきだろう。生憎、喚導が言ったマグニ、という存在に思い当たるものがないのが難点だ、と出久は内心での警戒度を上げる。

だが、下手に先手を許し、喚導相手にペースを握られるのもマズいというのも、出久は理解していた。故に、取る行動は、

「前に、出るッ！」

警戒しつつ、先手を取る。ワン・フォー・オールと、歩法の合わせ技。一步で、高速で喚導との間合いを詰める。そこから更にワン・フォー・オールの出力を利用してのステップ。

ここまでは心操相手にも使った流れ。だが、一度見せた戦い方に、喚導が対応を用意してはいないとは思えない。故に、もうワンステップを挟み、喚導の側面から、背面へと移動する。

そして出久は喚導相手に加減をする余裕などないと認識しているため、遠慮なくワン・フォー・オールを100%の出力で叩き込もうとする。

しかしそれですら、出久は喚導には対応される可能性が高いと判断しており、事実、それは間違った考えではなかった。

「——おおら、よっとオー！」

「んなっ!？」

ただ、喚導の対応はあまりにも予想外に過ぎた。

体捌きで素早く後ろへ反転し、その勢いを乗せた拳を出久の拳と打ち合わせる。無論、本来であれば、ワン・フォー・オールに対してそんなことをするなど、例えば100%程度の出力であっても自殺行為だ。

だが、結果として起きたのは、出久が打ち負けるといふ事態だった。ワン・フォー・オールが、オールマイトの100%が打ち負けたのだ。その事実が出久に大きな衝撃となつて襲い掛かるが——けれど、驚いている暇はないと意識を切り替える。何故なら、既に打ち負け、軽く吹き飛んだ出久に喚導が距離を詰めてきていたからだ。

ワン・フォー・オールのパワーを利用し、後ろへと吹き飛ぶ身体を

無理矢理止める。そして喚導から打ち込まれる拳を、側面から叩くことで逸らし、回避する。

いくら打ち負けたとはいえ、感触的にそれほどパワーに差があったわけではない。ワン・フォー・オールのパワーで側面から叩けば簡単に逸らせる、という出久の読みは間違っていなかった。

けれど、と出久は歯噛みする。

完全に喚導にペースを握られたため、現状後手に回り防御することしかできない。

左肩を狙った一撃を、左手の裏拳で弾く。腹部を狙ってきた拳を、右の掌で受け流した。拳の連撃に隠すように挟まれた、出久の脛を狙ったローキックをステップで回避する。

一撃一撃が当たればこちらの動きが鈍るような場所を狙ってきている。一撃でも当たればマズい、と冷や汗が流れるのを出久は自覚する。

しかも、出久の防御のテンポよりも、喚導の攻撃のテンポの方が早い。徐々にズレはじめ、逸らし切れずに掠り始めている。出力は向こうの方が下だが、一撃から一撃への繋ぎが上手いため、攻撃のペースに無駄がなく、速いのだ。

出来るだけ早く、この状況を改善する必要があるが出久にはあった。取れる手段は、さほど多くない。攻撃が連続でくるために、出久が動ける範囲が少ないのだ。

だから小さな動きで、簡単にできる動き。つまり、前に出る。

「ああああ!!」

瞬間的にワン・フォー・オールの出力を20%まで引き上げ、それを全て肉体の防衛へと回す。高出力に体が軋むが、一瞬であればそれに20%まで耐えられるのは確認済み。

喚導の右拳を腹部に受ける代わりに、出久も、喚導の顔面に向かって右拳を振り抜こうとし。

右腕を、空いている左手で掴まれた。

だけど、それは出久の想定範囲内だ。

動きが制限され、取れる手段が少なくなるということは、動きが読

まれやすくなるということである。だから間違いない。喚導はこちらの行動を予測し、対応してくると最初から出久は判断していた。

同時に、その上でこの状況を打破するのであれば、喚導の予想外の一手を撃つか。あるいは、対応された上でそれを超える必要があると考えるもいた。

そして出久が選んだのは、後者。例え対応されたとしても、その上でこちらはそれを超えていく——！

「これ、ならッ！」

掴まれた右腕を支点に、地面を蹴って空中で逆さまになる。そのまま、宙で身を捻り、虚空へ向けて拳を振るう。

「New Hampshire SMASH!!」

出久は過去のオールマイトの戦闘を、動画で残されている範囲でだけが全て見て、記憶している。そしてその時に使われた技も、その原理も。

その中でも、つい最近扱えるようになった技。一瞬のみとはいえ、20%を扱えるようになったことでもようやく使えるようになったその技。

すなわち、風圧を飛ばす一撃。

これにより、出久は風圧を利用して、空中において高速で移動することができる。そして喚導が出久の右腕を掴んでいる今。喚導を連れられたまま、空中を移動する。

「このまま場外に引きずり出す……！」

二人ともフィールドから出た場合、敗北になるのは先に地面についた方だ。故に、着地の瞬間が勝負になる。

出久はその瞬間に向けて神経を研ぎ澄まし。

「——なるほど、こうか」

流れる景色が、反転した。

急激に今までの方向とは真逆に流れていく景色に、出久は状況が理解できない。

いいや、状況自体は理解できている。簡単な話だ、今までは進んでいる方向が逆になった。だが問題は、何故逆になった——!?

「ちよつと、コツがいる……けど、これ、使いこなせば便利だな」
聞こえてきた言葉に、思わず喚導を見れば、そこには驚愕の光景が広がっていた。

喚導が、虚空に蹴りを出し、その風圧で体勢を変えている。

それは先ほど、出久が放った一撃と同じだった。いや、それ以上だ。確かに、多少移動した後で勢いが落ちた分、逆方向へ進路を変えること自体は難しくない。しかし出久は吹き飛ぶように移動するだけならできて、喚導が行った姿勢制御のような細かい動きはできはしなかった。

しかも喚導の発言から鑑みるに、この一瞬でその感覚を掴んだというのか。

「普段の肉体制御の応用だな。——んじや、俺の勝ちつてことで」

再度、風圧で移動を試みようとするが、心操戦でも20%の出力を出したために、出久の肉体が悲鳴を上げて即座に出すことができない。

そのため、抵抗もできず、喚導に投げられるまま、背中に衝撃が叩き込まれる。見れば、すぐそばにあるフィールドではない地面と、風圧でフィールド上へと戻る喚導の姿があった。

——つまり、出久の敗北であった。

#29. Shouto's third game.

さて、と轟焦凍は思案する。

シード枠から、二回の試合を経て無事に勝ち上がった焦凍だったが、次の試合はこれまでのように簡単にはいかないだろう、と考え込んでいた。

あの超パワーを持つ緑谷出久を、真正面から打ち破った喚導想也という男。午前の競技ではチームも組んだが、複数人で何かにあたることに慣れていたような節もあった。素性といい、色々謎が多い男だとは、焦凍も思う。

ただ、焦凍からすればさほど、その素性については重要ではない。今回の体育祭においての焦凍の目的は、エンデヴァーを否定することだ。熱^左を使わずに、体育祭で優勝する。それによりお^{エンデヴァー}前の力など要らないのだ、と否定するのだ。

そのためには、次の試合であたる喚導は大きな壁となる。喚導は午前十チームメンバーであった焦凍にも、その個性について概要しか教えてくれない。クラスメイトとしての焦凍にも、また然り。

だから焦凍が知っている喚導の個性とは、対象を現物として召喚するか、あるいは自らに憑依させて召喚することができる、程度である。制限や、弱点については、流石に焦凍は知らない。

そうになると、焦凍に予想できるのはこちらに対してメタになるものを召喚してくること、だったのだが。

「……緑谷戦、もつと戦いやすい力はあったはずだ」

喚導の一つ前の試合。緑谷と戦った試合において、喚導は何故か、純粋なパワー型の個性を使用していた。あの試合では緑谷の超パワーと打ち合える、という点に意識が行きがちだが、次に戦う焦凍としては、何故緑谷と同じ土俵で戦うことを選んだのか、が気になるところだった。

緑谷に勝つのが目的であれば、もつといい力があつたはずだ。例えば、自身が受けた攻撃を反射する力など。

けれど、実際喚導が使ったのは、純粋なパワーの底上げ。何か個性

自体の制限に引っかけたのか、何らかの意図があるのか。それが分らない限り、焦凍は喚導がこちらをメタった能力でできた場合と、それ以外の場合を想定しなければならぬ。

むしろ、こうやって今後試合で戦う相手を悩ませること自体が目的なのだろうか。

そこまで考えて、焦凍は頭を振って、一度思考をリセットする。

喚導の個性はあまりにも汎用性が高過ぎる。一々どう仕掛けてくるかを想定しては追い付けはしない。幸い、喚導は運営からの制限で最終種目においては一試合につき、一度の召喚のみとなっていることは選手全員に伝えられている。と、なれば個性自体への対策は試合時に発動されてから考えればいい。

今焦凍が考えるべきは、基本の立ち回りをどうするか、だ。大技で攻め立てるのか、長期戦を想定してセーブをかけるのか。

大技で攻めるのは、リスクが高い。身体が寒さに耐えられなくなってしまうえば、パフォーマンスが落ちて喚導相手では間違いない対応できなくなるだろう。

しかし、力を抑えるのも、喚導相手に技術で戦う必要が出てきて、その上長期戦になった場合喚導には経験と体力の差で潰されるだろう。

と、なれば。焦凍は通路からステージへ出つつ、方針を決める。

『ついにやってきたぞシード枠対決!! 圧倒的な力で試合を勝ち抜いてきた二人の登場だア!!』

「うーん、自分も観客だったら見てて楽しいと思うけどさ。実際自分が見世物にされると複雑な気分だよな。そこら辺、どうよ少年は？」

「別に、どうでもいいっす」

「お、珍しく返事してくれた。オニーサン的には、見栄えも気にしたりしてるんだけど、少年はどうなのよ」

「だから、どうでもいいっす」

喚導から放たれる下らない質問に、吐き捨てるように焦凍は言葉を返す。焦凍にとって、正直観客からの視線など鬱陶しくてたまらないのだ。なんせ、その視線の中にあのエンデヴァーの視線が混ざっている

るのだから。

どれだけ多くの視線の中からでも、あの男の視線だけは焦凍には分かる。期待と、渴望と、様々な想いが入り混じった気持ちの悪い視線。間違えようもない。

視界の端に、あの男の姿が映って、焦凍は思わず舌打ちをしてしまう。

「んー、そういうの、余裕がなくてオニーサン的には嫌いなんだよなあ……」

そんな焦凍の様子を見ていた喚導が、そんなことを呟く。確かに、焦凍自身、余裕がないことは自覚していた。だけど、そんなことは喚導に関係ないので、さして気にはしない。

焦凍の様子を気にするのが喚導の勝手であるように、焦凍が態度を改めないのも、また焦凍の勝手である。

「なんつーかなア……実はオニーサン、初対面の段階で少年のこと割と嫌いだったんだよ」

そんな風に考え、喚導が喋っているのを放置していると、ふと喚導がそんなことを言う。焦凍自身、人に好かれやすいとは思っていないので、それほど驚くことでもない内容だ。流石にちよくちよく話しかけてきた喚導が、という点は意外ではあったが。

「それが最近、やっと理由が分かったんだよな。気づいたらストン、と来る内容でなア」

試合開始の合図は、未だ聞こえてこない。既に試合としては準決勝。プレゼント・マイクの実況にも力が入り、会場を盛り上げるのに時間がかかっているようだった。

そのため、焦凍としては早く戦いたくとも、大人しく喚導の言葉に耳を傾けることしか今はできない。

「なんつーか、鏡を見てる気分なんだよなあ、お前を見てると」
「……鏡？」

「おう。嘘で塗り固めた俺の内側。自分の一部が憎くて、ある一つのこと以外に目を向けることができない余裕のなさ。そりやそうだが、誰だって自分の嫌いなところまざまざと見せつけられちゃ気分がい

「いわけがねエ」

何だか、随分身勝手な話のように焦凍は思う。それに、己が喚導と鏡写しだというのは、どうにも違和感のある話だった。焦凍が持つ喚導想也のイメージはノリが軽く、悩み事も無さそうな自分と真逆のよ
うな人間というものだったからだ。

「だからまア、先に謝つとくぜ——」

『それじゃあ喚導想也对轟焦凍!! STARRT!!』

「——悪いな、盛大な八つ当たりさせてもらうわ」

ぞわりと。その言葉に言い知れぬ悪寒を感じた焦凍は、試合開始と
ほぼ同時に、思わず最大出力で個性を発動していた。

観客席まで届きそうなほど大きく広がった氷。喚導どころか、
フィールドの大半すらをその氷は覆っていた。

「お、おいおい……あれ、喚導想也は生きてんのか……?」

観客席から聞こえてきた眩きに、流石に焦凍もやり過ぎたと反省す
る。今回の一撃は、本来であれば人に対して放つことなど考えもしな
い威力だ。元々、喚導相手に加減などできはしないと、最初から全力
で戦うために備えていたのが仇となった。

けれど、思わずそんな一撃を放ってしまうほどに、先ほどの喚導の
言葉は悪寒を焦凍に感じさせたのだ。そう、ここで仕留めなければ何
か致命的なことが起きると予感させるほどに。

——そしてその直感は、間違っていないかった。

「ッ!」

突如として、氷を突き破るように炎の柱が上がる。普通の炎とは違
い、どこか輝きを孕んだそれは、父にエンデヴァーを持つ焦凍ですら
見たことのないほどの熱量を持っていた。

……いいや、一度だけ、一度だけであるが、あの火柱を焦凍は見た
ことがある。それは、敵^{ライオン}連合が雄英へ攻め込んできたあの日。敵の
個性で遠くへと飛ばされた焦凍が、敵と戦う最中見た火柱に酷似して
いた。

後から聞けば、その火柱が上がった点に居たのは、敵とイレイザー
ヘッドに十三号、そして喚導想也。そして今、喚導想也との試合でこ

の火柱は上がっている。つまり。

「——いやア、弱くて涼しくもなれねエぞ少年」

炎で作られた剣を多数引き連れながら、喚導想也は焦凍が生み出した氷を溶かしつつ現れた。その姿には氷が効いた様子が欠片もなく、また距離のある焦凍でさえ汗が流れるほどに感じる熱量を、喚導は気にした様子もない。

脳裏に過ぎるのは、ヴィランと戦うエンデヴァアの姿。いや、だが、違う。あれはエンデヴァアが放つ熱量と比較にならないほど——

「絆憑依^{ソール}太陽神^ル」。悪いけど、俺の我儘に付き合ってくれ」

胸を抑えながら呟かれたそれに、どんな意味があるのか、焦凍には理解できない。そしてそれを気にできるほど、焦凍には余裕がなかった。

幼少期、自らに厳しかった父の姿が蘇る。母を傷つけた父の姿が蘇る。

目の前の存在は、エンデヴァアではないはずなのに。むしろエンデヴァアを超える炎だからこそ、忌まわしき記憶の中にだけいる、焦凍の憎悪によって生み出されたエンデヴァアにその姿がダブる。

ああ、お前だ。お前のせいで、母は——

「——あああああああ!!」

「力任せか、つまんねエ」

再び、全力で喚導を凍結させにかかる。ただし、今度はその指向性を全て喚導の方向に収束し、威力を尖らせている。

だけど、それを喚導は炎剣の一振りで溶かし、無効化する。

「ほら、使えよ、熱^ヒ。氷じゃ相性が悪すぎるからな。でも炎でなら相殺できるかもしれないぜ?」

「ツ……左は、使わねえ!!」

不意打ちをしようにも、喚導の周囲が熱過ぎて冷気を仕込むことができない。そのため愚直に凍結を放つしかないのだが、基本的に炎剣で斬り払われ、酷い場合は氷が近づいただけで溶かされることもあった。

幸いにも、喚導によって周囲が熱くなっているために、個性のデメリットである身体が冷えるという事態は起きない。けれど同時に、打開策もないのが現状だった。

「……つまんねエな」

何度目かも分からない、焦凍が氷を放ち、それを喚導が炎剣で斬り払うという構図。

繰り返して、焦凍に疲労が溜まり始めた時に、ふと喚導がそう漏らした。

「外面が剥がれたら、俺もこうなっちゃうのかねエ。ああ、やだやだ。縫りつくように一つのことについて、情けないったらありやしねエ」
「さっきから、何を勝手に……！」

「自分自身への文句、つてやつさ、少年」

今まで自らが動くことがなかった喚導が、突如として距離を詰めてくる。それに反応して、焦凍は咄嗟に氷を放つが、それはやはりあっさりと溶かされてしまう。

振り上げられる喚導の右腕に握られた炎剣。そこに乗っているのは——殺意だ。

纏わりつくような、言語化するのが難しいその澱んだ意思を、焦凍は初めて向けられたのにも関わらず、確信を以ってそれを殺意だと判断していた。それは、焦凍が心の奥底でエンデヴァーに対し抱いていた感情だからなのか。

しかしそれについて考える暇なく、炎剣が焦凍へと迫る。水^右では、防げない。そう直感的に判断した焦凍は、無意識のうちに。防げるであらう熱^左での防御を行っていた。

視界に広がる、喚導の放つ輝きを纏ったものとは別の炎。見たくないと思いつけていた、父親と同じ炎。それが、高い出力を以って喚導の炎剣を防いでいた。

そしてそんな攻防の奥から見える、狂気を孕んだ喚導の凄絶な笑み。それに恐怖を感じると同時に、思わず力任せに炎の出力を上げ喚導を弾き飛ばすが、さして効いた様子もなく、変わらず口元には笑みを浮かべている。そして、何かを言おうと口を開こうとする。

だけど、ダメだ、それを言わせてはならない。焦凍の頭が、そんな警鐘を放つ。言われたら、致命的な何かが起こる。それを理解しながらも、喚導への恐怖が焦凍の身を縛り付ける。

「——なあ、お前。何したのか自覚あるか？」

そして、焦凍は喚導にそれを言わせてしまった。

「今、お前、俺に対して炎を振るつたよな？使わないって言った炎を。テメーの母を傷つけた親父の炎を。俺を傷つけるために振るつたよなアおい!!」

そう、喚導を振り払ったあの瞬間。確かに焦凍は喚導をダメージを与えようと、その炎を振るっていた。使わないと誓った炎を。母が憎んだ左側を。今さっき、焦凍は衝動のままに振るつたのだ。

「気分はどうだよ、父親と同じ力を振るつた気分はさア!!」

「う……あ、ああああああ!!」

責め立てるように放たれた言葉と、自身がやったことに対する衝撃や自己嫌悪で、半ば頭の中が真っ白になりながら焦凍は炎を振るう。もはやそこに、熱^左は使わないという理性はない。あるのはただ、熱^左を使わせ、その事実を無遠慮に叩き付けてくる敵を倒さなければならぬという強迫観念だけ。

衝動のままに炎を振るう焦凍。その火力は、理性的にある程度セーブしていた氷結とは比にならず、容易く人を殺せるだけの火力になる。

しかしそれを喚導は容易くあしらいながら、狂気を孕んだ笑みのまま、焦凍から視線を外し、観客席を見やる。そして、エンデヴァーを視界に捉えると、より一層笑みを深めてその口を開く。

「見ろよエンデヴァー、お前の最高傑作とやらの出来をーハハッ、どこかが最高傑作なんだ!?オールライトどころか、紛い物の炎にすら負けてるぜ!!」

もはや、それは一人の選手としての行為を逸脱している。ゴージャルのせいで見えないだけで、喚導の瞳がもはや正気を保っていないだろうというのは、ここにいる誰もが察せることだった。

「ハッ、お前がやったことは欠片も価値がねエなアエンデヴァー!!」

エンデヴァーを嘲笑いながら、喚導がその炎剣を、焦凍を囲むように地へと突き刺す。何か来る、と焦凍は理解していたが、ほとんど失われた理性では正しい判断を下すこともできず、それを無視して喚導への攻撃を続行しようとする。

そのため、その脅威を正しく認識できたのは過去その技を見たイレイザーヘッドと、間近で見えていた審判のミッドナイトやセメントスだけであった。

『——セメントス、止める!!』

「ッ、了解！」

セメントスによってコンクリートが隆起し、焦凍を囲んでいた炎剣が崩される。そこから更にコンクリートを操り、喚導を拘束しにかかるが、喚導はそれを炎剣を振るうことであつさりと斬り払う。炎の威力が高過ぎて、プロヒーローのセメントスですら即座には拘束ができそうにもない状態だった。

故に、実況席から俯瞰視点で見れているイレイザーヘッドは更なる指示を飛ばす。イレイザーヘッドは教師として喚導の個性を知っている。そして、今までの経験から焦凍同様に、喚導もまた理性的な判断ができないことも理解していた。

今の喚導は、ある種の暴走状態だ。個性があまりにも活性化し過ぎている。暴走度合いにもよるが、今回の場合はイレイザーヘッドの個性では、抑制し切れない状態だった。だが、それでも有効な対処法は、こういう場合に備えて教員たちは用意してある。

『ミッドナイト、喚導は飲まれてる！個性の暴走だ、遠慮せずに眠らせろ！』

「言われなくてもー！」

「邪魔を、するなアア!!」

振るわれる炎剣を回避しながら、ミッドナイトの個性が放たれる。到達者としての力によって、瞬間的に広がる目に見えぬ香り。嗅いだ人間を問答無用で眠らせるそれは、フィールド付近にいた焦凍とセメントスすら巻き込んでいく。

一瞬で薄れる焦凍の意識。先ほどまでの激情が嘘のように薄れる

中。ほとんど瞼が落ちてなお、炎の柱を昇らせる喚導が上げた雄叫びは、焦凍には何故か泣いているように聞こえた。

——そこで、焦凍の意識は途絶えた。

#30. Dialogue with Allmi
ght.

オールマイトは一人、廊下を歩く。

今の姿はトゥルーフォーム、すなわち八木俊典としての姿であるため、生徒からは首を傾げられたが、今はそれはさほど問題ではない。そう、例え不審者と疑われても気にしていない。気にしていないつたら、気にしていないのだ。

普段であれば、決してこのトゥルーフォームで学校内を歩くことはしない。少しでも、オールマイトⅡ八木俊典と気づかれる可能性を減らすためだ。

ただ今回に関しては、通勤中のヴィランとの戦闘で活動できる時間の幾らかを使ってしまったこと。その上で外すことのできない用事があったために、こうしてトゥルーフォームでありながら、雄英高校の廊下を歩いていた。

向かう先に近づけば近づくほど、どんどん人影が少なくなっていく。けれどそれに、オールマイトは特別疑問を持つことなく進んでいく。当然だ、元々、好んで近づきたいような場所でもないし、そもそも生徒に関しては無断で近づくのを禁止している区画なのだから。

そのため、ある程度目的地に近づいてしまえば、生徒の姿は全くと言っていいほどなくなる。そこまで来てようやく、オールマイトは一息吐く。

基本的に、その見た目からオールマイトⅡ八木俊典と気づくような生徒はまずいないと思っている。しかし、オールマイト自身は自分が嘘を吐くのが苦手というか、うっかりなところがあるのを自覚している。

下手に誰かと話せば、うっかり口を滑らせてしまう可能性があるため、移動中は結構内心ドキドキだったりしたのだ。実際、過去に口を滑らせてバレたこともあるわけだし。

——そう、ちょうど、目の前の彼にバレたのだったか。

扉を開け、ある一室に入りながら、オールライトはそんなことを思う。

部屋の内装は実に簡素だ。ベッドと、テーブルに椅子。小さな本棚に、そこに本が数冊だけ。殺風景なその部屋は、反省部屋と呼ばれる、所謂問題児を拘束しておくための部屋だった。

基本的にヒーローを目指す少年少女らが集まる英雄高校においては、滅多に使われることのない部屋である。それこそ、個性が暴走でもしなければ。

「……気分はどうだい？」

「……ああ、オールライトか。気分なんざ、いいわけないだろ」

ベッドに腰かけていた喚導は、入室したオールライトに気づいていなかったのか、声をかけられて初めてオールライトを認識したかのように戻す。その姿に、普段のような明るさは欠片もない。……いや、あれはあくまで仮面で、その内側では以前から既にこうだったのかもしれない、とオールライトは情けなさから歯噛みする。

そんなオールライトを気にした様子もなく、喚導は指で椅子を示しながら、口を開く。

「用があるんでしょ？椅子、座っていいっすよ」

「あ、ああ、ありがとう」

「別に、俺の部屋じゃないし」

今までとは全くと言っていいほどに違う様子の喚導に、オールマイトとしては戸惑うしかない。いつものノリであれば、オールマイトも話しやすいが、今の喚導はどう接したらいいのかオールマイトには分からなかった。

だが、かと言ってこのまま、というわけにもいかない。ここに来たのは確かに、個人的な部分もある。しかし、メインはあくまで仕事として、だ。雄英体育祭での出来事を、喚導に問う必要があった。

「……そうだね、そしたら幾つか聞きたいことがあるけど、いいかな？」

「事情聴取っつーやつっすか。どうぞどうぞで、存分に語るっすよ」

察しが良過ぎるのも、それはそれで困るものだ、とオールマイトは

溜息を吐く。

元々、喚導には元ヴィランの疑いがかけられていたのだ。その疑いは敵^{ヴィラン}連合との一戦で薄まっていたが、今回の一件でまたその疑いが強くなっている。

そして、そんな喚導を監視するのは、保護したオールマイトの仕事となっている。だからこうして、オールマイトは事情聴取も担当しているのだ。

そこら辺の事情を、諸々喚導は理解しているのだろう。答えなければ、自分が不利になることも。

喚導自身はそれでも構わないのかもしれないが、ルリのこともあつてか、投げやり気味ながらも事情聴取には従順のようだった。

「まあとりあえず、あの子の後の体育祭について話そうか」

そうやって切り出しつつ、オールマイトは喚導へ体育祭の結末について語っていく。

とは言っても、そう語ることは多くない。準決勝で喚導は暴走状態に入り、眠らされたことでそれ以上の試合は不可能。轟も、喚導との戦闘で既にそれ以上の戦闘はできない状態になっていた。

そのため、もう一つの準決勝で勝った爆豪がそのまま優勝。納得のいかない結末に、暴れる爆豪を無理矢理表彰した、というのがその後の体育祭だった。

そんな話を、興味なさげに聞く喚導に、まああんなことがあつた後では仕方ないか、とオールマイトは溜息を吐く。

そしてそのままその話題を続けても意味がないと判断し、本題へと入ることにする。

「それじゃあ、そうだね。まずは君がどこまで意識を保っていたのか、聞かせてもらってもいいかな？」

「徹頭徹尾」

あつさりと呼導が言った言葉の内容に、オールマイトは言葉を失う。徹頭徹尾、最初から最後まで、彼が意識を保っていたのだとすれば、体育祭準決勝でのあれは、喚導が自らやったことだと言うのか。

それは、オールマイトには俄かに信じ難いことだった。オールマイ

トは喚導想也という人間を信頼している。それは、命を懸けて一人の少女を守ることができ、ヒーローだと思っっているからだ。自分とはヒーローの在り方こそ違えど、根は善良な、きつと良きヒーローになれると思っっている人間だった。

だからこそ、オールマイトにはあれが全て喚導の意思のもと行われたとは信じられないことだった。

「それは……本当なのかい？」

「本当っすよ。俺は、自分が何を思っつて、何をしたのか。はつきりと覚えてる。……それが、正気のもとで下した判断なのかは別としてですけどね」

その言葉に、オールマイトは一つのことを察する。オールマイトたち教員は、喚導が個性を使っつて暴れ始めた段階から、個性の暴走が始まっつていたと思っつていた。

しかし、仮にもつと前から暴走の兆候があつたとしたら？喚導の個性は、些か特殊だ。ただでさえ世界に数人程度しか確認されてい^{オリーブアード}ない超越者。それも何かを自らに憑依させる個性だ。暴走の仕方まで特殊、というのは充分あり得る話のはずだ。

そんな風に思考を巡らせるオールマイトを知っつてか知らずか、喚導は独り言かのように、更に体育祭の時の己について語っつていく。

「正直、何時から自分が正気を失っつてたのか。それもよくわかんないんすよ。少なくとも、あの時は本気でああするのが正しいと思っつてましたし。……あるいは、もつと前から正気じゃなかつたのかもしれないっすね」

自嘲するように笑う喚導は、見ていて痛々しいとオールマイトは思っつう。

あまりにも常とはかけ離れた姿。もしかしたら、もつともつと前から、彼の内側はこうだつたのかもしれない、とようやくオールマイトは察し始めていた。

「……正直、キツいんですわ。あの日からずつと、俺の中で声がする。何で、お前はそんな平和な世界で生きてるんだつて。スラム街の仲間たちの声が、ソールの声がするんですよ」

「……君の仲間たちは、そんなことを言う人たちだったのかい？」
「まさか。ふざけて煽りこそすれど、誰かが表の世界に戻れるんだつたら笑って祝福できるような連中ですよ。だけど、それを理解してても。俺自身があいつらを守れず、なのに今も生きている事実が許せない」

オールマイトは、そこで見落としていた事実にようやく気付いた。既に大人と言える年齢だから。普段は何事もない姿を見せていたから。だから見落としてしまっていた。

仲間を、家族を失ってそう簡単に立ち直れるわけがないのだ。人の生き死にが日常である場所だからと、親しい人を失って平気なわけがない。むしろ、スラム街という周囲との繋がりが強い場所を失ったからこそ、彼の心に負った傷は深いということに、オールマイトはもつと早く気づくべきだった。

「だからどうしても幻聴が聞こえ続ける。……ルリのことがあるから今も生きているだけで、それがなかったらとつくに自殺なりなんなりしてますわ」

そんなことを言う喚導を、オールマイトは咎めることはできない。それだけのものを抱えていたことに気づけなかった罪悪感。そして自分をもつと早く現場に辿り着けていれば救えていたかもしれないという事実が、オールマイトを苛んでいた。

無論、どちらもオールマイトが悪いというわけじゃない。気づけなかったのは喚導が誤魔化するのが上手過ぎたためであるし、間に合わなかったのも、オールマイトに非があるわけではない。

それでも、どうかかできたかもしれないとなれば、責任を感じずにはいられないのがオールマイト、八木俊典という人間だった。

「本来なら、エンデヴァーのことだって、キレルほどのことじゃなかった。少なくともスラム街にいた頃なら、中指突き立てて煽るだけで終わってた。だけど、まあ心に余裕がなかったんでしようね、気づいたら、頭に血が上ってた。まあ、暴走のトリガーって言えば、その辺りじゃないっすかね」

エンデヴァーがしたことについては、オールマイトも把握してい

る。喚導やスラム街にいた人間からすれば、許せないような人間であろうということも。

だからキレてしまうのも分かる話であるし、暴走する切っ掛けになった、というのも納得がいく。まあそれでも、その為を選んで手法が、エンデヴァーの成果を真正面から叩き潰す、という手段は問題だったが。

やっぱり、喚導がそうなるのは意外なようにオールマイトは思ってしまう。そういったところが、喚導の内側が見えていなかったという証左なのだろう。

力でなら人々を救うことはできても、誰かの心を救うのはNo. 1ヒーローでも簡単なことではないのだと、改めてオールマイトは思う。

「俺の憑依召喚は、いくら人格がないものを召喚するつつても、結局は異物を自らに入れるわけですから。やっぱり自己の境界が曖昧になるんすわ」

「それは……何時しか、君自身が失われてしまうのでは？」

「平時なら問題ないですね。強い自我があればいいわけだから、スラム街に暮らしてたようなやつならほとんどのやつが平気だと思いません。だけど、心が揺らいでたりなんかするとマズいみたいすわ」

どうやら、体育祭でのあれは憑依召喚の多用によって、自己の理性的な部分が曖昧になり、感情が表に出やすくなった結果のようだった。

それが確認できた段階で、一応、オールマイトの仕事は終わる。ただ、まだ個人的な用事が残っていたため、帰るわけにもいかない。けれど、と憔悴した様子の喚導を見る。

今の彼に、追い打ちとなるようなことを言ってもいいのか、という迷いはある。言うべきか、言わないべきか。

しばらく悩み、オールマイトが出した結論は、伝えるのが後になつてより大きなダメージが喚導にいくことがないようにすべきだ、というものだった。

「……喚導くん、アウェイクくんは今も無事だ、という前提で聞いて欲

しい」

「……ッ、ルリに何かあったんですか？」

「何かある前に、何とかしたんだよ。……人斬りが、襲撃してきた」

オールマイトが告げた言葉に、喚導は目を見開いたあと、憎々し気な表情で、けれど落ち着こうとしてか一つ息を吐く。

余計な心労を与えたくはない、とも思うが、こればかりは伝えないわけにはいかない。オールマイトは心を鬼にして言葉を続ける。

「体育祭の中継が何かで知ったんだろうね。昨日の夜、真正面から雄英に喧嘩を売ってきたよ。雄英の教師陣で対応する中、人斬りは私の姿を見たら撤退してたよ」

「今、ルリはどうしてますか」

「住居の方じゃなく、雄英高校内で匿っているよ。昨日の襲撃も雄英の敷地内には侵入させなかったし、私もしばらくは雄英に泊まり込むから問題はないだろう」

そこまで聞いて、ようやく喚導は安堵の溜息を吐く。もちろん、完全に安全というわけではないのは、喚導もオールマイトも理解している。それでも、一先ずの安全は確保できたことに安堵はしていた。

「ただ、言いにくいんだが……」

「……分かってるっすよ、俺はまだしばらく、ここにいなきやいけないんですよね？」

オールマイトの言葉を先回りして言った喚導に対し、頷きを返す。いくら暴走とはいえ、元ヴィランの疑いがある人間が起こした一件。そう簡単に解放することはできないし、また保護対象のルリと会わせることも、同じ理由から難しい。

そのため、人斬りという明確な危機が迫っているというのに、喚導は今、動くことができない状態だった。

「大丈夫です。ここから脱走するような真似はしません。俺自身、一度落ち着く時間が欲しいのもあるし……」

だから、と喚導が真剣な目でオールマイトを見る。それは、オールマイトを信頼していることが分かる瞳で、オールマイトもまた、真剣な目で喚導を見返す。

「——ルリを、守ってください。俺があいつの傍に戻るまで」

「——平和の象徴の名に懸けて」

喚導が安心できるように。一瞬だけマツスルフオームと化しながら、喚導の言葉に強く頷いて返す。

その返事には、もちろんヒーローとしての矜持があつた。だけど、それ以上に喚導が信頼してくれているという事実が。今まで一人で抱えていた喚導が、素直に頼ってくれているという事実が嬉しく、だから必ず力になってみせようという意気込みの方が大きかった。

それ故に。オールライトから確約を得てなお、喚導が険しい顔で考え込んでいることに、オールライトは気づけなかった。

#31. Awkward workplace experience.

目の前に聳える建物を見上げる。

雄英の体育祭から既にそれなりの日々が過ぎたこの日。ようやく謹慎から解かれた自分は、ヒーロー事務所への職場体験のために、昼間ながらこうして雄英高校の外にいた。

ルリは人斬りがいつ来るか分からないため、職場体験は無し。今頃雄英高校敷地内でオールマイトと過ごしているはずだ。オールマイトは中々癖が強いが、コミュ力極高のルリならどうとでもするだろう。

だから、問題はむしろ自分。正面にあるのはエンデヴァーヒーロー事務所。隣にいるのは紅白頭の轟少年。

体育祭で色々あったメンバーがここに揃っていた。

——始まりは、職場体験の指名。

ぶつちやけ派手にやらかしたわけだし、目的であったコネを作るのは大失敗だったかなあ、なんて思っていた訳だが。それでもなお、強個性故か指名はそれなりに来ていた。相澤先生に聞いたところ、暴走の危険はあっても、今後雄英での3年間、あとは事務所に所属してからも解決すればいい、と判断した事務所が多かったのだろうとのことだ。まあそれだけでも手元に欲しい能力だとは、自分でも思う。

ただそれでも理解できなかったのは、エンデヴァーのヒーロー事務所から指名があったことだ。轟親子に対してあれだけのことをしたこちらを指名するとは、ちよつと理解できなかった。そして、だからこそ何故指名したのかが気になってつい、その指名を受けてしまった。

そしたら何故か轟少年と一緒にになった。

エンデヴァーヒーロー事務所を選んだ理由のもう一つには、ここから轟少年と顔を合わせることもないだろうというのがある。あれだけのことをしては流石の自分でも気まずいのだ。

エンデヴァーのことを嫌っていたようだし、エンデヴァーヒーロー事務所なら轟少年とは別のところだろう、と高を括っていたわけだが。

何故か轟少年もエンデヴァーヒーロー事務所に職場体験に来ることにしたようだった。

「……………」

「……………」

轟少年と並んで、エンデヴァーヒーロー事務所へと向かう。自分は、謹慎解除直後に校長先生からありがたいお小言を頂いていたので、A組とは別行動でエンデヴァーヒーロー事務所の最寄り駅に来た。

しかし、ヒーロー事務所に同時に行った方がいだろう、ということとで最寄り駅の方で轟少年と合流してからはこうして、無言でひたすら歩いていった。

いや、だって流石にあんなことがあったあとに普通に話かけるほど、無神経にはなり切れないし。というか何を言ったらいいかわからない。そもそもあそこまで感情的になったのは人生で初めてなのだから、こういう状況も人生で初めてだった。

そんな風に悩みながら後頭部を掻いていると、なあ、と予想外なことに轟少年の方から声がかけられる。いくら何を話せばいいかわからないとはいえ、これを無視するわけにはいかないよな、と立ち止まって轟少年を見る。

「……………喚導、さんにちよつと言いたいことがあって」

「あー、言いづらいならさん付け要らないぞ?」

「なら、喚導。……………あんたに、その。礼が言いたかったんだ」

「頭大丈夫?」

あまりにも予想外なことを言いだした轟少年に、思わずそんな言葉が漏れていた。

言われた轟少年は首を傾げているが、首を傾げたいのはこちらである。何故あれだけのことをされた相手に、礼を言いたい、という話になるのか全く見当がつかない。

しかしそんなこちらを理解できないからか、轟少年はこちらの様子を無視して、勝手に話を進め出す。

「体育祭のあと、あんたとの試合の録画を改めて見たんだ。もちろん、あんたに言われたこと、やられたことに文句はあるけど……」

ただ、と顔を上げてこちらを見てきた轟少年の瞳に驚く。そこには今まで存在していなかった、余裕が確かにあった。一つのこと——エンデヴァーへの憎悪に縛られていない、真っ直ぐな瞳がそこにあったのだ。

「あんたは、最後にエンデヴァーがやったことを否定した。それを見て、聞いて思ったんだ。ああ、あいつは失敗したんだなって」

「……………」

「俺があいつを憎んでたその奥底にあったのは……あいつのやり方を、否定したいって思いだったんだと思う。母を蔑ろするようなやり方を、氷^右だけでNo. 1ヒーローになることで否定したかった」

「……エンデヴァーが用意した道筋以外で、オールマイトを超えることとか」

「ああ。……だけど、それが予想外な形で成された。あいつが最強だとしたものを、あいつ自身に近い力が上回った」

確かに。轟少年の願いがエンデヴァーのやり方の否定にあるならば。自分によってそれは成されていた。既にエンデヴァーのやり方は間違っている、とまではいかなくとも、現状では足りない^と示されたのだ。

「それなら、何だか色々アホらしくなって。それで同時に、色んなものが見えてきたんだ」

「例えば？」

「エンデヴァーの否定に拘って俺は、オールマイトを超えることに拘っていたあいつと何が違うんだろう、とか」

きつと、エンデヴァーの否定に拘り続けていたら、エンデヴァーと同じようになっていた、と轟少年は語る。

結局のところ、二人は親子なのだ。似ているところもあり、そうなっていた未来は否定できない。

「余裕ができて、今までの自分を振り返って……思ってたんだ。きつと今のままじゃ良くない。もつと違う可能性を探すべきじゃないかって」

「可能性、ねえ……」

「だから、やったことはあれでも、切っ掛けをくれたあんたには感謝してるんだ。だから——」

「生憎だけど、礼は受け取らねえよ」

なるほど、轟少年がこちらに感謝する理由は分かった。けれどその感謝を受け取る気は全くない。

何故なら何一つ救われていないのだから。

エンデヴァーはオールマイトに固執したままだ。轟少年は、エンデヴァーと和解することもなく、その存在を気にしなくなったただけだ。誰も、何も救われていない。表面上は問題が見えなくなったただけでしかなかった。

そして何より、あれは自分がやりたいからやったことでしかない。だからどこにも感謝される謂れはないのだ。

「ま、代わりに、だ」

かと言ってそれで轟少年が納得するとも思えない。なので、一つ妥協点を提示する。

「俺は体育祭でお前にやったことを一切謝らねエ。例え暴走した結果であつたとしても、お前に向けた言葉も、エンデヴァーに向けた言葉も本心だからだ」

「……そう、か」

「俺はあのことを謝らない。代わりに、お前は感謝だろうが怒りだろうが好きにしろ。それでいいか?」

「……分かった。だったら俺は、勝手に感謝して、勝手に怒り続ける」
そうやって結論を出して、改めてエンデヴァーヒーロー事務所に向かつて歩き出す。会話に少し時間をかけ過ぎたので、早足気味だ。

ただ道中一つだけ言っておこうと思い、後ろを歩く轟少年へ顔だけ振り返りつつ、口を開く。

「ついでに。俺は未だにお前のことが嫌いだよ」

例えば、こちらと同じ状態だったくせに、あっさり立ち直って前に進もうとしてるところとかな。

そう内心だけで続け、轟少年からの返事を待たず、エンデヴァーヒーロー事務所へと向かう。

◇

「雄英高校一年A組、轟焦凍。仮ヒーローネーム『ショート』」

「ならびに同じく雄英高校一年A組、喚導想也。仮ヒーローネームは……」

謹慎処分中、考えるように言われていた仮のヒーローネームを思い浮かべる。自分で決めておきながら、この名前を名乗っていいのかと悩むところはある。

けれど、もしヒーローネームを決めるなら、と考えていたのは一応、あるのだ。自分自身の根幹を表すその名前。

「――『Stlum, s Soul。以上二名、職場体験のためお邪魔させていただきます』」

スラム街式の魂と、ソール≡ソウル。それが自分が決めたヒーローネームだった。

意味もそうだし、略称としてSダブル・エスSとか、ソウルなどの呼びやすい形にもできる。

自分には重い名ではあったが、気に入っている名前だった。

「……うむ、確認した。では改めてエンデヴァーヒーロー事務所のエンデヴァーだ。これから数日みっちり扱いてやるから覚悟するよう」

エンデヴァーヒーロー事務所に到着し、まずは責任者であるエンデヴァーに顔を見せる。

とは言っても、この段階ではまだ向こうは仕事だ。そのため何故自分を指名したのかなど、個人的な会話は慎み、事務的に話を進めていく。

流石にエンデヴァー直々に面倒を見てもらえるということではなく、

まずは轟少年と二人、教育担当となったヒーローに事務所内の案内と、業務の簡単な説明を受ける。

「それじゃあ、今日から早速パトロールに——」

「今回のパトロールは保須市まで遠征だ」

「あ、エンデヴァー」

「喚導、少なくとも業務中は俺を呼び捨てにしないように」

「うっす」

「それでエンデヴァーさん、職場体験の二人も保須のパトロールに出すんですか？」

「ああ。二人の実力はお前も雄英の体育祭で見ただろう？」

そう問われた教育担当の人が苦笑いを浮かべる。そりゃまあ、自分と轟少年が全力で戦った試合は内容が酷かったしなあ……と思い、自分もまた苦笑するしかない。

むしろ、この事務所のトップを否定したのに、こうして自分が受け入れられている現状がおかしいのだ。

「とりあえず、この四人で保須市まで行くぞ。現地の方で先行している二人と合流し、そこから二人組に別れてパトロールに入る」

「とは言っても、ここら辺の見回りもあるからしばらく周辺を見てから車で移動、って形だね」

と、いうことは公共交通機関には乗らずに済むのか、と安堵の溜息を吐く。

些かゴツイとはいえ、自分はまだ私服で通る見た目のヒーローコースチュームだから問題はない。轟少年もまた然り。

しかしプロヒーロー陣、特にエンデヴァーなんかは主張の激しい見た目だ。それに加えてあの厳しい顔。

一緒に電車などには乗りたくない、というのが本音だった。というか、多分真顔でエンデヴァーが電車に乗っていたらシニール過ぎて笑ってしまう。

「……………」

「喚導、どうかしたか？」

「いやな?——」

「——っ」

想像して軽く笑ってしまったところ、轟少年に声をかけられたので轟少年にも今考えたことを伝える。

すると轟少年も笑いかけてしまい、二人で笑っているのがバレないように誤魔化しながら、エンデヴァーの後ろをついていく羽目になる。

エンデヴァーの姿を見ると、ついつい思い出し笑いそうになってしまうが、流石に仕事なので怒られるのは目に見えている。何とか頭の中から真顔で吊革を掴むエンデヴァーの姿を追い出し、ずっと気になつていたことを聞いてみることにする。

「ちよつと聞きたいことがあるんですが、今聞いても大丈夫ですか？」

「パトロールに支障が出ない範囲であればな」

「じゃあ、何で俺に指名入れたんですか？」

「その話を今するのか……」

「あはは……でも僕も気になりますね」

呆れた顔をするエンデヴァーだが、こちらに追従するように教育担当のプロヒーローがこちらに賛同する。

そんな自身の事務所のメンバーに、エンデヴァーは困ったように頭を掻く。見れば轟少年も気になつているようで、状況としては三対一の構図だ。

「僕らサイドキックとしては、エンデヴァーさんがやったことに怒るのも分かるんで文句はないですけど、流石にあれだけやった喚導くんを指名するっていうのはわからないんですよー」

ジト目で見られたエンデヴァーが、顔を逸らす。個性婚、というのは流石にサイドキックの人たちも思うところがあつたらしい。それが、どうやらサイドキックの人たちに自分が受け入れられている理由のようだった。

サイドキックにそこまで言われると流石に、という話なのかエンデヴァーが仕方なしと言わん顔で口を開く。

「……一つは、あの個性の原理を聞きたかったからだ。もし技術で自身の体温のコントロールができるなら俺自身に応用したかったからな」

なるほど、と頷く。確かに絆憑依^{ソール}“太陽神”パツと見はデメリット無しで、エンデヴァーと同じ個性を操っているようにも見える。もし技術でデメリットをどうにかしているのなら、オールマイトを超えることを目指すエンデヴァーには気になるところなのだろう。

だが、と自分は首を振る。生憎だが“太陽神”、つまりソールの個性は己を太陽の現身だと定義する個性だ。そもそも、太陽が自らの熱に負けるわけがない、と定義することでエンデヴァーのようなデメリットはなくせるのだ。

そうエンデヴァーたちに説明すれば、エンデヴァー以外はなるほど、と納得する。

「ま、そんなことだろうと思っていた」

そしてエンデヴァーは、案の定だとさほど落胆した様子もなくそう答えるだけだった。

「あれ、さほど期待してなかった感じですか?」

「技術でどうにかなるのなら、俺が見つけているはずだからな」

そりやそうだなあ、と今度は自分が納得する。以前も言ったが、自分はエンデヴァーは技術の化物だと思っている。化物級のオールマイトを超えるためだけに、技術でその領域まで追いかけたエンデヴァー。そんな人間が見つけれなかったものを、二十五歳の若造が見つつけられるわけがない、というのは当然とも言える判断だった。

「だったら、何で喚導くんを指名したんですか?」

「何、簡単な話だ」

サイドキックからの質問に、エンデヴァーはこちらに獰猛な笑みを浮かべながら答える。

「——あれだけのことを言ったんだ。間近でその实力を見せてもらおうと思っただけ」

その言葉に、あ、これは目を付けられたやつだ、と頬が引き攣るのを自覚する。

これ、状況次第では無茶振りされるんだろうなあ、なんて思いつつ事務所周辺地域の見回りを終え、保須市へと向かうのだった。

#32. Contact, hero kill r.

「……なアーンで、俺となんですかねエ……」

「貴様がまた暴走したら俺しか止められないだろう」

それは、確かにそうなんだが、と反論に詰まる。

場所は既に保須市内。着いてから予定通り、二人組に別れての行動となったのだが。何故か自分と組むことになったのはエンデヴァーだった。

「てつきりエンデヴァーさんは轟少年と組むと思ってたんですが」

「いくら俺でも仕事に私情は挟まん」

その言い方、本当は轟少年と行動したかったんだな？と思いつつも、それを口に出せば燃やされる未来が見えているので、口を噤む。

代わりに、周りを見ながら疑問だったことを口にしてみる。

「存外、外に人がいるもんすね。事件があったんだから、外出を控えてもおかしくなさそうですけど」

保須市は、最近巷を騒がせているヴィランが、つい先日現れたばかりの場所だ。住民たちは、恐怖で引きこもっていてもおかしくないと、個人的には思っていたのだが。

実際に来てみると、誰もが事件など気にしていないかのようになり、至って普通に生活を続けている。スーツを着て街中を急ぐ人。公園で子供を見守る女性。金髪の少女の指示を受け、ブレイクダンスをキメるピンク色をしたクマの着ぐるみ。

何かイロモノも交じっていた気もするが、至って平和な日常の風景がそこには広がっていた。

「……ヒーロー殺しについては何も知らないのか？」

「謹慎処分くらってましたからねエ。外部からの情報ゼロで、最近のことは追えてないんですよ。ぶっちゃけ、保須市で事件があった程度にしか知らなくて、ヒーロー殺しという二つ名も今初めて知りました」

そう答えると、エンデヴァーからは呆れた顔と溜息をプレゼントされる。確かにエンデヴァーヒーロー事務所に向かう途中や、保須市への移動中に調べることもできた以上、こちらの怠慢ではあるため、甘んじてそれを受けられない。

「……簡単に説明してやる。一度だけだからよく聞けよ」

——ヒーロー殺し、ヴィランネーム敵名ステイン。

少し前からその存在を確認されていたこの男は、ヒーローを殺すことを主な活動としているヴィランだそうだ。当初は無名のヒーローの殺害から始まったために、さほど警戒されていなかったこのヴィランだが、徐々にそのターゲットは名の知られたヒーローへと変わっていき、つい先日、この保須市で活動していたプロヒーロー「インゲニウム」の殺害を受け、政府が大きな脅威であると認定。一気に優先捕獲対象となったヴィランらしい。

その犯行手口としては、プロヒーローと真正面から戦い、それを打ち倒していること。そして必ず現場に犯行声明を残していくというものになる。

またその犯行声明が曲者で、主旨としては殺した対象はヒーローとは認めない。今のヒーローは間違っている。己はそれを正す者だ。内容に差はあれど、必ずそういった主旨の犯行声明となっているらしい。

「実際、被害が出ているのはヒーローだけで、あとは一部のヴィランしか殺していないらしい」

「あくまで自らの考えるヒーローにそぐわない者がターゲット……。所謂思想犯、つつーやつつすか」

こちらの問いかけに、エンデヴァーが頷いて返してくる。

今存在しているヒーローが求める形ではないから、そんなヒーローを殺して自らが求めるヒーローのみを残す。

「そしてあくまで否定したいのは今のヒーローの形だけだから、ヒーローが守るべき住民には手を出さない、ってことっすね」

「ああ、だからこうして保須市の住民たちはある程度安心して外に出ている」

なるほど、と保須市の現状について納得する。確かに人間、自らに危険が及ばないのであれば存外他人事として平気な顔をしていられるものだ。保須市ではいつも通りの日常が流れているのは分からもない話だった。

「……というかむしろ、ヴィランを殺してくれる、ってことで受け入れてる住民もいるかもしれないっすね」

「だとしても、だ。どれだけステインとやらの求めるヒーロー像が正しかったとしても、そのために選んだ手法は間違いでしかない。ならば俺たちはそれを捕まえるだけだ」

そう真つ直ぐ語るエンデヴァーに、やっぱりこの人もヒーローなのだ、とふと思う。だからこそ、何故家族にはそう真摯であることができなかつたのか、とも。

個性婚はギリギリ犯罪じゃないからセーフ、とはどちらかと言えば自分のような人種のやり口なのだがなあ、と思いつつ、エンデヴァーと二人で保須市のパトロールを進めていく。

今回の保須市のパトロールは、自分たちエンデヴァーヒーロー事務所から出張の三組に加え、元々保須市を活動の場とするヒーロー事務所もパトロールをしている。

そのため、各組に割り振られたパトロール範囲自体はさほど広くはなく、それなりに早くパトロールが終了する。

現状ではヴィラン経験のある自分からも、プロヒーローのエンデヴァーからも不審な点は見つからなかったので、一度他のグループと合流し、情報交換をすべきだろう。そうエンデヴァーと話し合っただけで、事前に決めていた合流ポイントへ向かおうとしたその時。

「——うわああああああ!」

「ッ!」

「何事だ!」

突如聞こえてきた音に、自分とエンデヴァーが揃って驚く。しかし厳密にはその驚きの対象が違う。

自分は聞こえてきた悲鳴に、エンデヴァーは遠目に見える煙と、微かに聞こえた爆発音に、それぞれ反応を示していた。

「エンデヴァー、指示を！」

「ここからなら保須市に来るのに利用した車が近い！俺が車であの爆筒所へ向かう！お前は悲鳴が上がった方に対応しろ！」

今の自分はいくまでエンデヴァーヒーロー事務所まで職場体験中の身。独断で動くわけにもいかず、即座にエンデヴァーに指示を仰げば、二手に別れる、という指示が出た。

その指示に一瞬、身分的には学生の自分を単独行動させていいのかと悩む。しかし事件は既に起きており、迅速な対応が求められる状況。その状況でプロヒーローがそう指示したのだから、と素直に指示に従う判断を下す。

「個性の使用については、俺の権限を以って許可する！基本的には戦闘は避ける。だがどうしようもない時は個性を用いてヴィランと戦え！」

「了解！」

エンデヴァーと別れ、悲鳴が上がった方へと走る。憑依召喚を用いて高速移動をしてもいいのだが、どんなヴィランがいるかもわからない以上、移動などでの消耗はできるだけ少なくしておきたい。

それが原因で、現場に間に合わないという可能性もある。ただ、今回の相手がプロヒーローをも殺せるヴィラン、ステインである可能性を考慮すると、できるだけ温存しておくべきだろうと判断するしかなかった。

この判断が、裏目に出ないことを祈るが———そう思いながら走り続けること数分。エンデヴァーと別れた地点と音源からでは、それなりに離れていたために大まかな方向しか分からず、しばらく探し回ったが未だに悲鳴を上げた人物が見つからない。

あるいは、既に移動してしまったあとなのか。そんな疑問を持ちつつも、悲鳴を上げた人物を求め、覗いた路地裏で見た光景に思わず驚きから叫んでしまう。

「———緑谷!?それに轟と、飯田もか！」

「喚導さん!?!」

「ッ、危ねエ!!」

こちらの声に反応して振り返った緑谷に、ヴィランが迫る。それに、咄嗟に自分が剣を召喚し投げつけ、同じタイミングで轟少年がヴィランへ氷を放つ。

それをヴィランは空中で自らが持つナイフを足場とすることで跳躍、回避を成功させて来る。しかし代わりに、緑谷がヴィランと相対し直す時間は稼ぐことができた。

「悪い、俺が叫んだせいで邪魔したわ」

「大丈夫、二人の援護で何とかなつたから」

そう会話しながら、正面に立つヴィランを観察する。バンドナと季節外れのマフラー。目元は包帯で隠され、身体の一部にはプロテクターが付けられている。身体中にナイフと刀を装備していることから、恐らく近接型だろう。実際、その体捌きは近接戦の覚えがある人間のものだ。

またその立ち姿は自然体でありながら、隙がなく、また重心のブレもなくかなり高いレベルで鍛えていることが容易に想像できる姿であった。

マズいな、と緑谷、轟少年。そして倒れ伏す飯田と見知らぬ男を見る。正直、やつを観察して予測できる技量的に、このメンバーでは全くと言っていないほど勝ち目が無い。というか、緑谷たちでは足手まといにしかないレベルだ。自分単騎で挑んでも、勝てるかどうかは五分五分、その実力の全てを見せていないであろうことも考慮すると、こちらの勝率は三割いかないだろう。

この状況で確実な勝ち目を求めるなら、オールマイトやエンデヴァー級の救援が欲しい。一応、エンデヴァーはこの保須市内にいますので、救援が来るまでの時間稼ぎも兼ねて男に向かって確認を口にする。

「あんたが、ヒーロー殺しとかいう二つ名のステイン？」

「……如何にも。そういうお前は……ハア……喚導想也だな？」

「よく知ってるな、正解だよ」

雄英体育祭で覚えられたか、と考えつつ、ステインの動きを見逃さないよう見続ける。だが何故、わざわざこちらのことを覚えたのか、

と疑問に思っていると、その疑問を見抜かれたのか。それともただの偶然か、ステインの方からその答えが語られる。

「——お前もまた、俺が殺すべき相手の一人」

ゾクリ、と背筋が冷えるような感覚に襲われる。それに思わず硬直してしまった一瞬。マズい、と思つて慌ててステインからの攻撃を警戒するが、ステインが取つた行動は、跳躍し建物の上へと逃げることであった。

「だが……ハア……。流石に、お前が加わつてはこちらが不利だ。俺は、まだ止まれぬ。止まるわけにはいかないのだ」

そう告げてステインは建物の屋上から屋上へ、飛び移るようにして移動していく。どうやら数的不利から、ステインは逃げるべきだと判断したようだった。

状況的には、このまま逃がすべきだとは思ふ。しかしあの男は、こちらを明確なターゲットとして認識していた。ここで逃がせば、今後何時襲われるかと、警戒しながら過ごさなければいけない。もし、ルリがいる場で襲われなどしたら、ステイン相手ではルリを守りながら戦うのはキツイだろう。

逃がすことで現状の安全を確保するか。追いかけることで未来の憂いを断つか。

「——緑谷、轟少年。怪我人は任せた」

「え、あつ、喚導さん!」

判断は一瞬。緑谷たちにこの場を任せ、自分は建物の出っ張りに足を引つ掛け、それを蹴るようにして上へと跳ね上がる。そこから更に、パイプや窓の縁などに体重をかけないように足場として利用しながら、建物の屋上まで駆け上がる。

周りを見渡せば——いた。風に靡くマフラーが、いい目印になっている。建物の屋上を跳んでいくその速度は、通常の自分でも終える速度だ。故に自分も、同じように移動してステインを追いかけたい。

結局自分は、ステインを今のうちに倒すべきだと判断した。それは単純に、相対しただけで分かる実力者を放置しておくのは怖い、とい

うもある。

だが、背筋が凍るような奴の気迫。そんなものを放てるだけの何かを持つ男を放置するべきではないという直感と、奴と相對すれば何かを得られるという確信めいた何かがあるが、自分にステインを追うべきかどうかという判断をさせていた。

「……俺は、あいつが何を求め、何を為そうとしているのか、知らなくちやいけない」

そこに、自分の迷いを断ち切る何かがある。そんな確信と共に、自分分はステインの背中を追い続けた。

#33. Those that cannot yield.

——これ、誘われてるな。

ビルからビルへ。所謂パルクール、と呼ばれる技術を応用してその屋上を駆けていく。

正面には、ある程度離れた距離にステインの姿がある。だがその現状には、些か違和感がある。

ステインを追うにあたって、わざと最短では無いルートを選択する。ついでに多少の減速もしておく。結果、離れるステインとの距離。

けれど、やはりその姿を見失うことはない。

本気で逃げる気ならば、今のように姿をくらますタイミングなら幾らでもあった。けれどステインはそれをせず、こちらが姿を捉えられるような動きで逃げ続けていた。

それはつまり、意図的に追わせている、ということだ。それが最初から自分一人だけが追ってくるかと読んでいたのか、偶然自分一人が追ってきたのを確認したからなのかは分からない。

用意周到な計画だとしたら、厄介極まりないのだが、と警戒しながらステインの後を追うこと数分。

保須市の外れ。ビルもなくなって来たからか、木々に囲まれた地上を駆け抜けながら辿り着いたのは廃工場。

そこに入つていったステインに、一瞬罨を警戒するが、もしあつたとしてもこの状況ではそれを突破する有効な手立てがあるとは思えない。いや、まあ建物全部吹っ飛ばすという選択肢もあるが、流石に消耗が大きくて気軽に取れる選択肢ではない。

それにまあ罨がないであろうと考えてもいい理由もある。ここまで来て引くという選択もありえないので、虎穴に入らずんば虎子を得ず、腹を括って廃工場へと踏み込む。

——警戒したようなトラップもなく、何事もなく廃工場内へと入

る。

使われなくなつてかなり年月が経つていいのか、埃塗れの床。廃工場だと分かるのは外観だけで、中は既に機械類は撤去されたのか、存外余裕ある空間が広がっている。

そんな場所に、ステインはこちらを待ち構えるようにして立っていた。

「……まさか素直に追つてきてくれるとはな」

「ん、まあ思想的に不意打ちとか、無駄な殺生を是とするタイプじゃねエとは思つてたしな。誘いだとしても、罨で一発アウトだけはないと思つてた」

ステインが行う殺害には、ヒーローの在り方について訴えるという意味がある。そして彼自身がヒーローという存在を信奉する限り、卑怯な手段はまず取らないだろう。

実際、エンデヴァーから聞いた限り、彼が今まで行った殺人は全て、真正面から行われているらしい。そこから自分は、警戒しながらここに入るという判断を下すことができていた。

「やけに、ハア……俺のことを信頼しているのだな」

「ん？んー、確かに言われてみれば……」

指摘され、首を捻る。何故こうも、出会ったばかりの、それも敵であるステインを信頼しているのか。ステインの犯行については、エンデヴァーから聞いただけの、確実な情報ではないのだ。

その情報だけで判断し、この場に訪れたのは自分にしては軽率な行動に思える。

だから何か、そう判断するだけのものがあつたはずだ。そう考え、ふとステインと視線が合つて、気づく。

「……ああ、目だ」

「……目？」

「そうそう。さつき路地裏で会つた時。多分その時から、お前の目に宿る熱から、譲れない……拘り？みたいなものを感じ取つたから、だと思ふ」

「……クク。クハハハ!!」

「え、何？こわ」

正直に思ったことを答えたら、急に笑い出したので思わず数歩下がって、ステインと距離を取る。しかし軽く引くこちらを気にした様子もなく、しばし高笑いをしたステインは、口元に笑みを浮かべたまま、その口を開く。

「ああ、いいぞ、やはりお前はいい！」

「いや何がだよ。ていうかお前思ってた以上にやべー奴で困るんだけど」

「譲れない信念がある者は、同じく信念を持つ者の目を見れば分かるものだ。迷いがある。苦悩がある。けれどそれでもお前には譲れない信念があるな!」

「……っ」

ステインからの問いかけに、言葉が詰まる。それまでのようにふざけることができない。

誰にも、オールマイトにすら問われなかった質問。迷いも苦悩も、ヒーローたちが見抜けなかったものをこいつは見抜き、更にその奥にあるものまで手をかけている。

怖い。そこまで踏み入られた事実が。けれど同時に、ステインを追えば何かを得られるという確信は、間違いではなかったとも理解する。

「雄英の体育祭で何かを秘めたお前の目を見てからずっと気になっていた。答える、喚導想也！お前は何を求める！お前の信念は何だ！」

「……信念なんて、大層なものじゃねエよ」

守れなかったものがあつた。失ったものがあつた。それでも、たった一つだけ、この手の中に残ったものがあつた。

もう二度と、この手の中のものを失いたくない。だからみつともなくそれにしがみついているだけ。

「信念なんかじゃない。失いたくないから——守りたいものを守る。それだけだ」

「——そうか、お前は、皆のヒーローではなく、一人の為のヒーローなのだな」

こちらの答えを聞いたステインが、背中の鞘から刀を抜き放つ。徐々にステインから漏れだす殺気。

問答は終わり——それを肌で感じ取り、自分もまた、腰を低くし、構えを取る。

「ならば、俺はお前を殺さねばならぬ。その迷いを孕みながらも貫く在り方を、苦悩がありながらも譲らぬ信念を。喚導想也という人間を、俺は認めよう」

「……そいつはどうも」

「故に、故にこそお前は殺す。見せしめではなく、俺が俺の信念を貫くために。俺が求めるのは誰も為のヒーロー。お前は、一人の為のヒーローは、邪魔だ」

そう言い切ったステインの目には、気圧されるほどの熱がある。本気だ。本気でステインは、この世界を変革し、ヒーローの在り方を変えようとしているのだ。

そのためには、求めるヒーローとは違う在り方であるヒーローの自分、喚導想也は邪魔であると。ヒーローであると認めたらこそ、こちらを殺そうというのだ。

「……そうか、そうかよ」

自分では、自分のことをヒーローとは思えない。一人の為のヒーロー？笑わせる。彼女を守ろうとするのは、全て自分の為だ。利己的なそれは、ヒーローには程遠く、ヴィランの方が似合うとすら思う。けれど、けれどだ。

「……認めるぜ、認めるよステイン」

お前の想いを。お前の熱意を。お前の揺るぎなき信念を。間近でその気迫を浴びて、自分は認めざるを得なかった。

「お前のやり方はきつと、間違ってる。だけどお前の熱意と、覚悟は本物だ。お前のヒーローにかける想いは本物だ」

そしてステインを認めてしまったからこそ、自分は認めるしかない。認めた男から、自分はヒーローであると、認められたのだ。ならば。

「——俺は一人の為のヒーロー、スラム Slum, ソウル Soul」喚導

「想也！」

ならば、それを自分自身が認めないわけにはいかない。だから、咆える。

「俺にはまだやるべきことがある。お前が俺を殺すと言うならば、俺はお前を殺してでも生き延びる」

憑依召喚を成立させる。奇策は使わない。使いたくない。ただ真正面から、ステインと斬り結べるだけの力を。

「——喚導想也」

「——ステイン」

「お前を、殺すッ!!」

瞬間的に間合いを詰め、憑依召喚で手元に現れたその剣を振るう。同時、正面からステインもまた、その刀を振るう。

ぶつかり合おうとする剣と刀。しかし寸前、ステインが何かを感じ取ったのか、掌で刀をくると回し、逆手に握り直す。

それにチツ、と舌打ちを漏らしながら、けれど剣の軌道を変えることなく、障害物が無くなったことで真っ直ぐにステインへその剣を振るう。

その一撃を、ステインが身を低くすることで躲す。空振る一閃。更に間合いを詰めてくるステイン。

距離が詰まり、剣や刀の間合いを抜け——ナイフへの間合いに変わる。その瞬間、ステインが左手でナイフを抜き放ち、自分も召喚で同じく左手にナイフを生み出し、衝突。

数瞬の鏝迫り合い。そこから互いの力を利用して後方へと跳び退る。

「……その剣、ハア……いい切れ味をしているな……。おそらく、まともにも打ち合えば、こちらの得物が斬れる程度には」

「せーかい」

右手に持つ片刃直剣を手の中で回し、地面に突き刺すことでその切れ味を示す。軽く放っただけなのに、その半ばまで地面へと刺さる

劍。

求めた通りの切れ味だ、そう思いながら自らに憑依召喚した存在を振り返る。

—— 北欧神話の英雄、シグルズ。

悲恋の逸話を持つ、悲しき英雄。だが彼にはフアフアニールの討伐や、父の仇の一族を殺した逸話も持つ。それに由来する純粋な剣技を始めとした戦闘能力。そして、その相棒たる凄まじい切れ味を持つという劍、グラム。

それが、ステインと戦うにあたって自分が憑依召喚の対象に選んだ存在だった。

そしてそこからさらに、グラムと剣技にその方向性を絞り込んでいく。だから動物との会話など、一部の逸話は再現されない代わりに、戦闘能力に特化した状態へとなっていた。

「厄介だな—— だが、ただ打ち合わなければいいだけのことでもある」

「ハッ、言うほど簡単じゃねエ、ぞッ!!」

踏み込む。既にステインのリズムは掴んだ。意識の隙間を縫うようにして、ステインの意識外から接近する。だが即座にステインの呼吸が切り替えられ、こちらの存在がステインに知覚されてしまう。

まあそう簡単にはいかないよな、と思いつつ、既に間合いは劍の間合いと化しているため、一閃。右下から左上へ。何の変哲もない切り上げだ。けれど、英雄シグルズの技量を以って振るわれたその一撃は、肉体の駆動を利用し、とてつもない加速を得てステインに迫る。

そしてそれをステインは、涼しい顔で捌く。

まともに打ち合えば、ステインの武器が斬れる。故にステインは、左手に握ったナイフをグラムへと添え、流すようにその一撃を誘導する。結果、ステインから逸れ空を斬るグラム。

だがそれは予想の範疇。ステインならば、この程度どうにかするだろう、とある種信頼にも近い確信があったので、そこから更に、右方向への薙ぎの一撃へ繋げる。

それを跳躍して回避するステイン。空中にいけば、次の一撃は避け

られない——そう判断し、次の一撃へ動きを繋げようとするが、ステインから放たれるナイフが、その行動を阻害してくる。

グラムを握る手とは逆の、左手にナイフを召喚し、ステインから飛んできた数本のナイフを全て斬り払う。その頃には既にステインは着地しており、今度はこちらの番だ、と言わんばかりに刀で斬り返してきた。

そのまま、ステインと剣戟を繰り広げる。

こちらの心臓を狙った突きを、刀の腹にナイフを添えることで逸らす。返すように放った縦の一閃を、柄を叩かれることで防がれる。

そうやって幾度となく攻防を繰り返し、徐々にステインの攻撃の回数が増えていく。

それはつまり、ステインの方が技量でこちらを上回り、動きのテンポが早いということを示していた。

その事実には、けれどさほどの驚愕はない。むしろ、そうだろうかと納得すらしていた。何故ならそれは憑依召喚の欠点が現れただけに過ぎないからだ。

自分の召喚は、決して世界に実在したものを召喚するものではない。あくまで、自分のイメージと合致した存在を、平行世界から召喚するものだ。

このイメージと合致した、という部分が重要で、例えば今憑依召喚の対象となっているシングルズは、過去存在したかもしれないシングルズを召喚しているのではなく、自分がイメージしたシングルズに合致する平行世界より召喚しているのだ。

つまり、イメージしたものの以上のもは召喚されない。言い換えればイメージできないものは召喚できない、ということになる。

だから、例えば切れ味がいい剣なら、硬いものを斬る様子をイメージすればいいから簡単に召喚できる。けれど、技術を以って普通の剣で硬いものを斬る存在を憑依召喚するには、その技術に対しての理解がなければ具体的にイメージできず、結果召喚ができない。

要するに、単純な能力や機能ならイメージしやすいが、技量に関しては自身が理解していなければどうしようもない、ということにな

る。

そのため、雄英の教師陣と対決し、その技術を使えなくとも理解したわけだが。

ステインは、技量という観点では雄英教師陣を凌駕している。

実際に戦えば、創意工夫でどちらが勝つかは分からないだろう。だが、技量という土俵においてはステインは化物クラスである。それこそ、オールマイトやエンデヴァアのヒーロートップ陣並みだ。

それは、オーバーアード超越者やリミテッド到達者どころか、そもそも個性を使つてこないという点に現れていた。ステインにとって個性とは所詮手段の一つでしかなく、メインはあくまで己が磨き上げた剣術だということなのだろう。

自分では、エンデヴァアやステインの技術については、実力が足りずその全容を把握し切れない。そのため、真正面からの戦闘ではどう足掻いても実力差で潰される、という事態が発生していた。

ステインの動きから理解できた部分は、即座に憑依召喚に適応しアップグレードすることで取り込んでいるが、所詮付け焼刃でしかない。ステインを後から追いかけている以上、いつまでもステインを上回ることはできない。

一応、技量関係なしの大技で決めるのも手だが、正直何らかの方法で回避されるか、そもそも発動を許されない未来しか見えない。同様の理由で、ソールを絆憑依するのも無理だ。炎剣に触れられないのなら、全て避ければいいのか、炎ごと斬り裂けばいいのかやってみようである。

それにそもそも、自分がそういった手段を使いたくない、という意地もある。互いに認め、認められた——ライバル好敵手とでも表現すべき相手には、真正面から己の実力で勝ちたいという思いがある。

だから、どうにかして勝ち筋を。そう思いながら、捌き切れなくなったステインの一撃をグラムで受け止め、あえて吹き飛ばされることで距離を取る。

「……どうした、喚導想也」

「何がだよ」

「お前の力はその程度か？」

離れた間合いを詰めることなく、ステインが動きを止めてそんなことを言ってくる。

自分だって、好きで追い込まれているわけではない。純粹に、実力が足りていないからこうなっているのだ。だから、そのステインの発言に思わずムツとし。

「——お前の信念とは、その程度か。俺の信念の前にあっさりと屈するものなのか、と問うている」

続けられた言葉に、そんな感情は霧散した。

代わりに頭を占めるのは、疑問だ。自分の譲れないものは、ステインのそれに劣っているか。否だ。絶対に否だ。実際はどうかは問題ではない。重要なのは、己にとつては否であるという事実だけだ。

ではステインと自分では何が違う。信念の強さがこちらの方が上だとするならば。何が違うから今、自分はステインに負けている。

それを考え、ステインと己を比較し——理解する。

ああ、そうだ。自分はまだ、突き抜けていないのだ。

ステインは己の信念のために、今この時まで己の多くを捧げてきた。

それに対し自分はどうか？ スラム街を、ソールを失い、ルリを守る決めてから何をやってきた。

人斬り対策をした？ 違う。あれは結局他力本願だ。手札を増強した、と言っても結局、強い人間に頼ってるだけでしかない。何故、自らが飛び抜けて強くなり、根源を断つという考え方をしなかった。

そこだ、そこがステインと自分の違いだ。自分は己の信念に対して、あらゆるものを犠牲にできるほど突き抜けていなかった。

けれど、それに気づけたから何になる。ステインは昔から多くを犠牲にして、努力し続けることであそこまで強くなったのだ。

そんなステインに今から何を犠牲にすれば、自分は追い付くことができる。自分が利用できるリソースは何だ。

考え、考え、考えて——答えに至る。自分だから、自分の個性だから利用できるリソース。

それを今まで思いつきもしなかったのは、やはりそういったものを犠牲にできるほど、必死ではなかったからなのだろう。

そんなことを思いつつ、眩くようにして個性を発動し、干渉する。

「――『未来召喚』」

それによる、劇的な変化はなかった。肉体的には、今が全盛期に近い。ここからはもう、維持することはできても更に高めるのは難しいだろう。

だから肉体的な変化として存在するのは、視界に映る白髪が数本混じった黒髪ぐらいだろうか。

その代わり、内面においては劇的な変化を得ている。少なくとも、先ほどまでのステインに対応できるだけのものを得た、と思えるだけの変化はあった。

故に、こちらの変化を敏感に感じ取って警戒するステインに対して、こちらから踏み込む。

縮地。それと並行して意識の隙間へと潜り込み、加えて肉体の駆動を最適化。無駄な動きを省くことで、最小の動きで最大の加速を發揮する。

それにより、今まで以上の加速が發揮され、そして停止状態から最高速に入るまでが速くなる。

それぞれ変化自体はそれほど大きなものじゃない。けれど、今までの速度で慣れていたステインは、一瞬こちらへの対応が遅れる。

回避し切れなかったステインの頬を、浅くグラムが斬り裂く。流れる血に、驚いた表情のステイン。

だがそれでも、そこからのステインのリカバリーは早い。剣を振り切った姿勢のこちらに対し、ステインが右手に持った刀で斬りつけようとしてくる。

だが生憎、自分はそう対応してくることを知っている。予め予期していたため、焦ることもなく軽く首を傾げるだけでその一撃を回避する。

そしてそこから再び始まるステインと自分の剣戟。

けれど、今回徐々に相手を追い込んでいくのは、ステインではなく、

自分の方だ。剣を振るう速度で上回り、ステインの攻撃を捌きながら攻撃の手数を増やしていく。

その状況に、ステインは目を見開いて驚いているが、こちらからすれば当然の状況。そのままステインの攻撃の芽を潰していく、少しずつ追い込んで防戦一方にしていき——そしてその時が訪れる。

こちらの攻撃を捌き切れなくなったステインの真つ芯を、グラムの一撃が捉える。嘔き出る血。倒れいくステイン。

二度目の光景に、どこか不思議な感覚を覚えながら、倒れていくステインを見つめる。

「……俺の……負けだな……」

「ああ、俺の勝ちだ」

眩くように言った言葉に、はつきりと答えを返す。それを聞いたステインは、負けたはずであるのに。志半ばで潰えるというのに、どこか清々しさすら感じさせる笑顔で言葉が続ける。

「……発破をかけてから、動きが見違えるようになった……。何を、したんだ……？」

死の間際にありながら放たれたのは、そんな問いだった。まあ確かに、気になるよな、と思いつつ、端的にその質問に対する答えを告げる。

「未来でお前を倒した俺自身を召喚した」

「……ああ、なるほど……それは勝てんな……」

今の自分ではどう足掻いても勝てない。だったら、勝てる自分になればいい。やったこととしてはそれだけのこと。

自分の召喚は、平行世界だけではなく過去未来からも召喚しようと思えばできる。だから、未来においてステインを倒した自分を、憑依召喚した。

だから自分はステインの動きを既に知っているし、それに対応できるだけの技量も得ている。技術で言えば、既にステインと並んでいる状態だ。

代わりに、召喚対象である約十年後の自分から、もう二度と戻れないが、目的を達成するためには些細な問題だ。

「他に、聞きたいことはあるか？」

「……いいや、充分だ。世界を正せなかったのは、心残りだが……お前に殺されたなら、仕方ないとは思える……。俺が死のうとも、誰かが意思を継ぐだろうしな……」

「そうかい。んじゃ、二度目のさよならだ」

「……ああ、さよなら、だ。喚導想也」

究極的に、自分とステインは求めるものの違いから、決して相容れない敵でしかない。だから交わす言葉もさほどなく——ステインに背を向け、歩き去る。

このまま放置すれば、いずれステインは死に至るだろう。そこに感慨のようなものは……少しだけ、ある。ステインを殺すのは、未来での含めれば二度目であるし、ステインは本気になる切っ掛けをくれた、恩人とも言えるような存在でもある。だから流石に、何も感じないということはない。

けれど、そうやって感傷に浸るのは数瞬。ヴィランとはいえ、今の自分は人を殺した身だ。誰かに見つかつては困るし、もはや、ヒーローたちの元には戻れない。

だから素早く廃工場から走り去る。そうして向かう先は——雄英高校だ。

◇

「ルリ」

「ソー……ヤ？」

まあ確かに、パツと見ではだれか分からないか、と苦笑する。大きな変化はないとはいえ、十数年後の姿と化したために、髪には白髪が混じっていたり、顔に皺ができて老け始めてもいる。

面影はあっても、本物か悩むよな、と思いつつも、今はそれを説明する時間がない。急がなければ、オールマイトを始めとした雄英の教師陣に捕まってしまう。

流石に、ルリを連れてでは逃げられる確率が五割程度になってしま

うので、見つからないうちに逃げたいのだ。故に、ろくな説明もせず
に、ただ手を差し出してルリに頼む。

「俺と一緒に来い」

「ん、ソーヤがそう言うなら」

そんなあつさりと、と少し揉めるかと思っただけに拍子抜けす
る。しかし、何を思っただろうかあつさりと承諾したのかを聞くような
時間は、もはや残っていない。

ルリを肩に左肩に座らせ、壁をぶち抜く。既に侵入した段階で、警
報などをガン無視してきたためにこちらの侵入には教師陣も気づい
ているだろう。そして、今壁をぶち抜いたせいで、居場所もバレた。
その状況から完全に教師陣を撒くために、絆憑依でデイティーの隠
密の個性を発動し、他人に一切知覚されない状態と化して雄英高校か
ら脱出する。

それでも、流石にオールマイイトなんかだと経験と直感からなんと
く、で居場所がバレてしまうので、慎重を期して隠れながら逃げてい
く。

——そうして、ある程度離れた位置まできて、隠密の個性を解く。
雄英教師陣は、そう簡単に雄英高校から離れることはできない。

そのため、警戒しつつもある程度の安心感を以って、次の目的地へ
と向かう。

道中、暇だったのもあって、ステインやらなんやらの保須市の一件
は、結局今どうなっているのかと調べてみれば、ステインの死の間際
の映像が見つかる。

どうやらあの後廃工場に倒れているところをヒーローに見つかっ
たようで、その際の様子を何者かが隠れた状態で撮影していたよう
だった。

『——貴様らは、偽物だ……！世界に、本物の英雄ヒーローを……！！』

死の間際にあつてなお、そう言い続けるステインに、やはり奴の信
念は本物だったのだ、と再認識する。そしてそんな男に認められた以
上、もはや自分も立ち止まるわけにはいかないとも。

だから、改めて腹を括り、自分の進むべき道を決める。

辿り着いたパツと見は何の変哲もない建物。けれどそこに、今の自分はある。

外階段を登った先。そこにある扉を開けて、その中にいた見知った顔に軽く手を挙げて挨拶しつつ、告げる。

「よオ、死柄木」

「喚導……？お前、何でここに」

「いやなに——ちよつと、仲間に入れて欲しくてね？」

For myself.
#34. To the road of villain.

「あ、黒霧もいんじやん。ちつすちつす」

「……あー、とりあえず、何か飲みますか？」

「そんじや、カミカゼ貰える？」

リアクションに困った様子の黒霧が、バーカウンターのようなどころで何を飲むかと問うてくる。特にメニューらしきものもないので、バーカウンターということでカクテルを頼んでみたのだが、どうやら本当に用意してくれるようで、黒霧が棚からカミカゼの材料を取っていく。

その作る過程を何とはなしに見ていると、使用するウオツカの量が多いことに気づく。死柄木は酒に強いため、そこに合わせたレシピなのだろう。

実際、一口飲んでみれば、アルコール度数が高めで、結構キツめになっている。ただ、それでもライムジュースが入っていることもあって、自分の好みのさっぱりした風味もあって、割とそれなりに酒に強い自分であればハイペースで飲めてしまう程度ではある。

だから、すぐにグラスの半分ほどまで飲んでしまいつつ、黒霧にルリの分としてリングジュースを出してもらおう。

「……いや、普通に飲んでますが、どういう状況ですか」

「おい、喚導。説明しろ」

実は学生だから、ということとで雄英の教師陣にお酒は規制されていたので、久々に度数が高めの酒を飲んで気分がいい。今なら、何でも答えてやろう。

そんな気持ちで、こちらの隣に座り直しながらそう言ってきた死柄木に、何と答えるかをしばし思索して組み立てていく。

「そもそもお前らに俺が雄英に入った理由言ったっけ？」

「聞いてませんね」

「んじや、そこからか。まアスラム街が潰されたのは知ってるだろ？
んで、そんな時にオールマイトに助けられたから雄英と縁ができたわけ
だが」

オールマイト、という言葉に顔を顰めた死柄木を意図的に無視す
る。そのまま、雄英に入ることにした理由は三つある、と右手の指を
三本立てる。

「まア言うて、一つ目と二つ目はかなり近いんだけど。一個目は、ルリ
の保護。防御力的に教師が常駐する雄英に保護してもらうのがいい
と思つてな」

「俺たちは侵入できたがな」

「セーフツ……！撃退できた以上セーフだからツ……!!」

「ですが侵入されただけで割と信頼は揺らぎますよね」

「それな。だからそれも今回雄英から離れる判断材料の一つになつて
る」

インペリアル・フィズを黒霧から貰い、飲んでいる死柄木からの
ツツコミがくる。一応弁明はするが、実際、あの一件で雄英への信頼
が揺らいだ部分はあるのだ。

撃退はできた。それだけの戦力は自分含めてあつたのだろう。だ
が、だからこそ侵入されても撃退すればいいとでも言うべきか、そも
そも侵入させないという点では、雄英はさほどいい場所ではないので
はないか、と思えたのだ。

だから実はちよつと、その頃から雄英って大丈夫、みたいなどころ
はあつたのだ。だから、体育祭ではコネを得ようとしたところはあ
る。

「んで、二個目は戦力的に、つて話だな」

「それは一つ目と同じでは？」

「一つ目が防御つて点で考えたのに対し、二つ目は攻撃の点でだな」

「……攻撃、ですか」

「そうそう。人斬りを捕まえられるだけの戦力がある場所、つて観点
でな」

まあ実際のところは人斬りを捕まえるどころか、襲撃を受けたわけ

だが。とはいえ、これに関しては雄英はヒーローサイドであるために、正規の手段でしかそもそも捜査ができないという難点がある。だから痕跡の少ない人斬りの存在を捉えるのは少々難しいところはあるのだろう。

それでもやっぱり、後手に回っている段階で信頼は揺らいでいるわけだが。改めて考えると、雄英は結構杜撰なように思えた。

「それから最後に、俺自身のトレーニングを兼ねて」

「ああ、確かに雄英は人材だけなら優秀ですからねえ」

暗にそれを活かしているかは別だが、と言う黒霧に、なんやかんやで黒霧もしっかりヴィランしているよな、と苦笑する。

とはいえ、残念ながらそれをフォローできるだけの実績を、自分が所属している間に雄英は成していない。というか、目の前の雄英侵入をやった二人に対して反論できる実績などそうそうあるわけがなかった。

「オールマイトなんかは別次元過ぎて参考になりやしなかったけど。それ以外は結構いい経験になったぜ？」

「確かに、私が戦った相手も、もしこちらを殺す気であれば苦労したでしょうしねえ」

「……レイザーヘッドも、思っていたより格闘戦ができて驚いたな。それでも俺のほうが上だが」

この負けず嫌いどもめ、とも思うが、襲撃時の戦闘を思い出すとあながち間違いでもないように思える。なんやかんやで、スラム街に協力をもち掛けてきた段階から準備を進めていた、と考えれば用意周到な計画であつたわけだし、戦いに関する努力もかなりしていたのだろう。

二人とも、個性の性能含めてかなりの実力者だ。スラム街でののはほん、とした姿が印象的ですっかり忘れてしまっていたことだった。「しかし、それだけの理由があつて、何故我々の仲間にな？」

「ああ、それだよそれ。結局、何で俺たちのところに来たんだ？」

なんやかんやで。死柄木や黒霧との付き合いはそれなりにある。だから互いに、本気で言っているかどうか程度であれば見抜けたりす

るのだ。そのため二人は、自分が死柄木たちの仲間になりに来たという言葉を信じているようだった。

無論、それと同時に何か裏があるのでは、とも警戒はしているようだが。流石に本気かどうかは見抜けても、その裏に何かがあるかまでは見抜けないという話だ。

「いやね？ 究極的に俺がやりたいのはルリを守ることなわけだ」

会話に参加できず暇そうにリンゴジュースを飲むルリの頭を撫でる。ルリに関しては全く事情を説明せずに振り回していたので、そもそも今話したことはほとんど初耳なのだ。まあその割には恨めし気な視線もなく、ニコニコとこちらを見てくるのが不思議なわけだが。

まあ何はともあれ、結局自分がやりたいことは、ルリを守ること集約するのだ。雄英に入ったのも、こうして死柄木の仲間になりきたのも、結局は自分がルリの意思に関係なく、彼女を失いたくないからになる。

「そのために雄英に入ったわけだけど。それじゃあ対症療法でしかない、つてのは分かるか？」

「……確かに、そのやり方ではそもそも原因を取り除くのは難しいですね」

今、ルリを守らなくてはいけない理由としては、大本を辿れば彼女の個性の希少性及び性能が原因になる。ただ、こればかりは現状では触れられない領域の話なので、少しだけ別の段階で考える。

つまり、ルリを守らなくてはならないのは、ルリを狙う人斬りというヴィランがいるから、という話だ。

雄英に入ったのは、人斬りが来るたびにルリを守れるから、という考え方からだ。だが、それでは結局人斬りが捕らえられない限り延々と繰り返し続ける対症療法にしかならない。どうやら人斬りは退き際をわきまえてるようで、そのやり方では中々捕まえられそうにない。

「それじゃあ何時まで人斬りの影に怯えて過ごせばいいか分からねエ。ならどうすべきか」

「……なるほどな。自由に動ける立場が欲しかったのか」

そう、死柄木の言った通り。ヴィランであれば、裏のルートを使って人斬りについて調べられるし、それに人斬りを殺しても問題がない。自ら人斬りを処分するのであれば、ヒーローサイドよりもヴィランサイドの方が行動しやすい状態だった。

「ヴィランになると、それはそれでルリが狙われやすくなるってデメリットもあるけど。それはお前のところだったらそんなに問題ないし」

「俺らがその女を奪って逃げるとは考えないのか？」

「だってお前、俺と戦いたくないだろ」

「……………」

その問いに対する答えはない。とはいえ、友人だから戦いたくないなどという理由ではない。単純にこちらと敵対するメリットデメリットの話だ。発動条件が明確でないが強力なルリの個性と、こちらによってもたらされる被害、それを天秤にかけた場合、どちらが重要かを比べてだけの話。

死柄木や黒霧は、スラム街時代のこちらの実力を正しく把握している。そこから更に雄英で修行し、今では十数年後の姿になっている。そこから死柄木たちは、ルリを得てもその後自分たちが殺される可能性がある、と判断して手を出してこないようだった。

「それに、お前らの裏にいるやつもルリに手を出せとは言っていないだろ？」

「っ」

「……………喚導さん、いつからそれを？」

こちらとしては何の気なしに放った言葉に、死柄木と黒霧が剣呑な空気を纏う。それに一瞬首を傾げ、そう言えばこっちが勝手に察しただけで、二人から言われたわけではなかったか、と気づく。

「行動的に優秀なブレインはいると思ってたし、裏のルートで情報収集もしてた。具体的な存在は分からなくても、なんとなくいるだろうとは思ってたんだよ」

「……………そういうことでしたか」

「……………ちっ」

無駄に警戒してしまったことが恥ずかしかったのか、死柄木が舌打ちをしてカクテルを一気に呷る。それから、黒霧に同じものを要求しつつ、で、と問いかけてくる。

「お前、ずつとうちにいる気はないだろ。いつまで、それからどこまで俺たちに協力する気だ？」

仲間になる、ということとはつまり、ヴィランとしての活動もする、ということになる。とはいえ、ヴィランとは究極的には社会のルールを無視してやりたいことをやっている人間たちだ。だから、組織といつてもその組織がやる全てのことに対し参加しなければならぬわけではない。

だからこそその死柄木の問いなわけだが。ぶっちゃけた話、自分はスラム街時代はやっていたことは思いつきりヴィランだったのだ。だから、今更特に躊躇う理由もない。そのため、答えは決まっている。「全面的な協力を。期間は俺が人斬りを殺すまで。代わりに俺が人斬りを殺すのに協力してくれ」

「……いいぜ。喚導レベルの戦力が増えるのは正直ありがたい。交渉成立だ」

アルコールも入っているし、元々友人関係ではあるので、交渉というほど大層なものでもない。けれど、それでも一応は契約であるため、その内容を確認し、握手を交わすことで互いが納得したことをここに証明する。

こうして、自分は死柄木の仲間となること——すなわち、ヴィラン敵連合への加入が決定した。

#35. Toward the end.

煙が肺を満たすように大きく息を吸う。無論、煙草嫌いな自分ではそれを心地よいと思うことはできない。むしろストレスになる。

けれど、それが自分を追い込むようで、己のことが嫌いな自分にはちょうどいい。最終的には救う算段があるとはいえ、ルリをより危険な道に連れ込んだことで、余計に己のことを嫌いになった今は、特に。それでも、最終的な目処が立ち、そこにたどり着くまで戦い続ける覚悟はできている。その分、以前よりかは精神的には楽である。

だから、まあ、体育祭の時のような無様は晒さない……と、信じたところではある。

やりたいことも、やるべきことも見えている。迷いはない。そういったものは、ステインと出会って吹き飛んだ。

ブレなければ、個性に飲まれることもない。故に一人静かに覚悟を決めていると。

「……ソーヤ？」

「ん、ルリか」

死柄木と黒霧から与えられた個室。そのベランダにいたところルリが出てきたので、吸っていた煙草を携帯灰皿へと押し付ける。

以前がルリが居ても吸っていたが、そこら辺の配慮ができるだけの余裕ができた、という話だ。だからしっかりと火が消えたことを確認して、携帯灰皿に蓋をして懐へと仕舞う。

「煙草、最後まで吸わなくてもいいの？」

「別に好きで吸ってるわけじゃないしな」

だからそもそも、吸う頻度自体が少なく、こうしてルリにその場を見られるのもまた珍しいことだった。そしてふと、そういえば以前もこんなふうにルリに煙草を吸っているところを見られたなと思いつく。

あの時は確か、体育祭の前。ルリの前でも仮面を被ることを決めた時だったか。あれから結局、自分は上手く演じることができていたのだろうか。ああ、いや、あれだけ無様を晒しておいて、上手くもクソ

もないか。

そんなことを思いつつ、自身への呆れから苦笑していると、なにやらルリがこちらをじっと見つめていることに気づく。何か変なところでもあっただろうか、と首を傾げていると、そんなこちらに気づいたルリが口を開く。

「ソーヤは煙草似合うのに、私が近づいたらやめちやつて残念だなんて思っ。特に今のソーヤはこう……老けた？から」

「ああ……そういや、そうか」

ステイン戦。あの時使った未来召喚は、初使用の奥の手だ。そのため、制御が甘く本来なら未来から経験や技術のみ引っ張ってくることを、肉体まで未来の状態にしてしまった。

未来召喚とはすなわち憑依召喚の発展形で、未来の自分を憑依召喚する技になる。基本的には経験や技術のみを未来から召喚する形だ。

ただしこれには欠点があり、時間の流れは一方通行であるという性質から、二度と元に戻すことはできない。つまり一度召喚してしまえば、例えばそれとは違う方向性に成長したいとしても、切り替えることができないということになる。

また、この未来召喚はあくまで未来の時間を先行して使用しているだけであり、使用した分は無論短くなってしまう。要するに、今十年後の未来の姿になった分、寿命が十年縮んだということである。

とはいえ、寿命が縮んだだけで済んだ、とも言えるとは個人的には思っている。ステインに関しては、寿命を使う価値のあるの強さの敵だった、という話だ。

ともかく、結果としては、三十代の自分の姿になってしまったわけだが、確かにこの歳ではもはや見た目は立派なおっさんだ。中身こそ二十代のままだが、これではもうお兄さんだとは口が裂けても言えないだろう。

けれど代わりにルリが言ったように、煙草の似合うダンディなおっさんになれているのなら、それはそれでありかもしれない。

「ねえ、私も煙草吸ってみてもいい？」

「あー……」

ルリからのその頼みに、どうすべきかと数瞬迷う。ルリはまだ、二十歳になっていない。日本の法律的には煙草はアウトである。あとは単純に、ルリには健康でいてもらいたい、という思いもある。

けれど、まあ、今の自分はヴィランである。法律なんざクソ喰らえない立場であるし、自分の性格的にもそちらの方が性に合っているという自覚もある。

だったら、純粋な少女を悪の道に誑かすのもありだろう、と一本ルリに煙草を与え、火をつけてやる。

「——っ、えほっ……何、これ。全然美味しくない……」
「ま、だろうな」

ベランダの塀に背中を預けながら苦笑する。初めての煙草を平気で吸えるのは、よっぽど適性があったか、あるいは身近な人間が煙草を吸っていて煙慣れしている人間だけだと個人的には思っている。

だからまあ、当然の結果ではあるので、さして驚きはない。勿体ないので、これ以上吸えそうもないルリから煙草を奪いとり、そのまま自分が続きを吸う。

「うう……喉がイガイガする……。お父さんとかは全然平気そうだったのに……」

「まあそれは慣れと、自分に合った煙草だからだろうよ。初めてじゃ仕方ないって」

しよぼくれるルリの頭を軽く撫でてやれば、徐々にその表情が心地よさげなものへと変わる。男のごつい手で撫でられて気持ちいいものなのだろうか、と内心首を傾げていると、ルリが心地よさげな顔のまま、ふと呟く。

「……ソーヤは、いなくならないでね」

「……それは」

その呟きに、どんな思いが込められているのかわからないほど、自分は鈍感ではない。自分がソールやスラム街の仲間を失ったのと同様に、ルリもまた家族を失っているのだ。だから、ルリの中にあるのはきつと自分と同じ気持ち。

「ソーヤに私しか残っていないように、私にももうソーヤしか残って

ないの。確かに学校でお友達が増えたけど……それでも、お父さんたちを知ってるソーヤは、特別だから」

気づけば撫でる動きが止まっていたこちらの手を取って、ルリはそんなことを言う。

その内容は、気づいていないことではなかった。気づいていた上で、無視していたものだった。

自分にとってルリが大切なものであるように、ルリにとっても自分は大切な存在であると。それに気づいていながらも、自分はそれを無視していた。

「ソーヤは私を救おうとしてくれてるみたいだけど、ソーヤがいなくなっちゃったらそこに私にとっての救いはないんだよ？」

——なぜなら、それを聞いてしまえば、自分は自分を犠牲にできなくなってしまうのだから。

自分は、自分のことが何よりも嫌いだ。だからルリを救うためのリソースとして己を消費することで、ついでに嫌いな自分を殺してしまおうと思っていた。

だが、たった今。自分が死んでしまっただけはルリにとっての救いはないのだと、本人から明確に言われてしまった。言われてしまっただけはもう、自分は自分の犠牲を容認することができない。

「ソーヤがね？ 雄英高校をやめる時に、私のことも連れてってくれたの凄く嬉しかったんだよ？ まだ一緒にいられるんだって」

自分はあくまで、己のエゴでルリを救おうとしている。だから、ルリが救いを望んでいないとしても、無理矢理にでも彼女を救うつもりだった。

けれど彼女は、こちらが勝手に救うことを容認した上で、こちらのやり方では救えない、と言ってきたのだ。

自分がどうしてもやりたいのは彼女を救うこと。それができないことだけは、認めることができない。だからもう、自分は決して死ぬことはできない。

「……まったく、俺のことをよくわかっていらっしやる」

ルリは間違いなく、どうすればこちらが自分のことを犠牲にしない

ようにするかを理解して、今の発言をしている。どうやら、案の定自分が被っていた仮面は見抜かれていたらしい。

本当は、自分の生命エネルギーを全て個性に回すことで、一時的に瞬間的な出力を上げ、一撃で人斬りを殺しつつその反動で自殺する、というのがプランだったのだが。自殺を封じられてしまった以上は、サブプランの自分も生き残る手法を使うしかない。

「しゃーねエ、俺が生き残れるように立ち回ってみますかね」

「うん、いなくなっちゃ嫌だからね」

念押ししてくるルリの頭を再び撫でる。ただし今度は、少しばかりの嫌がらせとして力を強めに。それに対し、きゃー、と声を上げつつもなんやかんやで楽しんでいる辺り、ノリがよくなったものだと思う。

「——喚導、少しいいか？」

そんな風にルリと二人戯れていると、ノックの音と共に、死柄木の声が聞こえてくる。

存外死柄木も、ノックする程度の礼儀はあるんだな、と失礼なことを考えつつも、ベランダから屋内に戻り、玄関の扉を開ける。

扉を開けた先にいた死柄木は、いつも通りの無愛想な顔でさほど緊急の要件ではないように思える。それに少し安堵しつつ、何の用かを問いかければ、死柄木は少しだけ困ったようにその口を開く。

「先生が、お前に会いたがってる」

◇

「あんたが、死柄木の先生か？」

「如何にも。オール・フォー・ワンだ。よろしく頼むよ」

オール・フォー・ワン、日本語訳で皆は一人の為に。なるほど、確かにヴィランの裏にいる存在としては充分ありな偽名だろう。

自分は、スラム街での活動でも聞いたことのない名前だが……さて、諜報担当の者であれば知っていたのだろうか。

そんなことを思いつつ、目の前のモニタに映る男であろう人物を見

る。

そう、モニタ。会いたい、という話だったが、実際に用意された場は何でもないソファが置かれた部屋で、モニタ越しにというものだった。

しかもモニタに映るオール・フォー・ワンは、暗闇の中にいてその姿を明確に見ることはできない。声音から、何とか男だということ程度しかわからなかった。

「まずはこんな形で相對になったことを謝罪しよう。何せ僕は過去、酷い怪我を負っていてね。その治療で動くことができないのさ」「ふーん……」

嘘だな、とオール・フォー・ワンの言葉を判断する。暗闇の中、ギリギリ見える下半身から、怪我を負ったのは事実でも、全く動けないわけではないと理解できる。

大きな動きはできないだろう。けれど、多少なりなら動けるといったところか。どちらにしても、こちらに出向くというのは無理そうだとは思う。

まあ、そこら辺は個性があればどうとでもなってしまう時代なのだが。だからまあ、実際のところは他者の協力なりなんなりで個性を使えば割と自由に動けるのだろう。

「……ふむ？ その様子だともう僕が実際は動けることに気づいたようだね？ 予想より些か早い、君については上方修正しておこう」「アーン？」

こちらの思考を読まれたことに関する気持ち悪さと、上から目線でこちらに評価を下す姿勢に思わず眉が吊り上がるのを自覚する。

今回はルリも同席していい、ということなので、ルリが隣にいるため自重しているが、本来であれば中指を突き立てる程度のこととはしているところだった。

いくら死柄木の先生とはいえ、自分にまで偉そうな態度なのは気に入らない。基本的にスラム街出身は何もしていないのに自分の方が上だと思っている連中が嫌いなのだ。その点、目の前のモニタに映るオール・フォー・ワンは典型的な嫌いな相手と言えた。

「ああ、すまない。偉そうに見えたかい？それなら謝罪しよう。個性を使うために正確な分析が必要だね。格付けはどうしても必要なんだ」

「お前、俺の思考を読んでるな？」

思わずそう呟くように言ってから、いいや違うと自分で首を振って否定する。本当にこちらの思考を読んでいるのなら、先ほどのように確認をとる必要はないはずだ。全ての思考を読めるなら断言すればいい。

それが一々確認を挟む、ということは絶対的なものではないということになる。それはつまり。

「……予想してるのか、こっちの思考を」

「正解だ！これはまた驚いたよ。やはり他者から聞いた情報だけでは限界があるね。自分で直接見て、話すのが一番だ。まあモニタ越しなんだけどね！」

はっはっは、と陽気に笑うオール・フォー・ワンは、どうにもあの死柄木が先生と慕う相手には見えなくて気が抜けそうになる。

だが、それでもこちらの思考を予想するという変態染みた技を披露してくれた以上、警戒しないわけにはいかない。死柄木や黒霧が信用できても、その仲間まで信頼できないのがヴィランなのだから。

「それじゃあ、本題に入る前にまずはネタばらしとしようか？何故僕が君の思考を予想できたのかは気になるだろう？」

気にならない、と言えば嘘になる。どうやら相手には完璧ではなくとも相手の思考を予測できる力があるようだから、例えば口だけ否定しても意味はない。故に素直にここは頷いておくことにする。

「うむ、素直なのは美德だと僕は思うよ。それではネタばらしだが。まずは僕の個性は『個性を奪い、与える』というものだ。聡明な君ならこれだけでわかるんじゃないかい？」

その言葉に、しばし考え込む。シンプルに考えるなら、単純に相手の思考を予測できる個性を奪った、となる。だがわざわざ問いとして出してくる以上、そこまで簡単ではないのだろう。

となれば、である。多分大筋としては間違っていないのだと思う。

相手の思考を予測できる個性を奪った、というのは間違いではない。そこに何を付け足すのか、だ。

そもそも、基本的に予測系の個性はその持ち主の頭の良さに依存するところがある。あくまで予測であり、それは計算によって出されるものだからだ。そして人間の頭での計算によるものという都合上、どう足掻いても精度は低くなりがちなのだ。

しかしオール・フォー・ワンの予測はやけに精度が高い。普通の人間の頭ではありえないほどに。

「……つまり、演算能力の上昇する個性か何かを併用している?」

「ああ、それで正解だ。いいね、君は実にいい。気に入ったよ」

相変わらずの上から目線にイラつくところはあがあるが、先ほど言った個性が本当であるならばその手札の多彩さは自分以上になるだろう。半端な状態での個性の再現と、完全な個性の行使。どちらが上かなど明白だ。

上から目線になるだけの実力はある、そう考えるのが妥当なのだろう。だからまあ、無理矢理言うことを聞かせるなどの手は取れない。

しかしもしその個性が本当であるならば、とチラリと隣にいるルリを見る。

ルリ自身は会話の内容に関わってこないからか、暇そうに部屋を見回している彼女。もしオール・フォー・ワンの個性が本当ならば、ルリが狙われている直接的な原因であるその個性を奪ってもらうことが可能なのではないだろうか。

もしそれができれば、これ以上ルリが人斬りに狙われることもないだろう。人を超越者へ至らせることのできる個性だ、その強力さから要らないということもないだろう。

そう思い、こちらの思考を予測できるオール・フォー・ワンへと無言で訴えかければ、なるほど、とオール・フォー・ワンはこちらの意図を理解し。

「――残念だが、それはやらないよ」

返ってきたのは、そんな無情な答えだった。

#36. A t a l k w i t h A L L F O R
O N E.

「――残念だが、それはやらないよ」

オール・フォー・ワンからの予想外の言葉に、一瞬頭が真っ白となるが、そこで思考を止めては何も解決しないとなんとか落ち着きを取り戻す。

単純に考えて、誰か仲間を超越者オーヴァードに至らせることができる個性はあつて困らないはずだ。それを断るとしたら、そこにはどんな理由があるだろうか。それを考えなくてはいけない。

単純な嫌がらせ？ いいや、オール・フォー・ワンはそこまで単純な人間じゃない。嫌がらせ如きで、利益を捨てるタイプでは無いはずだ。むしろ、嫌がらせした上で利益も持っていくタイプだろう。

「……だとしたら、既に同種の個性を持っている？」

「それもある。が、それだけが理由ではないよ」

そう否定したオール・フォー・ワンは、まずは前提としてだ、と言って話を切り出す。

「そもそも君たちは彼女の個性を厳密に知っているのかい？」

「……私の？」

そこで指名されたことで初めて自分のことについて話していると気づいたのか、ルリがきよんとした顔をする。

それに苦笑しつつ、オール・フォー・ワンの言葉について吟味し、そこにきてようやく気付く。自分たちはルリの個性の発動条件とその効果を正確に知っているのか。答えは否だ。故にもし、発動条件がオール・フォー・ワンには満たせないものだとしたら。なるほど確かに、必要ないというのも分からない話ではない。

「ほう、既に見当をつけたか。実に聡明でよろしい。その考え方で合っている……が、一応口頭で説明しておこうか。ついてこれていない子もいるようだしね？」

その言葉に思わずルリを見れば、話の流れが分からないのか。それ

ともそもそも何故見られているのかが分からないのか。不思議そうに首を傾げるルリの姿がある。

なんというか、ちよつとおバカっぽいところがあるというか。愛嬌がある子だよなあ、と思いつつ、口頭での説明の必要性を理解し、オール・フォー・ワンの言葉を待つ。

「まず不思議なことに、僕の複数ある“個性を見極める個性”を以てしても彼女の個性を厳密に把握することができない。故に圧倒的上位の個性であり、その個性の位階以下の個性をある程度レジストするのだろう、と僕は予想している」

「位階……？」

「あー、いいカルリ。個性にはランクみたいなのがあつてだな？」

あまり有名な話ではないのだが、個性には上位下位の概念があるとされている。それは基本的にはそのまま個性の強さに直結している。ただ他にもこの位階が関わってくる場合があり、例えば全く治癒の個性が二つ存在した場合。同対象に同時にその治癒の個性を行使すると、より位階の高い個性が優先され、位階の高い個性によって治癒が行われる。

またオール・フォー・ワンが言っていたように、上位に位置する個性は下位の個性からの干渉をある程度弾くことができるのだ。そしてオール・フォー・ワンが持っている個性が下位個性だとは思えないので、その干渉を防いだというルリの個性はかなりの上位個性になると考えられる。

そんな内容のことをかいつまんでルリに説明すれば、完璧ではないだろうがある程度把握したようで、一つ頷いたのが確認できた。

「そろそろ続きを話してもいいかい？……うん、じゃあ続きだけれど、残念ながら僕でも彼女の個性は把握しきれていない。だけど、予測の個性を織り交ぜれば、その全容を予想することはできるんだ」

なるほど、とルリと二人頷く。確かにこちらの思考を読み取る精度から考えれば、情報源さえあればそれも不可能ではないように思える。

故に、気になるため素直にオール・フォー・ワンに言葉の続きを促

せば、特にもつたいぶることもなく、オール・フォー・ワンはその考えを口にする。

「個性の能力としては、対象の個性を持ち主の才能上限まで開花させること。だからそもそも超越者となる才能がない者は個性の効果を受けても超越者にはなれないだろう。まあそこら辺、喚導くんとアウエイクくんが揃った、というのは奇跡的なのかもしれないね」

つまりどうやら元々、自分には超越者となるだけの下地があったらしい。自分自身はそこまで才能があるとは思っていなかったもので、意外ではあるのだが。

とはいえ、ルリに出会わずそのままスラム街で過ごしていたら開花することがなかった才能なのだろう、とも思う。基本的には超越者は厳密なトリガーが不明とされているのだ。そんな条件を簡単に満たせる、とは思えなかった。

「さて、それで問題の発動条件だが。……ふむ、しかしこれ、僕が言っているものなのかね……？」

珍しく、と喋っているのかどうか。今回が初対面であるために珍しかどうかは不明だが、少なくとも意外なことにオール・フォー・ワンが戸惑った声を漏らす。個人的にここまでのやり取りでオール・フォー・ワンには超然としたイメージを持っていたので、戸惑う姿は意外だった。

しかしして、オール・フォー・ワンを戸惑わせるような発動条件とはいったい何なのだろうか。

「なんか、衝撃の事実でもあるのか？」

「いや、そういうわけでは……。いや、あるいは君にとってはそうなのか……？」

何とも歯切れの悪い。そこまで言葉に詰まるような内容だと思うと、逆に気になってきてしまう。かと言って、藪をつついて蛇を出すのも怖いので、先を促すかどうか悩んでいると、その間にオール・フォー・ワンの方が結論を出してしまったらしい。

うんうん言っていた独り言をやめ、覚悟して聞いてくれ、と前置きをする。こちらとしてはいまいち聞くべきか否か判断しかねている

ところはあつたが、オール・フォー・ワンが言ってもいいと判断したのであれば、それに乗ることにする。

「いいかい、彼女の個性の発動条件は、彼女が明確な好意を抱いた相手——まあ端的に言えば恋した相手に発動するようだね。うん、何と
いうかよかつたね?」

「えっ」

「……う、私、ソーヤに恋してるの?」

「えっ」

「おや、無自覚だったか……僕の予測が外れるとは。しかしやっぱりこれ、言わない方がよかつたのか……?」

今更悩まないで欲しい。

というか、唐突にルリがこちらに恋愛感情を抱いていたとか、それをルリ自身は無自覚だったとか思考が追い付いていない。ちよつとキヤパオーバー気味だ。

とりあえず、ルリ本人は無自覚であつたようだし、こちらとしてはルリは守備範囲外なのでしばらくはそこら辺には触れないようにしよう。いや、だつて見た目三十代のおっさんが高校一年生とか事案でしかないし。ヴィランに事案もクソもあるか、という話でもあるのだが。

それにそもそも、自分の好みは二十代くらいの、ナイスバディな女性なのだ。ヒーローのミッドナイトとか割と好みである。まああの人若作りが異様に上手いだけで、実は結構な年齢いつているという説も……。……寒気がした、この話題はやめておこう。

だがしかし待て。今の自分はヴィランだ。どうせ犯罪者なら、それこそミッドナイトなどのヒーローの胸やケツを揉んでもいいのでは……。……?

よし、いい感じに脳が蕩けてきた。平常運転に戻ってきている。

「うん、まア……うん！とりあえずは全部問題を解決してからかなア!!」

「逃げたね」

「うーん、恋愛感情っていうのはよくわからないけど、私はソーヤのこ

と凄いい好きだよ?」

「ぐわア」

ルリが笑顔で言った言葉に思わず崩れ去る。ルリの純粹さは、汚れた大人の自分に刺さり過ぎる。

「ごめん……! 君が好かれてるのに脳内でセクハラの予定を立てるクソ野郎で本当にごめん……!」

「浄化されてて笑う」

オール・フォー・ワンの爆笑している姿に、もし直に会えたら一発殴ることを心に決めつつ、ルリのあまりの綺麗さに浄化されそうなところを何とか持ち直す。スラム街出身として、浄化されてヨゴレ系卒業は何としても免れなければならぬところだった。

そんな風に、自分は浄化からの立ち直り。オール・フォー・ワンは笑いが収まるまでにしばしの時間をかけ、互いに落ちついたところで何とか本題へと戻る。

「……まあそんなわけで。僕も結構いい歳だし、今更恋愛感情を持つということもない、というのが一点。それから恋愛感情なんてものを制御できるとも思えない、というのが僕がアウェイクくんの個性を要らないと言った理由だね」

「あんたくらいなら感情もある程度制御できそうだけだな」

「それは本当にある程度だよ。人間の感情はそう単純じゃないからね」

しみじみとそう言うオール・フォー・ワンに、過去それで痛い目を見たのだな、と察する。まあ自分に思いつくようなことが、演算能力を上げているオール・フォー・ワンに思いつかないわけがないよなあ、と納得しつつ、過去に人の感情を弄っているあたりやはりヴィランなのだ、と再確認する。

自分はそのままでヴィランらしい悪事をする気はないが、それでも自分も必要であれば他人の感情を弄るくらいするだろうし、オール・フォー・ワンとノリが合うあたり自分はやっぱりヴィランの方が性に合っているのかもしれない。

そんなことを自覚しつつ、改めてオール・フォー・ワンからルリの

個性を奪わない理由を聞かされ、思わず落胆する。理由を聞き、本気でオール・フォー・ワンがルリの個性を要らないと思っっていることを理解してしまった。一番楽な解決ルートが封じられてしまったのは実に惜しいところだ。

「……と、思いつつも君には元々の解決策があるだろう？なに、その解決策なら僕もアリだと思う。多少の協力も約束しよう」

相変わらず当然のようにこちらの心を読んでくるオール・フォー・ワンに気持ち悪さを覚えつつも、その申し出自体はかなりありがたい話だ。オール・フォー・ワンの協力があれば、足りなかったピースも幾つか埋められるだろう。そう考えると、最善ではなくとも今回はいい邂逅だったのかもしれない。

「代わりに、弔に協力してやってくれると助かる」

「それは元からそのつもりだよ。部屋とかも世話になってるしな」

「私もトムラとクロギリは好きだから、できることで協力する」

むしろ好きじゃない人がいるのか、と疑問に思うほどの天使っぷりを発揮するルリに癒されながら、そのまましばし、オール・フォー・ワンと協力についての具体的な話を詰めていく。

ヒーローが信頼や情で動くのに対し、ヴィランは実利が重要だ。どれだけ互いに気に入っていても、利益が得られないなら相手を捨てるのが一般的なヴィラン。

だから死柄木たちへの信頼とはまた別に、明確な協力内容とその条件については定義しておく必要がある。それはある種の契約に近いだろう。

「……ま、とりあえずはこんなところか？」

「そうだね。早速後で情報を探してみるよ」

「頼むわ。こっちも死柄木の補佐に精を出すよ」

「僕の予測通りならばらく忙しくなるからね。そっちもよろしく頼むよ」

モニタ越し、という都合上握手ができないながらも、互いにしっかりと納得の姿勢を見せ、契約を終わらせる。互いに利益のある、いい内容になった、とは個人的に思っている。ただ、自分より頭が回る相

手なので何か見落としがあろうなのだが怖い所だが。

まあそんな恐怖を抱えつつも、ひとまずの話し合いも終わり、相手の目的も完遂したようなので話が終わる流れに入る。ただそんな中、ふと何かを思い出したらしいオール・フォー・ワンがあ、と声を零す。「どうした？」

「いや、なに。これは契約とは全く関係のない個人的な頼みなのだがね？」

その言葉に、思わず少し身構える。早速、何か見落とした契約の穴でも突いてくるような頼みでもしてくるのか、と少しばかり警戒する。

「君は個人的にも気に入ったからね。だから—— 弔と、この先も友達でいてやってくれるかい？」

「……なんつーか、あんた死柄木の先生つーよりかはお父さんって感じだよな」

ただ、まあ。そういうところは嫌いじゃない。

あまりにも個人的な頼みに拍子抜けしながらも、若干の呆れと共に警戒を解く。契約の穴でも突いてくるのか、と警戒していた自分がバカらしい。

だから肩の力を抜いて、個人的な頼みに対し、自分も個人的な答えを返す。

「ま、俺が友人でいたいと思う間は死柄木も黒霧も。ついでにあんたも友人だと勝手に思うことにするよ」

「私も、トムラもクロギリも、あなたも皆友達だと思ってるよ。もちろんソーヤも！」

そう言って抱き着いてくるルリの頭を撫でていると、オール・フォー・ワンの映っていたモニタが消える。結局最後まで映っていた映像は暗闇の中であり、足元程度しかその姿は見えなかった。

ただなんとなく。根拠も何もないが、最後、モニタが消える直前。オール・フォー・ワンは口元に笑みを浮かべていたような気がした。

「——それではこれより面接を始める」

「何をやってるんですか」

眩くと同時、部屋に入ってきた黒霧がそうツツコミをいれてくる。だがしかし待つてほしい。何をやっているかなど、たった今言ったのだし、加えて現状を見れば分かるはずだ。

一つだけ置かれたパイプ椅子。その椅子とは長テーブルを挟んで反対側には四つ椅子が並び、一つが空きで残りに自分とルリに死柄木が座っている。更に長テーブルの上には紙媒体の資料が複数。どこからどう見ても面接会場ではない。

喚導想也が責任者の喚導想也による立案、そして喚導想也による設営によって用意されたイベント。

「そう、俺による俺の為の俺の面接……！」

「いや、あなたは面接官なんですから、あなたの面接ではないでしょう」

せやな、と頷きつつ黒霧を手招きする。そこにどういう意図があるのか察したらしい黒霧は、はあと呆れの溜息を吐きつつも、そのまま空いている椅子へと座ってくれる。

「なんやかんやで乗ってくれるから黒霧ちゃん好きやで、と思いつつ、手元の資料を確認する。」

しっかりと四人分コピーして用意してきたそれは、言ってしまうば履歴書だ。今回、何やら死柄木たちの組織“敵^{サイラン}連合”の方に新たな仲間を加えるにあたって、希望者が多過ぎるのである程度絞り込みたい、という話を死柄木の方から自分は聞かされた。

「どうやら、ステインは敵連合の方に所属していたらしく、派手に活動したステインの影響で希望者が増え過ぎたらしい。なので、だったら面接で絞り込めばよくないか、と自分が提案し、じゃあそれで、と死柄木から全部丸投げされたのが現状だった。」

……いや、待て。冷静に考えたら幹部でも何でもない自分が面接を仕切るっておかしくないか……？

これ以上考えると敵連合のガバガバっぷりというか、適当さが露呈する。やめておこう。

「死柄木、これってあくまで主力部隊に入れるかどうかの面接でいいんだよな？」

「ああ。主力か、下っ端かの分類だけしてくれればいい」

オツケー、と死柄木に返事をしつつ、最初の面接対象が来るまでに改めて資料を確認しておくことにする。そしてついなので、資料の段階である程度主力行きかと、下っ端行きかを判断しておく。

敵連合はその活動上、どう足掻いても主力には強さが求められる。なので、個性や過去の実績から先にある程度のアタリなら付けられるのだった。無論、実際に面接をして使えそうだったら評価を修正はするが。

それでも、同日に複数人を捌くという都合上、事前の整理は必要なことだった。

そんな風に自分は時間を潰し、黒霧もまた資料を読み込み。ルリは気分よさげに鼻歌、死柄木は椅子に寄りかかって眠ることでそれぞれ時間を潰していく。半数がこのあと面接官をやるとは思えない時間の潰し方をしているが、これでこそ敵連合みたいな気がしてしまうあたり、自分も洗脳済みのだろう。

いや、スラム街もこんな感じだったし、元からだった気もするのだが。

まあ何はともあれ、そういうしているうちに最初の面接対象がやってくる時間となる。

CASE 1：蜥蜴男

コンコン、と部屋に扉をノックする音が響く。それに自分がどうぞ、と返すと、失礼します、という声と共に、一人の青年が部屋へと入ってくる。

「真面目過ぎ。ヴィランらしくない。減点」

「うーん、理不尽な気もするけど、我らがリーダー死柄木が言うんじや仕方ないよね！というわけで慈悲はない、早速減点です」
「えっ」

シヨックを受けた、というよりはこちらの対応に戸惑っているかのような顔をする青年。手元の資料を確認すれば、ヴィランとしての活動名はスピナーであり、また資料にある写真と目の前の青年の姿が一致することも分かる。

全身を鱗に覆われた、蜥蜴を擬人化したような見た目に、各所に巻かれた包帯や首元のマフラー。資料の写真を見た段階でも思っていたが、分かりやすくステインに影響を受けているらしい。

また、ステインに影響されてヴィランになったためか、明確な過去の実績というべきものが存在しない。だからこの面接で判断したいところなのだが。

「さ、とりあえずはまずはその椅子に座りなさい。あと今のやり取りで分かっただろうけど、ヴィランだからまともな面接にはならないよ？」

それにええ、という顔をするあたり、まだネジが吹っ飛んでいないらしい。まあステインに影響されただけの新米ヴィランならそれも仕方ないのだろう。

とりあえず頭の中でスピナーのことは哀れな被害者に分類しつつ、まだまだ何人もいるので手早く面接を進めていくことにする。

「それじゃあ、本格的に面接を進めさせてもらうけど。とりあえずスピナーくんはステインに影響されてヴィランになったんだな？ということは、あくまでステインの思想に共感しているのであって、うちのリーダーに全面的に従う、っていう認識でオーケー？」

「……まあ、そうだな。俺はあくまでステインの夢を引き継ぎたいだけだ。だからステインの主義主張に沿わないようなら聞く気はないな」

なるほど、とスピナーの資料にメモを取る。ある程度の主義があり、場合によってはリーダーの言うことを聞かないだけの気概もあ

る。ただし、その主義はあくまでステインのものであり、自分のものとして昇華できない限りはブレを持つ可能性もあるだろう。

「次は戦い方についてだな。事前に提出してもらった資料には近接戦がメイン的なことが書いてあるけど。実際のところどれだけ自身が「ある？」」

「元々ある程度は鍛えていたとはいえ、本格的に鍛えたのはステインを見てからだだからな。あんたと真正面から渡り合うのが精一杯ってところだろう」

憑依召喚をしていない時のこちらと渡り合える程度、となるとそれなりに使えるだろう。少なくとも、雄英の教師陣とは勝てずとも時間稼ぎ程度はできることになる。それに歩き方や体幹を見たところ、虚偽申告だとも思えない。

ここに個性も加えれば戦力的はアリだな——そんな風にしばし、自分がメインで偶に黒霧からの質問を加えつつ、面接を続けていく。そしてこちらから聞きたいことがある程度出尽くした段階で、最後にぎつと現状での評価を伝えておくことにする。

「この後他の人と比べて決定するから絶対、とは言えないけど参考までに現状での評価を。黒霧から頼む」

「そうですね……。戦力的には申し分ないですし、思想に関しても途中までは我々と同じ目的となるので問題ないでしょう。あとは実戦経験が少ないというのが気になる程度でしょうか」

「次に死柄木」

「面白味がない。個人的にはつまらなくてアウトだが、まあ喚導が戦力になると判断したならまあいいだろ」

「誰だよこいつ面接官に呼んだやつ。や、まあ俺なんだけど。んじやまあ続いてルリ」

「私、トカゲさんってじっくり見ると意外と可愛いと思うんだ」

「うーん、そんなこと言っちゃうルリちゃんが可愛い。というわけで個人的にはルリがお気に入りのようなので前向きに検討したいと思います。本日はありがとうございました」

「……大丈夫なのか、この組織……？早まったか……？」

まともさを求めていたのなら、早まったのだろう。そんなことを思いつつ、部屋から出ていくスピナーを見送った。

CASE 2：制服女子

「おつ邪魔つしまーす！」

何人かの面接を済ませたあと、やたら軽いノリで入ってきたのは一人の女の子だった。カーディガンにプリーツスカート、一般的な女子高生のような恰好をした少女だ。団子状にまとめられた髪に、特徴的な瞳孔を持った可愛らしい少女だとは思う。

しかし彼女のような人物は資料に存在しない。はて、と首を傾げつつ、それでも少なくとも狂気が見え隠れしているあたり、真つ当そうな人間ではなさげなので、飛び込み参加の可能性も考慮して対応することにする。

「えっと、君、お名前は？」

「トガです！トガヒミコ！」

トガ、トガ……。はて、何やら覚えがあるぞ、と資料を確認すれば、丁度次面接予定の人物と同じ名前だ。だが、資料の写真と見た目が一致しない。

「トガちゃん、資料の写真と見た目が違うようだけど？」

「はっ、そーでした！その資料の写真、個性で変身してた時に撮ったんです！うっかりしてた……」

大きな身振り手振りを交えて喋るトガちゃんに、これまた愉快そうなのが来たなあと内心笑いながらも、資料に記載された個性の内容を確認する。確かに、細かい条件は書いていないが、変身系の個性だとはある。

無論、嘘の可能性もあるが……そこら辺の危険性は最初から織り込み済みのこの面接だ。とりあえずは目の前のトガちゃんであろう人物の面接を行うことにする。

「じゃ、とりあえずはそこ座ってもらえる？」

「はいー！……あ、でもその前にいいですか？あなた、喚導くんですよ

ね？」

「んっ…そうだけど——」

返事をし、資料の方からトガちゃんへと視線を戻そうとした瞬間。視界からトガちゃんの姿が消える。

いいや、無意識の領域へと入られたのだ、と同系統の技術を持つが故に感覚的に理解し、そのまま呼吸を奪い返してこちらへとナイフを振るおうとしたトガちゃんの腕を掴んで抑え込む。

「……あり？」

「どういうつもりかな？」

「あわわ、まさか対応されるとは。結構自信あつただけだなー」

こちらの質問をガン無視してそう呟くトガちゃんは、腕を掴まれ捕らえられていることを気にした様子もなく、呑気に口を尖らせている。

この子、あまりにマイペース過ぎて大物では……？と内心ちよつと慄いていると、唐突にトガちゃんは私知ってるんです、と切り出してくる。

「実はステ様と喚導くんが戦ってる近くについて、お二人の戦い見えました」

「マジかよ」

「二人ともとつてもとつても素敵で、ゾクゾクしちゃいました。——

—ああ、あなたとも一つになってみたいなあ」

「やっべ、こいつマジもんのサイコパスだ」

だがそれでこそ面白いと思う。これには死柄木くんもニッコリ。

予想外なところでヴィランらしいヴィランが出てきてちよつと楽しくなってきた。実力に関しては今の攻防で申し分がないことが分かったし、また実績も資料にある過去、彼女が起こしたらしい事件を見る限り問題ない。

即戦力級の当たりヴィランだろう。ちよつと自分が付き纏われる恐れがあるが、まあ彼女程度の実力であれば捌けるだろうし、もし失敗して死ぬことになっても、そこら辺は負けた自分が悪いということ

「即採用だと個人的には思うんだけど、そこらへんどうよ」

「まあ私はアリだと思いますよ。負担は喚導くんに行きそうですし」

「面白いからおーけー」

「ちなみに死柄木、一応言つとくと芸人の面接じゃないからね？」

あと何気に黒霧もこちらに対して容赦がない。まあトガちゃんに最初にオーケーサイン出したのは自分なので、今回に関しては責任は持つのだが。

「ちなみにルリ的には……ああ、いや、オーケーっぽいわな」

「ルリちゃんっていうの？名前も見た目もカアイイねえ」

「あなたも笑顔が凄いな素敵だと思うよ」

既に大分仲良くなり始めた二人に、呆れの溜息を吐く。現状、未だにトガちゃんは自分が取り押さえたままなのだが。いや、だってこのまま離れたらルリの血を吸おうとしそうだし。何が怖いって、友達だからとあっさりルリが血を差し出しそうなことだった。

まあとにかく、ルリからも採用の判定しか出なさそうなのを確認したし、とりあえずトガちゃんに関しては採用の方向で。何とか説得をして部屋から出ていってもらおう。

はあ、と溜息を一つ。何人もの面接を済ませ、疲れが溜まってきていたところにあのテンションが高い子だ。どれだけ面白い相手だろうと、多くの人間の相手をしていけば自然と疲れは生じる。自分が企画したとはいえ、流石にちよつとキツイところはあった。

それでも敵勢力だったりヒーローの潜入がある可能性も考慮すると、主力メンバーはこうして直接顔を合わせて選ぶしかない。

故に軽く頬を叩き、気合を入れ直して。そして大柄な男でありながら、どこことなく女性的な仕草の写真という、もはや資料添付の写真から伝わってくるキャラの濃さに絶望した。

#38. Everyone is plot in
trigue.

「……ここも随分と大所帯になったなあ」

「でも私、毎日が賑やかで楽しいよ?」

「ま、それは否定しないわ」

ヴァイラン 敵 連合の拠点内を見回しながら、こちらの肩に座るルリと会話する。

流石に、主要級のメンバーが新たに増えて、敵連合の主力陣も安全とは言えなくなった。そのため、基本的には常にルリを自分の肩に座らせ安全を確保するスタイルでの生活になっている。

おかげで子連れかよ、なんてからかわれることも増えたが、今の自分の見た目にしたってあくまで三十代後半。ルリの年齢的に……あれ、ワンチャン自分の子供でもおかしくないのか。

予想外のルリとの歳の差に恐れ戦きながら、敵連合拠点でも自分の定位置であるバーカウンターの一席へ座る。流石に、こういう場であればルリも降ろし席へと座らせてやる。

そしてそのまま、バーカウンターの向こうにいる黒霧へと、カクテルの注文を入れる。

「お前も人数増えて対応大変だよなあ……。あ、俺オールドファツシヨンドで」

「そう思うなら頼まないでくださいよ……。はあ、少々お待ちを」

「黒霧ー！俺にはバーボネラを頼むわ!」

「あなた今日何杯目ですか……」

忘れたわ、と言って豪快に笑う新入りのマスキュラーに対し、黒霧は呆れの溜息を吐きながらも、自分の分と合わせて二人分のカクテルを用意していく。

黒霧って絶対ヴァイランに向いていない苦労人気質だよな。と思いつつ、その黒霧に最近主に迷惑をかけているマスキュラーの方を見れば、酔った勢いでスピナーを巻き込んでバカ騒ぎしているのが見え

る。

流石被害担当スピナー、今日も一身に被害を受けている。

とりあえず、自分がいるバーカウンターと、マスキュラーが暴れているソファやテレビのあるリビングのような場所はそれなりに離れているので、そのまま酒乱騒ぎを外野から見て遊ぶことにする。

ルリはルリで黒霧が用意したラテアートを見て楽しんでるし、問題ないだろう。というか、黒霧そんなこともできたのか。多才すぎないだろうか。

「……あのソファ、結構高かったよな」

「しかも死柄木のお気に入りに入り！こないだも座り心地に文句言ってたぜ！」

こちらの眩きに、前後で真逆のことを言いながらルリとは逆の隣の椅子に座ってきたのは、全身にラバースーツを纏った男。カラーリングを黒から変えれば、蜘蛛の糸でも出しそうなその男は、トウワイス。過去個性の都合だからで二重人格のような状態で、一人で二人分ほど喋る騒がしい男である。

だがその分テンションが高く、また中々ノリもいい。以前の面接で加わったメンバーの中では比較的自分と仲の良い人物だった。

「こないだもマスキュラーは死柄木お気に入りの物壊してたよな？なんだっけか」

「確かよく使ってるっつーマグカップだな。最近そこら辺で買ったらしいぜ」

トウワイスと会話するコツは、発言の後半を反対の意味で取ることだ。二重人格の影響で、一部反対のことを言ってしまうらしい。だから文脈からなんとなく意味が通るように言葉を翻訳すれば、トウワイスとの会話はさほど難しくない。

例えば今なんかは、前半でよく使っていると知っているから、後半の最近買ったというのが意図とは違う発言。だからそこを反転させて、そこそこ前から使ってた、という意味になってくる。

「あー……そうだ、思い出した思い出した。あれ、俺があげたマグカップだわ」

「マジかよー前から思ってたけどお前と死柄木って仲いいよな。見て赤の他人っぽいとよく思ってる」

この場合は……赤の他人の反対だから親しい間柄、友人とかだろうか。流石に完璧には翻訳できないので、なんとなくニュアンスで拾っていく。

まあ確かに、少なくとも自分は死柄木を友人だと思っているし、死柄木もまたそう思ってくれていると信じている。何故ならスラム街で生活してた頃、ちよいちよい家に来るからとあげたマグカップを、わざわざ回収してまで使ってくれているのだから。

「まあ我々も付き合い自体は一年二年とはいえ、ほとんど毎日顔を合わせていた時期もありましたからね。はい、喚導さん、注文のオールドフアツシヨンドです」

「……そういやふと気づいたけど、喚導って本名だよな？ ヴィランネームとか偽名はないのか？ 興味ないから答えなくていいぞ」

トウワイスからの質問に、そういえばと今更ながら自分も気づく。死柄木たちには喚導と呼ばれていたし、ルリからはソーヤだ。そしてヴィランとして本格的な活動もしていないので、ヴィランネームもつけられていない。

ふむ、と少し考える。流石に本名のままヴィランとして活動できる勇氣はない。レンタルビデオ店のカードとか止められる恐れがあるし。と、なればヴィランとしての名前を決めなければならない。

ヒーローネームそのままは……流石に、気が引ける。ではどんな名前を付けるべきか、と周りの人を参考に見てみることにする。

例えば、トウワイス。個性が「二倍」だから、そのままトウワイス。黒霧なんかも、黒い靄と化すからだろう。個性や見た目、スタイルからシンプルに、というパターンが多い気がする。

「……サモナーとか？ いや、違うな」

召喚の個性なので、シンプルに。と思ったがどうにもしっくりこないし、あまり格好良くもない。どうせなら格好いい名前にしたいよな、という話だ。

どうやらサモナーはトウワイスと黒霧的にも不評なようだし、もう

少し考えてみることにする。

個性由来がアウト、と考えるとあとはビジュアルや生きる上でのスタンスなどだろうか。見た目はただのダンディなおっさんなので、これを由来にするとダンディとかしか思いつかないので無し。生きる上でのスタンスなら……。

「……リベルタ、とか？」

「イタリア語で自由、でしたか。あなたの出身にも合うし、中々いいのでは？」

「ヴィラン的にも自由ってのはいいな、ハイセンスだ。俺は嫌いだね」中々、ウケもいい。じゃあとりあえず決定かな、ということでは。からはヴィランとしての名前はリベルタを名乗ることにする。

そんな風に、他愛もないことを皆で話していると突然拠点のドアが開く。

「今、いないやつはいるか？」

「お、死柄木の目がいつになくやる気に満ちてる。トイレ行ったマグ姉以外はいるはずだぜ」

今日声を聞いたトウワイズたち以外も、マスクュラーの酒乱騒ぎに巻き込まれる姿を見ているし、我らが姉御のマグ姉はトイレに入るところを見た。トガちゃんは気づかぬ間にルリの隣に座って会話してるし、一応ここに主力メンバーは揃っていることになる。

「そしたらあのオカマが戻ってきたら少し話がある」

「話？」

「次の作戦だよ」

その死柄木の言葉に、誰も表情が変わる。基本的には皆ヴィラン、ということもあって好戦的なものだ。苦笑しているのは自分と黒霧ぐらいなものだろう。

とはいえやっぱり自分に關しては初のヴィランとしての活動になるわけで。流石に、全く気にならないというわけではない。少しそわそわしながら、カクテルを口に運んだりしてマグ姉が戻るのを待つ。「……あら？ボスがいつの間にか来てるし、何だか皆の空気が変わってるわね」

「新メンバーを加えて初の作戦だつてさ」

「あら、あらあらあら！素敵じゃない！それは皆ワクワクするつても
のだけわ！……あ、黒霧ちゃん、私に何か飲み物くれる？アルコールは
弱めをお願いね」

「私、バーテンダーではないんですがね……」

だからそう言いながらも準備しちゃうからだよ。とは内心で思っ
ても口には出さない。それでやめられてしまったては、自分も困るから
だ。

しばらく黒霧がマグ姉用のカクテルを作るのを待ち、全員がしつか
りと話を聞ける状態になってから改めて死柄木が話を始める。

「それじゃあ次の作戦について話すぞ。まず参加するのは俺以外の主
力陣。黒霧に関しては移動のみだ」

それはまた、何とも豪勢な話である。マスクユラーなんかの単純な
人間は参加できることに喜んでているが、自分のような一部の連中はそ
の参加者に若干の違和感を覚えてしまう。

なんというか、中途半端なのだ。一つの作戦につき込むには、些か
過剰にも思える。しかし、死柄木は待機で黒霧が移動のみ、というの
は総戦力戦でもなく、半端な戦力に思えてしまう。過去雄英襲撃では
死柄木と黒霧が最前線に出たわけだし、前線に出すのを惜しんでいる
とも思えないところだが。

なんて思っていると、疑問が顔に出ていたのか。はたまたそもそも
その疑問が出るのは想定済みだったのか。どちらかはわからないが、
追加で死柄木からの説明が入る。

「このメンバーなのは、新たに入ったメンバーでどれだけ通用する戦
力かの確認も兼ねている。実際、俺と黒霧も以前にやったしな」

雄英襲撃、本気での攻略ではなくあくまでどれだけ通用するかだつ
たのか、と若干驚きつつ、同時に何となく今回の作戦内容にアタリを
つける。

目的が戦力確認も兼ねているなら、比較する対象があつた方がやり
やすいはずだ。そして敵連合の戦力について比較する対象など、一つ
しかない。すなわち、今話題にもあつた雄英襲撃。

「そして戦う相手は、雄英高校だ」

ほらやつぱり、と一人笑みを浮かべる。ぶっちゃけ、現状敵連合の大きな活動は雄英襲撃しかないのだ。比較対象を用意するならそこしかないし、死柄木の目的であるオールマイトの所属がそこなのだから、滅多に雄英以外と戦うことはないだろう。

「まあ戦う理由とか相手は分かっていたがよ。肝心な勝利条件は何だ？」

仮面が特徴的なMr. コンプレスという名の新メンバーが死柄木へと問いかける。彼はなんとというか、マジシヤン的なノリで、どうにも言動が煙に巻くようなところがあるせいで若干苦手なんだよなあ、と思いつつもその質問自体は自分も気になるところなので、死柄木からの返事を待つ。

すると死柄木は言葉ではなく、一枚の紙をテーブルの上に投げることで示してくる。

「これは……雄英の生徒だったか？」

茶毘という身体中の火傷痕のような肌が目立つ男の眩きに、俄然死柄木の投げた紙に写るものが気になってくる。しかし死柄木が紙を投げたのはマスキュラーたちがいる方のテーブルだ。故にマスキュラーたちが見終わるのを待ってから、黒霧にワープでこちらへと持ってきてもらい、そこで初めて紙が写真であり、そこに写る人物の姿を確認する。

「……って、爆豪？」

写真に写る見覚えがある姿に思わず眩く。ただその写真の光景自体は見たことがなく、表彰台らしく場所で縛られた爆豪が暴れているというものだった。

背景から考えるにこれは体育祭の時のものだろうか。そういえばオールマイトが爆豪が優勝した、とか言っていたような気もする。納得のいかない優勝で暴れたり何なりした結果がこの写真の光景なのだろう。

「いいか、そいつを攫って、うちに勧誘するぞ」

「……おいおい、ヒーローをか？」

マスキュラーの言った疑問も尤もだとは思う。しかし、自分を含め

幾人かは死柄木が言いたいことが理解できなくなかった。特に、クラスメイトとしてある程度の距離で爆豪を見ていた自分はおのこ。そのため、代表していまいち何故爆豪を勧誘する、という話になるのかわかっていない連中に自分が説明することにする。

「あー、元雄英生徒として言わせてもらうけど。爆豪は割とあれ、ヴィラン向きだぜ」

「そうなのか？」

「おう。あいつはヒーローこそ目指しているけど、口は悪い、すぐキレる。そして何より自分が気に喰わないことには牙を向く。その性格から世間のルールに抑圧されることも多々あったはずだ。雄英体育祭を見たやつなら、その暴れっぷりから何か感じたんじゃないか？」

まあ自分はそのシーンを見ていないわけであるが。とはいえ締まらないのでそこは口には出さない。

そんなこちらの言葉、特に抑圧されたの部分にシンパシーか何かを爆豪に対して感じたのか、誰もが納得の雰囲気を出し始める。そんな中、最初に疑問を出したマスキュラーが口を開く。

「ま、俺としちゃ暴れられればなんだっていいわ。とりあえず作戦自体には賛成だぜ」

一人が賛成と明言したからか。部屋の空気全体が賛成へと流れ、死柄木が否定意見はないか確認すれば、誰からも反論はでない。よってそのまま、作戦の決行が決まる。

「と、なるにあとは作戦の詳細だが……その前に。喚導、お前的に爆豪の説得はどれだけ現実味がある？」

「ん？あー、そうだな……」

死柄木からの確認に、しばし考える。先ほど自分が口にしたのは、あくまでヴィランとしての適性がある、というだけの話だ。実際勧誘が成功するか否か、という点は考慮していない。

だから改めて考え、個人的な意見ではあるが爆豪の勧誘の成功率をざっと弾き出す。

「三対七ってどこか。勧誘成功するのが三、失敗が七な」

「その根拠は？」

「爆豪の根底にあるのは、ヒーローへの憧れだ。目線的には多分オー
ルマイトだろうな。その憧れがなければヴィラン一直線だったよう
な人間だ。……だが逆に言えば、ヴィランではなくヒーローとなって
しまうほどの強烈な憧れだ、とも言える。勧誘は難しいだろうな」

「勧誘するにあたって有効だと思われる話題は」

「緑谷出久について。理由は知らんが、あの二人は幼馴染だからで因縁
か何かあるらしい。緑谷を引き合いに出せば何か反応があるかもし
れん」

「……分かった。留意する」

どうやら自分の意見は参考になったようで、死柄木はしばし俯いた
あと頷きを見せる。

そしてそこでどうやらそこで爆豪の説得については終わりのよう
で、そこからは細かい作戦内容へと入っていく。

内通者によってもたらされた雄英の林間合宿の開催場所の情報共
有。誰が囮で誰が爆豪を攫うか。そういった細かい内容を詰めてい
き、最後に死柄木から作戦の決行日が伝えられ、その場は解散となる。

無論、決行日は雄英の林間合宿開催中。元雄英の生徒として、自分
も知っている日付。

——— 今から、約一週間後の話になる。

#39. A forest training camp that collapses.

「正直、開闢行動隊って痛々しくない？俺名乗りたくないんだけど」

「まあおじさんには名乗るのちよつと辛いところはあるねえ」

「俺は格好いいと思うけどな。だから嫌いな名前だ」

「ぶっちゃけ名前なんか暴れられれば何でもいい」

その後も皆、意外と好意的な意見しか返ってこない。どうやらMr. コンプレスぐらいしか自分とセンスが近い人間はいないようだった。おじさんには若者のセンスがわからないよ……とMr. コンプレスと慰め合う。

「いやア、思ってたより気が合うな？今度からコンちゃんって呼んでいい？」

「そんな可愛らしい名前前で呼ばれる歳じゃないんだが……まあ、代わりに今度からリベちゃんって呼ぶわ」

「コンちゃん？」

「リベちゃん！」

そのままノリと勢いで肩を組んで拳をぶつけ合う。胡散臭いから勝手に距離を感じていてごめん。これからコンちゃんはマブダチである。

「何をバカなことをやってるんですか……。もうすぐ出発しますよ」

「うーっす」

「ま、初仕事ですしおじさんも頑張りますかねー」

既に雄英高校の林間合宿は始まっている。日程としては現在、二日目の夜で食事でもしている頃だろう。自分たちはその隙に林間合宿が行われている敷地内へ潜入、三日目に作戦行動を開始するための準備をする手筈となっていた。

「……いやでもマジで今から行くの？俺山の中で野宿とか虫がいそうで嫌なだけ……」

「女子か」

そんなことを言われても、嫌いなものは嫌いなのだ。単純に気持ち悪いのもあるし、蚊とかコバエなんかはイラつくので嫌いである。

そこら辺ルリは、何に対しても興味津々というか。物怖じせず、嫌いなものもないというから凄いよなあ、とは思う。

「ていうか、それだったらあんたを倒すなら虫使いでもぶつけられないの？」

「クソガキお前そんなことやってみろ。お前も虫も、辺りまとめて全部燃やしてやるからな」

「ひっ……」

虫だけはガチで嫌いなので、くだらないことを言いやがったマスタードという新人に本気の殺気をぶつける。それでマスタードの方は腰を抜かしてその場に座り込んでしまふあたり、やっぱイキってるだけのクソガキだなと思いつつ、殺気を引つ込める。

「喚……リベルタ。彼も貴重な戦力なのですから、削るような真似はやめてください」

「……あーい」

正直、マスタードに関しては劣等感からヴィランをやっているだけのクソガキでしかないのです、面接の段階で落とす気だった相手なのだ。だが死柄木がマスタードのことを気にいってしまい、リーダーには逆らえないということで結局 敵 ^{ヴィラン} 連合に所属することになった少年だった。

だからまあ、自分が彼を嫌っているというのものもあるし、マスタードもマスタードでこちらが元英雄生徒ということもあつて嫌っているため、水と油、といった感じだった。まあ立場だけで言えば自分の方が圧倒的に上なのだが。だって実力はこちらの方が上であるわけだし。

「……別にお互いが嫌いなのは構いませんが、作戦に影響は及ぼさないでくださいね」

「分かってる分かっている。この歳にもなつてそこまでバカなことはいねエよ。やって後ろからつかい誤射するぐらいだ」

「リベちゃんリベちゃん、多分それ誤射して言わない」

あ、やっぱり？とコンちゃんのツツコミに返しながら、マスタードの方を見る。未だに腰を抜かしたままであるが、それでもこちらに反抗的な目を向けてくるようにはなっていた。

流石に意図的な誤射云々はともかくとして、一度徹底して上下関係を叩き込む必要はあるからなあ、と考える。ただそれもあくまでマスタードがこの作戦で雄英側に逮捕されなければの話。実はマスタードで内緒で行った「マスタードは逮捕されるか否か」の賭けでは八対二で逮捕される方が多く、かく言う自分も逮捕されるち思っている口だ。正直、彼が勝てるイメージが湧かないんだよなあ、と若干憐れにも思いながら、黒霧がワープゲートを広げるのを待つ。

「……時間通りですね。それではまた、所定の時間、場所にワープゲートを作成しますのでその際に。くれぐれも協力して、協力して！作戦に臨むように」

黒霧からの念押しに、気のない返事をしながらワープゲートへと入る。黒霧には生憎だが、本当にもう、虫がいる中野宿しなければいけないのが嫌なのだ。そんなくだらないことを気にしている余裕はなかった。



「うエー……やっぱり蚊に刺されたー……。コンちゃんムヒとか持つてない？」

「こんなこともあるうかと！」

「さすがマジシャン！どこからともなく！」

ただまあ、出てくるのはあくまでムヒなのだが。

そんなコントの末、受け取ったムヒを蚊に刺された箇所塗りがら、高所から眼下の燃え盛る森を見る。既にこの場には自分と、コンちゃんしか残っていない。つまり、もう襲撃は始まっているということだ。

「うーん、派手にやってるねエ」

「のんびりしてないで、早く自分のターゲットを探せよ」

コンちゃんからのありがたい忠告に、はいはいと生返事を返しつつ望遠鏡を召喚する。ただまあ、正直この望遠鏡は仕事してますアピールでしかない。実際は昨日仕込んだセンサーによりターゲットの位置は既に把握している。

だから適当なところでアピールを切り上げ、一つ伸びをする。

「んじゃお仕事してくるわ」

「……ほんとにその子連れてくのかよ」

「そりやまあ、一心同体みたいなものですし？」

肩に座るルリにねえ？と問えば領きが返ってくる。今現在、雄英においてルリはヴィランに攫われた、ということになっているらしい。なのでルリにはちよつと拘束されているような姿になってもらっている。基本的にはそれっぽいだけで意外と動いたりできるのだが、流石に喋られると困るので口元の拘束だけは本物であり、基本コミュニケーションはジェスチャーで、という状態だった。

「ま、リベちゃんがいいならいいけどよ」

流石に、敵連合の拠点にルリ一人残すのは人斬りのこともあつて怖いのだ。それに雄英生徒相手にする程度であれば、ちよつどいいハンデにもなる。

故にそのまま、ルリを肩に乗せた状態で崖から飛び降りる。そしてそこから、絆憑依でスラム街に住んでいた空気を一瞬だけ固める個性の持ち主を憑依させる。

この個性、本当に一瞬だけで、またその固める範囲も十センチ程度しかない。そのため基本的には使いづらい個性なのだ。

「よつ、ほつと」

ある程度の身体能力があれば、こうして空中を走るのに利用できる。スラム街に住んでいたそいつは、その個性で空中を駆け回りよく敵を攪乱していたものだった。ただそれをやるには自分の足の裏に正確に、素早く個性を発動する必要がある。流石の自分もそいつほどの変態機動はできない。それでも軽く空を走る程度ならできなくはなかった。

「空を走るのになかなか気持ちいいな……。ルリはどうだ？……そう

か、お前も楽しそうでよかったよ」

喋れないルリから頷きを返してもらい、その目元から楽しんでいることを察する。折角なので、もう少し空中散歩を楽しみたいところではあるのだが、生憎とそういうわけにもいかない。

「つと、ここらか。ちよつと負荷かかるぞ」

左手でルリを押さえながら、固めた空気を蹴って地面へと飛び出す。自分が進む方向には——轟と爆豪、あとは轟に背負われたBクラスの少年の姿が見える。

また轟と戦うのかよ、と若干辟易しながらもそのまま轟たちの近くの地面へと向かい、空中で戦いの準備を整える。

MATCH UP!!
リベルタ VS 轟&爆豪

——と、言ってもこの戦いは速攻でケリをつける予定ではある。

地面が近づくと同時、絆憑依の対象を切り替える。空気を固める個性の持ち主から、自身から一定距離の場所に幻影を生み出す個性の持ち主へ。

この個性は、発動者と全く同じ見た目で同じ動きをする幻影を数メートル離れた場所に投影するだけの個性だ。だが今、轟たちがこちらを認識できていない状態で、丁度数メートル離れたところからそれを発動すれば。

「——っ!?!」

突然、目の前にこちらが現れたかのように錯覚させられる。そして轟も爆豪も、個性が強力な分、咄嗟に出してしまう攻撃は広範囲で大雑把な一撃になってしまうところがある。

結果、投影された幻影を中心に広がる巨大な氷。だがそれはあくまで幻影を狙ったものであり、本体であるこちらには拡散した分威力が減衰した分しか届かない。

即座に絆憑依をソールに切り替えれば、あっさりと轟の攻撃は防げる。そしてまた、大技であったことで、轟は数瞬ではあるが身体が固

まる時間が存在する。

その瞬間を狙って、先ほど轟の攻撃前に見えた位置に向かって人差し指の先から、細い光炎の線を伸ばす。これで座標を間違えてなければ、轟の腹部に穴が空いただろう。

流石に、自分でも元クラスメイトを殺すのは気が引ける。光炎でなら貫いた箇所を焼くので止血もできるし、死にはしないだろうと思いつつ、その場から闇に紛れるようにして移動する。

「初手でやれなかったか……!」

「何やられてんだクソがア!!」

もちろん、そのまま動けばいくら暗い森の中とは言え居場所がバレる可能性があるので、持ち込んだ黒いローブを身に纏う。

流石に、轟も爆豪ももうこちらが同じ場所にはいないというのは察しているようで、周囲の警戒へと移っている。その姿にこれは簡単には背後を取れないな?と察し、視線誘導を行うことにする。

「——ハア!?!」

「アウェイク——!?!」

自分の手によって轟たちの頭上へ放り投げられるルリ。それに釣られて轟と爆豪の視線が上へと上がる。

「はい、というわけで Good night、いい夢見ろよ」

その隙を突いて背後へとまわり、二人の頭を地面へと叩き付ける。ここら辺の地面なんか、人の拳なんかよりよっぽど硬い。故に思いつきり脳を揺さぶられた二人は白目を向いて失神してしまう。

「ほいキャッチ。悪いな、投げて」

首を横に振って気にするな、とアピールするルリに改めて謝罪と感謝を伝えつつ、周囲を見回す。

「コンちゃんん。コンちゃんん? いるんでしょー?」

「あなたの後ろにね?」

「おわアお!?!」

音もなく突然現れたコンちゃんに、思わずその場から飛びのく。流石マジシャンというか、自分でも声をかけられるまで全く分からなかった。これ、コンちゃん敵にまわしたら普通に自分暗殺されるので

はないだろうか。

そんな危惧をしながら、コンちゃんに失神させた爆豪を差し出す。

「つーわけで、圧縮頼むわ。とりあえずZIP形式で」

「オーケー、ちゃんと解凍ツールは用意しておけよ?」

まあ実際はZIP形式も何も関係ないのだが。ノリだけで会話してる間にも、コンちゃんが爆豪を圧縮し指先程度の球体と化す。何とも、持ち運びに便利な姿になったものである。

「うーん、これ俺も圧縮してくれない?運んでよ」

「断る。俺そこまで戦闘能力自体は高くないんだから、お前が戦ってくれないと困るんだ」

そうツツコミを入れてきながら、コンちゃんが通信機で目標を確保したことを仲間たちへ告げる。無論、自分も通信機をつけているので、その通信内容はしつかりと聞いている。

「……マスタード、返事ないな?」

「マスキュラーもだな。これ、もしかして負けたんじゃねエか?」

「あー、クソつ。素直に捕まる方に賭けてればよかった」

そこでその言葉が出てくるあたり、コンちゃんもなかなかいい性格をしている、なんて思いながら黒霧によってワープゲートが作成される予定の場所へと向かう。既に目標は達成したのだ、長居する理由はない、という話である。

「しかしこれでこの、爆豪くんだったけ?の勧誘失敗したら、マスキュラーとマスタードを失っただけで大損だよなあ」

「つつても、そもそも俺らの戦力確認も兼ねてるんだろ?だったら、最初から負けるやつは切るつもりで——ストップ。……誰か近くにいな」

微かにだが、地面を踏み締める音と、草木が風で揺れたにしては不自然な音が聞こえてくる。予定ではここの近くで戦う味方はいないはずなので、ほぼほぼ敵だと思った方がいいだろう。

そのため、もう一度黒いローブを羽織り直し、再度闇に紛れようとして——気づく。

これ、ディティリーの個性の隠密使えばバレないのでは?。

ディテーターの隠密は、音や気配を誤魔化すのではなく、相手がこちらを認識できなくする個性だ。故に基本的に、直感が化物染みていない限り認識されることはない。

オールマイトがこの林間合宿にいないことは確認済みであるし、まづバレないだろう。そう判断し、コンちゃんに常に触れておくことでコンちゃんにも隠密の個性を適応しながら、敵とすれ違う。

確かあの二人は、Bクラスのやつだったか、と薄い記憶と照らし合わせながら無事、Bクラスの二人から離れることに成功する。

そしてそこからもう簡単だ。常に隠密の個性を発動し続けていれば、敵に見つかることはほとんどない。故にあっさりとワープゲート作成予定地点に辿り着く。

これ、轟たちとの戦いでも隠密の個性を使えば楽だったな、と手札の多さからくる即座に最適手を選べない弱点を反省しつつ、こうしてあっさり和林間合宿襲撃は成功したのだった。

#40. Stand by.

「たっだいまーっと」

「戻ってきましたね……おや、マスキュラーと、マスタードがいませんね？」

「捕まったのか、それともまだ戦ってるのか。細かいことは知らないけど通信に反応ないし、集合場所にも来ないから置いてきたわ」

「ふん……まあ最初から脱落者が出る可能性も考慮してたから構わない」

と、言いつつも気に入っていたマスタードが脱落したため、若干不貞腐れ気味の死柄木を内心だけで笑っておく。

とまあ、黒霧のワープゲートで自分が最初に帰ってきたために、自分が簡単な戦果報告を済ませる。脱落者、傷を負った者、目的は達成できたか……。それぞれ戦っていた場所が違うため正確には把握していないが、それでも集合した段階で全員の状態は確認している。

というか、普通に考えて学生、ヒーローの卵に負けるわけがないのだ。それこそマスタードのように同年代であるか、マスキュラーのように単細胞でもない限り。

だから本来であれば、プロヒーローに担当した者以外は、年齢による経験と実力の差から自分のように圧勝しなければおかしいのである。

コンちゃんだつて、自分がいたからより確実性の高い自分に戦闘を担当させたのであつて、やろうと思えば学生レベルであれば抑えられるだけの実力はある。それは過去の犯罪歴が示している。

つまり、マスタードとマスキュラーが例外なだけであつて。

「爆豪は回収完了。プロヒーローと相対した連中が軽い傷を負っただけで、ほぼほぼ皆無傷だぜ」

「上々だな」

そう報告を締めくくれば、死柄木は口元に軽く笑みを浮かべてそう返してくる。それにやはり、最初からここで脱落する連中は切る気だったな、と思いつつ捕獲した爆豪を持っているコンちゃんことM

r. コンプレスを呼ぶ。

「とりあえず脱落者の二名についてとか、報告済ませたから爆豪を元に戻してくれるか?」

「それはいいがよ。二名って、もしかしてムーンフィッシュのこと忘れてない?」

その言葉に思わずあ、と声が零れる。自分とはろくに会話が成り立たないし、ルリを見かけると襲い掛かってきたために大した関わりがなかったのですっかりその存在を忘れていた。

そうか、そんなやつもいたなあ、と思わず頷きつつ、死柄木に改めて報告をする。

「というわけで、脱落者一名追加で」

「脱落者追加入りまーす!」

「お前らが揃うと意外と五月蠅いな……」

まあ二人とも歳のわりにはっちやけるタイプだからなあ、と苦笑しつつ、一旦爆豪の処置などを死柄木と黒霧、コンちゃん三人に任せて、バーカウンターの定位置へと座る。

そしてそのまま隣に今の今までずつと肩に乗せていたルリを下ろして座らせてやり、そこにきてようやく、形だけの拘束具を外してやった。

「つぷは」

「悪いな、そこそこの時間拘束しちまって」

「んー……初めての体験で楽しかったから大丈夫だよ? 流石に一回で十分だけど」

初回だけとはいえ、拘束されるのを楽しむあたり何気にルリもヤバいところあるよな、と一瞬思うも、個性“ドM”とかヤク中がいたスラム街と比べれば大したことないか、と考え直す。出身地の人たちがあまりにも濃すぎるのだった。

今まで一応、全くとは言えないまでも動けなかったのは事実であるため、ルリの身体をほぐす為に二人でストレッチを行う。本当はまだ後処理があるわけだが、それでも自分にとって最優先はルリなのでこちらを優先する。

ただそのままストレッチだけする、というのもつまらないので軽く、適当な会話をルリと交わすことにする。

「そういやさー、俺は今回轟と爆豪と戦ったわけだけど。元クラスメイトを俺が襲ってるのを見るのって、ルリ的にはどうなのよ？」

ストレッチ中にするには些か重い話題のような気もするところだが。それでも単純に聞いておきたいことではあったので、この際に聞いてしまうことにする。

自分に関しては、轟も爆豪も最初からある程度距離を置いて接してきた相手だ。だから敵対しようが、さほど気にするようなどころはない。

けれどルリは誰に対しても親しく接してきた。それは、あの爆豪でさえ振り払うのを諦めたほどだ。鈍感と言うか、ブレないと言うか。普段は物分かりがいいくせして、こと誰かと仲良くなることに関しては一切の妥協をしない子だ。その上、気づけば懐に入られている、というか自然と過去から友人であったかのように錯覚させてしまうほど、相手の心の内側へ入るのが上手い。

友人作りに関しては性格と、そのなり方が異常に上手く、そしてそうして作った友人を大切にするのがルリだ。そんな彼女が友人同士が戦う、という状況に何も思わないわけがなはずだ。故に気になっていたのだが。

「んー……実はそんなに気にしてないよ？」

「……そうなのか？」

身体を伸ばしながらルリが言ったのは、意外な内容だった。友達同士が殺し合う、なんていうのは見たくないものだと思うのだが。

スラム街ではそれが日常茶飯事であり、自分は特に気にはしないのだが。それでも流石にそういったものは一般的には好まれないことぐらいは知っている。

だからルリがこちらに気をつかってそんなことを言ったのか、と様子を伺えば、特に嘘を吐いた様子もなくルリは言葉を続けていく。

「もちろん、何も思わないわけじゃないけど。クラスの皆と比べたらソーヤの方が大事だから、ソーヤが必要だと思ったならそれでいいと

思ってるんだ」

「ん、む……」

なんとも気恥ずかしいことを簡単に言ってくれるものだ。思わずそっぽを向きながら頬をかいてしまう。

こんな仕草をしてしまえば、スラム街の連中や敵ライバル連合の連中であれば間違いなく煽ってくるのだが。ルリがそんなことをするわけもなく、無垢な瞳でそのまま続きを口にしていく。

「それに、ソーヤは元クラスメイトを殺したりしないでしょ？ 必要であれば殺せるけど、だからって無駄に殺したりはしないって知ってるもん」

「ストップ、理解してくれてるのは嬉しいけどストップ……！」

このまま放っておくと延々とこちらについて知っていることを垂れ流されそうで思わず止める。流石に、こうもはっきりとこちらのことを理解していて、同時に信頼してくれているというのは嬉しさよりも恥ずかしさが先立ってしまう。

そんなに分かりやすいタイプだったかなあ、とあまりにルリがこちらのことを把握し過ぎていて思わず顔を赤くしながらも首を捻る。スラム街ではあまり、内心を見抜かれることもなかったはずなのだが。

スラム街にいた頃はさほど深く考える必要がなかったため、見抜かれるような内心が元々なかったのか。それともルリが異様に人の内心を見抜くのが上手いのか。

どっちもありそうだよな、なんて思っていると、軽いストレッチが終わる。そしてそのタイミングを見計らっていたのか、黒霧が手招きでこちらを呼んでくる。

「どしたよ、黒霧」

「喚導さん、こちらを」

ルリを再び肩に座れせつつ黒霧の元へ向かえば、二つ折りにされた複数枚のまとめられた紙を手渡される。はて、この場で言えないことなのだろうか。なんて思いながらその紙を開き。

「——っ」

その内容に、思わず一瞬呼吸が止まる。けれどあまり露骨な態度を死柄木や黒霧以外に見せるわけにもいかない。

故に、適当なことを言つて一旦、拠点のベランダへ、ルリと二人だけ出る。

幸い、ベランダには誰もおらず、またベランダから見えるのも隣の建物の壁だけだ。だからそこで、改めて渡された紙の内容を読む。

——そこに書かれているのは、人斬りについての情報だ。

オール・フォー・ワンとの契約。その中の一つに、オール・フォー・ワンの個性と人脈を使つて人斬りについて調べてもらう、というものがあつた。

人斬りは、如何にも黒幕と言わんばかりのオール・フォー・ワンとは全く無関係らしく、加えて人斬りの協力者が何かが随分と有能なようで、オール・フォー・ワンはほとんど何も情報を持っていなかったらしい。

だからその場では特に情報は貰えず、こうして調査後に改めて情報を貰う形になつていた。

じっくりと読み込み、書かれた情報を頭に叩き込んでおく。オール・フォー・ワンの手によって用意されたものなのだ、そう簡単にこちらが人斬りについて調べているなどとバレるとは思えない。それでも、世の中に絶対はないと思つているので、これは読み終わったら燃やしてしまうつもりだ。

故に、人斬りの出身、過去の関わつたと思われる事件。さらには現在の拠点。そういったものの情報を読んでいくうちに、一つの項目に行き当たると。

「血縁関係……？」

本来であれば、さほど気にすることもない項目だ。出身などはそこから流派などの情報も得られるため、意外と大事な要素だったりもするのだが。本人の個性がはっきりしている場合、両親の個性から予想を立てる必要もなく気にしなくていいはずの内容なのだが。

しかしあのオール・フォー・ワンがわざわざ書いた情報なのだ。何か大切な要素でもあるのだろうか、と思ふ家系図を見れば。

「人斬りに、息子？」

捨てられたのか何なのか。名前がないが、息子がいたという情報だけが家系図には示されている。そしてその下には更に注釈が書かれている。

『人斬りのDNAを回収できていないため、确实ではない情報になるが、息子が当時の人斬りの行動。同時期にあつた事件から推察するに――』

「――俺が、人斬りの息子……？」

その衝撃の事実――けれど、自分は意外とショックを受けていなかった。

確かに、元々顔も覚えていない両親など興味がなかったのもある。ただなんとなくではあるが、今にしてみればそうなのかもしれないと心のどこかで感じていたように思えた。

自分がスラム街に捨てられた際。両親の個性についてやそこから予想される自分の個性、あとは名前などが書かれていた紙が一緒に置いてあつたという。そのことから少なくとも親の片方は、捨てたくなかつたが、捨てざるを得なかつたのではないか、なんて言われていたりもしたのだが、今重要なのはそこではなく。

どうやらその紙には父親の個性は「斬る」個性、と書かれていたらしい。そのため、自分の召喚の個性は特に刀剣類への適性が高いのだが、そういつたのもあつて自分の父親の個性についてはこの歳になつても何となく覚えていた。

だから人斬りの個性を聞いた段階で、何となくは察していたのだろう、と思う。

「……前に襲ってきた人、ソーヤのお父さんなの？」

考え込み過ぎたのか、ルリが心配げな顔でこちらを見てくる。ルリは父親とは仲が良かった人間だ。だからきつと、父親と戦うことになつたこちらのことを純粹に心配してくれているのだと思う。

しかしルリには申し訳ないが、心配する必要はそんなになかつたりするのだ。確かに、全く思うところが無いわけではない。今まで不明だつた父親が分かつたのだから当然だ。自分を捨てた恨みだつてあ

る。

けれど、とルリの頭を撫でながら思う。
だから何だ、と。

今の自分にとって重要なのは何なのか、という話だ。それは父親への恨みとかそういういたたものではない。むしろそんなものはどうでもいい、と切って捨てられるだけのものではない。

今の自分にとって大切なのは、スラム街での思い出と、唯一自らの手の中に残ったルリだけだ。

だから、父親かどうかなどさほど大きな問題ではなく。重要なのはルリの敵か否か、ただそれだけでしかない——そうやって、情報が記載された紙を燃やしながら、改めて覚悟を決めた。

#41. Stand by ready.

——爆豪を拉致してから二日。

爆豪自体に揺さぶりをかけること。今回の一件の痕跡を全て消す作業。そういう諸々の結果、爆豪の説得に入るまでにそれだけの時間がかかってしまっていた。

ただそれだけ時間をかけた甲斐はあり、テレビでは間もなく目的の番組が放送されようとしている。そしてそれを爆豪に見せるために、爆豪は簡単な拘束だけされた状態でバーカウンターへと座らされていた。

「手錠だけだから飲もうと思えば飲めるだろ？何がいい？……あ、酒はダメだからな。未成年の飲酒は禁止だぞ！」

「おじさんたちヴィランが言っても説得力ないだろうけどね！」

はっはっは、とテレビ前のソファで寛ぐMr. コンプレスと笑い合う。説得役は何故か自分に放り投げられたため、こうして爆豪の隣にいるが自分もコンちゃんのように寛いでいたかった。

とはいえ自分の立場は今では死柄木の部下。せつせと働くしかない——そう苦笑しながら、ちよつとだけ真面目に説得に入ることにする。

「つーわけで、おじさんはリベルタ。もちろん本名じゃないけど、そこはほら、ヴィランだからね？」

「ケツ、キョーミねえよ。とつとと離せこのクソヴィラン！」

「なーこいつ口悪いー！こいつの方がよっぽどヴィランっぽいんだけどー！」

「まあ少なくともヒーローとは思えませんよね」

「誰がヴィランだ！どつからどー見てもヒーローだろうがッ！ブツ殺すぞ!!」

そういうところ、そういうところ。そうツツコミを入れながら、内心では自分が喚導想也だとバレていないことに安堵する。

今の自分は、コンちゃんから借りた仮面に、髪を全て白色に染めている。加えて以前の未来召喚の影響で、多少体格も変わっているの

で、まずバレない状態だ。

それでも、もしかしたらを考えてしまい、こうして実際にバレないことを確認するまでは安心できない状態だった。

もちろん、自分が喚導想也だと気づかれないためにも、ルリも再び拘束している。また苦しい思いをさせてしまうが我慢して欲しい。

「さてさて、それで本題だが。まあ端的に言えば君に俺たちの仲間になつて欲しいわけだが」

「誰がテメエらなんぎの仲間になるかよ。ウイルスンつてのは頭も悪いのか？」

「ま、そりゃ断るよね」

なんの揺さぶりもかけていない状況だ。これで簡単に仲間になれたら拍子抜けである。自分の準備に費やした努力を返せ、という話だ。

だからむしろ断つてくれてよかった、と思いつつ、どう話を進めるかを今の爆豪のリアクションを加味して少しだけ考える。

「……ほいたら、テレビ見せようか。コンちゃん！例の番組お願いー！」

「あいよー」

『——見てください、この愛くるしい姿。やはり子犬は——』

「あ、間違えた」

まさかこのタイミングで普段通りの番組をやっているとは。やっぱりあの放送局はブレないな、と思いつつもテロップだけで済ませられても困るため、すぐにコンちゃんに他のチャンネルに変えてもらう。

『この度、我々の不備から——』

「お？イレイザーヘッドじゃん。ま、攫われた生徒の担任じゃ当然か」
イレイザーヘッドのメディア嫌いはヴィランでも有名であり、過去英雄生徒だった自分はなおのことよく知っている。何かの機会メディアでの露出が回ってくれば、お得意の合理的じゃないというセリフで断っていたのを何度か見ている。

故にそんなイレイザーヘッドが記者会見に出ている、ということに

驚きつつも、爆豪にその番組を聞かせるといふ目的がある以上、さほど余分な茶々は挟まずにその番組を見る。

「どーよ、爆豪。お前の担任が、学校が悪者扱いされる姿はさ」

「……けっ」

明確な答えは返さない。そして瞳の奥で悔しさと、自身への怒りが渦巻いているのが良く見える。

揺さぶれてはいる——だが、致命的なほどじゃない。これだけでは足りないか、と言葉を続ける。

「ステインの件もそうだけど、今のヒーローの在り方を君はどう思う？完璧であることが求められ、守るのが当然だとされる。そしてヒーローは憧れではなくシステムへと堕ちた。そんなヒーローの在り方を君は肯定するかい？」

「……キョーミねえよ。俺は全部守って全部救えるヒーローになる。だったらそこに何も問題はありやしねえ」

「うーん、いい啖阿だ。それに実力が伴っていないことに目を瞑ればね」

こちらの言葉にチツ、と舌打ちが返ってくる。やはり全くもって揺さぶれていないというわけではないが、彼を引きずり落とすには足りないのが現状だ。

屈辱も、後悔も、迷いもある。だけど根つこの部分。心の芯が折れていない。だから決してヒーロー側から揺らがない。

これはアップローチの方向を変えた方がいいな、と話題を少し変えることにする。

「……そうだなア。君が目指すヒーロー像は、それこそオールマイトみたいな、ってことだよな？」

「……わりいかよ」

「まさか、全然！だけど君は、オールマイトについて、そして幼馴染の緑谷出久についてどこまで知っているのかな、って」

「……おい、待てよ。何でそこでデクの野郎が出てくるー！」

揺さぶるならこちらだな、と内心でほくそ笑む。緑谷と爆豪の間に何があったかは知りはないし、興味もない。だが、それが利用でき

るならとことん利用させてもらおう。

そうして自分は、状況からの予測をあたかも真実かのように語っていく。

「そもそも、君はオールマイトが弱ってきてることを知っていたかい？」

「……………」

「いつも笑顔の無敵のヒーロー。だけど世の中、絶対なんてない。それはオールマイトですら例外ではない。とある強敵との戦いの後遺症で、活動時間に制限が生まれたそうだよ」

ここまでは、オールマイトから直接聞いた話。そしてここからがオールマイトが弱まるのが加速し、オールマイトによく似た個性を持つ少年が現れたことからの予想。

「だからね、オールマイトは後継者を見出したそうだ」

「後継者…………」

爆豪はその荒っぽさから勘違いされがちだが、頭の回転が早い天才だ。故に、ここまでの流れから何となくその後継者が誰かを察したらしく、目を見開いている。

「さて、ここで質問。君は緑谷出久の個性、あの超パワーに見覚えがなかい？」

「…………デクが、後継者だつていうのか」

「オールマイトが雄英の教師になったのと、緑谷出久が雄英に入学したのが同時期なのは偶然だと思う？」

そう問いかければ、齒を食いしばった爆豪が俯いてしまう。

ここまでは自分は、嘘は言っていないし、別に緑谷出久が後継者だとも言っていない。あくまで緑谷出久が後継者というのは、こちらの予想でしかないからだ。

けれど、自分が持っている情報を与えれば、聡明な爆豪であれば同じ結論に至るだろうとは思っていた。故に予想通りの結果に満足しながら、さらに揺さぶりをかけていく。

「君は、選ばれなかった。才能ある君が、だ。憧れたヒーローは、君じゃなく君が下に見てきた人間を選んだんだよ」

爆豪の拳が強く握られる。本当に緑谷関連の話はよく効くな、と思いつつ爆発するまでもう少しか、と算段を立てる。

オールマイトへの不信感を煽り、世界への不満を爆発させる。爆豪をヴィランへと引きずり込むには、根幹にあるオールマイトへの憧れをどうにかするしかなかった。

実に都合よくオールマイトと緑谷が関わってくれていたおかげで、オールマイトへの不信感を高めることはできた。だからあともう一押しすれば、ヴィランへ落ちるだろう、と予測を立て言葉を選んでいく。

「不満があるだろう？見返したいだろう？そのために君がすべきことは何だ。いいや、君がしたいことは何だ？」

そう問いかければ、爆豪一度大きく息を吐いたあと、小さく呟く。「……ああ、そうだな。見返してえよ。俺を選ばなかったオールマイトに文句を言っやりてえ」

それは、自分が求めていた言葉だったように思う。そこに込められた感情が、熱量が。決してこちらの望んでいたものではないと明確に告げている。

「……だから俺がN.O. 1ヒーローになる。オールマイトじゃねえ。オールマイトが選んだデクじゃねえ。俺が、俺だけの力でN.O. 1ヒーローになって、オールマイトに吠え面かせてやるッ……！」

「ッ」

爆豪の気迫に、一瞬気圧される。そして同時に、自分では爆豪を説得できないと理解もしてしまった。

これはダメだ、彼は気質はヴィランかもしれない。それでも、こちらが思っていた以上に彼のヒーローへの憧れは強いらしい。

仕方なしに、死柄木に向かって首を横に振ってみせれば、死柄木が頭を掻き耷る。それはつまり、死柄木も説得は不可能と判断したということだろう。

ここからどうしたもんかね、なんて思っていた時だった。

「すいませーん。ピザのお届けに来たんですけどー」

——その声に、誰もが臨戦態勢に入った直後だった。

ドカン、と派手な音を立ててドアが壁ごと打ち破られる。その衝撃にドアの傍にいたスピナーなどは勢いよく吹き飛ばされていた。

「……オール、マイト……！」

「私だけではないぞ！」

「——先制必縛、ウルシ鎖牢ツ!!」

誰かの呟きに返したオールマイトの言葉に応じて、一人のヒーローが突入してくる。身体を樹に変化させる個性を持つ、シンリンカムイというヒーローだ。

そしてそのシンリンカムイが突入してくると同時に放たれる必殺技。敵連合のメンバーにシンリンカムイの肉体が変化した樹木が伸びてくる。

それに対応するように、自分も個性を放つ。

必殺技を使う際にその名を叫ぶ。なるほど、実に見栄えがよく市民受けがいいだろう。だがレイザーヘッド風に言うならば、合理的じゃない。

必殺技の名前を叫ぶ、ということは今からこの技を使いますよと宣言することと同義だ。それでは対応してくれ、と言っているようなものである。

故に、伸びてくる樹木、それを切断可能な位置に、座標を指定して遠隔での召喚を行う。未来召喚の結果、細かい制御が上がったが故の小技だ。やっていることとしては以前使った「プレイドスコール降り注ぐ刃雨」とさほど違いはない。

「黒霧！」

「わかっています！」

それでも、こちらを拘束しようとした樹木を阻害することはできた。だがそれでもヒーロー優勢に変わりはない。何せ、オールマイトが壊した壁の向こう。そこに見えるヒーローの数が多過ぎる。数的有利を取られた以上、実力に大きな差がなければ勝ち目は薄い。

そのため、即座に黒霧の名を叫べば、それだけで意図を察した黒霧がこちらの数を増やそうと脳無を呼び出そうとし。

「っ!?!脳無がない……!?!」

「生憎だが、既にそつちは抑えさせてもらつたぜ」

「用意周到って感じだなアおい……」

「どうやら、ヒーロー側はしつかりと計画を立てていたらしい。予想以上に自分たちは追い込まれているようだった。」

「困つたなあ、と頬をかく。ここで捕まつては、全て計画がおじやんだ。それは実に困る。」

「けれど、それが分かつた上で、ここまで追い詰められてなお、自分はさほど焦つてはいなかつた。何せ、自分の友人にはあの人がいる。」

「っ、何だ!?!」

「そんなことを考えたと同時に。空間から突如黒い液体が溢れ出す。そしてそこから現れる脳無たち。それに遅いんだよ、と内心で悪態を吐きつつ、爆豪とルリの回収を済ませる。脳無を送ってくれたおかげで、それくらいの余裕がある。」

「回収を済ませた次の瞬間、自分の口から溢れ出す、先ほど何もなかったところから現れたのと同じ黒い液体。一瞬、その息苦しきから目を閉じれば、次に開いた瞬間には景色が変わっていた。」

「うえー……。あの移動の個性クツソ苦しいんだけど。どうにかかないの?」

「贅沢を言わないでくれよ。黒霧のような何の弊害もなくワープできる個性は貴重なんだよ?」

「呼吸が再びできるようになったと同時に、思わず文句を垂れれば、空中より返事が返ってくる。」

「……なに、空まで飛べるわけ?」

「上手く個性を組み合わせれば、この程度余裕だよ」

「そこにいたのは、生命維持装置か何かであろう黒いヘルメットを被つた、オール・フォー・ワンだった。」

「初めてこうして直に会って理解したが、オール・フォー・ワンが放つ圧とでも言うべきものが尋常ではない。これ、敵として向けられたら呼吸も止まりそうだな、と改めてオール・フォー・ワンの化物つぷりを理解する。」

「しっかし酷い光景な。大破壊してるじやねエか」

「ヒーローたちを一掃したら、ね。いや、久々で加減が難しかった」

その言葉に破壊痕が続く先を見れば、何人ものテレビで見たことがあるヒーローが倒れているのが分かる。何人かは、死亡者もいそう
だ。

やっぱり規格外よなあ、なんて思っていると、ふと覚えのある気配が近くにいることに気づく。

「……ほーん。そういうことなら持つてくといいい」

それが誰のものなのかを理解した段階で、抱えていた爆豪をその気配の主——緑谷をはじめとする、何人かの雄英生の方へと投げる。驚いた顔で爆豪を受け取る切島。そんな彼らに、とつとと行けよと顎で示す。

「……今のは、死柄木への裏切りともとれるわけだが」

「よく言うぜ。いるのを理解しながら放置してたくせによ。それにあれは説得は無理だと死柄木も判断してる。返しても別にいいだろうよ」

「まあ君の今後にも関わるだろうし、今回は目を瞑ってあげよう」

爆豪を抱えて走り去っていく緑谷たちを目線で追いながら、さらりとオール・フォー・ワンはこちらがこの後どうする気かを読んでくる。本当にそういうところだぞ、と思いつつ、自分はオール・フォー・ワンによってワープさせられてから未だに倒れている黒霧の方へと向かう。

「おい、黒霧ー。起きてるー?」

「うぷっ……すいません……ワープに軽く酔ってしまっ……」

「おい、オール・フォー・ワン?ワープ使いがワープに酔っただけ?」

「知らないなあ」

思いつきり顔を逸らすオール・フォー・ワンを思わずジト目で見ながら、黒霧の背をさすってやる。できれば早く復活して欲しいところだ。何せ、既に遠目ではあるが、こちらへと向かってくる現No.1ヒーローの姿が見えるもので。

「黒霧ー、できるだけオールマイトに自分を見られたくないから、早く復活して俺をこの座標に飛ばしてくれない？」

「……っ、何とか、一回程度なら……」

その絞り出したかのような声と共に、少し小さめではあるがワープゲートが開かれる。

オール・フォー・ワンの調査が確かであるならば、この先に奴がいる——その緊張感に思わず手を握り込めば、そっと、その手が暖かいものに包まれた。

見れば、ルリがその小さな手でこちらの手を包んでくれている。それに幾分か、落ち着きを取り戻し、苦笑しながら口を開く。

「ルリ、いつの間にか拘束から抜けられるようになったわけ？」

「頑張ったらできた」

むん、と胸を張って言うルリだが、何も説明になってない。頑張るだけで拘束から抜けられては困るのだ。

ただまあ、決戦前のいい息抜きにはなった。故に幾分かリラックスして、最後にオール・フォー・ワンや死柄木へと別れを告げる。

「んじゃ、またな。そっちも頑張れよ」

「ああ、そちらこそ頑張りましたまえよ」

生憎にも、死柄木などはワープ酔いで返事がなかったが。まあ返事を待っている余裕もないので、ワープゲートへと入る。

そうして移動した先は、実に殺風景な場所だった。コンクリートの柱が等間隔にあるだけで、他には何も無い空間がただ広がっているだけの場所。

どこかの地下空間だろうか、なんてあたりを見渡していれば、一つの人影があることに気づき、そこに向かって声をかける。

「——よオ、久しぶりだな人斬り」

決戦が、始まる。

#42. For me, For you.

「よオ、久しぶりだな人斬り」

「まさか本当に来るとはな」

以前と同様、黒い着物と灰色の袴を身に纏い、人斬りはそこにいた。大太刀を肩に担いでいるのも前と同じであるが、唯一白い羽織だけがそこにはなく、光源が少ないこの場所では視認しづらい状況だった。

「オール・フォー・ワンとかいうやつからよくわかんねエ呼び出しを受けたと思つたら……：：：：テメエの差し金だったとはな」

こちらの姿は以前よりも老けて、更に髪は全て白色に染められているはずだ。なのに人斬りがこちらを正しく認識しているのは、こちらがルリを抱えているからか。それとも人斬りの感覚が鋭いのか。

どちらもありそうだな、と思いつつルリを安全な距離まで下がらせる。流石に人斬り相手ではルリを庇いながら戦う余裕はない。

「それで何の用だ？その嬢ちゃんを渡してくれる気になつたのか？」
「まさか、寝言は寝て言えよ。つーか、正直こつちの意図はわかつてんだろ」

その証拠に、構えこそ取っていないが、既にその身には重い殺気を纏っている。やる気充分、といった様相だ。

故に、どちらからともなく構えを取る。人斬りは大太刀を肩に担ぎ直し。自分は右手へただ切れ味だけを追求した片手剣を生み出す。

別に今更、人斬りにお前が父親だと言うつもりはない。言つたところで何か意味があるわけではないし、息子の仲間だからとルリのことを諦めてくれるとも思えない。

それに自分にとつてももはや父親かどうかなどどうでもいいのだ。重要なのは人斬りがルリの敵だということ。

だからせいぜい。

「パッパ死ねエ！」

「何だアいきなり!!」

揺さぶりに使う程度である。

しかし人斬りもその程度で揺らぐほど単純ではないというか。律

義に言葉を返してきながらも、上段で斬りかかったこちらに対し、大太刀を下から上へと振り上げて対応してくる。

普通に考えれば、重力の関係で重い大太刀を下から上へと振り上げる人斬りより、上から下に振り下ろすこちらの方が威力が乗りやすい。しかしそこを人斬りは肉体の駆動と、重量故の遠心力を大太刀に乗せることで威力を跳ね上げてくる。

その結果、膠着……いいや、むしろ瞬間的な威力は向こうの方が上であり、片手剣がそれを持つ両手ごと上へとかちあげられる。

ならば、と逆にその勢いを利用し、後方へと宙がえり。ついでに人斬りの顎に向かって蹴りを放つが、それはステップで回避されてしまう。

未来召喚によって技量、経験が上がっているために人斬りが何をしたか、それにどう対応すべきかは分かる。だがこのままいけば後手に回るだけでジリ貧で負けるしかないだろう。

加えて、まだ人斬りは個性を使ってきていない。使ってきていたら、今頃片手剣ごと自分は真つ二つになっているだろうからだ。

「……どうしたよ、まだ超越者オーヴァードの力は使わないのか？」

その言葉に、どうするかと一瞬悩む。間違いなく、これは誘いだ。何らかの罠の可能性がある。だが、相手が人斬りだと考えると、強い状態の相手と戦いたいから言った可能性もある。

罠の可能性があっても踏み込むか否か——そして、憑依召喚を使うと判断を下す。ジリ貧でいつか負けるのであれば、罠に飛び込んででも勝ちの目がある方に行くべきだろう。

「憑依召喚—— グラムグの担ルい手ズ!!」

ステインとの戦いでも使ったシグルズの憑依召喚を成立させる。北欧神話への親和性の高さ、剣への適性。単純な性能も含めれば、シグルズは自分にとってかなり使い勝手がいい憑依召喚だ。

故に、即座に憑依召喚を成立させ。そうして視線を向けた先で笑みを浮かべる人斬りに、寒気を覚えた。

「——ッハア!!」

「ぐうッ!？」

理屈ではなく直感に従い、身体の前にグラムをかざす。そしてグラムから腕に伝わる重い振動。腕に残る痺れを振り払いながら、斬られたことを理解する。

しかし人斬りとの距離は大太刀の間合いの倍以上離れている。普通なら斬撃は届かないはずの距離だ。

「おう、まさか今のを防がれるとはな。その憑依召喚とやらを行う時には隙があるみてエだからそこを狙ったんだが」

人斬りの言葉に、危なかつたと冷や汗が流れる。適性が高いシングルズの憑依召喚でなければ、一瞬の隙を突かれて斬られているところだった。

「……今、こつちを斬ろうとしたよな。この距離でどうやった？」

「お、斬撃だつて気づいたか。じゃあ頑張つて手品を暴いてくれよ」

ダメもとで人斬りに直接答えを聞いてみるが、返ってきたのは案の定自分で考えろとの答え。

まあ敵に手の内を明かす理由はないよな、と思いつつ、原理に思考を巡らせる。人斬りが得意とするのは、シンプルに敵を斬ること。故に、先の一撃が斬撃であるのは確定。

無造作に振るわれる二撃目を再びグラムで受け止める。

何か仕込みがあるとしたら、それができるのは個性。人斬りの個性は「斬る」という個性だ。それをどう応用したら斬撃を遠くに届かせることができる。

三撃目。遠くから放たれる斬撃を、腕の動きから斬撃が奔る位置を予測し防ごうとして気づく。

大太刀を振るう前と、振るった後の腕の位置。そこから想定される剣閃と、実際に斬られた位置が合わない。そして高速で振るわれた為に見えづらかったが、剣は二度振るわれたようにも見えた。それはつまりこちらを斬る以外に何かを斬ったということ。ならば、何を斬れば遠くへと斬撃を届けられる？

「……空間を、斬ったのか……？」

「正解だ！」

四撃目。しっかりと人斬りの動きを見て、一度目の斬撃を無視。二

度目の斬撃の軌跡に合わせてグラムで防御すれば、確かな手応えが返ってくる。

遠隔斬撃の正体、見破ったり。

けれど、だからと言って簡単にその対策ができるわけではない。生憎、シグルズは完全に近接戦に振り切っている状態だ。この間合いでは対応できない。かといって、憑依召喚を切り替えれば、斬撃を防ぎきれずに死ぬだろう。

加えて、空間を斬れるということは距離を弄れるということだ。それが何を示すかと言えば。

「ほおら、こいつはどうだア!!」

「まアできるだろうなアそういうことも!」

地面を斬ることで距離を斬ったのか、瞬間的に人斬りが間合いを詰めてきてその大太刀を逆袈裟に振るう。その一撃を何とかグラムで防ぎつつ斬り返せば、再度地面を斬った人斬りはこちらの間合いの外へと移動してしまう。

しかも人斬りの大太刀を直接防いだグラムに、少しだけだが一筋の線が入っている。これは人斬りの大太刀がグラムへと食い込んだ証だ。イメージ元が神話であるため、それ相応の硬度のグラムを斬るというのだから、個性が適応された一撃は恐ろしい。

「やっぱあんた、超越者になる必要ないんじゃないやねエの?」

「言っただろ、今のままじゃオールマイトには届かないって」

まあ確かに、その言葉には同意せざるを得ない。実際にオールマイトに出会ったことで自分も理解したが、オールマイトであれば空間を斬って距離を弄ろうが、全て見切って対応するだろう。それだけの能力に加え、今まで鉄火場に飛び込んできた分の経験がオールマイトにはある。

人斬りの個性は現状で既に、目に見えるものではなく空間という曖昧なものを斬れているのだ。これが超越者になれば概念に干渉するであろうし、そこまできけば何とかオールマイトにも対応できるだろうとは自分にも思えた。

その結果、狙われることになったルリや自分はたまったものではな

いのだが。

ただそれだけの相手と戦うことを想定して調整してきている人斬り相手に、素直に正攻法でいっても勝てるとは思えない。

現に何度も空間を斬ることで間合いを変動させ続ける人斬りに、自分是对応しきれていない。防御はできる。距離を斬るのはあくまで目標地点との間合いを詰めるだけであるため、直線軌道になるからだ。事前の位置から、ある程度予測して防御することはできる。

しかし、反撃はどこまで相手が下がるかわからない以上、前に出て間合いを詰めて反撃に出るのも難しい。結果、防戦一方になっているのが現状だった。

「……防御できてるのはまあ、褒めてやるよ」

突然、動きを止めた人斬りがそんなことを言ってくる。しかしその顔はあまりにもつまらなそうで、本気で褒めているようには見えない。

「以前と比べれば、強くもなっている。だけど結局、俺には届いてない。ま、久々に斬り甲斐があったから許してやるがな」

肩を竦めてそう言う人斬りに、思わずイラツとして文句を言いそうになるが、そこでふと、一つのことを思いつく。

「……なあ、あんたがオールマイトに挑むのは、強者を斬りたいからだよな？」

「アーン？　そうだけ、俺の目的は究極的にはただ一つ。強者と興奮するほど激しい戦いを繰り広げ、その上で相手のこと斬り殺すことだ！　これがたままないほど気持ちいいんだよなあ……」

なんだこいつ、気持ち悪い。なんて思うわけだが、そのおかげで一筋の光明が見えたのだから文句は言うまい。

口から漏れそうになるツツコミを何とか飲み込みつつ、代わりに一つの問いを人斬りへと投げかける。

「だったら、もし俺がオールマイト級まで理不尽な能力へとなれる切り札があったら、その発動を待ってるか？」

その問いに、人斬りは一瞬驚いたような顔をしたあと、身体を震わせ大爆笑を始め、こう言う。

「くつ、ハハツ、面白いこと言う！ハハハハハ！いいぜ、それだけのものがあるなら見せてみるよ！もし事実なら俺はそれを斬りてエ!!」

「……お前がそういうタイプで助かったよ」

でなければ、これは隙が大き過ぎて使うことができなかつた。

故に内心で礼を言いつつ、個性を発動させる。

「——未来召喚」

ただし、今回は純粋な未来の自分の召喚ではない。そもそも、普通にやっつては人斬りに勝てる未来が存在しないため、召喚できない。現状を変えない限り、人斬りには勝てなかつた、ということだ。

だからその現状を変えるために必要なものを未来召喚で引つ張ってくる。足りないのは個性の出力、純粋な性能による理不尽さだ。

それを得るために未来から召喚するのは——未来において召喚に使用するエネルギーだ。

基本的に、未来召喚を使えば時の流れには逆らうことができないう制約上、今回引つ張ってきたエネルギーを元に戻すことはできない。それはつまり、今後個性を使おうとしても、それに必要なエネルギーは全て今この瞬間に流れてきてしまうということであり。

今後一切、自分は個性が使えなくなることを意味する。

要するに、未来の分を前借りしてブーストしているのだ。それだけしなければ、人斬りには追い付けない。

もちろん、個性を失うことに何も思わないわけではない。それでも、個性なんてなくても生きていつている人はスラム街にいたし、自分も必須なものだとは思っていない。

ルリが安心して生きていける未来のためなら、個性如き惜しくはないのだ。

「……おいおい、まさか本当にオールマイト級になるとはな」

確かに単純なエネルギー量で言えば、今の自分はオールマイトすら超えているだろう。だが、その程度だと思ってもらっては困る。これから先の未来分全てを使うことでようやく使える憑依召喚がまだあるのだから。

思い描くのは炎。

どこまでも絶対的であり。

何もかもを焼きつくす破壊の紅蓮。

「憑依召喚——『破壊の炎』」

そして、神の領域へと手をかける。

あたり一帯で噴き上がる炎。それは決してソールが使っていた暖かさのある光炎ではなく、どこまでも燃やし尽くすことしか考えられていない炎。

当然だ、この炎は北欧神話において世界を焼き尽くすといわれたスルトの炎なのだから。

「あー……いや、こいつは予想外だな……」

「どうした、怖気づいたか？」

「いいや——むしろ斬り甲斐がある!!」

そう言って距離を詰めてくる人斬りに対応するように、こちらも炎で剣を形作る。スルトは解釈こそ様々であるが、神話において剣を扱ったとされる存在だ。故に、スマートに炎剣を生み出し。

大太刀と炎剣がぶつかった瞬間、炎剣が人斬りの個性によって断ち切られ、大太刀が炎によって焼き尽くされる。

スルトを憑依召喚するにあたって、強くイメージしたのは何もかもを焼き尽くすという属性。よって、自分が意思を乗せて振るった炎は、触れた対象を問答無用で燃やし尽くすようになっていく。

そしてそれは神の炎でもあるために、容易く概念にすら干渉し。距離を取ろうと隠し持っていた小太刀で空を斬った人斬りに対し、同じように空間を焼き尽くすことで人斬りとの間にできた距離を消滅させる。

「わりいな、こっちも余裕ないからとつとと終わらせるぜ」

「終わって——たまるかア!!」

人斬りが小太刀を爪で引つ掻く。そこに何の意図があるのか、それが即座に見抜けなかったために、何かされる前に潰そうと炎剣を振るう。

しかしその一撃が、小太刀によって防がれる。本来であれば、触れた段階で焼き尽くされるはずなのに、と顔を顰めれば、人斬りが冷や汗を流しながら種を明かす。

「今俺が爪で小太刀を『斬った』ことで、小太刀の燃える可能性を斬った。これでもうこの小太刀は燃やせない——」

「——なるほど」

人斬りが簡単に種明かししてくれたおかげで、原理は分かった。なので、『小太刀の燃える可能性を斬った』という事象ごと丸ごと燃やし尽くす。結果、あっさりと灰になる小太刀。

「嘘だろ……」

「終わらせるって言ったろ。つーわけでルリのためにとつと死ね」

炎剣を振るい、それが人斬りへと触れる。それだけで、人斬りは灰すら燃えて跡形もなくなってしまった。

以前あれだけ追い込まれた相手がこうもあっさりと消えてしまい、不思議な感覚に襲われる。

しかしそれも数瞬。このスルトの力を使ってやらなければならぬことはまだあるのだ。神の力の一端を扱うために、燃費が悪過ぎて長い間使うことはできない。

手早く目的を果たすため、ルリの元へと駆け寄る。

「……終わったわ」

「……お疲れ様、ソーヤ」

ルリと視線を合わせるようにしてしゃがむ。出会った頃から変わらぬ、名前の通り瑠璃色の瞳がこちらを見つめ返してくる。

「ルリ。俺はお前が望もうが望まなかりうが、お前に安全な場所で幸せになって欲しい」

「……うん」

「これは俺の我儘だ。お前の意思を無視して、俺の願いを押し付けるだけだ。それは理解している……だけど、その上で言わせてもらう」

一つ、深呼吸。ルリの返事がどうであれ、自分は自分の願いを貫き通すつもりだ。それでも、やめてくれとルリに拒絶されたら、と思うと躊躇うところはある。それでも、自分が望むそれは譲ることができ

ないために言葉にする。

「――俺の為に、お前の個性を捨ててくれ」

「――いいよ、ソーヤがそれを望むなら」

個性とは身体の一部だ。いくらそれが不幸を呼んでいたとしても、身体の一部を失うことが怖くないわけがない。事実自分だってこの先一切個性が使えないのが怖くない、と言えば嘘になる。その上でこちらの為にと領いてくれたルリに感謝し、同時に覚悟を決める。

スルトの炎は、概念にすら干渉できる。故に、通常干渉できない他者の個性であっても、扱い切れればピンポイントで個性だけを焼き尽くせる。

人斬りを倒すだけなら、他にいくらでもやりようがあった。けど、ルリの個性も無くすのであれば神の領分に手を出す必要があったのだ。そのために、自分は自分の個性を差し出したのだ。

瑠璃色の瞳は揺るがない。今から個性を焼かれることに対しての恐怖も、悲しみもそこにはある。けどそれでも、瑠璃色の瞳はこちらに対する信頼で揺らぐことがない。

それに自分は感謝を抱きながら――そつと、ルリの胸に炎剣を突き刺した。

◇

――どこかの国の、どこかの街。そこから少し離れた小高い丘。そこが、今の自分たちの家だった。

「――何で！お前らが！いるの!!」

「黒霧の個性で来た」

「死柄木、彼が聞きたいのはそういうことではないと思うのですが……」

黒霧からの真つ当なツツコミに、思わず大きく何度も頷く。実際、手法などどうでもよく、聞きたいのはどうしてここが分かり、わざわざ来たのかということだ。

「つーかお前ら。テレビで見ただけどわりと世界レベルで指名手配されてるだろ。こんなところで何やってんだよ」

「息抜き」

そう一言で言い切る死柄木に溜息を吐いていると、黒霧が申し訳なさにこちらに声をかけてくる。

「死柄木はともかく。私はあなたの方が心配で来たんですよ」

死柄木はともかく、には息抜きできた死柄木は、という意味なのか。それとも照れていて正直には言わない死柄木は、という意味なのか。

無粋なのもあって、そこで詮索をやめつつ黒霧の言葉に耳を傾ける。

「お二人とも、個性を失ったのでしょう？日本では死亡扱いになって戸籍も失われていますし、大丈夫かな、と」

「あー、まア大変っちゃ大変だよ」

個性を普段は使っていないかったルリはともかく、わりと便利に使っていた自分はちよつとばかり大変だ。今までは召喚して済ませていたものもちゃんと用意しないといけない。それから二人揃って死んだことにすることで、もう二度と狙われないようにしたため戸籍がなく、正規の病院やバイトもすることができない。

「仕事は裏の、ちよつと怪しいところかワケありでしか働けないし。下手に病気になれば闇医者行く必要ができてぼったくられるし。まア大変どころじゃないかもなア……」

「——はい、紅茶入れたよ」

それでも、とお盆に乗せて人数分のカップに入った紅茶を持ってきた彼女の頭を撫でる。

今どれだけ大変であっても、それだけの苦勞をする価値がある、望んでいたものを自分は手に入れられた。だから小さな不満はあつて

も、この生活から逃げ出したいとは思わないのだ。

「……だけど、裏稼業じゃ荒事もあるだろ」

一通り答えたあと、死柄木からそんな言葉が飛んでくる。それにやっぱりこいつ、息抜きじゃなくてこちらが心配で来てるな、と内心だけでほっこりしつつ、その疑問に答えることにする。

「つつても、個性が消えても技量が落ちたわけじゃないんだぜ？流石にヒーローとかは無理だけど、小競り合い程度ならまだやれるさ」

実際、それで既に何度か修羅場をくぐり抜けてきたし、と言えば死柄木と黒霧から呆れた目を向けられる。とはいえ残念ながら根つこのところがヴィランであるため、そう簡単には荒事からは離れられないのだ。

自分自身、そんな自らに呆れていると、ふと紅茶を入れ終え、こちらの隣に座った彼女が少し悩んでいるのに気づく。

「どうした？」

「あのね、紅茶もう少し美味しくできないかなって」

その言葉に一口、紅茶を口に含んでみれば、なるほど確かに。不味いわけではないし、充分飲めるが特別美味しいというわけではない。もう少し上達したいというのも分からなくはない味だ。

だが自分も特別紅茶を美味しく淹れられるわけではない。どうしたもんかな、と悩んでいると、ふと黒霧が口を開く。

「それでしたら、私がお教えしましょうか？プロとは言えませんが、それなりには覚えがありますので」

「ほんとは!?教えて欲しい!」

そうしてキツチンへと向かう二人を見送りつつ、死柄木と揃って口元に笑みを浮かべる。

失ったものも多く、それらは二度戻ってこない。
今だって、多くの苦労がある。

それでも、友人が、自分が、彼女がここにいる。

確かに求めていたものが、ここには存在していた。

EX. Bonus. #. Afterword.

というわけで己が為完結ツ!!

Twitter見てた人は知ってただろうけど、作者はこの作品を己が為って略してるやで、と言う感じで。

いやー、己が為完結しましたわ。投稿から二ヶ月半か、それ以上？流石に青薔薇のように毎日投稿とはいきませんでした。おかげさまで無事完結までこぎつけることができました。

私の趣味にここまでお付き合ひいただき、ありがとうございます。た。

そんなわけで、青薔薇同様ここからは作品の裏話とか、反省に入っ
ていきたいと思います。

まずはこの作品を書く切っ掛けでも。

青薔薇の完結が近づいてくる中、次何を書こうかなー、なんてハメルンを漁っていた折り。ふとヒロアカ原作の作品を読んで思ったのが、「純粋なヴィランサイドの主人公少くない？」ということでした。

ヴィランサイド自体はある。しかしそれは嫌々ヴィランをやっていたりと、根っこがヴィランという主人公があまり見かけなかったのです。今は多少増えたようですがね？

そんなわけで、当時新しくやるなら大型タイトルを原作にしたらどれだけ閲覧数が増えるか、というのも実験したかったため、ヒロアカ原作のヴィランサイド、というのがその段階で決まりました。

しかしこれがまた、実際書いてみると難しい。

プロットを組み上げるにあたって、ざっと主人公を構築しようとしたらあまりにもウケが悪そうな主人公が出来上がる。

当然、といえば当然なんです。ヴィランとは悪役。根っこからそうだとすると、どうしても人として気に入らない、感情移入しづらい主人公になってしまうことが発覚したのです。

そりや書く人が少ないわけだ、と納得しつつ、そこからはじやあど
ういうヴィランなら読者に受け入れられやすいか、という試行錯誤に
突入しました。

ヴィランである以上、やることは悪であり人を当然のように殺さな
ければならない。だったらそれを、面白い描写にすれば。ならそもそ
も周囲のヴィラン自体を――

そんな風に作られたのが、主人公、喚導想也とスラム街の面々だっ
たわけです。

あとは個人的にこの作品で練習したかったのは、魅力的なモブです
ね。名前はない。物語の大筋にも関わってこない。けれどモブはモ
ブなりに全力で生きている、みたいなのを表現したく、スラム街には
名前もない連中がちよくちよく外から野次を飛ばしてくる感じにな
りました。

読者の目に彼らが少しでも魅力的に映っていたのであれば、幸いで
す。

ただまあ、この作品実は全体として見ると失敗作だったりして。

スラム街が壊滅するまではよかったです。あそこまでは、スラム
街の面々の死を含めて、血反吐を吐きつつもプロット通りでした。

しかしそこからがプロットのなガバを発見し、物語を進行しつつの
プロット修正。結果、予定通りの着地点にはついたらけれども、道中が
大分ブレた形となってしまいました。

ほら、ステイン戦とかあのあたり。タイトルの己の為に、からブレ
てたじやろ？

そんな風に、プロットの練り込みが甘いと死ぬやで、というのを
ガッツリ味わったのがこの作品でした。

さて、続いてキャラの裏話でも。

最初は主人公の喚導想也くん。

彼は、まあ歳が二十歳超えているのもあって、ある程度落ち着いた
キャラとして書いていました。世の中の理不尽さがある程度知って
いるため、遊んでこそいるが中身は年相応に落ちついているような。
けれど同時に、彼もまた人間であるため油断もするし、その結果と

して大切なものを失ってしまう。そしてどれだけ落ち着いていようが、年齢が高かろうが、大切な何かを失う悲しみには耐えられない。彼を通してそんなことを表現させていただきました。

あとはまあ、あの世界においては個性があまりにも重要視されてるけど、それだけじゃないよね、というのも彼とスラム街を通して表現したかったところですね。

スラム街では弱個性や個性無しでも戦い、そして主人公は最後に個性を捨てるという選択を取る。そういったところから、個性が無くたってあの世界で生きていける、というが表現できていれば、と。

ついでに個性の話が出たんで、主人公の個性の話をしましょう。

あの「召喚」という個性は、最後のルリの個性を消す、という演出のために生まれた個性でした。未来の分も使って個性を発動する。じゃあどうやって未来の分を引っ張ってくる？

その方法を考えていった結果、主人公の個性は召喚となりました。ちなみに召喚は対象が剣に近ければ近いほど、また北欧神話に近ければ近いほどその精度と燃費がよくなったりします。

剣の方は、作中でいったように、父親の個性故。北欧神話の方は、ソールが影響しています。まあ詳細はソールについて語る時に。

そのため、剣を使った北欧神話の存在、に該当するためスルトは神としての力をギリギリ使えた形です。途中で出てきたツールに関しては、あれは人間規格まで性能落としてようやく、ですしね。

なおあのスルトの炎とソールの炎は理論上関係はありません。確かに炎の扱いはソールの個性を通して学んでるし、北欧神話繋がりではあるけども。理論上は関係ないのです、ええ理論上は。

というわけで、続いてヒロインその1、ソールのお話に入りましょう。

彼女は……うん、プロットの段階で死ぬことが確定していたキャラでした。おかげさまで日常回を書くのが辛い辛い。

役割としては、主人公の意識を変えるのが目的。そのために深く主人公に関わる必要があり……うん、結果作者も読者も死んだということ。

思っていた以上に読者へ爪痕が残ったのはほんとごめんやわ。

ちなみにヒロアカ式で海外の人の名前の付け方が分からなかったため、名前は北欧神話の太陽神由来となっています。個性もそれがベースにあり、そのため主人公の方も北欧神話への親和性が高くなつた、という形です。

それからヒロインその2、ルリについて。

彼女はソールの死があったからこそ、主人公が手放したくないものになってもらう予定だったんですが……。

予想以上にソールが読者に印象深かったようで、感想を見る限り、作者の技量不足もあってルリのヒロイン力が足りなくなってしまう形かな、と。

だから敵^{サイラン}連合行ってからはルリの描写を増やすことを意識してたり。

そしてルリの個性について。

これがT w i t t e rで軽く触れたんですが、読者などの所謂メタ視点じゃないと分からない力がありまして。

厳密に言うるとルリの個性は、「惚れた相手を主人公に仕立て上げる個性でした。

故に、喚導想也は危機に追い込まれるし、土壇場で覚醒したりできたのです。本来であれば、喚導想也は^{オーバーヴァード}超越者になれるだけの才能はあるものの、環境はともかくとしてそれなりに平和な日々を送るはずの人間でした。

だから言ってしまうえば、スラム街が滅んだのもソールが死んだのもルリのせいだったりします。あれらはルリが喚導想也に惚れ、喚導想也が主人公となったからこそ降り注いだ苦難なのです。

そんなわけで実は、ルリは想也に一目惚れだったり。

あとはまあ、原作キャラなんかもありますが、それに触れてると長くなるので簡単に。

敵^{サイラン}連合は、わりと好き勝手やった連中でした。書いてて楽しかった。

逆にヒーロー陣営は、原作との差異を無くすために弄れなくてつま

らなかった……。

コンセプトとして、原作の裏側で起きたこと、というのがあったが故の縛りでしたね。

まあそのわりには轟くんとかとぼっちり受けて……ほんとごめん。……さて、あまり長々と語ってもあれなので、そろそろ次回作のお話でも。

次回作は、とりあえずSAO原作予定です。コンセプトは、『茅場晶彦が本気を出したら』。細かい内容は、Twitterの方で随時公開していく感じで。

ただすぐに公開するかは微妙で、その前に短編的なのをちよいちよに出すかなあ、どうかかなあ……。

というわけで、情報の小出しもあるのでTwitterフォローしてね。自分から絡みに行くことは少ないけど、絡んでくれればちゃんに対応するわよー。

https://twitter.com/Amazumi_creator

それでは。ここらで己が為は終わりにしようと思います。

おまけは……アイデアがないのと、青薔薇と違って書くならIFとかになつて設定練るのが大変だから現状では予定してない感じですねえ。

まあそんなわけで、改めて。ここまで読んでいただきありがとうございます。次回作でまたお会いしましょう……。